

博士論文

「イソップ寓話」の成立と展開に関する一考察

吉川 齊

目次

序論		1
第1章	ヘシオドスとアルキロコス——イソップ以前	10
1.	はじめに	10
2.	「イソップ」の年代設定	11
3.	ヘシオドス	12
4.	アルキロコス	14
5.	後世のイソップ集の場合	18
6.	総括	21
第2章	アリストファネスとプラトン——古典期の用例から	22
1.	はじめに	22
2.	アリストファネス	22
3.	プラトン	30
4.	その他の用例	35
5.	総括	39
第3章	アリストテレスとその影響——ヘレニズム期以降	41
1.	はじめに	41
2.	アリストテレスと「イソップの話」	41
3.	前1世紀頃までの用例	47
4.	「身体と胃袋の話」	53
5.	総括	56
第4章	「イソップ寓話」の芽生え——ローマ帝政期	58
1.	はじめに	58
2.	テオン	58
3.	クインティリアヌス	64
4.	2世紀頃の用例	66
5.	総括	71

第5章	古代のイソップ集——ファエドルスとバブリオス	75
1.	はじめに	75
2.	編者について	78
3.	編者の認識	82
4.	編者と集成	89
5.	総括	102
第6章	アトス写本とイソップ受容——バブリオス集の受容と変質	104
1.	はじめに	104
2.	バブリオスの受容と展開	109
3.	『修辞学初等教程』における $\mu\delta\theta\omicron\varsigma$	116
4.	アトス写本後辞と編者	123
5.	総括	127
第7章	「犬とその影」に見るイソップ受容の一端	128
1.	はじめに	128
2.	明治初期の「犬とその影」	129
3.	古代の「犬とその影」	133
4.	ジェームズとタウンゼントの参照元	138
5.	再読：明治初期の「犬とその影」	149
6.	総括	152
	結論	155
	引用原典出典	164
	参考文献	166

序論

1. はじめに

もしもしかめよ かめさんよ せかいのうちでおまえほど
あゆみののろいものはない どうしてそんなにのろいのか
なんとおっしゃる うさぎさん そんならおまえとかけくらべ
むこうのおやまのふもとまで どちらがさきにつくか
どんなにかめがいそいでも どうせばんまでかかるだろ
こらでちょっとひとねむり グーグーグーグー グーグーグー
これはねすぎたしくじった ピョンピョンピョンピョンピョンピョン
あんまりおそいうさぎさん さっきのじまんはどうしたの

この歌詞を見て、頭に旋律が流れる人も多いのではないだろうか。唱歌「うさぎとかめ」である。「うさぎとかめ」は、作詞石原和三郎、作曲納所弁次郎の歌であり、1901年（明治34年）の『教科適用 幼年唱歌 二編 上巻』に収録された。

「うさぎとかめ」は、著名な「兎と亀」の話がもとになっている。「兎と亀」は、兎と亀が競争をし、亀の鈍足に高を括って休む兎を尻目に、亀が休まず歩き続け、結局亀が勝利する、という話である。兎が目覚めたときには既に手遅れ。いくら早足で急いでも間に合わない。この話では、たとえば「着実に努力を続けること」「才能に驕って怠けることのないように」など、亀あるいは兎の立場に基づいて教訓を引き出すことができる。唱歌「うさぎとかめ」は、この粗筋を見事にまとめている。

ここで紹介した「兎と亀」の他、「狼と子羊」「狐と葡萄」などの話について、標題だけで内容を思い浮かべることができる人も多いと思われるが、この種の話私たちは一般に「寓話」と呼んでいる。著名な話はどこかで必ず目にするなり耳にするなりしていることだろう。

ところで、「寓話」について現代の辞書を幾つか参照してみると、「教訓または諷刺を含めたたとえ話。動物などを擬人化したものが多い。」（『広辞苑』）、「教訓的な内容を、他の事物、主として動物にかこつけて表わした、たとえ話。」（『日本国語大辞典』）、「教訓的・諷刺的内容を擬人化した動物などに託して語る物語。」（『明鏡国語辞典』）といった説明がなされており、その用例として「イソップ」の名が挙げられる*1。

*1 「イソップ」の名については、たとえばギリシア語では Αἰσωπος（アイソーポス）であり、言語によって

これらの説明から、現代における「寓話」に関する共通の理解が見えてくる。すなわち、「寓話」とは、「教訓あるいは諷刺を含むたとえ話」であり、「主として動物が登場する話」なのである。また、例として「イソップ」の名が挙げられていることからすると、およそ短い話が想定される。こうした観点に従えば、「寓話」は、その背後に意味を読む必要のあるものであり、さらにその意味の多くが教訓的である一方、話そのものは、主として動物が登場する、一見なじみ易く短いものということになる。したがって、「寓話」は「短い」「簡単」「教訓的」という条件を備えたものといえるのであり、その読者として児童まで対象とされる状況も不思議ではない。

ただし、こうした現代の「寓話」に関する認識は、「寓話」を外形的に定めるものでもない。形式として「短い」という点のみ共通するものであり、「寓話」の重要な要素といえる教訓の有無については、いわば解釈の問題となってくる。“Everything’s got a moral, if only you can find it”とは『不思議の国のアリス』*Alice’s Adventure in Wonderland*の一節であるが*2、教訓を読み取ることが解釈の問題である限り、どのような話でも「寓話」として認識される可能性を帯びてしまう。たとえば「動物が登場する短い話」である場合、それが教訓的解釈を意図したものではなかったとしても、動物という特徴から読者がそれを「寓話」として認識し、教訓を読み取ってしまうことにもなりうる。そうしてみると、現代の「寓話」概念は、個々の話を個別に検討する場合に、それが「寓話」であると明確に判定しうる客観的な基準を提供してくれるわけではないのである。

その点では、「寓話」を集めたという体裁の「寓話集」の存在は大きい。冒頭で示した通り、「兎と亀」といった著名な話などは、寓話集によらずとも目にすることはできるが、それも遡れば寓話集に出典を求めることが可能である。しかし問題は、それらが何を集めたものか、ということであろう。どのような話でも「寓話」と認識される可能性があるならば、「寓話集」に含まれる話が「寓話」という、一種の逆転現象も起きてしまう。

「寓話」の問題は、その文字にも現われている。「寓」とは「かりずまい」であり「かこつけてほのめかす」ことであるから、「寓話」という言い方をした場合、はじめから背後に何かを読み取ることが話の前提として宣言されているに等しい。現代の辞書的な定義を改めて考えれば、それらは話に何を読み取るかという点において、「寓」の部分を具体的に説明したものといえる。つまり、「寓話」という語を使用した場合、それをどう定義するかという問題以前に、既に語彙が意味を含んでしまっているのである。

2. 古代の「イソップの話」

ところで、辞書の「寓話」の用例に「イソップ」の名が挙げられるように、「寓話」とイソップが語ったとされる話、いわゆる「イソップの話」の関係は一般に認知されているも

表記が異なるが、本論では「イソップ」と表記する。

*2 Lewis Carroll, *Alice’s Adventure in Wonderland*, Ch.9.

のと考えられる。

それが「寓話」であるかどうかは別として、「イソップの話」という括りで見ただけの場合、その歴史は古いものである。イソップの名はヘロドトスの著述に登場し、アリストファネスやプラトンら古典期の作家たちもその名を登場させている^{*3}。「イソップの話」を集めたイソップ集は、現存しないものの、紀元前300年頃にファレロンのデメトリオスの手によって纏められたものがはじめとされる。現存するイソップ集としては1世紀頃のファエドルスや2世紀頃のバブリオスによる韻文イソップ集、そして2世紀頃の編纂と考えられるギリシア語散文集成 *Augustana* が挙げられる^{*4}。そして、これらのイソップ集が後世のイソップ集の礎ともなる。また、これら初期のイソップ集においては、それ以前に散在していた「イソップの話」だけではなく、本来はイソップとは無縁な話までイソップの名のもとに収められている。そしてまた、ファエドルスやバブリオスらは、同じ話ばかり採録しているわけでもない。

このような、古代の作家がイソップのものとして言及し、あるいは初期のイソップ集に含まれる話を辿ると、アルカイック期にまで遡ることが可能な話も存在する。したがって、「イソップの話」を包含する「話」「fable」を想定する場合、その歴史としては、2500年以上に及ぶものと考えられる。イソップ研究の大家ペリー Perry, B.E. は、この「話」について、次のように説明している^{*5}。

ペリーは、1世紀の修辞学者テオンが示す “λόγος ψευδῆς εἰκονίζων ἀλήθειαν” (a fictitious story picturing a truth) という定義が、“This is a perfect and complete definition provided we understand the range of what is included under the terms λόγος (story) and ἀλήθειαν (truth)” と述べ、自身の定義に利用した。ペリーによると、“story” とは、一文以上を含む話で、あるいは長く、会話も含みうる。しかし、それは作り話であり、過去のものとして語られる話でなければならず、また、個別の行為、一連の行動、あるいは発言などが、かつて行われたという体裁で、個別のキャラクターを通じて語られる話でなければならない。一方、“picturing a truth” であり、その話は過去の逸話という体裁をとった喩え話となる。そして、“truth” は、特定の人物や事柄、状況などにあてはまる特有のものや、世間的な分別や洞察を示すような一般性を持つものをいう。また、そうした “truth” は明示されないこともあるという。したがって、「話」とは、過去時制で語られた作り話であり、喩え話であるのだが、その一方で、そこに “truth” が存在することが条件であり、非常に広範な話が該当するものである。ペリーは「話」の分類を通して以上の条件を導き出したと考えられるが、ペリーの説明は、逆にそうした「話」の多様性を示すものとなる。

^{*3} Hdt. 2.134; Ar. V. 1446-1449; Pl. *Phd.* 60c など。詳しくは第2章参照。

^{*4} 「アウクスブルク校訂本」 *Augustana* は、アウクスブルク図書館に旧蔵され、現在はミュンヘンのバイエルン国立図書館所蔵の *Augustana Monacensis 564* と呼ばれる写本を代表とする諸写本から再構成されたギリシア語散文イソップ集をいう。*Augustana Monacensis 564* は14世紀頃のものであるが、その祖本は2世紀頃まで遡るものと考えられる。なお、本論では、*Augustana* に含まれる話に言及する際は、ペリーの *Aesopica* の番号によって表記する。

^{*5} Perry(1965) pp. xix-xxv. 以下の英訳はペリーによるものである。

ペリーはこれら「話」の古代における歴史について、大きく三つの時期に区分している。時代区分は、第一期がアルカイック期から古典期にかけて、第二期がヘレニズム期、第三期がローマ帝政期以降である。各時期については、次のように説明される*6。

第一期においては、「話」が様々な作家の作品中に、散発的に現われた。また、各作家は話のみを語るのではなく、何らかの状況の下で、たとえば説得のための喩え話として、付随的に「話」を提示した。そして、おそらく後のイソップ集にあたるものは存在せず、もっぱら口承によって個々の話が伝えられていた。また、当初は話の作者が問題となることはさほどなかった。しかし、時代を下るに従い、イソップに帰される話が増加していく。中でもアリストファネスはイソップの名を好んで用いたが、その一方でアリストテレスはイソップの他にステーシコロスの話なども取り上げており、実際のところ、「話」については、それに言及する作家に左右される側面もあった。

第二期は、それまで散発的に現われていた「話」が文字に記され、一卷の書物に纏められたことが契機とされる。それはファレロンのデメトリオスが編纂したと考えられる散文イソップ集である。ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』5.80は、ファレロンのデメトリオスが弁論術関連の著作を行なう中でイソップ集も編纂したとし、著作リスト(5.81)には「Αἰσωπειῶν α΄」の名を含めている。つまり、一卷本のイソップ集を編んだというのである。デメトリオスはアリストテレスの孫弟子にあたり、ムーセイオンの設立にも寄与した人物である。ヘレニズム時代、ムーセイオンでは精力的に書籍が蒐集され、さまざまな文献が集成されたが、デメトリオスのイソップ集もそうしたものの一卷であったと考えられる。ペリーは、デメトリオスのイソップ集について、それが作家や弁論家たちに、「話」に関する資料を提供することを目的に編まれた、一種の手引書あるいはレファレンス・ブックであって、ヘレニズム期を通じてイソップ集の標準として流布していたと推測する*7。

第三期は、ファエドルスおよびバブリオスのイソップ集に始まる。両者とも韻文によってイソップ集を構成しており、デメトリオス集とは一線を画すものだった。「話」の韻文化の試みは、たとえばソクラテスが獄中に行ったという逸話をプラトンが紹介しており、必ずしも新しいものではない。しかしながら、ファエドルスとバブリオスは、個々の話をあえて詩の形に整えて集成を編んだのであり、彼らは「話」をいわば詩的創作の対象として扱ったといえる。つまり、第二期までの「話」が付随的に用いられる素材や手段であったのに対して、第三期ではひとつの文学的題材として選択されるようになったわけである。ファエドルスおよびバブリオスは、集成を編むにあたって、デメトリオス集を参照し、話の翻案や創作も行ったようであるが、「話」の歴史における彼らの功績は、そうした点よりもむしろ、「話」を作品として提示することで、それ自体をひとつの文学的題材として

*6 Perry(1940); Perry(1959); Perry(1965). ペリーの見解は、基本的に Perry(1965) の説明に基づく。なお、ペリーの三区分については、Horzberg(2002); Zafiroopoulos(2001); 岩谷・西村(1998); 小堀(2001); 中務(1996)などもペリーに基づく説明を行っており、現在なお一般的な区分であると思われる。

*7 デメトリオスに関するペリーの議論は、主に Perry(1962) および Perry(1965) に拠る。

独り立ちさせたことにあるのである。

これらの区分は、いわば「話」の現れ方を基準に策定されたものといえる。また、排他的な区分というわけでもなく、各時期において特定の現れ方をしたということでもない。ただ、この区分は概ね有効であると考えられるが、第二期の扱いに関しては、問題が残る。デメトリオス集について、それをどう捉えるかという問題である。デメトリオス集は既に散逸し、その内容を確認することはできない。その存在に関する証言もディオゲネス・ラエルティオスによるものだけであり、しかも内容についての具体的な言及はない。ペリーの詳細な研究に従えば、その存在自体を疑う必要はないと思われるが、デメトリオス集が後世に与えた影響については、未知数の部分が多い。ペリーは、ファエドルス集やバブリオス集、そして *Augustana* 集の祖本がデメトリオス集を参照したものであると推測するが、それらに共通して採録されている話を数えてみると、三者に共通する話は 10 篇ほどに過ぎず、バブリオス集と *Augustana* 集では共通する話が 50 篇を越えるものの、ファエドルス集については、他の二者と共通する話は、それぞれ 20 篇程度である。デメトリオス集が多大な影響力を持っていたとすれば、共通する話はずっと含まれていてもおかしくはないように思われる。ヘレニズム期における用例の少なさもあり、結局のところ、確実なものとして語ることは難しい。

以上の展開を考えるペリーであるが、ペリーの説明する「話」は、それが過去時制で語られるという点を除けば、「話」を外形的に定めるものではない。そこに含まれる“truth”の問題も併せて考えると、個々の話が「話」であるかどうかの判定においては、明確にそれを定めてくれるものでもないのである。あるいは、動物などの特徴は分かりやすい指標ではあるが、必須の条件ではなく、何を「話」とするかの境界線が分かりにくい。また、ペリー以降では、たとえばダイク Dijk, G.van が、語彙や形式にこだわって古代の「話」を抽出し、分析を行っている。しかし、個々の「話」について詳細に分類が行われる一方で、全体を包括する統一的な見解を得るには至らない*8。ここでも、個別的に「話」を判定する難しさを見て取れる*9。

*8 Dijk(1997). Dijk(1997, p.382) は、“these fables (and other fables not included in collections) should never be studied without taking their contexts into close consideration” と述べ、話自体だけではなく、それが用いられる文脈への注視を喚起する。文脈抜きにしてその在り方を究明できないとすれば、fable 自体は非常に緩やかな話の枠組みを意味することになる。そして、これらは後のイソップ集に関して説明してくれるものでもない。

*9 なお、現代の研究者による「話」の定義については、Dijk(1997, pp.3-37) が詳しく整理している。「話」の厳密な定義が困難であるゆえに、研究者によって扱う対象に差異が出ることになる。Dijk(1997, pp.631-683) は、他の研究者が「話」として扱っていても、自身はその対象に含めなかったものを挙げている。また、ペリーとは異なるアプローチを試みた研究者の一人としては、ノイガー Nøjgaard が挙げられる。Nøjgaard(1964, p.82) は、“un récit fictif de personnages mécaniquement allégoriques avec une action morale à évaluation” と「話」を定義し、その文体や構造を基準として、それを厳密に適用して分析を行った。たとえばイソップ集内部においても、彼の基準を満たさないものは「話」から除外されることになったが、そうした構造分析を行った結果、Nøjgaard(1964, pp.456-457) は、古典期以前には後の *Augustana* 集とは異質なイオニア系の「話」が存在したことを指摘し、そこへ外部からイオニア系ではない「話」の集成が持ち込まれたことで、*Augustana* 集へと通ずる道が開けたのだと考えた。すなわち、ペリーとは「話」の歴史においても異なる認識を持っていたことになる。Adrados(1999-2000) も大著であるが、独特の基準を

3. 「イソップの話」と「寓話」

ところで、古代における議論に注目すると、「イソップの話」に関しては、アリストテレスとテオンの議論が残る。両者とも本論で詳しく扱うが*10、アリストテレスは『弁論術』*Rhetorica*において説得の手段として「イソップの話」*Αἰσώπειοι λόγοι*を説明し、過去に模した喩え話として機能面から分析する。アリストテレスの議論においては、「イソップの話」は個別に独自の話として解釈されるものではなく、使用される文脈において意味を持つものである*11。

παραδειγμάτων δὲ εἶδη δύο· ἓν μὲν γὰρ ἐστὶν παραδείγματος εἶδος τὸ λέγειν πράγματα προγενομένα, ἓν δὲ τὸ αὐτὸν ποιεῖν. τούτου δὲ ἓν μὲν παραβολὴ ἓν δὲ λόγοι, οἷον οἱ Αἰσώπειοι καὶ Λιβυκοί.

例証の種はふたつある。例証の種のひとつは過去に起きた出来事を語ることであり、もうひとつは、それを自ら作り出すことである。そして後者のうち、ひとつは比喩であり、もうひとつはイソップやリビュアの話のような喩え話である。

ただし、アリストテレスは、*λόγος*として「リビュアの話」も挙げており、「イソップの話」は全体を包括するものとはされていない。アリストテレスの説明では、あくまで「イソップの話」は*λόγος*を構成する一要素といえる。とはいえ、*λόγος*が一般的な語彙であることをふまえると、ここで示される機能を満たす話が「イソップの話」として区別された可能性は十分に考えられる。

一方、テオンは『修辞学初等教程』*Progymnasmata*において、*μῦθος*として「イソップの話」を示す。前述の通り、テオンの見解については、ペリーも自身の定義に用いている。ペリーの場合、テオンの説明をより一般化した上で、アルカイック期以降の「話」全体へ適用することを意図していた。しかし、もともとテオンは自身の対象を限定していることに注意が必要である*12。

Μῦθος ἐστὶ λόγος ψευδῆς εἰκονίζων ἀλήθειαν. Εἰδέναι δὲ χρή, ὅτι μὴ περὶ παντὸς μύθου τὰ νῦν ἢ σκέψις ἐστίν, ἀλλ' οἷς μετὰ τὴν ἔκθεσιν ἐπιλέγομεν τὸν λόγον, ὅτου εἰκὼν ἐστίν· ἔσθ' ὅτε μέντοι τὸν λόγον εἰπόντες ἐπεισφέρομεν τοὺς μύθους.

ミュートスは、真実を映す偽りの話である。知っておくべきこととして、ここで今検討するのは、全てのミュートスに関してではなく、話の提示のあとに説明を語ることができるもの

用いて、膨大な資料からデメトリオス集やヘレニズム期の「話」の集成の痕跡を探ろうとするもので、評価が難しい。たとえばGibbs(2002, p.xxxix)はアドラドスの取り組みを“eccentric endeavour”と評する。また、Kurke(2011)もイソップ研究といえるが、やはり独自に「話」を扱うものである。

*10 アリストテレスについては第3章、テオンについては第4章で扱う。

*11 Arist. *Rh.* 1393a28-31.

*12 Theon, *Prog.* 72 Spengel.

であり、その写し絵である。説明を語ったのちに、ミュートスを示す場合もある。

テオンは、*μῦθος* の対象を、話の後あるいは前に解釈・説明を附すことのできるものとする。ここでの解釈は、提示される話から導き出されるものであり、話それ自体としての解釈が要となる。ここにおける *μῦθος* は、ある具体的文脈における喩え話ということではなく、独立した話として一般的な意味を読み取るべき話である。

また、続く箇所ではテオンは *μῦθος* が一般に「イソップの」(*Αἰσώπειος*) と呼ばれるものと述べている^{*13}。

Καλοῦνται δὲ Αἰσώπειοι καὶ Λιβυστικοὶ ἢ Συβαριτικοὶ τε καὶ Φρύγιοι καὶ Κιλικιοὶ καὶ Καρικοὶ Αἰγύπτιοι καὶ Κύπριοι· τούτων δὲ πάντων μία ἐστὶ πρὸς ἀλλήλους διαφορὰ, τὸ προσκεείμενον αὐτῶ ἐκάστῳ ἴδιον γένος, «οἶον Αἰσώπος εἶπεν», ἢ «Λίβυς ἀνήρ», ἢ «Συβαρίτης», ἢ «Κυπρία γυνή», καὶ τὸν αὐτὸν τρόπον ἐπὶ τῶν ἄλλων· ἐὰν δὲ μηδεμία ὑπάρχη προσθήκη σημαίνουσα τὸ γένος, κοινοτέρως τὸν τοιοῦτον Αἰσώπειον καλοῦμεν.

ミュートスは、「イソップの」「リビュア人の」「シュバリス人の」「ブリュギア人の」「キリア人の」「カリア人の」「エジプト人の」「キュプロス人の」と呼ばれるが、それらにはお互い一つの違いだけがある。すなわち、それぞれの話の前に、その種類を示す表現が置かれることである。たとえば、「イソップが語った」「リビュアの男が」「シュバリス人が」「キュプロスの女が語った」といったものであり、他の種類についても同様である。もし何も種類を示す表現が附されていない場合、一般に「イソップの話」と呼んでいる。

アリストテレスとの相違がこの点にも現われている。テオンの説明では、「イソップ」の名は、語り手の名であると同時に、話の種類、すなわち *μῦθος* を表す記号ともなるのである。このとき、「イソップの話」は *μῦθος* に該当する話を意味し、既存の話も含めた多様な対象を取り込む枠組みとして機能する。そして、イソップ以外の話も「イソップ」の名の下に集約することが可能となる。

ここで紹介したアリストテレスの議論は紀元前4世紀、テオンの議論は紀元1世紀頃のものである。両者とも「イソップの話」を扱うが、提示される話の性質は異なるものといえる。素直に両者の相違と時代の経過を意識するならば、およそ400年の間に何らかの変質が起きたと考えるべきであろう。ともすれば、イソップの名が附されるために全てを同一の枠組みの中で扱いがちであるが、そうすると時代による変質が見え難くなってしまふのである。この点については、「イソップの話」がアリストテレス以前から存在することにも留意する必要がある。

翻って、現在の「寓話」を考えると、その在り方はテオンが示した *μῦθος* によって説明可能であるようにみえる。その点をふまえ、さらに「イソップの話」の過去からの変質を

^{*13} Theon, *Prog.* 73 Spengel.

想定すると、「イソップの話」の $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ としての在り方が後世の私たちにまで受け継がれ、「イソップ寓話」として認められるようになったと捉えることができるのではないか。この場合、 $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ が「寓話」であり、たとえばアリストテレスのいう $\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$ は「寓話」には該当しない。両者とも「イソップの話」ではあるが、必ずしも同一の枠組みに属する対象とはいえないのである。

一方、テオンの $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ = 「寓話」とする場合の問題は、それが一般に「イソップ」の名とともに認知されるものと述べられる点であろう。「寓話」はすなわち「イソップ寓話」ということになり、両者の明確な切り分けは困難である。「イソップの話」が「寓話」であり「イソップ寓話」であるばかりでなく、「寓話」であれば「イソップ寓話」であり「イソップの話」として認識されることにもなりうる。

本論における「イソップ寓話」については、 $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ を足掛かりとしつつも、「イソップの話」と「寓話」を同一視せず、あくまで「イソップの話」という枠組みを中心に据え、それが「寓話」の性質を帯びたものとする。つまり、「イソップの話」+「寓話」で「イソップ寓話」である。また、「イソップの話」は、前述の通り、イソップが語ったとされる話、イソップと関連付けられる話をいう^{*14}。ただし、従来の議論とは異なり、「イソップの話」を内包する「話」（英語でいう *fable*）の枠組みは想定せず、あくまでもその時々の「イソップの話」の在り方とその展開を問題とする。

4. 本論について

筆者の関心の原点は、日本における「イソップ寓話」の存在にある。そもそも、私たちが「イソップ寓話」と認めるものと、古代ギリシア・ローマの「イソップの話」の関係はいかなるものであるのか。テオンの議論に注目すると、「イソップの話」と「寓話」の結び付きは、時代を経て1世紀頃に成立したものであると考えられる。それでは、その元となった「イソップの話」の枠組みはどのような対象であり、どのような経過を経てテオンの議論に至ったのだろうか。また、さらに後世への展開を視野に入れると、私たちが主に「イソップ集」の形で「イソップ寓話」を受容していることも注目すべきであろう。

本論では、テオンの $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ を「イソップ寓話」の基軸とし、「イソップの話」の「寓話」的性質が後に認められたものとする観点から、「イソップの話」に関する認識の変質と、「イソップ寓話」の展開に関して検討する。まず、古代ギリシア・ローマにおける「イソップ寓話」の成立を、「寓話」概念形成の観点から捉え直すことを試みる。その上で、古代以来の幾つかのイソップ集に注目し、その在り方を考察する。なお、本論は、時代による変化を重視するため、できるだけ時系列に沿って議論を進める。

第1章から第4章においては、古代ギリシア・ローマの、おもに紀元2世紀頃までの各作家の作品に現われる「イソップの話」について検討する。現存する初期のイソップ集

*14 「イソップの話」に該当する対象の具体的な選定については、第1章で扱う。

であるファエドルス集やバブリオス集が登場する時期までに、はたして「イソップの話」はどのような対象として認識されていたのだろうか。この時期に散在する各作家の用例や各作家が示している見解などをもとに、古代における「イソップの話」とその認識の在り方、時代による変質、そして「寓話」概念の形成について考察する。

第1章は、後に「イソップの話」として認定されるヘシオドスとアルキロコスの事例を取り上げ、その変質について考える。第2章においては、古典期においてイソップの名に言及して話を用いているアリストファネスとプラトンの事例を中心に取り上げる。イソップへの言及が多いとは言えない状況において、両作家は直接「イソップの話」を示してくれる。彼らの認識を検討し、当時の「イソップの話」の在り方を考察する。第3章は、アリストテレスが『弁論術』で示す「イソップの話」に関する議論を中心に取り上げ、その議論の影響を検討する。そして第4章において、テオンの議論を中心に、「イソップ寓話」と呼びうる「イソップの話」の登場に関して考察する。

第5章では、現存する初期のイソップ集であるファエドルス集とバブリオス集について検討する。現在ではいずれも「イソップ寓話集」として扱われるものの、はたして当初からそう呼びうるものであったのか。後世のイソップ集の基礎ともなるそれらのイソップ集が、どのような認識のもとで、何を集めて生み出されたものか、ファエドルス・バブリオス両者の「イソップの話」に関する認識を確認し、両者の集成の特徴を考察する。

第6章では、現在の「バブリオス集」の主要写本であるアトス写本を取り上げる。10世紀頃にバブリオス集を纏めたアトス写本には、話の形式を整えようとする意識が見られるが、その点をイソップ受容と合わせて考える。まず3世紀以降のバブリオス使用例から、バブリオス集の受容について考察する。そして、その文脈のなかにアトス写本を位置づけ、改めてアトス写本について評価を試み、「バブリオス集」の在り方を考察する。

第7章では、「イソップ寓話」の展開に関する一つの事例として、日本で受容した「イソップ寓話」を考える。具体的には、渡部温『通俗伊蘇普物語』に含まれる「犬と牛肉」の話为例に、その背景にある「イソップ寓話」の在り方を考察する。渡部本は、近代日本における「イソップ寓話」普及の嚆矢といえるものであるが、普及の初めにおいて、私たちは一体何を受け入れたのだろうか。

以上の議論を通じて、「イソップ寓話」の成立とその展開に関して考察を試みるのが、本論の目的とするところである。

第1章

ヘシオドスとアルキロコス——イソップ以前

1. はじめに

現代の「イソップ寓話」が古代の「イソップの話」から連なるものであるとして、それでは古代において「イソップの話」はどのようなものであったのだろうか。古代の作家たちは、それをどのようなものとして認識し、使用していたのだろうか。そして、それらはもともと「イソップ寓話」と呼びうるものとして認識されていたのだろうか。まず、本章において、後に「イソップの話」として認定されるヘシオドスおよびアルキロコスの事例を取り上げて、個々の話に関する認識の変質を確認する。

なお、本論において議論の対象とする「イソップの話」とは、直接イソップの名に言及される話の他、本章で見るとような、後に「イソップの話」として認定される話を含む。つまり、本論で対象とする「イソップの話」は、下記の基準に該当する話である。

1. イソップとの関連が明示されていること
2. 「イソップ集」に含まれていること

これらのいずれかに該当すれば、それを対象として扱うこととする。あくまでも古代における「イソップの話」を形式的に抽出するための基準である。

1. のイソップとの関連性については、該当する話において「イソップが語った」などイソップとの関連を示す情報が付随していることをいう。また、「イソップ風 (Αἰσώπειον)」など、間接的にイソップとの関わりを示すものも含む。したがって、何らかの形でイソップの名に言及されているものが対象となる。2. の「イソップ集」について、参照する集成は、ファエドルス集、バブリオス集、「アウグスブルク校訂本」*Augustana* の三種である。ただし、これらに含まれるとは、完全に同一の話であることを意味するものではない。一字一句まで同一の話は存在しないともいえるため、これは話の筋書きによって判断することになる。この点には筆者の判断が働くことを、あらかじめ注意しておきたい。

以下、1. に該当する話のうち、イソップと直接関わる話を〈イソップの話〉、2. に該当する話は〈話〉と表記する。そして、「イソップ風」などの、両者を包含しうるより上位の枠組みは「イソップの話」ということになる。その点では、本論は、枠組みとしての「イソップの話」の在り方とその展開を、寓話概念との関係の中で捉え直すものともいえる。

2. 「イソップ」の年代設定

具体的に用例を検討していく前に、「イソップ」に関して想定される年代を確認しておく。イソップに関しては、ヘロドトス『歴史』*Historiae* 2.134-135 節に以下の記述が見られる。

ἔτεσι γὰρ κάρτα πολλοῖσι ὕστερον τούτων τῶν βασιλέων τῶν τὰς πυραμίδας ταύτας λιπομένων ἦν Ῥοδῶπις, γενεὴν μὲν ἀπὸ Θρηίκης, δούλη δὲ ἦν Ἰάδμονος τοῦ Ἡφαιστοπόλιος ἀνδρὸς Σαμίου, σύνδουλος δὲ Αἰσώπου τοῦ λογοποιοῦ. καὶ γὰρ οὗτος Ἰάδμονος ἐγένετο, ὡς διέδεξε τῆδε οὐκ ἦκιστα· ἐπεὶ γὰρ πολλάκις κηρυσσόντων Δελφῶν ἐκ θεοπροπίου ὃς βούλοιο ποινὴν τῆς Αἰσώπου ψυχῆς ἀνελέσθαι, ἄλλος μὲν οὐδεὶς ἐφάνη, Ἰάδμονος δὲ παιδὸς παῖς ἄλλος Ἰάδμων ἀνεύλετο, οὕτω καὶ Αἰσώπος Ἰάδμονος ἐγένετο. Ῥοδῶπις δὲ ἐς Αἴγυπτον ἀπῆκετο Ξάνθεω τοῦ Σαμίου κομίσαντός [μιν], ἀπικομένη δὲ κατ' ἐργασίην ἐλύθη χρημάτων μεγάλων ὑπὸ ἀνδρὸς Μυτιληναίου Χαράξου τοῦ Σκαμανδρωνύμου παιδός, ἀδελφεοῦ δὲ Σαπφοῦς τῆς μουσοποιοῦ.

ロドピスは、これらのピラミッドを残した王たちよりも遥かに後年の人物であったが、生まれはトラキアであり、ヘファイストポリスの子イアドモンというサモス人の奴隷女で、話の作り手であるアイソポスと奴隷仲間であった。そして、アイソポスがイアドモンの奴隷であったことについては、とりわけ次のことから明らかである。すなわち、デルフォイ人たちが、神託に基づいてアイソポス殺害の補償金受け取りを望む者を求めて幾度も布告を出したとき、イアドモンの孫の同名のイアドモンだけが現われ、他には誰も現われなかった。したがって、アイソポスはイアドモンの奴隷であったのである。ロドピスはクサントスというサモス人に連れられてエジプトへ至ると、遊女を生業としたが、スカマンドロニュモスの子で、詩人サッフォーの兄である、ミュティレネ人のカラクソスによって大金で身請けされた。

ロドピスという遊女に関する説明の中で、彼女がイアドモンというサモス人に奴隷として仕えた際に、イソップが奴隷仲間であったことが語られる。また、イソップは *λογοποιός* とされ、ヘロドトスの時点で何らかの話の作り手として知られていたことが分かる。また、詳細は書かれていないものの、イソップがデルフォイ人たちによって殺害されたという逸話も伝わっていたようである。

イソップの年代に関する手がかりは、ロドピスがサッフォーの兄カラクソスによって身請けされたという記述である。つまり、サッフォーと同時代にイソップが存在していたとすれば、イソップの存在した時期として、およそ前 600 年前後を想定することができる。一方、イソップが前 600 年前後の人物だとすれば、ヘロドトスの説明は当時としてもおよそ 150 年前の人物について語るものであった。

イソップの生存年代について、ヘロドトス以上の情報は乏しい。さらにまた、このヘロ

ドトスの記述が、イソップという人物の実在性を保証するものではない。あくまでも、古代ではイソップという人物についてそのように考えられていた、というだけである。とはいえ、古代の議論において、イソップの存在について疑いの目を向ける議論は見受けられないため、少なくとも古代ではイソップは実在した人物として認められていたと考えられる。

本論では実際のイソップの実在性は重視しないものの、古代の人々が共有しえた年代設定として、ヘロドトスの示す前 600 年前後という時期をひとつの基準としておく。つまり、イソップが実在したかどうかではなく、古代の人々がどう認識していたかを重視するのである。本章で見る通り、ヘシオドスやアルキロコスの作品にも〈話〉は登場するが、この年代設定に従えば、これはイソップ登場前の〈話〉ということになり、古代においても後付けのイソップ認定がされていたことを確認できる。

3. ヘシオドス

前 8 世紀の詩人ヘシオドスは、『仕事と日』202-212 行において、「ナイチンゲールと鷹」の話語っている。前述のとおり、これはイソップ以前の〈話〉と呼びうるものであり、後世のイソップ集に含まれるものである。

νῦν δ' αἶνον βασιλεῦσι' ἐρέω φρονέουσι καὶ αὐτοῖς·
 ὧδ' ἴρηξ προσέειπεν ἀηδόνα ποικιλόδειρον,
 ὕψι μάλ' ἐν νεφέεσσι φέρων, ὀνύχεσσι μεμαρπώς·
 ἢ δ' ἐλεόν, γναμπτοῖσι πεπαρμένη ἀμφ' ὀνύχεσσι,
 μύρετο· τὴν ὃ γ' ἐπικρατέως πρὸς μῦθον ἔειπεν·
 “δαμονίη, τί λέληκας; ἔχει νύ σε πολλὸν ἀρείων·
 τῆ δ' εἷς ἦ σ' ἂν ἐγὼ περ ἄγω καὶ ἀοιδὸν εὐδῶσαν·
 δεῖπνον δ', αἶ κ' ἐθέλω, ποιήσομαι ἢ ἐμεθήσω.
 ἄφρων δ', ὅς κ' ἐθέλη πρὸς κρείσσονας ἀντιφερίζειν·
 νίκης τε στέρεται πρὸς τ' αἴσχεσιν ἄλγεα πάσχει.”
 ὧς ἔφατ' ὠκυπέτης ἴρηξ, τανυσίπτερος ὄρνις.

今度は王たちに昔ばなしを語ろう、自身でも弁えているだろうが。

鷹が斑な喉頸をしたナイチンゲールにこう言った、

爪でしっかり捕まえて、雲多き空の高みを運びつつ。

ナイチンゲールは、鉤爪に身を貫かれて、哀れに

泣いていた。それに対して鷹が威圧して言うには、

「おかしな小鳥よ、何を泣き喚くのか。今や遥かに強い者がお前を捉えているのだ。

お前が歌い手であろうと、お前は私が連れて行く所へどこなりと向かうのだ。

私がお前の気になれば、お前を食事とするだろうし、あるいは解放するだろう。

自分よりも強い者と張り合おうとする者は愚か者である。

勝ちを手にするのではなく、恥をかく上に痛い目に遭うのだ」

翼の長い鳥、すばやく翔ける鷹はこう言った。

ヘシオドスは王たちに向けて語る話 *αἴνος* として、この話を持ちだしている。鷹とナイチンゲールの力関係を背景に、自身より強いものと張り合おうとする者は愚か者である、と鷹が語る。この部分だけ読むと、いわゆる弱肉強食という、人の世の理を示す話のようにも見える話である。鷹が王たちを、「歌い手」ナイチンゲールがヘシオドス自身を表す喩え話にも見えるが、そうであるとする、救いのない話といえる。しかし、ヘシオドスは直後でペルセースに対してこう語る（213行）。

ὦ Πέρση, σὺ δ' ἄκουε Δίκης μηδ' ὕβριν ὄφελλε·

ペルセースよ、お前は正義に耳を傾け、暴慢を助長してはならない。

ヘシオドスは、正義（*Δίκη*）に耳を傾け暴慢（*ὑβρις*）を助長しないようにと語りかけ、逸話で示される理を正義に悖る行為として否定する。そして、人の世において、不正をよしとするものは、いずれ神に罰せられることになるという*1。この考えに従えば、「ナイチンゲールと鷹」の逸話における鷹は、不正を働くものとして、いずれは自らもまた神の手により厄災を被るようにも読める。この場合、王たちもいずれゼウスに罰せられることを指摘する話となる。ところが、鷹は必ずしもそのような存在ではなさそうである。

この部分の終わりで、ヘシオドスは再度ペルセースに語りかける（274-281行）。

ὦ Πέρση, σὺ δὲ ταῦτα μετὰ φρεσὶ βάλλεο σῆσιν

καὶ νῦ Δίκης ἐπάκουε, βίης δ' ἐπιλήθεο πάμπαν.

τόνδε γὰρ ἀνθρώποισι νόμον διέταξε Κρονίων,

ἰχθύσι μὲν καὶ θηρσὶ καὶ οἰωνοῖς πετεηνοῖς

ἔσθειν ἀλλήλους, ἐπεὶ οὐ δίκη ἐστὶ μετ' αὐτοῖς·

ἀνθρώποισι δ' ἔδωκε δίκην, ἣ πολλὸν ἀρίστη

γίνεται· εἰ γὰρ τίς κ' ἐθέλη τὰ δίκαι' ἀγορεῦσαι

γινώσκων, τῷ μὲν τ' ὄλβον διδοῖ εὐρύοπα Ζεὺς·

ペルセースよ、お前はこれらのことを心にたたき込み、

今こそ正義に耳を傾け、暴力を完全に忘れるのだ。

クロノスの子は人間たちにこの掟を割り当てたのだから、

すなわち、魚や獣や翼もつ鳥たちには、

彼らが正義を持たぬゆえに、お互いを食い合うにまかせ、

その一方で、人間たちには、際立って最善のものである正義を

*1 Hes. *Op.* 238-243.

授けたのだ。もし誰か、正義を見分けて公言しようと
いう者があれば、その者には遠く見晴るかすゼウスが福を授ける。

ヘシオドスはペルセースに対して、213行同様に、暴力（βία）を忘れ正義に耳を傾けるように促す。暴慢（ὑβρις）も暴力（βία）も、いずれも正義に悖る振る舞いであり、避けるべき対象である。そして、ここにおいて、正義を知らない動物たちとゼウスから正義を与えられた人間たちの区別が示される。人間の世界の理と動物たちの世界の理には相違があり、暴慢や暴力は、無法な動物たちの世界の理ということになる。

この点で、ヘシオドスの示した〈話〉は、動物たちの世界の理を切り取って描くものといえる。このとき、強者の理論を振りかざす鷹は、正義を知らない動物の象徴であろう。無法な動物たちの世界では、鷹のような在り方は自然であり、その振る舞いの結果として神から罰を与えられることもないと考えられる。互いに食い合うままにさせるという通り、そこには神が積極的に関与しないためである。このように考えると、ヘシオドスが語る「鷹とナイチンゲール」の〈話〉は、無法な動物の世界を描くものとして、まさに動物の話であることが重要な要素であったといえる。鷹と同様の振る舞いは文字通りに獣の所業であり、獣に身をやつすことを意味するのである。したがって、この〈話〉は、単純な喩え話というわけでもなく、一般的な教訓を語るための話でもないと考えられる。これは人間としては否定されるべき動物の世界を描写するものであり、ヘシオドスの文脈にあって、不正を働く人間に対する強力な批判として機能するのである*2。

4. アルキロコス

アルカイック期の詩人アルキロコスにも、〈話〉が見られる。ヘシオドス同様、アルキロコスも想定されるイソップの年代以前の人物であるため、アルキロコスの〈話〉もイソップ以前のもの、ということになる。ただし、話の一部が断片に残るのみであり、各断片を再構成するにあたって後世のイソップ集に残る話が参照されている点は、ヘシオドスの場合と事情が異なる。

アルキロコス断片 172-181 West において、内容がある程度分かる形で〈話〉が登場する。後世のイソップ集で「鷲と狐」と題される話である。

172

πάτερ Λυκάμβα, ποῖον ἐφράσω τόδε;
τίς σὰς παρήειρε φρένας
ἦις τὸ πρὶν ἠρήρησθα; νῦν δὲ δὴ πολὺς
ἀστοῖσι φαίνεται γέλως.

*2 この〈話〉については、West(1978, pp.204-205) や Verdenius(1985, pp.117-118) もいわゆる「寓話」ではないと指摘する。また、Nelson(1997) は鷹=ゼウスの喩え話とする。

父リュカンベースよ、どういふつもりだ。

誰がお前の頭を狂わせたのか、
以前はまともであったものを。今や
お前は町で笑いの種となっている。

173

ὄρκον δ' ἐνοσφίσθης μέγαν
ἄλας τε καὶ τράπεζαν.

お前は、偉大な誓いに背を向けた、
塩と食卓に。

174

αἴνός τις ἀνθρώπων ὄδε,
ὡς ἄρ' ἀλώπηξ καιετὸς ζυνεωνίην
ἔμειξαν,

世間にはこのような話がある。
かつて狐と鷺が友誼を
交わした。

一連の断片の背景には、リュカンベースが詩人に娘を嫁がせる約束を反故にしたという事情がある*3。一種の裏切り、不義を働いたリュカンベースに対して、詩人が「鷺と狐」の話で応酬するのである。断片 174West において、話の導入が示される。ヘシオドス同様、アルキロコスも話を αἴνός とし、また、それが既に人々に知られていたものと読める。つまり、既存の話を語る体裁である。

175

×—υ ἐς παῖ]δας φέρων
δαῖ]τα δ' οὐ καλὴν ἐπ[ι
ὠρμησαν ἀπτ]ήνες δύο
×—υ—×]. γῆ[ς] ἐφ' ὑψηλῶι π[άγωι
×—υ—]νεοσσιῆι
×—υ—]προύθηκε, τὴν δ[×—υ—
×—υ—].εχο.[υ—
×—υ—]αδε..[υ—×—υ—
×—υ—×]φωλά[δ—

子供たちへ運び、

*3 West(1971), pp.63-64.

そして人好きしない食事に
 二羽の雛鳥が押しかけた
 ・ ・ ・ 大地のそびえ立つ岩山の上、
 ・ ・ ・ 雛鳥たちの巢で
 ・ ・ ・ 前に置いた、 ・ ・ ・
 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・

176

ὄρᾱις ἴν' ἐστὶ κεῖνος ὑψηλὸς πάγος,
 τρηχὺς τε καὶ παλίγκοτος;
 ἐν τῷι κάθηται, σὴν ἐλαφρίζων μάχην.
 あの高い岩山のある場所が見えるか？
 あのごつごつした、峻しい岩山が。
 あそこに奴がいる、あなたの攻撃を見下して。

177

ὦ Ζεῦ, πάτερ Ζεῦ, σὸν μὲν οὐρανοῦ κράτος,
 σὺ δ' ἔργ' ἐπ' ἀνθρώπων ὄρᾱις
 λεωργὰ καὶ θεμιστά, σοὶ δὲ θηρίων
 ὕβρις τε καὶ δίκη μέλει.
 おおゼウス、父ゼウスよ、あなたの力は天上にあるが、
 あなたは人間の所業を見そなわすはず、
 不当な所業も正当な所業も。獣たちの
 横暴も正義も、気かけられるはず。

178

μή τευ μελαμπύγου τύχηις.
 翼黒き鷲に出会わぬように。

179

προῦθηκε παισὶ δεῖπνον αἰηνὲς φέρων.
 不吉な食事を運んで、子供たちの前に置いた。

180

πυρὸς δ' ἐν αὐτῷι φεψάλυξ.

その中に火の粉が...

181

].ω[
]ηρκ[
].τάτην[
 μ]έγ' ἠείδει κακ[όν
 φ]ρέ[ν]α.ς
].δ' ἀμήχανον τ.[
]ακον·
].γων μεμνημένο.ς[
].ην κλύσας
 κέ]λευθον ὠκέως δι' αἰθέρος[
 λαιψηρὰ κυ]κλώσας πετρά
]ν ἦσ..· σὸς δὲ θυμὸς ἔλπεται

 . . . 大きな厄災を目にした . . .
 . . . 心臓を
 . . . 手立てのない

 . . . 思い出して . . .
 . . . 洗う
 空を通過してすばやく路を
 俊敏な翼を回して
 . . . お前の心は期待する

狐と鷲が親しくなるが、鷲が狐に不義を働く。狐が復讐しようにも、鷲の住処が高い岩山の上のため手出しができず、ゼウスへ祈ることしかできない。とはいえ、鷲も安泰ではなく、結局は災いを被ることとなる。ここで示される話の大筋は以上のものと推測できる。

ここでは直接言明されてはいないものの、裏切り者が不義の代償として厄災を被る構図にみえる話である。したがって、この話だけ読むと、友情を裏切ればその代償としていざれ厄災を被ることになる、だから裏切らないようにせよ、と戒める内容とも解釈できる。しかし、アルキロコスの文脈においては、その限りではない。というのも、既に裏切った相手に対してこの〈話〉が語られるためである。この場合、詩人はこの〈話〉によって、裏切り者（リュカンベース）に対して期待される未来を提示することになる。すなわち、

「狐と鷲」の話が、「お前も悲惨な目に遭うぞ」という脅し、あるいは、そうなるようにと願う一種の呪詛ともいうべき機能を果たすのである。

ところで、断片 177West は狐によるゼウスへの呼びかけの一部である。ゼウスが人間たちの正当な行為 (θεμιστά) と不当な行為 (λεωργά) を監督するとともに、動物たちの暴慢 (ὑβρις) と正義 (δίκη) も気に掛ける存在として語られる。ここでも人間と動物の区別は見られるが、前述のヘシオドスの世界と異なり、ゼウスは動物の世界にも関与する。ὑβρις と δίκη の対比は、ヘシオドスの表現に対応するよう見えるが、ヘシオドスの場合は、それらは人間の世界で問題とされるものであった。一方、アルキロコスの話では、動物たちにも ὑβρις と δίκη を認めることで、そこに神の関与が生じている。そのため、ὑβρις を体現する鷲が、最終的に厄災を被ることが可能になるのである。

こうしてみると、ヘシオドスと多少世界観は異なるが、アルキロコスの場合も人間と動物の区別が意識され、「動物の世界」における出来事を描くものとして「狐と鷲」の話が語られていたと解することができる。動物の世界であっても裏切りを働いた者には神罰が下ると語る〈話〉は、裏切りを働いた「人間」に対して、「神罰は必至である」と強く主張するものであったのではないだろうか。したがって、アルキロコスにおいても、単純な喩え話として動物が持ち出されているわけではなく、まさに「動物の話」であることにも意義を見出せるのである*4。

アルキロコスの断片については、「狐と鷲」の話の他にも、断片 185-187West に、Augustana 集の「王に選ばれた猿と狐」と目される〈話〉が残る*5。ただし、〈話〉を αἶνος とする他に断片から読み取れる情報が少ないため、ここではその存在を指摘するに留めておく。

5. 後世のイソップ集の場合

さて、それでは両者の〈話〉が後世のイソップ集でどのように扱われているか、Augustana 集の例から確認する。

ヘシオドスの〈話〉については、Augustana 集にその翻案と思われる話が含まれている*6。

ΑΗΔΩΝ ΚΑΙ ΙΕΡΑΞ

ἀηδῶν ἐπὶ τινος ὑψηλῆς δρυὸς καθημένη κατὰ τὸ σύνηθες ἦδεν. ἰέραξ δὲ αὐτὴν θεασάμενος, ὡς ἠπόρει τροφῆς, ἐπιπὰς συνέλαβεν. ἡ δὲ μέλλουσα ἀναιρεῖσθαι ἐδέετο αὐτοῦ μεθεῖναι λέγουσα, ὡς οὐχ ἰκανὴ ἐστὶν ἰέρακος γαστέρα αὐτὴ πληρῶσαι, δεῖ δὲ

*4 ここでのヘシオドスとアルキロコスについての議論は、Irwin(1998) や Steiner(2010) にも見られる。Irwin(1998, p. 181) は“The assertion of *dike* in the animal world also has a function in Archilochus’s story: such an assertion heaps abuse upon Lycambes who has no *dike* and therefore is worse than an animal.”と述べており、人間と動物の対比が想定される。

*5 *Aesopica* fab.81.

*6 *Aesopica* fab.4.

αὐτόν, εἰ τροφῆς ἀπορεῖ, ἐπὶ τὰ μείζονα τῶν ὀρνέων τρέπεσθαι. καὶ ὃς ὑποτυχὸν εἶπεν·
 “ἀλλ’ ἔγωγε ἀπόπληκτος ἂν εἶην, εἰ τὴν ἐν χερσὶν ἐτοίμην βορὰν παρὲς τὰ μηδέπω
 φαινόμενα διώκοιμι.”

ὁ λόγος δηλοῖ, ὅτι οὕτω καὶ τῶν ἀνθρώπων ἀλόγιστοί εἰσιν, οἱ δι’ ἐλπίδα μειζόνων
 τὰ ἐν χερσὶν ὄντα προίενται.

ナイチンゲールと鷹

ナイチンゲールが高い木の上に座って、いつものように歌っていた。そのとき、鷹がナイチンゲールを見つけ、餌に困っていたので、飛びかかって捕まえた。ナイチンゲールは、殺される間際に、自分は鷹のお腹を満たすには十分ではないから、もし鷹が餌に困っているならば、もっと大きな鳥に向かうべきだといって、放してほしいと鷹に嘆願した。すると、鷹が答えていうには、「もしこの手にある確かな餌を放り出して、まだ見ぬものを追いかけるならば、私はとんだ考えなしだろう。」

このように、人間においても、より大きなものを望んで手中にあるものを投げ捨てるのは考えが足りない者である、ということはこの話は説き明かしている。

ナイチンゲールが鷹に捕まり、逃げられない筋書きは共通である。特徴的な取り合わせであるから、*Augustana* 版はヘシオドスの逸話に話の発想を得ているように見えるが、鷹の語る理屈が大きく変えられている。すなわち、まだ見ぬものを望んで手中にあるものを手放すことを戒める内容であり、人間に対して適用されるのである。一方で、ヘシオドスの文脈で登場した暴慢 (ὑβρις) と正義 (δίκη)、あるいは動物と人間の対比も意識されない。この話では、人間の代弁者として鷹が登場するのであって、ヘシオドスにおける在り方からの変質を確認できる。

アルキロコスの〈話〉については、*Augustana* 集では以下のような形で話が残る*7。

ΑΕΤΟΣ ΚΑΙ ΑΛΩΠΗΞ

ἀετὸς καὶ ἀλώπηξ φιλίαν πρὸς ἀλλήλους σπεισάμενοι πλησίον ἑαυτῶν οἰκεῖν διέγνωσαν βεβαίωσιν φιλίας τὴν συνήθειαν ποιούμενοι. καὶ δὴ ὁ μὲν ἀναβὰς ἐπὶ τι περιμηκες δένδρον ἐνεοττοποίησατο, ἡ δὲ εἰς τὸν ὑποκείμενον θάμνον ἔτεκεν. ἐξελθούσης δὲ ποτε αὐτῆς ἐπὶ νομῆν ὁ ἀετὸς ἀπορῶν τροφῆς καταπτάς εἰς τὸν θάμνον καὶ τὰ γεννήματα ἀναρπάσας μετὰ τῶν αὐτοῦ νεοττῶν κατεθοινήσατο. ἡ δὲ ἀλώπηξ ἐπανελθοῦσα ὡς ἔγνω τὸ πραχθέν, οὐ μᾶλλον ἐπὶ τῷ τῶν νεοττῶν θανάτῳ ἐλυπήθη, ὅσον ἐπὶ τῆς ἀμύνης· χερσαία γὰρ οὔσα πετεινὸν διώκειν ἠδυνάτει. διόπερ πόρρωθεν στᾶσα, ὁ μόνον τοῖς ἀσθενέσιν καὶ ἀδυνάτοις ὑπολείπεται, τῷ ἐχθρῷ κατηρᾶτο. συνέβη δὲ αὐτῷ τῆς εἰς τὴν φιλίαν ἀσεβείας οὐκ εἰς μακρὰν δίκην ὑποσχεῖν. θυόντων γὰρ τινῶν αἶγα ἐπ’ ἀγροῦ καταπτάς ἀπὸ τοῦ βωμοῦ σπλάγγνον ἔμπυρον ἀνήνεγκεν· οὗ κοιμισθέντος

*7 *Aesopica* fab.1.

ἐπὶ τὴν καλιὰν σφοδρὸς ἔμπεσὼν ἄνεμος ἐκ λεπτοῦ καὶ παλαιοῦ κάρφους λαμπρὰν φλόγα ἀνήψε. καὶ διὰ τοῦτο καταφλεχθέντες οἱ νεοττοὶ – καὶ γὰρ ἦσαν ἔτι ἀτελεῖς οἱ πτηνοὶ – ἐπὶ τὴν γῆν κατέπεσον. καὶ ἡ ἀλώπηξ προσδραμοῦσα ἐν ὄψει τοῦ ἀετοῦ πάντας αὐτοὺς κατέφαγεν.

ὁ λόγος δηλοῖ, ὅτι οἱ φιλιὰν παρασπονδοῦντες, κἄν τὴν τῶν ἡδικομένων ἐκφύγωσι κόλασιν, ἀλλ' οὖν γε τὴν ἐκ θεοῦ τιμωρίαν οὐ διακρούσονται.

鷲と狐

鷲と狐が友情を結び、日々のつきあいで友情が確かなものにしようと、お互いの近くに住むことにした。鷲はある高い木の上のぼって巣を作り、狐は低い茂みに子を産んだ。あるとき、餌を探しに狐が外に出ると、餌に困った鷲が茂みへ舞い降り、狐の子供たちを攫って自分の雛鳥たちと一緒に食べてしまった。戻って来た狐は、何が起きたか悟ったが、子供たちの死にも増して心を痛めたのは、復讐についてだった。というのも、地上に暮らす者であるため、飛ぶものを追いかけることが出来なかったのである。そのため、か弱い無力な者にはこれしかすることが残されていないのか、遠くに立って敵を呪っていた。しかし、鷲も、友情を裏切った不義への罰を遠からず受けることになった。野原で生贄の山羊が焼かれていたとき、鷲が舞い降りて、祭壇から火のついた腸を持ち去った。それを巣に持ち帰ったところ、激しい風が吹きつけて、細い乾いた小枝の巣から、眩い炎が燃え上がった。そのため、雛鳥たちは——まだ羽が生え揃っていなかったため——火に焼かれ、地面へと落ちた。そして、狐は駆け寄ると、鷲の目の前で、雛鳥をみな食べ尽くした。

結んだ友情を破る者は、害を及ぼした相手からの懲罰を逃れたとしても、神罰を免れることはない、ということはこの話は説き明かしている。

鷲と狐が同じ木の天辺と根元に住むなど、状況設定や具体的な描写に相違はあるが、話の筋書きは、アルキロコス断片に見られる話の展開を残しているように見える*⁸。この話がアルキロコス版と大きく異なるのは、教訓部に見られる通り、一種の戒めとして人間に直接適用される話として理解される点であろう。主張としてはアルキロコスと同様のものに見えるが、狐の発言にあった動物と人間の対比は失われている。つまり、人間を動物に投影した物語、人間の世界を動物によって語る逸話として語られるのである*⁹。

以上のように、イソップ集においては、もともとヘシオドスやアルキロコスで語られていた文脈は失われる。そして、個別の話として独立的に解釈が行われ、人間の世界と動物の世界の対比ではなく、動物に人間を投影した話として提示される。これらは「寓話」として理解される話である。

*⁸ もちろん、この話がアルキロコス断片を再構成する手がかりとなっている点は注意を要する。

*⁹ なお、「狐と鷲」の話については、アリストファネスが『鳥』651-3行において「イソップの語った話」として言及している。つまり、前5世紀の時点で、イソップと本来無縁な話の「イソップ」化が行われていたことが分かる。この点については、改めて次章で扱うこととする。

6. 総括

LSJ で *αἶνος* の項を繙くと、“tale, story” が冒頭に挙げられ、さらに “esp. story with moral, fable” として、本章で取り上げたヘシオドスとアルキロコスの箇所と言及されている。これは、いわゆる「寓話」として両者の話が理解されていることを示す。一方、本章で確認したとおり、両者の用いる〈話〉は、文脈上はむしろ “story without moral” と呼ぶうる「動物の話」としての性質を含むものであった。それらは後世のイソップ集に含まれた際には「寓話」へと変質しているが、必ずしも当初から同様の在り方をしていただけではなく、両者に対する「寓話」としての読み方は、後に一般化したものと考えられる。その点では、*LSJ* の語義説明は、寓話概念が遡及的に適用された一例と見ることができると同時に、近現代に至るその影響の大きさを窺わせるものでもある。

さて、アルカイック期からイソップ集編纂までの間に、こうした変質が生じたものと推測できるが、はたしてそこに何があったのだろうか。第2章以降で、さらに検討を進める。

第2章

アリストファネスとプラトン——古典期の用例から

1. はじめに

前章で確認したヘロドトスの記述をはじめ、イソップの名への言及は、紀元前5世紀に見られるようになる。個別の作家では、アリストファネスとプラトンの作品にイソップへの言及が含まれる。本章では、両者の用例を中心に検討し、紀元前5世紀頃の「イソップの話」の在り方を考える。

2. アリストファネス

古典期において、イソップをもっとも作品中に取り込んだのはアリストファネスである。アリストファネスは複数の作品内で〈イソップの話〉を構成要素として取り込んだ。

『蜂』*Vespaie* においては、〈イソップの話〉の効用が示される。フィロクレオンが裁判における嘆願者について言及する際、次のように述べる（563-567行）。

φέρ' ἴδω, τί γὰρ οὐκ ἔστιν ἀκοῦσαι θάπευμ' ἐνταῦθα δικαστῆ;
οἱ μὲν γ' ἀποκλάονται πενίαν αὐτῶν, καὶ προστιθέασιν
κακὰ πρὸς τοῖς οὔσι <κακοῖσιν>, ἕως ἂν ἰσωθῆ τοῖσιν ἔμοῖσιν·
οἱ δὲ λέγουσιν μύθους ἡμῖν, οἱ δ' Αἰσώπου τι γέλοιον·
οἱ δὲ σκώπτουσ', ἔν' ἐγὼ γελάσω καὶ τὸν θυμὸν καταθῶμαι.

ここで裁判人をやっている私が聞けない追従があるなら、知りたいものだ。

ある者たちは自分の貧困を大声で嘆き、さらに、実際以上に

不幸を並び立てるせいで、私の不幸に肩を並べるほどになる。

ある者たちは作り話を語ってみせ、ある者たちはイソップの滑稽話をする。

ある者たちは冗談を言って、私を笑わせて怒りを収めさせようとする。

ここで〈イソップの話〉は笑いを生む話、一種の滑稽話（γέλοιον）として示される。被告人が情状酌量を狙って語る種々の話の中に〈イソップの話〉が含まれる。それによって裁判人を笑わせて和ませ、その怒りを鎮めることが効果として期待されるのである。しかし、フィロクレオンはそうした嘆願を認めないとしており、したがって期待される効果は

発揮されない。

この点については、この後の場面で、今度は息子のブデリュクレオンによって以下のよう
に語られている（1252-1261行）。

{Φι.} μηδαμῶς,
κακὸν τὸ πίνειν. ἀπὸ γὰρ οἴνου γίγνεται
καὶ θυροκοπήσαι καὶ πατάξαι καὶ βαλεῖν,
κάπειτ' ἀποτίνειν ἀργύριον ἐκ κραιπάλης.
{Βδ.} οὐκ, ἦν ξυνηῆς γ' ἀνδράσι καλοῖς τε κάγαθοῖς.
ἦ γὰρ παρητήσαντο τὸν πεπονθότα,
ἦ λόγον ἔλεξας αὐτὸς ἀστεῖόν τινα,
Αἰσωπικὸν γέλοιοι ἢ Συβαριτικόν,
ὄν ἔμαθες ἐν τῷ συμποσίῳ· κᾶτ' εἰς γέλων
τὸ πρᾶγμ' ἔτρεψας, ὥστ' ἀφείς σ' ἀποίχεται.

（フィロクレオン）とんでもない。

飲んで良いことはない。酒のせいで、

戸を破り、殴り合い、物を投げることになる。

そして、二日酔いになって、罰金を払わなければならない。

（ブデリュクレオン）立派な方々と一緒にいれば、そうはならないのです。

その方々が被害者に許しを請うてくれるか、

あなたが自分で何か気の利いた話をして、

つまり、イソップとかシュバリスの滑稽話とか、

宴会で習い覚えた話をして、一件を笑い話に

変えてしまう。それで相手はあなたを許して立ち去るのです。

ブデリュクレオンは、宴席で問題を起こした場合に、何か気の利いた話、イソップやシュバリス人の滑稽話をしてその問題を笑い話にしてしまうと良い、という。それを聞いた相手が許してくれるというのである。前段の裁判の事例と状況は異なるが、この箇所でも〈イソップの話〉は一種の笑い話として、相手を和ませる意図を持った話として説明される。ここで興味深いのは、その手の話が宴席で覚えるものと語られている点、そうした話が多く流布していたと読み取れる点であろう。しかし、それが具体的にどのような話であるのか、ブデリュクレオンの口からは語られない。

その後、フィロクレオンは、ブデリュクレオンの説明を信じて宴会へ赴くことになる。そして、続く場面で、実際に〈イソップの話〉や〈シュバリス人の話〉がフィロクレオンによって語られる（1393-1406行）。

{Φι.} οὐδαμῶς γ', ἐπεὶ

λόγοι διαλλάξουσιν αὐτὰ δεξιοί·
 ὥστ' οἶδ' ὅτι τή ταύτη διαλλαχθήσομαι.
 {Αρ.} οὔτοι μὰ τῷ θεῷ καταπροιζει Μυρτιάς
 τῆς Ἀγκυλίωνος γενομένης καὶ Σωστράτης
 οὔτω διαφθείρας ἐμοῦ τὰ φορτία.
 {Φι.} ἄκουσον, ὦ γύναι· λόγον σοι βούλομαι
 λέξει χαρίεντα. {Αρ.} μὰ Δία μὴ 'μοιγ', ὦ μέλε.
 {Φι.} Αἴσωπον ἀπὸ δείπνου βαδίζονθ' ἐσπέρας
 θρασεῖα καὶ μεθύση τις ὑλάκτει κύων.
 κάπειτ' ἐκεῖνος εἶπεν· “ὦ κύον κύον,
 εἰ νῆ Δί' ἀντί τῆς κακῆς γλώττης ποθὲν
 πυροὺς πρίαο, σωφρονεῖν ἄν μοι δοκεῖς.”
 {Αρ.} καὶ καταγελαῖς μου;

(フィロクレオン) とんでもない。

巧みな話が丸く収めてくれるのだから。

間違いなく私はこの女と仲直りしてみせよう。

(パン売り女) 二柱の女神にかけて、ミュルティアー、
アンキュリオーンとソーストラテーの娘であるこの私の
商品を台無しにしておいて、ただではおかないぞ。

(フィロクレオン) まあお聞きなさい、奥さん。素敵な
話をしてあげよう。(パン売り女) やめてくれ、あんた。

(フィロクレオン) ある晩、宴会帰りのイソップに、
厚かましくて酔っぱらった牝犬が吠えかかった。

そこでイソップが言うには、「この牝犬め、
もしお前がその性悪な舌と引き替えに
小麦を買ったなら、賢いやつだと思えるのだが」

(パン売り女) まだ私を馬鹿にするのか？

宴会で酔ったフィロクレオンがパン売りの女と揉める場面である。憤慨するブデリュクレオンに対して、気の利いた話で丸く収めると言った後、パン売り女に向かって素敵な話と言いつつ〈イソップの話〉を語るのである。これは、フィロクレオンをイソップ、パン売り女を牝犬になぞらえた一種の喩え話であり、小麦への言及もふまえると、まさにパン売り女を揶揄して煽るために、酔ったフィロクレオンがこの場で生み出した話と読める^{*1}。もちろん、この話がパン売り女の怒りを鎮めることはなく、むしろ火に油を注ぐこ

^{*1} この話について、MacDowell(1971, p.312) は、場面に応じたフィロクレオンの創作話と読む。なお、ペリーは *Aesopica fab.423* として各作家に用例の見られる「イソップの話」に含めている。

とになる。

ここでのフィロクレオンの〈イソップの話〉は、前段 1256 行以下のブデリュクレオンの発言を受けたものであろう。ただし、フィロクレオンが語る話は、彼が受けた助言とは異なり、事前に覚えた話ではない。また、この場面において、フィロクレオンはシュバリス人に扮する話も語っており（1427-31 行）、ブデリュクレオンの助言をそのまま実行するが、直前の〈イソップの話〉と同じく、期待される効果は発揮されないのである。

アリストファネスが、〈イソップの話〉について、何らかの問題発生時に相手を和ませ、問題解決を期待できる一種の笑い話として扱う点は、563 行以下のフィロクレオンの発言から一貫している。そして、使用の結果として期待される効果が発揮されない点も共通である。また、裁判の場面ではフィロクレオンは聞き役であるが、宴会後の一連の場面では主客が逆転する。つまり、フィロクレオンは自身が認めなかった〈イソップの話〉によって問題解決を図り、今度は相手に認められずに失敗するのである。そうしたフィロクレオンの軽薄さを描くこともアリストファネスの意図であったとすれば、そのなかの一要素として、〈イソップの話〉は作品構成上で一定の役割を担っていたといえるのではないか。あるいはむしろ、アリストファネスがそのような役割を果たすものとして〈イソップの話〉を設定した可能性も考えられる。後述する通り、アリストファネスが他の作品で示す〈イソップの話〉は、『蜂』と同じ性質の話とはいえないためである。

宴会後の場面でフィロクレオンが示す〈イソップの話〉は、イソップが語った話として、現在確認できるものとしては最も古い。しかし、既に見た通り、フィロクレオンが語るこの話は、おそらくこの場面のために創作されたものである。また、『蜂』における〈イソップの話〉は概して効果を発揮しないが、ここではさらに、酔ったフィロクレオンによる〈イソップの話〉の誤解も要点と考えられる。つまり、〈イソップの話〉といった場合、イソップによって語られた話なのか、イソップについて語る話なのか、という点である。前者であれば、イソップはあくまで語り手であって、話の内部に登場する必要はない。後者はまさにイソップ自身についての逸話と呼ぶべきものであり、話の主体がイソップとなる。一方、〈イソップの話〉に関する当時の一般的なイメージは、ヘロドトスがイソップについて *λογοποιός* と述べる点や後述するプラトンの事例をふまえると、前者であったと推測できる。そうしてみると、フィロクレオンの語った話は、観衆の〈イソップの話〉に関する予想を裏切るものであったのではないか。

この場面の最後、ブデリュクレオンがフィロクレオンを連れて行く際に、フィロクレオンはさらにイソップに言及する（1446-8 行）。

{Φι.} Αἴσωπον οἱ Δελφοί ποτ' – {Βδ.} ὀλίγον μοι μέλει.

{Φι.} φιάλην ἐπητιῶντο κλέψαι τοῦ θεοῦ.

ὁ δ' ἔλεξεν αὐτοῖς ὡς ὁ κάνθαρός ποτε –

(フィロクレオン) あるときデルフォイ人たちがイソップを—— (ブデリュクレオン) ど

うでもいい。

(フィロクレオン) 神の盃を盗んだとして罪に問うた。

そのときイソップが彼らに語るには、かつてフンコロガシが——

イソップとデルフォイの関わりはヘロドトスの記述にも現われており、当時、デルフォイにおけるイソップについて何らかの逸話が広まっていた可能性は十分に考えられる。古註によれば、デルフォイで聖物窃盗の罪を着せられたイソップが、聖物窃盗犯を投げ落とす習わしとなっていた崖の上へと連れて行かれた際に、デルフォイ人たちへ向けてフンコロガシ (κάνθαρος) についての話を語ったのだという*2。つまり、ここでのフィロクレオンの発言は、イソップの最期にまつわる逸話を背景にしたものとみられる。その点では、最後になってフィロクレオンは期待される〈イソップの話〉を語ろうとしたといえる。

とはいえ、イソップはこの話をデルフォイ人たちへ語った後、殺されてしまう。すなわち、イソップが自身の生命を救うためにこの話を語ったのであれば、その話がデルフォイ人たちに受け入れられず、期待される効果を発揮しなかったということになる。ここまで『蜂』で語られる〈イソップの話〉は共通して期待される効果を発揮しない(あるいは逆効果の)ものであったが、その原点はイソップ当人の逸話の中に存在したのである。弁舌で名を馳せたであろうイソップが、その語りでもって自身の生命を救えなかった結末は、言辞を弄する者たちへの強烈な皮肉ともなる。もちろん、この場面で最後にフィロクレオンが語ろうとする〈イソップの話〉は、誰にも相手にされず効果を発揮することはない。

『蜂』の終盤で言及される「フンコロガシの話」は、『平和』*Pax*においては、作品の基本的構想に関わるものともなっている。トリュガイオスが、天上に向かう手段としてフンコロガシを利用するのである。アリストファネスは、『蜂』『平和』を通じて「フンコロガシの話」の全貌を示してはいないが、『平和』のトリュガイオスと娘の対話場面で、話の簡単な筋書きをトリュガイオスに語らせている(127-134行)。

{PA.} τίς δ' ἡ 'πίνοιά σουστίν ὥστε κάνθαρον

ζεύξαντ' ἐλαύνειν εἰς θεούς, ὦ παππία;

{TP.} ἐν τοῖσιν Αἰσώπου λόγοις ἐξηυρέθη

μόνος πετηγῶν εἰς θεούς ἀφιγμένος.

{PA.} ἄπιστον εἶπας μῦθον, ὦ πάτερ πάτερ,

ὅπως κάκοσμον ζῶον ἦλθεν εἰς θεούς.

{TP.} ἦλθεν κατ' ἔχθραν αἰετοῦ πάλαι ποτέ,

ᾧ' ἐκκυλίνδων κἀντιτιμωρούμενος.

(娘) 何という思いつきな、フンコロガシを

繋いで神々の所へ向かおうなんて、お父さん。

*2 Σ in Ar. *V*. 1446.

(トリュガイオス) イソップの話の中に、翼あるもののうち、
ただこれだけが神々のもとへたどり着いたのが見つかったのだ。

(娘) お父さん、お父さん、信じられない話を言っています、
ひどい臭いのする生き物が神々のところへ行っただなんて。

(トリュガイオス) むかしあるとき、鷲に恨みをもってそこへ向かい、
卵を転がし落して復讐したのだ。

ここでは、フンコロガシだけが、翼あるものたちのうちで神々の許(天上)へたどり着いたとされる。フンコロガシが鷲への復讐のために神々の許へ行き、鷲の卵を転がし落としたというのである。この話をイソップの話のなかに見出したとする発言は、当時のアテナイで〈イソップの話〉が複数流布していたことを意味するものだろう。『蜂』の例もふまえると、少なくともこの「フンコロガシの話」については、話全体を語らずとも観衆に了解されるものであったと考えられる*3。

『蜂』をふまえれば、この「フンコロガシの話」は、イソップが死を間際にして語る話であり、観衆の共通認識としても、語られた状況が想定されるものであったと思われる。しかし、アリストファネスは、そうした状況を捨象して「フンコロガシが神々の許へ行った」という内容にのみ注目するのである。

また、この話に対して、「信頼できない作り話」(ἄπιστον μῦθον)と娘が評価している。率直に考えるとフンコロガシの話そのものが荒唐無稽な話であり、娘の発言もそれを指摘するものに見える。しかし、娘が「信頼できない」と語る点は、フンコロガシが神々の許へ向かう動物として相応しくないということである。娘は直後にペガソスで向かうべきと語っており、何らかの生物に乗って神々の許へ向かうことについては否定しない。

アリストファネスは、話の発想だけではなく、「フンコロガシ」(κάνθαρος)を言葉遊びの素材としても利用している(140-145行)。

{PA.} τί δ', ἦν ἐς ὑγρὸν πόντιον πέση βάθος;

πῶς ἐξολισθεῖν πτηνὸς ὦν δυνήσεται;

{TP.} ἐπίτηδες εἶχον πηδάλιον, ᾧ χρῆσομαι·

τὸ δὲ πλοῖον ἔσται Ναξιουργῆς κἀνθάρος.

{PA.} λιμὴν δὲ τίς σε δέξεται φορούμενον;

{TP.} ἐν Πειραιεῖ δήπου 'στί Κανθάρου λιμὴν.

(娘) それでは、もし水を湛えた海の深みへ落ちたら、どうしますか?

翼を持っていても、どうやってそこから逃れることができるのでしょうか?

*3 なお、Augustana集(Aesopica fab.3)にも類似の話が残るが、そこでは神々の許まで追いかけて復讐を果たすフンコロガシの執念が要点であり、話としては、フンコロガシが出る季節にワシが巣作りをしない理由を示す縁起譚ともなっている。基本的な話の筋書きを考えると、イソップが自分を殺そうとするデルフォイ人たちに語るものとして、状況に適った話ではある。

(トリュガイオス) そこは考えて舵を持っているから、それを使うとしよう。

船はナクソス製の小舟となるだろう。

(娘) じゃあ、どの港が運ばれてくるお父さんを迎えてくれるのでしょうか？

(トリュガイオス) もちろん、ペイライエウスにはカンタロス港があるではないか。

フンコロガシが海に落ちたら「小舟」(κάνθαρος) となり、その船を「カンタロス港」(Κανθάρου λιμνήν) が迎え入れるという。κάνθαροςの多義性をもとに軽快な掛け合いが構成されるのである。

『平和』における〈イソップの話〉の扱いは、『蜂』のそれとは異なる。『蜂』においては、〈イソップの話〉は一種の問題解決の手段であり、ある状況下で語られるべき話であって、その目的が重要でもあった。一方、『平和』においては、語られた「話」それ自体が検討の対象となる。話が利用された状況や目的とは無関係に、話の筋書きあるいは字句をそのまま評価して作品内に取り込む試みが行われている。他方、扱い方に相違はあるが、両作品に共通するのは、作品構成上、〈イソップの話〉が欠かせざる要素となっている点であろう。両作品において、もし〈イソップの話〉が利用されなかったとすれば、作品の展開が大幅に変わっていたのではないだろうか。なお、アリストファネスは『リューストラテール』においても「フンコロガシの話」に言及しており、好みのお話であったのかもしれない*4。

ところで、アリストファネスは『鳥』Avesにおいても二箇所〈イソップの話〉に言及する。ひとつは、以下の用例である(651-653行)。

{ΠΕ.} ὄρα νυν, ὡς ἐν Αἰσώπου λόγοις
ἐστὶν λεγόμενον δὴ τι, τὴν ἀλώπεχ', ὡς
φλαύρως ἐκοινώνησεν αἰετῶ ποτέ.

(ペイセタイロス) では、イソップの話の中で
語られているように、かつて狐がどのようにして
鷲と悲惨な友情を結んだものか、見てくれ。

「イソップの話の中に」(ἐν Αἰσώπου λόγοις) という表現は『平和』と同じである*5。この場面では、ペイセタイロスがヤツガシラに向かって「鷲と狐」の話に言及する。これはアルキロコスの場合に見られた話と考えられる*6。すなわち、鳥と地上の生き物の交流とその結末を示す一種の昔話として、自分たちの関係について起こりうる状況をほのめかす手段とするのである。「鳥の話」を鳥に向かって語っている点も『鳥』ならではの点である。

この話がもともとアルキロコスの紹介したものである点も注目すべきだろう。つまり、

*4 Ar. *Lys.* 695: αἰετὸν τίκτοντα κάνθαρός σε μαιεύσομαι. ここでは話を前提とした脅しとして機能する。Henderson(1987) 参照。

*5 Ar. *Pax* 129.

*6 第1章参照。

本来イソップとは無関係に語られたと考えられる〈話〉を、アリストファネスは〈イソップの話〉として提示しているのである。これをアリストファネスがイソップと関連付けたのか、当時既に関連付けられて語られていたのか、この箇所からは判断できないが、古典期における既存の話の「イソップ」化を示す古い事例である*7。ここには、〈話〉を取り込む「イソップの話」の枠組みの存在を窺える。

『鳥』におけるもうひとつの用例は、以下のものである（470-476行）。

{XO.} τουτί μὰ Δί' οὐκ ἐπεύσμην.

{ΠΕ.} ἀμαθῆς γὰρ ἔφυς κοῦ πολυπράγμων, οὐδ' Αἴσωπον πεπάτηκας,

ὃς ἔφασκε λέγων κορυδὸν πάντων πρώτην ὄρνιθα γενέσθαι,

προτέραν τῆς γῆς, κάλειτα νόσω τὸν πατέρ' αὐτῆς ἀποθνήσκειν·

γῆν δ' οὐκ εἶναι, τὸν δὲ προκεῖσθαι πεμπταῖον· τὴν δ' ἀποροῦσαν

ὑπ' ἀμηχανίας τὸν πατέρ' αὐτῆς ἐν τῇ κεφαλῇ κατορύξει.

{ΕΥ.} ὁ πατήρ ἄρα τῆς κορυδοῦ νυνὶ κεῖται τεθνεῶς Κεφαλήσιν.

（コロス）そんなことは、ゼウスにかけて、聞いたことがない。

（ペイセタイロス）お前は無学で好奇心がなく、イソップに通じていないからだ、彼はこう語った、すなわち、カンムリヒバリがすべての鳥のなかで、大地より先に、最初の鳥として生まれ、それからカンムリヒバリの父親が病気で亡くなった。

しかし大地が存在せず、父親は四日間安置された。カンムリヒバリは

どうしようもなく途方に暮れて、父親を自分の頭に埋葬した。

場面は前後するが、この用例も、ペイセタイロスが鳥たち（コロス）へ語る「鳥」の逸話である。鳥が神々や大地よりも先に生まれたことを示す逸話、一種の昔話として語られる。

そのような話は聞いたことがないと言う鳥に対して、ペイセタイロスは、「無学」（ἀμαθῆς）で「好奇心がなく」（οὐ πολυπράγμων）、「イソップに通じていない」（οὐδ' Αἴσωπον πεπάτηκας）ことを、鳥が話を知らない理由に挙げる*8。言い換えると、学があり好奇心があれば、「イソップ」にも通じているものとする認識を窺うことができる。ところが、ここでアリストファネスが示すカンムリヒバリの話は、もともとイソップとは関わりのない話であった可能性が高い。3世紀頃の作家アイリアノスが、この箇所について、

*7 この箇所については、古註（Σ in Av. 651b）がアルキロコスに言及している。また、Dunbar(1995, p.419) は 653 行目 ἐκοινώνησεν が ξυνεωνήην (Alchil. fr. 174West) と関連するものと指摘する。

*8 471 行目 πεπάτηκας の解釈が問題である。LSJ は、πατέω の例としてこの箇所を挙げ“*has not thumbed Aesop*”と説明する。この場合、πεπάτηκας は何かをめぐる動作と結びつけて解釈され、何らかの「イソップ本」の存在が想定される。実際、West(1984, pp.121-2) は、この箇所について“The verb implies something more active than listening to stories”と評し、「イソップ集」とまで言わずとも、「イソップの話」を複数含む何らかの文献を推測している。とはいえ、現状で参照可能な資料を見る限りでは、この時期の「イソップ本」の存在については疑問が残るところである。したがって、ここでは「イソップ本」を想定せず、Dunbar(1995, p.326) に従って「イソップに通じている」ものと解釈する。

インドのヤツガシラに関する古の逸話との類似性を指摘し、インド起源であると論じているのである*⁹。この話に関しても、既にイソップが語ったものとして知られていたのか、あるいはアリストファネスがイソップと関連付けたものか不明であるが、仮に後者であったとすると、「イソップに通じている者」であってもこの話を知らなくても不思議ではない。ともすれば、観衆にとっても初めて耳にする〈イソップの話〉であったのではないかと考えられる。

また、アリストファネスはこの場面においても、話を言葉遊びの素材として利用している。カンムリヒバリが父親を自分の頭に（ἐν τῇ κεφαλῇ）埋葬したという結末に対して、今はアテナイ近郊のケファレー墓地に（Κεφαλήσιν）横たわっている、と語らせるのである*¹⁰。用法としては『平和』と同種のものといえる。

『鳥』における〈イソップの話〉は、『蜂』や『平和』と較べて、作品構成上の大きな役割は与えられていない。その一方で、『鳥』に共通して見られる特徴として、イソップと本来関連のない既存の話が〈イソップの話〉として語られている点を指摘できる。また、鳥に対して「鳥の話」を語る点では、まさに鳥が登場する話であることに意義がある。つまり、話の扱い方としては、やはりアリストファネス独特の意識が反映していると考えられる。

なお、『蜂』は前422年、『平和』は前421年、『鳥』は前414年、また、『リュースストラテ』は前411年の作品である。アリストファネスが〈イソップの話〉を利用する作品の時期が（少なくとも現存するものとしては）同時期に集中していることについても、注意が必要であろう。あくまで推測の域を出るものでもないが、この偏りは、この時期に〈イソップの話〉に対するアリストファネスの個人的な関心の高まりがあったことを示すようにも思われる。同時に、そうした高まりを生む環境が当時のアテナイに出来上がっていたのかもしれないが、他に手掛かりのない現状においては、可能性として述べるにとどめておきたい。

3. プラトン

プラトンは、『パイドン』*Phaedo* 60b-cにおいて、獄中のソクラテスがイソップに倣って話を創作する場面を描いている。

ὁ δὲ Σωκράτης ἀνακαθιζόμενος εἰς τὴν κλίνην συνέκαμψέ τε τὸ σκέλος καὶ ἐξέτριψε τῇ χειρὶ, καὶ τρίβων ἄμα, ὧς ἄτοπον, ἔφη, ὧ ἄνδρες, εἰσὶν οἱ ἀνθρώποι ἡδύ· ὡς θαυμασίως πέφυκε πρὸς τὸ δοκοῦν ἐναντίον εἶναι, τὸ λυπηρόν, τὸ ἅμα μὲν αὐτῷ μὴ ἐθέλειν παραγίγνεσθαι τῷ ἀνθρώπῳ, ἐὰν δὲ τις διώκη τὸ ἕτερον

*⁹ Ael. *NA* 16.5.

*¹⁰ なお、Dunbar(1995, p.327)によると、この話でカンムリヒバリ *κορυδός* が女性名詞として登場するのは、「遺体を安置する」(προκειῖσθαι)、すなわち遺体を綺麗にし、香油を塗って花や宝石などで飾ることが、親族女性の役割だったことと対応する。「ケファレー」と合わせて、アリストファネスが同時代的要素を話に反映させていることが分かる。

καὶ λαμβάνη, σχεδόν τι ἀναγκάζεσθαι αἰεὶ λαμβάνειν καὶ τὸ ἕτερον, ὥσπερ ἐκ μιᾶς κορυφῆς ἡμμένω δὴ ὄντε. καί μοι δοκεῖ, ἔφη, εἰ ἐνενόησεν αὐτὰ Αἴσωπος, μῦθον ἂν συνθεῖναι ὡς ὁ θεὸς βουλόμενος αὐτὰ διαλλάξαι πολεμοῦντα, ἐπειδὴ οὐκ ἐδύνατο, συνῆψεν εἰς ταῦτόν αὐτοῖς τὰς κορυφάς, καὶ διὰ ταῦτα ᾧ ἂν τὸ ἕτερον παραγένηται ἐπακολουθεῖ ὕστερον καὶ τὸ ἕτερον. ὥσπερ οὖν καὶ αὐτῷ μοι ἔοικεν· ἐπειδὴ ὑπὸ τοῦ δεσμοῦ ἦν ἐν τῷ σκέλει τὸ ἀλγεινόν, ἦκειν δὴ φαίνεται ἐπακολουθοῦν τὸ ἡδύ.

ソクラテスは、寝椅子の上へ体を起こし、脚を曲げて手でさすったが、さすりながらこう言った。「諸君、人が快樂と呼んでいるものは何か奇妙なものに思われます。なんとも不思議に、快樂は、反対物と思われるもの、つまり苦痛に対して生来関わっています。すなわち、それら二つは同時にひとりの人間に現われようとはしませんが、もし誰かが一方を追いかけてそれを捕まえると、概して、もう一方もいつも捕まえざるをえないのです。これはまるで、ひとつの頭に二つのものが結び付けられているようなものです。そこで私が思うには、もしイソップがこのことを分かっていたならば、こんな話を作つたでしょう——神が争う快樂と苦痛を和解させようと考えたが、うまくいかなかったので、両者の頭を同じ場所に結びつけた。そのために、一方のものが現われた者には、その後もう一方のものもあとを追って現われてくるのだ、と。それで、私自身の場合についても、そのようなものだと思います。足枷のために脚に苦痛がありましたが、快樂がそのあとを追ってやってきているようにみえます。」

ソクラテスは、ひとりの人間に快樂（ἡδύ）と苦痛（λυπηρόν）が同時に現われることはないが、もしどちらかが現われれば、もう一方も味わうことになるという見解を示し、それについて、まるでひとつの頭に二つのものが結び付けられているようだという。そして、もしイソップがこのことを知っていれば、対立する快樂と苦痛の頭を神が一つのところへ結び付けたため、一方が現われればその後続けてもう一方が現われることになる、という話を作つたであろうと述べる。なお、直後で語られるとおり、ここでソクラテスが快樂と苦痛を話題としたのは、自身の境遇を説明するためであった。すなわち、ソクラテスは、それまで足枷のために脚部に苦痛があったものの、この語りの場面において快樂がやってきたというのである。

これは、イソップならば、という前提で語られるものであり、イソップが実際に作つた話ではないが、(プラトン作中の)ソクラテスの〈イソップの話〉に関する認識を示唆してくれる。この話は、苦樂が一体ではないものの、必ず対となっていることの起源を示し、だから人には苦樂が続けて起こると説明する。これは人間に共通して起こる事象の由来を語る一種の縁起譚である。話の中で快樂と苦痛がそのまま人格化され、神が登場する。また、この話は単独で独立的に読みうる話であり、作り話である。したがって、ここにおける〈イソップの話〉とは、人間にとって一般的な事象を説明するために、人間を捨象して構成された作り話ということができる。そしてまた、何らかの具体的な状況に対する喩え

話としてではなく、話自体として独立的に理解されるのである。このような話は、人間一般に対する観察眼、洞察力の産物であろう。これは作者イソップに対する評価にも繋がるものと思われる。

この場面のソクラテスは、〈イソップの話〉を *μῦθος* として語っている。人間に一般的な事象を語る逸話は、個別の文脈に左右されず、汎用的な話として利用可能である。ソクラテスは自身の状態から逸話を作るが、その一般性ゆえに、作った逸話に自身の状態を当てはめて説明する形へと逆転するのである。

『パイドン』では、ここに続く場面でも〈イソップの話〉が話題とされる。ケベスによるソクラテスへの問いかけとそれに対するソクラテスの返答である。まず、ケベスが次のように問いかける (60c-d)。

Ὁ οὖν Κέβης ὑπολαβὼν, Νῆ τὸν Δία, ὃ Σώκρατες, ἔφη, εὖ γ' ἐποίησας ἀναμνήσας με. περὶ γάρ τοι τῶν ποιημάτων ὧν πεποίηκας ἐντείνας τοὺς τοῦ Αἰσώπου λόγους καὶ τὸ εἰς τὸν Απόλλω προοίμιον καὶ ἄλλοι τινές με ἤδη ἤροντο, ἀτὰρ καὶ Εὐήνος πρόην, ὅτι ποτὲ διανοηθεῖς, ἐπειδὴ δεῦρο ἦλθες, ἐποίησας αὐτά, πρότερον οὐδὲν πάποτε ποιήσας. その言葉を受けてケベスが言った。「ゼウスに誓って、ソクラテス、よい具合に私に思い出させてくださいました。イソップの話に詩を直したり、アポロン神への讃歌をお作りになった、あなたの詩作について、以前からある人たちが私に尋ねていて、そしてエウエノスも先日尋ねてきたのですが、以前はそれらの詩作を決してお作りにならなかったのに、この場所にいらっしやってから、それらをお作りになったのは、いったいどういうおつもりなのでしょうか。・・・」

ケベスは、ソクラテスの話を聞き、自身が知人から受けた問いを思い出してソクラテスに確認する。ソクラテスが獄中で〈イソップの話〉を詩に直し、あるいはアポロンへの讃歌を作ったことについて、それまで行わなかったことを今になって試みた理由を尋ねるのである。

それに対してソクラテスは、それまでの人生においては、「ムーシケーを為し、励め」(μουσικὴν ποίει καὶ ἐργάζου) という夢に従い、それを哲学(φιλοσοφία)と解して励んできたが、実際にはそれが大衆的な文芸(δημώδης μουσική)を為すように命じたとするならば、それに逆らわずに為そうと考えたと述べる^{*11}。そして、はじめに祭りが行われているアポロン神への讃歌を作り、その後、〈イソップの話〉を詩に直したと答えるのである(61b)。

οὕτω δὴ πρῶτον μὲν εἰς τὸν θεὸν ἐποίησα οὗ ἦν ἡ παροῦσα θυσία· μετὰ δὲ τὸν θεόν, ἐννοήσας ὅτι τὸν ποιητὴν δέοι, εἴπερ μέλλοι ποιητὴς εἶναι, ποιεῖν μύθους ἀλλ' οὐ λόγους, καὶ αὐτὸς οὐκ ἦ μυθολογικός, διὰ ταῦτα δὴ οὖς προχείρους εἶχον μύθους καὶ

*11 Pl. *Phd.* 60e-61a.

ἠπιστάμην τοὺς Αἰσώπου, τούτων ἐποίησα οἷς πρώτοις ἐνέτυχον.

そういうわけで、まずはじめに、ちょうど祭祀が行われていた神に向かって詩を作ったのです。神への詩作のあとに、わたしは、詩人というものは、もし作り手であろうとするのであれば、本当の話（ロゴス）ではなく作り話（ミュートス）を作るべきだと考えたのですが、私自身はそのような話の作り手ではなかったわけで、それで、手近にあって覚えていたイソップの話、それらのうちの最初に触れた幾つかを詩に直したのです。

ソクラテスは、イソップを選択したことについて、もし自分が詩人たろうとするならば、言論ではなく物語を作ろうと考え、さらに自身は物語作家ではないから、手近にあってよく知っている話、すなわちイソップの話を取り上げて、そのなかで最初に思いつくものを幾つか詩に直したのだ、と説明する。

ケベスの発言も含め、この叙述からは、イソップの名を伴う話が一般に流布していた状況を窺うことができる。ソクラテスの位置付けでは、〈イソップの話〉は大衆的な文芸に属するものということになるが、そのなかから幾つか取り上げたとするソクラテスの弁は、彼が個々の〈イソップの話〉を独立的な話として識別していたことを示している。また、ソクラテスは大衆的な文芸において自身が扱う素材として〈イソップの話〉を選択したのは、彼がそれだけの意義を〈イソップの話〉に見出していたためだろう。哲学とは異なるものだからといって、大衆的な文芸ならば何でもよいという姿勢をソクラテスがとったとは考え難いからである。これは上で検討したソクラテスの〈イソップの話〉に関する認識とも関係するものと考えられる。

この『パイドン』の場面では、〈イソップの話〉を示す語彙の相違も興味深い。プラトンの描くソクラテスが一貫して μῦθος を用いるのに対して、ケベスは λόγος を用いている。アリストファネスの用例を考えると、作り話としての μῦθος を強調する場合を除けば、前400年前後の〈イソップの話〉はむしろ λόγος が主流であったと推測できる。ソクラテスの示す μῦθος は特異な用例であり、ムーシケーの解釈に見られるとおり、ソクラテスが意識的に λόγος と区別して用いていたと考えられる。その点では、ソクラテスの示す〈イソップの話〉に関する認識も、彼の独自の理解を反映したものであって、当時としては必ずしも一般的な見方ではなかった可能性も考えておく必要がある。

プラトンは、『アルキビアデス I』 *Alcibiades I* 122e-123a において、ソクラテスが実際に〈イソップの話〉をふまえて議論を進める姿を著述している。

ἀλλὰ ταῦτα μὲν πάντα ἐὼ χαίρειν, χρυσίον δὲ καὶ ἀργύριον οὐκ ἔστιν ἐν πᾶσιν Ἑλλησιν ὅσον ἐν Λακεδαίμονι ἰδίᾳ· πολλὰς γὰρ ἤδη γενεὰς εἰσέρχεται μὲν αὐτόσε ἐξ ἀπάντων τῶν Ἑλλήνων, πολλάκις δὲ καὶ ἐκ τῶν βαρβάρων, ἐξέρχεται δὲ οὐδαμόσε, ἀλλ' ἀτεχνῶς κατὰ τὸν Αἰσώπου μῦθον ὃν ἡ ἀλώπηξ πρὸς τὸν λέοντα εἶπεν, καὶ τοῦ εἰς Λακεδαίμονα νομίματος εἰσιόντος μὲν τὰ ἴχνη τὰ ἐκεῖσε τετραμμένα δῆλα, ἐξιόντος δὲ οὐδαμῆ ἂν τις ἴδοι. ὥστε εὖ χρὴ εἰδέναι ὅτι καὶ χρυσῶ καὶ ἀργύρῳ οἱ ἐκεῖ

πλουσιώτατοί εἰσιν τῶν Ἑλλήνων, καὶ αὐτῶν ἐκείνων ὁ βασιλεύς·

しかし、これらのことすべてには触れないでおくとして、金と銀については、全ギリシアにあるものは、スパルタが私有するものに及ばないのです。すでに何代にもわたって、そこへ全ギリシアから、そしてしばしばギリシア以外の場所からも金銀が入って行っていますが、どこへも出て行かないのです。ちょうど、狐がライオンに向かって語ったイソップの話のように、スパルタへ向かって入って行く貨幣の足跡は、そちらへ向いていて明らかであるのに、出て行くものの足跡を誰もどこにも見ることはできないのです。したがって、金銀についてギリシアでもっとも富んでいるのはスパルタの人々であり、彼らのなかでは王がもっとも富んでいることを、わたしたちはよく知らなければなりません。

この場面では、ラケダイモンに金銀が集中していることに関して、ソクラテスがイソップの話にしたがって説明する。しかし、話そのものを引用するわけではなく、「狐がライオンに向かって語った話」とのみ言及する。この場合の *μῦθος* は話全体ではなく狐の発言を指すようにもみえるが、いずれにせよ、これは完全に引用せずとも内容が了解されることが前提の用法である。これもまた、イソップの名を伴う話が独立して一般に流布していたことを示す一例といえる。

ここで想定される「ライオンと狐」の話は、*Augustana* 集では次のように語られている*12。

ΛΕΩΝ ΚΑΙ ΑΛΩΠΗΞ

λέων γηράσας καὶ μὴ δυνάμενος δι' ἀλκῆς ἑαυτῷ τροφήν πορίζειν ἔγνω δεῖν δι' ἐπινοίας τοῦτο πράξαι. καὶ δὴ παραγενόμενος εἰς τι σπήλαιον καὶ ἐνταῦθα κατακλιθεὶς προσποιεῖτο τὸν νοσοῦντα καὶ οὕτω τὰ παραγεγόμενα πρὸς αὐτὸν εἰς ἐπίσκεψιν ζῶα συλλαμβάνων κατήσθιε. πολλῶν δὲ θηρίων καταναλωθέντων ἀλώπηξ τὸ τέχνασμα αὐτοῦ συνείσα παρεγένετο καὶ στᾶσα ἄφωθεν τοῦ σπηλαίου ἐπυνθάνετο αὐτοῦ, πῶς ἔχοι. τοῦ δὲ εἰπόντος· “κακῶς” καὶ τὴν αἰτίαν ἐρομένου, δι' ἣν οὐκ εἴσεισιν, ἔφη· “ἀλλ' ἔγωγε εἰσηλθὼν ἄν, εἰ μὴ ἐώρων πολλῶν εἰσιόντων ἵχνη, ἐξιόντος δὲ οὐδενός.”

οὕτως οἱ φρόνιμοι τῶν ἀνθρώπων ἐκ τεκμηρίων προορώμενοι τοὺς κινδύνους ἐκφεύγουσι.

ライオンと狐

ライオンが年をとり、自分の力で餌を獲れなくなったので、頭を使って餌を獲らねばならないと考えた。そこで、ある洞穴に入って横になり、病人のふりをして、自分のもとへ見舞いにやって来る動物を捕まえては食べていた。多くの獣たちが餌食となったが、狐はライオンの企みに気付いてやって来ると、洞穴から離れたところに立って、調子はどうかとライオンに尋ねた。「良くない」とライオンは答え、中へ入って来ない理由を訊くので、狐はこう

*12 *Aesopica* fab.142.

言った。「私も入って行ったことでしょう、もし多くのものたちの入って行く足跡があるの
に出て行くものの足跡がひとつもない、というのを見ていなかったら。」

このように、賢明な人たちは、確かな印から危険を察知して避けるのだ。

ソクラテスが想定する話がこれと同一であったかどうかは不明なものの、狐の発言からすると、話の筋書きは似たものであったと考えられる。ただし、ソクラテスの利用法では、「入って行く足跡は多いが出て行く足跡がひとつもない」という部分のみ必要であり、話の全体は必要ない。しかも、比較対象とされるのが金銀の出入りであるから、人間に関する話として扱われている訳でもない。個々の話の独立性は別としても、ソクラテスが〈イソップの話〉について、『パイドン』で示されるような理解の仕方ばかりをしていたわけではないことを確認できる。

4. その他の用例

ところで、この時期には幾つかの〈話〉が登場する。つまり、後世において「イソップの話」として判断される話である。ここでそれらについても確認しておきたい。

4.1 ヘロドトス

イソップの年代設定に関して重要な情報を残すヘロドトスであるが、その一方で、イソップに直接言及される〈イソップの話〉はその著作中に登場しない。後にイソップ集に含まれる話として、『歴史』1.141において以下の〈話〉が語られている。

Ἴωνες δὲ καὶ Αἰολεὺς, ὡς οἱ Λυδοὶ τάχιστα κατεστράφατο ὑπὸ Περσέων, ἔπεμπον ἀγγέλους ἐς Σάρδις παρὰ Κῦρον, ἐθέλοντες ἐπὶ τοῖσι αὐτοῖσι εἶναι τοῖσι καὶ Κροίσῳ ἦσαν κατήκοοι. ὁ δὲ ἀκούσας αὐτῶν τὰ προΐσχοντο ἔλεξε σφί λόγον, ἄνδρα φὰς αὐλητὴν ἰδόντα ἰχθῦς ἐν τῇ θαλάσῃ αὐλέειν, δοκέοντά σφεας ἐξελεύσεσθαι ἐς γῆν. ὡς δὲ ψευσθῆναι τῆς ἐλπίδος, λαβεῖν ἀμφίβληστρον καὶ περιβαλεῖν τε πλῆθος πολλὸν τῶν ἰχθύων καὶ ἐξεῖρῶσαι, ἰδόντα δὲ παλλομένους εἶπειν ἄρα αὐτὸν πρὸς τοὺς ἰχθῦς· Παύεσθέ μοι ὀρχεόμενοι, ἐπεὶ οὐδ' ἐμέο αὐλέοντος ἠθέλετε ἐκβαίνειν ὀρχεόμενοι. Κῦρος μὲν τοῦτον τὸν λόγον τοῖσι Ἴωσι καὶ τοῖσι Αἰολεῦσι τῶνδε εἵνεκα ἔλεξε, ὅτι δὴ οἱ Ἴωνες πρότερον αὐτοῦ Κύρου δεηθέντος δι' ἀγγέλων ἀπίστασθαί σφεας ἀπὸ Κροίσου οὐκ ἐπέειθοντο, τότε δὲ κατεργασμένων τῶν πρηγμάτων ἦσαν ἔτοιμοι πείθεσθαι Κύρω. ὁ μὲν δὴ ὀργῇ ἐχόμενος ἔλεγέ σφί τάδε.

イオニア人とアイオリス人は、リュディア人がペルシア人によって征服されるとすぐに、サルデイスのキュロスのもとへ使いを送った。クロイソスに従っていた時と同じようにキュロスにも従いたいと思ったためである。キュロスは彼らの申し出を聞いてから、次の話を語った。ある笛吹き男が海中に魚を見て、陸へと上がって来るかと思って、笛を吹いた。しかし

期待は外れたので、投網を手にして投げて、沢山の魚を曳き上げたが、そのとき、魚が跳ねまわる様子を見て、こう言った。「踊るのを止めよ、私が笛を吹いた時には出て来て踊ろうとしなかつたくせに。」キュロスがこの話をイオニア人とアイオリス人に聞かせたのは、以前キュロスが使いを送ってクロイソスに叛くように頼んだときにイオニア人は従わず、事が終わった後になってキュロスに従おうとしたためであった。キュロスは怒りに駆られて彼らにこう語った。

ヘロドトスの著作中に登場する〈話〉は、キュロス王が語る話である。イオニア人とアイオリス人が、ペルシアによるリュディア征服を受けてキュロス王のもとに従属を申し出たことに対してキュロスが答えて言う。一人の笛吹きが笛を吹けば海中の魚が取れるのではないかと考えたが当てが外れ、網を投げ入れたら魚がたくさん捕れた。笛吹きは魚が跳ね踊る様子を見て、自分が笛を吹いた時には出てこなかつたくせに、今更踊るのを止めるよう語る。λόγοςとして導入されるこの〈話〉は、眼前の状況に対する喩え話となっている。笛吹きがキュロスに、魚たちがイオニア人とアイオリス人に対応する。イオニア人とアイオリス人が、以前味方になるよう促したときには従わず、状況の切迫した今となって従いたいと申し出てきたことについて、キュロスは笛吹きと魚に喩えて語るわけである。キュロスはこの話を「怒りに駆られて」語ったとされる。「踊るのを止めよ」という笛吹きの発言は、キュロスの怒りを代弁するものにみえるが、イオニア人とアイオリス人の側も、そうしたキュロスの怒りを読み取り、申し出は手遅れと判断して町に城壁を築く選択をするのである*13。

ただ、この喩え話において、そもそも笛吹きが笛を吹いて魚を捕ろうとすること自体、手段として適切性に欠いている。それで魚が取れなかったからといって、批判できるようなことではなく、笛吹きの発言は一種の言い掛かりともいえる。つまり、話の流れとしては、むしろ笛吹き自身の問題が大きいようにみえる。キュロスがその点までふまえて喩え話をしたとすれば、ここでの「怒り」は、適正な手段を取らなかった自身に対するものも含んでいたことになろう。とはいえ、喩え話は魚たるイオニア人とアイオリス人の判断に繋がったわけであり、効用としては「既に手遅れ」ということを伝えるための話となっている。

この〈話〉は、キュロスが具体的な状況に合わせて語った喩え話と読める話であり、もともとイソップとは無関係な話である。話の効用もその状況に即したものである。また、ヘシオドスやアルキロコスの〈話〉は動物の世界を描く話であったが、この〈話〉は笛吹き（すなわち人間）が主役であり、魚が意志を持って会話をすることもない。つまり、話を単独で見ても、あくまで人間の世界の逸話といえる。しかし、後の時代には両者ともイソップと関連付けられて認識されるのである。

*13 Hdt. 1.141.

なお、この〈話〉は *Augustana* 集には以下のように採録されている*14。

ΑΛΙΕΥΣ

άλιεύς ἀλιητικῆς ἔμπειρος ἀναλαβὼν ἀύλους καὶ τὰ δίκτυα παρεγένετο εἰς τὴν θάλασσαν καὶ στάς ἐπὶ τινος προβλήτος πέτρας τὸ μὲν πρῶτον ἦδε, νομίζων αὐτομάτους πρὸς τὴν ἠδυσφονίαν τοὺς ἰχθύας ἐξάλλεσθαι. ὡς δὲ αὐτοῦ ἐπὶ πολὺ διατεινομένου οὐδὲν πέρας ἠνύετο, ἀποθέμενος τοὺς ἀύλους ἀνειίλετο τὸ ἀμφίβληστρον καὶ βαλὼν κατὰ τοῦ ὕδατος πολλοὺς ἰχθύας ἠγρευσεν. ἐκβαλὼν δὲ αὐτοὺς ἀπὸ τῶν δικτύων ἐπὶ τὴν ἠίονα ὡς ἐθεάσατο σπαίροντας, ἔφη· “ὦ κάκιστα ζῶα, ὑμεῖς, ὅτε μὲν ἠύλου, οὐκ ὀρχεῖσθε, νῦν δέ, ὅτε πέπαυμαι, τοῦτο πράττετε.”

πρὸς τοὺς παρὰ καιρὸν τι πράττοντας ὁ λόγος εὐκαιρος.

漁師

笛に長けた漁師が、笛と網を持って海へと赴いて岩の突端に立ち、甘い調べに誘われて魚たちがみずから跳び出して来ると考えて、まず笛を奏でた。しかし、いくら笛を吹いても目的を果たせなかったため、笛をわきに置き、投網を取って水に投げ入れたところ、沢山の魚を捕まえた。漁師は、魚を網から浜へと放り出したとき、魚がもがいて跳ねるさまを見て、こう言った。「いまましい生き物め、お前たちは、私が笛を吹いた時に踊らなかつたくせに、笛をやめた今になって踊ってやがる」

時機をはずして何かを行なう者たちにこの話はふさわしい。

笛吹きが笛に長けた漁師となり、登場する人物が魚を捕ることについて合理化が図られている。時機をはずして何かを行う者たち、という文言は、漁師に対しても魚に対しても当てはまるような表現である。

4.2 クセノフォン

プラトンの他、クセノフォンもまた〈話〉を語るソクラテスの姿を記録している。『ソクラテスの思い出』*Memorabilia* 2.7.12-14において、仕事をしないとって女たちに責められる男に対してソクラテスが語る話である。登場する話はイソップの名を伴うものではなく、バブリオス集に同種の話が含まれている*15。

καὶ ὁ Σωκράτης ἔφη· Εἶτα οὐ λέγεις αὐταῖς τὸν τοῦ κυνὸς λόγον; φασὶ γάρ, ὅτε φωνήεντα ἦν τὰ ζῶα, τὴν οἶν πρὸς τὸν δεσπότην εἰπεῖν· Θαυμαστὸν ποιεῖς, ὃς ἡμῖν μὲν ταῖς καὶ ἔριά σοι καὶ ἄρνας καὶ τυρὸν παρεχούσαις οὐδὲν δίδως ὃ τι ἂν μὴ ἐκ τῆς γῆς λάβωμεν, τῷ δὲ κυνί, ὃς οὐδὲν τοιοῦτόν σοι παρέχει, μεταδίδως οὐπὲρ αὐτὸς ἔχεις σίτου. τὸν κύνα οὖν ἀκούσαντα εἰπεῖν· Ναὶ μὰ Δί· ἐγὼ γάρ εἰμι ὁ καὶ ὑμᾶς αὐτὰς σὸζων ὥστε

*14 *Aesopica* fab.11.

*15 *Babr.* 128.

μήτε ὑπ' ἀνθρώπων κλέπτεσθαι μήτε ὑπὸ λύκων ἀρπάζεσθαι· ἐπεὶ ὑμεῖς γε, εἰ μὴ ἐγὼ προφυλάττοιμι ὑμᾶς, οὐδ' ἂν νέμεσθαι δύναισθε, φοβούμεναι μὴ ἀπόλησθε. οὕτω δὴ λέγεται καὶ τὰ πρόβατα συγχωρῆσαι τὸν κύνα προτιμᾶσθαι. καὶ σὺ οὖν ἐκείναις λέγε ὅτι ἀντὶ κυνὸς εἶ φύλαξ καὶ ἐπιμελητής, καὶ διὰ σέ οὐδ' ὑφ' ἐνὸς ἀδικούμεναι ἀσφαλῶς τε καὶ ἡδέως ἐργαζόμεναι ζῶσιν.

そしてソクラテスが言った。「それでは彼女たちに犬の話を使って聞かせないのですか？
 このような話です——動物たちが口を利けた頃、ヒツジが自分の主人に向かって言った。『あなたは奇妙なことをされています。羊毛や仔羊やチーズを提供している私たちには、私たちが大地から得るもの以外には何も下さらない一方で、何も提供しない犬には、あなたがご自分でお持ちの食べ物を分けてあげるなんて。』それを聞いて犬が言った。『もちろんやっているさ。お前たちが人間に盗まれたり狼に攫われたりしないように、俺がお前たちを守っているのだから。もし俺がお前たちを守ってやらなければ、お前たちは、殺されることを恐れて、草を食べることもままならないだろう。』そうして、羊たちは犬がひいきされるのを受け入れた、とのこと。そこで、あなたも、自分がこの犬同様に番人であり守護者であって、自分のおかげで、彼女たちは誰からも害を及ぼされることなく、安全に快適に働いて生きているのだ、と女性たちに言って聞かせなさい。」

この場面では、ソクラテスが、「犬の話」を女たちに話さないのかと男に向かって語りかけ、犬の *λόγος* として〈話〉を紹介する。話の中では、羊が所有者に対して、自分たちは羊毛やチーズなどを提供するのに、何もしない犬の方が良い待遇を受けていると文句を言う。それを聞いた犬が、自分が守っているからこそ、羊たちは安全に生きて食事ができるのだと答え、羊たちは犬の待遇を認めるようになる。この筋書きは、男が犬に、女たちが羊に対応する。つまり、具体的な状況に合わせた喩え話として機能する話である。その点では、ヘロドトスの用例に近い。なお、話の導入部で、「動物たちが言葉を話していた頃」と語られることで、話の内部で動物たちが発言することに説明が与えられている点も特徴的である。また、冒頭で所有者（＝人間）に言及されることで、この逸話は、人間の世界で動物たちが会話を交わす話ともなる。

プラトンの「ライオンと狐」とは異なり、この〈話〉が周知のものだったのかここで創作されたものなのか、判断は難しい。この〈話〉も、会話する動物たちによって何らかの状況を説明するという点で「ライオンと狐」と同種の話と読めるが、イソップへの言及がないため、同時代的にイソップと関連して認識されていたかどうか判然としない。ただし、同種に見える話をプラトンの描くソクラテスは *μῦθος* として語り、クセノフォンでは *λόγος* として語る。この点ではむしろクセノフォンの方が当時の在り方に適っているようにみえる。

5. 総括

イソップへの言及は前5世紀以降に見られるが、作家による〈イソップの話〉の扱い方を確認すると、作家によって異なる見解が示されている。また、同じ作家においても、作品によって用法が異なり、全体として一貫性を欠いている。この点は、〈イソップの話〉の性質が多様なものであったということもできるだろうが、見方を変えると、〈イソップの話〉に関する共通認識が構築されていなかったということでもあろう。後にテオンも指摘するとおり^{*16}、それを表す語彙も作家によって一定ではない。

一方、〈イソップの話〉として認められる話は、大きく見れば一種の昔話である。さらに、イソップが語ったとされる話では、動物や昆虫が主体となる話を中心となっている。また、プラトンが描くソクラテスによる〈イソップの話〉からは、それが何らかの事象の由来を語る、一種の縁起譚として理解されていたことを窺える。この点はアリストファネスにも同様の特徴が見られる。本章で扱った事例を考慮すると、当初の〈イソップの話〉は、基本的に、「動物が主体となる過去の話」あるいは「縁起譚」が要件であったと考えられる。このことは逆に、これらの要件が満たされる話であれば、〈イソップの話〉と見做される可能性があったということでもある。つまり、〈イソップの話〉が類型化されて「イソップの話」の枠組みが出来ることになる。たとえば、アリストファネスがアルキロコス〈話〉を〈イソップの話〉としたことは、その一例であろう。また、プラトンの例も同様に解することができるが、この場合、縁起譚であれば必ずしも動物の話に限定されなかったことも推測できる。とはいえ、プラトンの描くソクラテスの見解は独特に見えるものであり、一般的であったかどうか疑問が残る。

クセノフォンが示した〈話〉は、内容から見ると当時からイソップと関連する話として認識されていた可能性は考えられる。他方、ヘロドトスが語るキュロスの逸話は、同時代的にイソップと関連付けられたとは考えにくい。この話を「イソップの話」の枠組みに含めるためには、アリストファネスやプラトンとは異なる基準が必要であろう。

ところで、古典期には〈イソップの話〉が一定数流布していたことを推測できる一方で、実際の用例は限られており、実態が分からない。その状況において、アリストファネスやプラトンによる〈イソップの話〉の用例が、後世の人々にとっては、〈イソップの話〉を位置づけるための重要な手掛かりとなる。

たとえば古代においても、プルタルコスは、『いかにして若者は詩人に耳を傾けるべきか』*Quomodo adolescens poetas audire debeat* 16Cにおいて、『パイドン』の記述をふまえて、ソクラテスが〈イソップの話〉を詩に直したことに言及している^{*17}。プルタルコスはその前段で〈イソップの話〉の教育的効用を述べているが、ともすればこれは、プラトン

*16 第4章参照。

*17 Hunter&Russell(2011), p.87.

が残した記述が〈イソップの話〉の価値を裏付ける一因となっていたものと考えられる。この場合、プルタルコスが、プラトンの記す〈イソップの話〉を自身が扱うものと同じ対象として認識していたことになる。時代による変質は考慮されず、同一の対象として理解されるのである。この点は、プルタルコスの例に限らず、留意すべき問題であるように思われる。

第3章

アリストテレスとその影響——ヘレニズム期以降

1. はじめに

イソップとデルフォイの関係をヘロドトスが記述し、アリストファネスがデルフォイ人たちに話を語るイソップに言及していることなどをふまえると、具体的な状況で話を語るイソップ自身の逸話が、少なくとも古典期には知られていたと推測できる。前章でも確認したとおり、イソップの語りの意図について、アリストファネスは意識していたように思われるし、プラトンも当時としては異質に見える見解を垣間見せている。しかし、明確な形で語りの意図を説明するのは、アリストテレスの『弁論術』における議論である。

本章では、アリストテレスが示す見解を中心に、紀元前1世紀頃までの「イソップの話」の事例から、アリストテレスの議論とその後の「イソップの話」の関わりを検討する。

2. アリストテレスと「イソップの話」

アリストテレスは、それまでの作家と異なり、〈イソップの話〉を機能面から分析している。『弁論術』 *Rhetorica* 1393a23-31 において、例証 (παράδειγμα) の一種として〈イソップの話〉を位置付けるのである。

Λοιπὸν δὲ περὶ τῶν κοινῶν πίστεων ἅπασιν εἰπεῖν, ἐπεὶ περ εἴρηται περὶ τῶν ἰδίων. εἰσὶ δ' αἱ κοιναὶ πίστεις δύο τῷ γένει, παράδειγμα καὶ ἐνθύμημα· ἡ γὰρ γνώμη μέρος ἐνθυμήματός ἐστιν. πρῶτον μὲν οὖν περὶ παραδείγματος λέγωμεν· ὁμοίον γὰρ ἐπαγωγῆ τὸ παράδειγμα, ἡ δ' ἐπαγωγὴ ἀρχή. παραδειγμάτων δὲ εἶδη δύο· ἐν μὲν γὰρ ἐστὶν παραδείγματος εἶδος τὸ λέγειν πράγματα προγενομένα, ἐν δὲ τὸ αὐτὸν ποιεῖν. τούτου δὲ ἐν μὲν παραβολὴ ἐν δὲ λόγοι, οἷον οἱ Αἰσώπειοι καὶ Λιβυκοί.

個別の種類に関わる説得手段は述べられたから、残るは、すべての種類に共通な説得手段に関して述べることである。共通な説得手段は、分類として、例証と説得推論のふたつである(というのは、格言は説得推論の一部分なので)。それでは、まず例証について述べよう。なぜなら、例証は帰納に似ているが、帰納ははじまりであるから。例証の種はふたつある。例証の種のひとつは過去に起きた出来事を語ることであり、もうひとつは、それを自ら作り出すことである。そして後者のうち、ひとつは比喩であり、もうひとつはイソップやリビュア

の話のような喩え話である。

アリストテレスは共通な説得手段について、例証 (παράδειγμα) と推論 (ἐνθύμημα) の二種類を挙げる。そして、例証について、過去の事例を語る事 (τὸ λέγειν πράγματα προγενομένα) と過去の事例を模して創り出す事 (τὸ αὐτὸν ποιεῖν) に分類し、さらに後者について、比喩 (παραβολή) と喩え話 (λόγοι) に分類する。この喩え話について、アリストテレスはイソップの話やレビューの話 (οἱ Αἰσώπειοι καὶ Λιβυκοί) がそれにあたると説明する。

この分析において、アリストテレスは一定の枠組みを提示し、その中に〈イソップの話〉が含まれることを示したことになるが、見方を変えれば、一定の基準を満たせば、イソップとの関係が明示されずとも、それが〈イソップの話〉となりうることを示したのである。アリストテレスは Αἰσώπου λόγοι ではなく Αἰσώπειοι λόγοι と述べるが、〈イソップの話〉において、その枠組みに納まるものであれば、必ずしも「イソップが語った話」であることが重要ではないということになる。アリストテレスの議論は、「イソップが語った話」を機能の面から捉え、それを〈イソップの話〉として提示するものであるから、Αἰσώπειοι λόγοι とは、実体としての話の集合体というよりも、機能を満たす話の観念的な集合体を意味するものとなるのである。その点では、〈イソップの話〉を内包する、喩え話としての「イソップの話」の枠組みが、ここで提示されているともいえる*1。

アリストテレスの考える「イソップの話」は、「過去にあった事実」と「比喩」を合わせたようなものとされる (1394a2-5)。

εἰσὶ δ' οἱ λόγοι δημηγορικοί, καὶ ἔχουσιν ἀγαθὸν τοῦτο, ὅτι πράγματα μὲν εὐρεῖν ὅμοια γεγενημένα χαλεπὸν, λόγους δὲ ῥᾶον ποιῆσαι γὰρ δεῖ ὥσπερ καὶ παραβολάς, ἄν τις δύνηται τὸ ὅμοιον ὀρᾶν, ὅπερ ῥᾶόν ἐστιν ἐκ φιλοσοφίας.

「喩え話」は、公衆向けの弁論に適しており、また、類似した過去の出来事を見つけるのは困難だが、「喩え話」を作るのは容易だという利点がある。というのは、類似性を見つけることができる者は、比喩と同様に喩え話を作るべきであるが、類似性の発見は、知性の力によって容易に可能なのである。

過去に起った事例を見つけ出すのが困難であるのに対し、「イソップの話」を創り出すのは容易であることが利点として述べられる。用いる状況との類似性を掴むことができれば、比喩に倣って話を創ればよいというのである。アリストテレスの分類に従えば、「イ

*1 この箇所ではアリストテレスの示す「喩え話」は λόγοι と表記されるが、これは対象を限定するには適切な語彙ではない。そのため、アリストテレス自身も「イソップの」「レビューの」と付加して限定する必要があると考えられる。このことは、後の人々がアリストテレスの分析に従って「喩え話」 λόγοι を区別する際にも、「イソップ」「レビュー」などの名称が付加された可能性を示唆する。そして、その場合、知名度からみて「イソップ」の名が付加されることが多かったのではないかと推測する。その点では、たとえばディオゲネス・ラエルティオスがデメトリオスの著作として記す“λόγων Αἰσωπειῶν συναγωγαί” (5.80) などでもその一例といえそうである。

ソップの話」とはあくまでも作り話であり、しかも文脈に合わせて意図的に作り出すことのできる話といえる。話の内容は、それをを用いる状況との類似性によって定められるわけであり、そうした具体的状況が「イソップの話」に先立つことになる。ただし、類似性を見出すためには一定の観察眼や洞察力が必要であろうから、この点はプラトンが記したソクラテスの認識にも通ずるところがある*2。

また、アリストテレスは、「イソップの話」が公衆を前にして話すのに適したものだとする。アリストテレスは「イソップの話」について、ステーシコロスがヒメラの人々に語る例とイソップがサモスの人々に語る例の二つの用例を取り上げるが、いずれも公衆の面前で語られる話である（1393b10-22; 1393b22-1394a1）。

Στησίχορος μὲν γὰρ ἐλομένων στρατηγὸν αὐτοκράτορα τῶν Ἱμεραίων Φάλαριν καὶ μελλόντων φυλακὴν δίδοναι τοῦ σώματος, τᾶλλα διαλεχθεὶς εἶπεν αὐτοῖς λόγον ὡς ἵππος κατεῖχε λειμῶνα μόνος, ἐλθόντος δ' ἐλάφου καὶ διαφθείροντος τὴν νομὴν βουλόμενος τιμωρήσασθαι τὸν ἔλαφον ἠρώτα τινὰ ἄνθρωπον εἰ δύναται ἂν μετ' αὐτοῦ τιμωρήσασθαι τὸν ἔλαφον, ὁ δ' ἔφησεν, ἐὰν λάβῃ χαλινὸν καὶ αὐτὸς ἀναβῆ ἔπ' αὐτὸν ἔχων ἀκόντια· συνομολογήσας δὲ καὶ ἀναβάντος ἀντὶ τοῦ τιμωρήσασθαι αὐτὸς ἐδούλευσε τῷ ἀνθρώπῳ. “οὕτω δὲ καὶ ὑμεῖς”, ἔφη, “ὄρατε μὴ βουλόμενοι τοὺς πολεμίους τιμωρήσασθαι τὸ αὐτὸ πάθητε τῷ ἵππῳ· τὸν μὲν γὰρ χαλινὸν ἔχετε ἤδη, ἐλόμενοι στρατηγὸν αὐτοκράτορα· ἐὰν δὲ φυλακὴν δῶτε καὶ ἀναβῆναι ἐάσητε, δουλεύετε ἤδη Φαλάριδι”. (1393b10-22)

ステーシコロスは、ヒメラの人々がファラリスを独裁将軍として選び、親衛隊をつけようとしたとき、他にも述べてから、彼らに対してこのような話を語って聞かせた——ある馬が牧草地を独り占めしていたが、そこへ鹿が入り込んで牧草地を駄目にしてしまったため、馬は鹿に仕返ししようと思い、ある人間に、自分と一緒に鹿に仕返しをしてくれないかと尋ねた。するとその人間は、馬が馬銜をつけ、自分が槍を持って馬に乗るならばよい、と答えた。馬はそれに同意し、その人間が馬の背に乗ったが、馬は、仕返しをする代価に、自らその人間の奴隷となったのだ。そして、ステーシコロスは、こう述べた。「このように、諸君もまた、敵に復讐しようと思ひ、この馬と同じ目に遭わないように気をつけなさい。君たちは、彼を独裁将軍に選んだために、すでに馬銜をつけているのだ。もし親衛隊をつけて、背に乗ることを許すならば、すぐにもファラリスの奴隷となることだろう。」

Αἴσωπος δὲ ἐν Σάμῳ δημηγορῶν κρινομένου δημαγωγῷ περὶ θανάτου ἔφη ἀλώπεκα διαβαίνουσιν ποταμὸν ἀπωσθῆναι εἰς φάραγγα, οὐ δυναμένην δὲ ἐκβῆναι πολὺν χρόνον κακοπαθεῖν καὶ κυνοραιστὰς πολλοὺς ἔχεσθαι αὐτῆς, ἐχίνον δὲ πλανώμενον, ὡς εἶδεν αὐτήν, κατοικτεῖραντα ἐρωτᾶν εἰ ἀφέλοι αὐτῆς τοὺς κυνοραιστὰς, τὴν δὲ οὐκ

*2 第2章参照。

ἐᾶν ἐρομένου δὲ διὰ τί, “ὅτι οὗτοι μὲν” φάναί “ἤδη μου πλήρεις εἰσὶ καὶ ὀλίγον ἔλκουσιν αἷμα, ἐὰν δὲ τούτους ἀφέλητε, ἕτεροι ἐλθόντες πεινῶντες ἐκπιῶνταιί μου τὸ λοιπὸν αἷμα”. “ἀτὰρ καὶ ὑμᾶς, ἄνδρες Σάμιοι, οὗτος μὲν οὐδὲν ἐτι βλάψει (πλούσιος γάρ ἐστιν), ἐὰν δὲ τοῦτον ἀποκτείνητε, ἕτεροι ἤξουσι πένητες, οἱ ὑμᾶς ἀναλώσουσι τὰ λοιπὰ κλέπτοντες.” (1393b22-1394a1)

イソップは、サモスで、民衆指導者が死罪に問われていたときに、人々の前で次のような話を語った——ある狐が川を渡っていたとき、岩の裂け目にはまり、抜け出すことが出来ないまま長くにわたって苦しんでいると、沢山の犬ダニが取りついた。辺りをうろついていた針鼠が、狐の姿を目にして同情し、犬ダニをとってあげようかと尋ねた。狐が不要だということで、針鼠がその理由を尋ねると、狐はこう答えた。「こいつらはもう私の血で満腹で、血を吸うにしてもわずかであるが、もし君がこいつらを取ってしまうと、腹を空かせた別のやつらがやって来て、残りの私の血を吸ってしまうだろう」。(イソップが続けて言うには)「それで君たちも、サモスの諸君、この男はもう君たちに害を及ぼすことはないだろうが(もうお金持ちなのだから)、もし君たちがこの男を殺してしまえば、別の貧乏なやつらがやって来て、残った分を盗んで君たちをすっからかんにしてしまうだろう」

いずれの話も具体的な状況に対する喩え話となっており、アリストテレスの観点に従えば、両者がそれぞれ説得のために状況に合わせて自ら作り出して語った喩え話と説明できる。これらの用例においては、語り手が誰かということではなく、「具体的な状況で、説得のために、状況に合わせた喩え話を創作」したことが要点であり、話の前後の文脈も含めて、全体として「イソップの話」を具体的にどう用いるかという例示ともなっている。

しかし、ここでひとつ大きな問題が生じる。アリストテレスの理論では、「イソップの話」とは具体的な文脈で動的に作り出されるものであり、そこで個別的な効力を発揮する。つまり、具体的な文脈を伴ってこそ意味のあるものである。上記の例にしても、前提となる状況が示されるからこそ、有効なものとなっているといえる。それでは、既に語られた話はどう考えるべきだろうか。ステーシコロスやイソップが語ったという話が個別の状況に合わせて作られたものだとしても、一度作られた話は、状況が終了した後も残るものである。一方、アリストファネスやプラトンらの例から考えると、〈イソップの話〉は個々の話として独立的に流布していたように見える。そうであれば、それらの話は、それが語られたであろう具体的な状況とは独立して読まれたということになる。このとき、状況に合わせて動的に話を作成するというアリストテレスの考え方では、それらの話について評価することが困難なのである。

なお、その点では、アリストテレスの示す用例において、ステーシコロスの語る話は古代のイソップ集に含まれる一方で^{*3}、イソップが語ったという話がイソップ集に含まれていないことも、個々の話に対する評価として興味深い。

^{*3} Phaedr. 4.4; *Aesopica* fab. 269. また、Hor. *Epist.* 1.10.34-38 にも見られる。

ところで、アリストテレスは『弁論術』以外でも、〈イソップの話〉に言及している。『動物部分論』*De partibus animalium* 3.2. 663a34-b2において、アリストテレスは“ὁ Αἰσώπου Μῶμος”という書き出しでモーモスの話に言及する。

Ὅρθως δὲ καὶ τὸ ἐπὶ τῆς κεφαλῆς ποιῆσαι τὴν τῶν κεράτων φύσιν, ἀλλὰ μὴ καθάπερ ὁ Αἰσώπου Μῶμος διαμέμφεται τὸν ταῦρον, ὅτι οὐκ ἐπὶ τοῖς ὤμοις ἔχει τὰ κέρατα, ὅθεν τὰς πληγὰς ἐποιεῖτ' ἂν ἰσχυροτάτας, ἀλλ' ἐπὶ τοῦ ἀσθενεστάτου μέρους τῆς κεφαλῆς. Οὐ γὰρ ὀξὺ βλέπων ὁ Μῶμος ταῦτ' ἐπετίμησεν.

そして、(自然が) 頭の上に角を作ったことは正しい。しかし、イソップのモーモスのように、もっとも強力な打撃を生み出せるはずの肩の上ではなく、もっとも弱い部分である頭の上にあるとって牡牛を非難するのは正しくない。というのは、モーモスは鋭く物事を見抜いて評価を下したのではないためである。

モーモスはその名の通り「難癖」をつける神であるが、そのモーモスが、牛について、最も強力な打撃を生み出せる肩ではなく、最も力の弱い頭の上に角があるという非難したという話である。ここでは、*Αἰσώπου* の一語によって話が導入され、この箇所を読む読者はこれによって、ここに登場するモーモスが「イソップの語った話の中の、モーモスの話に登場する」モーモスであることを想定することになる。〈イソップの話〉に言及する方法として簡潔なものといえるが、ここでのイソップの名は、〈イソップの話〉の集合を内包するものとなっており、ただの人物名から意味合いが変質している。

『動物部分論』におけるモーモスの話は、角が頭の上にあることは正しいという議論で登場している。モーモスの話は、角が頭以外の場所（モーモスの主張では肩）にあることをよしとする主張の一例として挙げられる。アリストテレスは、角が肩の上にあると不都合が多いという旨の見解を示し^{*4}、つまり、モーモスの話は否定されるべき主張のひとつとして語られているわけである。『弁論術』における分類では、「イソップの話」は「過去に模した喩え話」であるが、ここでのモーモスの話は、喩え話としてではなく、角を巡る議論の一例としての提示である。これは〈イソップの話〉が、文脈に即した喩え話ではなく、独立した話として利用されている例といえる。

なお、モーモスの話については、*Augustana* 集やバブリオス集の他、ルキアノスも言及している^{*5}。それらにおいては、角が目の下がないことにモーモスが難癖をつける話となっている。アリストテレスの例で想定されるモーモスの話とは内容が異なるが、どちらが本来の形であるのか不明である。

『気象論』*Meteorologica* 356bにおいても、アリストテレスは〈イソップの話〉に言及している。

^{*4} Arist. *PA*. 663b2-12.

^{*5} *Aesopica* fab.100; Babr. 59; Lucianus, *VH* 2.3.

τὸ δὲ νομίζειν ἐλάττω τε γίνεσθαι τὸ πλῆθος, ὡς περ φησὶ Δημόκριτος, καὶ τέλος ὑπολείπειν, τῶν Αἰσώπου μύθων οὐδὲν διαφέρειν ἔοικεν ὁ πεπεισμένος οὕτως· καὶ γὰρ ἐκεῖνος ἐμυθολόγησεν ὡς δις μὲν ἡ Χάρυβδις ἀναρροφήσασα τὸ μὲν πρῶτον τὰ ὄρη ἐποίησεν φανερά, τὸ δὲ δεύτερον τὰς νήσους, τὸ δὲ τελευταῖον ῥοφήσασα ξηρὰν ποιήσει πάμπαν. ἐκείνῳ μὲν οὖν ἤρμωσεν ὀργιζομένῳ πρὸς τὸν πορθμέα τοιοῦτον εἰπεῖν μῦθον, τοῖς δὲ τὴν ἀλήθειαν ζητοῦσιν ἦττον·

デモクリトスの言うように、(海の)大きさが次第に小さくなって、最後に消えてしまうと考えることは、イソップの話と何ら異ならないように思われる。すなわち、イソップは、カリュブデイスが二度海水を飲み込んだとき、最初に山々を出現させ、次に島々を出現させたが、最後に飲み込むと、海を完全に干上がらせるだろう、という話を語って聞かせたのである。このような話を渡し守に語ったことは、怒った彼には相応しいことであったが、真理を探求する者たちには相応しくない。

アリストテレスは、海が干上がって消えてしまうという考え方がイソップの μῦθος を想起させるとして、ひとつの話を紹介する。カリュブデイスが二度海を飲み、まず山々が次に島々が生じたが、最後に海を飲んだら海を干上がらせてしまうだろう、という話である。アリストテレスは、立腹したイソップが渡し守に向けて語るにふさわしい話だったといいつつも、海が干上がることはないと論じている。この逸話において、イソップが渡し守を脅すためにこの話を語ったのだとすれば、それは「海が干上がること」(=渡し守の価値がなくなること)を語るための話であり、「過去に模した喩え話」とはいえない。アリストテレス自身も、喩え話としてではなく、「海が干上がること」を主張する議論の一例としてこの話を利用している。その意味では、ここにおける〈イソップの話〉の用例は、モーモスの話と同様のものといえる。

『動物部分論』や『気象論』における用例は、アリストテレス自身が用いる〈イソップの話〉であっても、『弁論術』で論じた枠組みに納まらないものがあったことを示している。アリストテレスは、これらの話を具体的な状況に対する喩え話ではなく、独立的な話として評価しているのである。また、アリストテレスはそれらの話で語られる議論を検討すべき主張として取り上げており、彼がある種の事実を語る話としてそれらを認識していたことも窺える。先に述べた既存の〈イソップの話〉に関する問題について、これらの用例は、そうした話に関するアリストテレスの認識を示す一例といえる。『弁論術』における議論は、あくまで〈イソップの話〉を説得の手段として用いる場合の枠組みということであり、包括的に〈イソップの話〉を扱うものではないのである。

3. 前1世紀頃までの用例

3.1 カッリマコス

アリストテレスの議論の一方で、カッリマコスが示す例は、それ以前の「イソップの話」の在り方を踏襲したものとなっている。

カッリマコス『イアンボス第2番』*Iambi* 2 (断片 192 Pfeiffer) に、イソップが語ったという話がひとつ残る。

ἦν κείνος οὐνιαυτός, ᾗ τό τε πτηνόν
καὶ τοὺν θαλάσση καὶ τὸ τετράπουν αὐτως
ἐφθέγγεθ' ὡς ὁ πηλὸς ὁ Προμήθειος
. . . (最大 17 行欠) . . .
τὰπὶ Κρόνου τε καὶ ἔτι τὰ πρὸ τη[
λ..ουσα καὶ κως [.]υ σ[.]νημεναις.[
δίκαιος ὁ [Ζε]ύς, οὐ δίκαι[α] δ' αἰσυμνέων
τῶν ἐρπετῶν [μ]έν ἐξέκοψε τὸ φθέ[γμα,
γένος δὲ τ.υτ.[.]ρον – ὥσπερ οὐ κάρτ[ος
ἡμέων ἐχόντων χητέροις ἀπάρξασθαι –
...]ψ ἐς ἀνδρῶν· καὶ κρυ[ν]ός [μ]έ[ν] [Εὔ].δημος,
ὄ[ρ]νο]υ δὲ Φίλων, ψιττακοῦ δε[
οὶ δὲ τραγωδοὶ τῶν θάλασσαν οἰ[κ]εύοντων
ἔχο[υ]σι φωνήν· οὶ δὲ πάντες [ἄ]νθρωποι
καὶ πουλύμυθοι καὶ λάλοι πεφ[ύ]κασιν
ἐκεῖθεν, ὠνδρόνικε· ταῦτα δ' Αἰ[ῶ]σω]πος
ὁ Σαρδιηνὸς εἶπεν, ὄντιν' οἱ Δελφοί
ἄδοντα μῦθον οὐ καλῶς ἐδέξαντο.

翼あるものも

海に棲むものも四つ足のものも、

プロメテウスの粘土と同じように口を利けた頃のこと、

(最大 17 行欠損)

クロノスの御代もそれ以前も

.....

ゼウスは正しいが、正しからぬ支配を行ない、

這うものたちから声を奪い、

・・・——まるで私たちが

他のものたちに先行く立場ではないかのように——
 人間の種族へ与えた。こうしてエウデーモスは犬の声、
 フィルトーンは驢馬の声、・・・は鸚鵡の声、
 悲劇役者たちは海を住処とするものの
 声を持つのである。また、人間はすべて
 このときから口数の多いおしゃべりなのだ、
 アンドロニコスよ。このことをサルディスの
 イソップが語ったのである。デルフォイの人々は、
 こうした話を語るイソップを快く受け入れなかった。

話の導入では、陸海空の動物たちが言葉を話せた時代が対象として示される。この点は、ここまでの用例においても、クセノフォンが同様の言及を行っていた。カッリマコス
 の語る話は、それら動物たちの声をゼウスが奪い、人間たちに与えたというものであり、
 その結果、動物は言葉を失い、人間は口数の多いおしゃべりになったのだという。また、
 後世の粗筋書きによれば、欠損部分においては、クロノスの黄金時代に人間も動物たちも
 同じ言葉を話して幸福に暮らしていたが、その後ゼウスの時代に、満ち足りた動物たちが
 次第に現状に不満を抱いて神々と同じ境遇を願うようになり、ゼウスの怒りを買ったこと
 が語られていたようである*6。つまり、この話は、体裁としては、一種の縁起譚とも呼ぶ
 べき昔話であったと推測できる。

カッリマコスは、この話をイソップが語った〈イソップの話〉とする。この種の話
 (μῦθος) を語るイソップをデルフォイ人が受け入れなかったとする点は、デルフォイとイ
 ソップの関わりに関する古典期からの伝統を受けたものでもあろう。ただ、ここではイ
 ソップがこの話を語る具体的な状況は不明である。したがって、語りの意図などは定かだ
 ではなく、あくまで話のみが提示される形となっている。

〈イソップの話〉が縁起譚として登場する例は、アリストファネスにも見られるため*7、
 カッリマコスに特異なものではない。とはいえ、この話は「イソップが語った」と明示さ
 れるにも関わらず、古代のイソップ集では採録されていない点は留意したい*8。むしろ、
 カッリマコスがイソップにかこつけて話を作り、自身の意見を表明しているとすれば、こ
 こでの〈イソップの話〉は「人間が口数の多いおしゃべり」であることを批判するための
 話と読める*9。この場合、カッリマコス自身が〈イソップの話〉を一種の縁起譚として認
 識していたことを示す。

カッリマコスの作品では、『イアンボス第4番』*Iambi* 4 (断片 194 Pfeiffer) も *Augustana*

*6 Pfeiffer(1965), p.172; Nisetich(2001), p.100.

*7 第2章参照。ただし「イソップ」化された〈話〉の可能性も考えられる。また、プラトンが描くソクラテ
 スの見解も、〈イソップの話〉を縁起譚と見るものであった。

*8 Perry は *Aesopica* fab.431 として採録する。

*9 Kerkhecker(1999), p.60.

集に残る〈話〉である*10。

ἄκου[ε] δὴ τὸν αἶνον· ἔ[ν] κοτε Τμώλω
 δάφνην ἐλαίη νεῖκος οἱ πάλαι Λυδοί
 λέγουσι θέσθαι . . .

この話を聞きなさい。古のリュディア人が語るには、
 ある時トモロスの山で、月桂樹がオリーブと
 言い争った . . .

カッリマコスはこの〈話〉を「古のリュディア人の語る話」(ἄνθος)として紹介し、話が語られる状況は不明ながら、やはり昔話として提示される。これは月桂樹とオリーブの樹の言い争いを語る逸話であり、ここまでの用例としても珍しい、植物の話となっている。100行以上に及ぶ長大な話だが、筋書きとしては、月桂樹とオリーブの言い争いに茨が横槍を入れて場を白けさせる、といったものである。*Augustana* 集では柘榴と林檎と茨の話として簡潔に語られるが、基本的な構造は同一である。

3.2 デイオドロス・シクルス

デイオドロスは、「世界史」*Bibliotheca historica* 19.25.5-6 および 33.7.6 の二箇所でも〈話〉を用いている。いずれもイソップの名への言及はなく、古代のイソップ集に含まれるものである。前者は *Augustana* 集の「恋するライオン」に該当し、バブリオス集にも同様の話が含まれる*11。後者は *Augustana* 集の「中年男と愛人たち」に該当し、ファエドルス集およびバブリオス集にも同様の話が含まれる*12。こうした状況からすると、デイオドロスが紹介する〈話〉は、1世紀以降には「イソップの話」として有名であったと考えられる。デイオドロスが示す「ライオンの話」は以下の通りである (19.25.4-6)。

Εὐμενῆς παρελθὼν ἐπήνεσέν τε αὐτοὺς καὶ λόγον εἶπε τῶν παραδεδομένων μὲν καὶ παλαιῶν, οὐκ ἀνοίκειον δὲ τῆς περιστάσεως. ἔφη γὰρ ἐρασθέντα λέοντα παρθένου διαλεχθῆναι τῷ πατρὶ τῆς κόρης ὑπὲρ τοῦ γάμου, τὸν δὲ πατέρα λέγειν ὡς ἔτοιμος μὲν ἐστὶν αὐτῷ δοῦναι, δεδοικέναι δὲ τοὺς ὄνυχας καὶ τοὺς ὀδόντας, μήποτε γήμας καὶ παροξυνθεὶς διὰ τινὰ αἰτίαν προσενέγκηται τῇ παρθένῳ θηριωδῶς. τοῦ δὲ λέοντος ἐξελόντος τοὺς τε ὄνυχας καὶ τοὺς ὀδόντας τὸν πατέρα, θεωρήσαντα πάντα δι' ὧν ἦν φοβερὸς ἀποβεβληκότα, τύπτοντα τῷ ξύλῳ ῥαδίως ἀποκτεῖναι. τὸ παραπλήσιον οὖν ποιεῖν καὶ τὸν Ἀντίγονον·

エウメネスがやって来て、彼らを称賛し、伝統的で古い話の一つ、その状況に不適切ではな

*10 *Aesopica* fab.213.

*11 *Aesopica* fab.140; Babr. 98.

*12 *Aesopica* fab.31; Phaed. 2.2; Babr. 22.

い話を語った。すなわち——ライオンが少女を愛し、その父親に結婚について話しかけた。すると父親は、ライオンに娘を嫁がせる準備はあるが、結婚したライオンが何らかの原因で腹を立て、獣のように娘に対して攻撃するのではないかと、ライオンの爪と牙を恐れていると語った。しかし、ライオンが爪と牙を取り除いてしまうと、父親は、自分を恐れさせていたものを全てライオンが捨て去ったのを見て取って、棒で打ち据えてライオンを容易に殺した。——そして、同様のことをアンティゴノスもしているのだ、と彼は述べた。

ディオドロスはカルディアのエウメネスが語った逸話として「ライオンの話」を記している。対立するアンティゴノスが使節を派遣してきた際に、それを拒絶したマケドニア人たちを称賛してエウメネスが「伝統的で古い話のひとつを語った」(λόγον εἶπε τῶν παραδεδομένων μὲν καὶ παλαιῶν)。目下の状況に適切な話と評される通り、エウメネスがこの話を語る目的は、これによってアンティゴノスの意図を説明することであった。つまり、この〈話〉は一種の昔話として提示されるものの、実際には、味方のマケドニア人たちをライオンに、アンティゴノスを娘の父親に模した、具体的な状況に対応する喩え話となっているのである。ディオドロスは、エウメネスが多くの人々の賛同を得たことを述べており*¹³、この逸話は、こうした語りのひとつの成功事例でもある。

「中年男の話」も同様の事例といえる。話の具体的な内容は第5章で扱うため、ここでは話が語られる文脈のみ確認しておく。「中年男の話」はルシタニアの指導者ウィリアトスがトゥッカの人々に語った話として説明される(33.7.5-6)。

αἰνόν τινα διελθὼν οὐκ ἀσόφως ἔσκωπεν ἅμα καὶ ἐπέπληξε τὸ τῆς κρίσεως αὐτῶν ἀβέβαιον. ἔφη γάρ τὸ παραπλήσιον δὲ καὶ τοῖς τὴν Τύκκην οἰκοῦσιν ἔσσεσθαι

彼はある話を語って、彼らを巧みに揶揄すると同時に、彼らの不安定な判断を非難した。すなわち、彼が語るには——(中略)。そして、テュッカの町に住む者たちにも同様のことが起こるだろう。

ウィリアトスが、ローマ人とルシタニア人の間で帰属をはっきりさせないトゥッカの人々に対して、ある話(ἄνθος)を語ることで、彼らの態度を巧みに揶揄しつつ非難したという。ここでの語りの目的は、眼前の状況を逸話によって説明し、トゥッカの人々に起こりうる事態を説明することにある。この〈話〉もまた、既存の話のごとく語られているが、トゥッカの人々を中年男に、ローマ人とルシタニア人を二人の妻に模した、具体的な状況に対応する喩え話となっている。ただし、この箇所は、ウィリアトスがこの種の話を読んでいたことの一例として紹介される事例であり、語りの結果については記されていない。

これら二つの事例は、前者が前4世紀、後者が前2世紀の出来事と考えられる。ディオドロスはいずれの用例においても“ἔφη γάρ”で話を導入し、“τὸ παραπλήσιον δὲ”で説明を導入しているが、時代も地域も異なる出来事であることをふまえると、ディオドロスが

*¹³ D.S. 19.25.7.

同一の型にはめ込んで著述していることになる。したがって、これらの語りが事実であったとしても、ディオドロスの記述がその状況を再現しているかどうか定かではない。これら二つの話は、いずれもアリストテレスが『弁論術』で示した喩え話としての「イソップの話」の枠組みに当てはめることができるが、あるいは、ディオドロスの仕立てによって、そのように読める話となっている可能性もある。その場合、これらの話に対するディオドロスの理解がアリストテレスに沿うものであったと考えられる。

3.3 ホラティウス

詩人ホラティウスは、『書簡詩』 *Epistulae* や『諷刺詩』 *Saturae* において、幾つか〈話〉を用いている。いずれもイソップとの関連は示されない。ただし、当時既にイソップのものと認知されていた話を、ホラティウスがイソップの名を附さずに使用している可能性も推測できる。

たとえば、ホラティウスが『書簡詩』 1.1.73-75 で言及するのは、プラトンも『アルキビアデス I』で言及した「ライオンと狐」の話である^{*14}。プラトンの例ではイソップの語った話とされていたが、ホラティウスはイソップの名を示していない。一方、ホラティウスもプラトン同様に話全体を語るわけではなく、キツネの発言にのみ焦点を当てる。

olim quod volpes aegroto cauta leoni
respondit, referam: 'quia me vestigia terrent,
omnia te adversum spectantia, nulla retrorsum.'

かつて用心深い狐が病のライオンに

答えたことを、お返ししよう。「なぜなら、足跡が私を怖がらせるのです。

すべてがあなたの方へと向いていて、戻るものがひとつもありません。」

この使用法はプラトンの用法とも類似するが、「ライオンと狐」の話が読者にとって既知のものであることが求められる。プラトンの時点でイソップと関連付けられていたことを考えると、ホラティウスおよび周辺の人々も、これを「イソップの話」と認識していた可能性は高そうである。また、ホラティウスが『書簡詩』 1.10.34-38 で語る〈話〉は、アリストテレスが『弁論術』において示した「鹿と馬」の話と同様の話である^{*15}。この話についても、ホラティウスの時点で既に「イソップの話」の枠組みの中で認知されていた可能性も考えられる。

ホラティウスは、これらの〈話〉を各作品において個々の文脈に対応した喩え話として用いている。つまり、説明のための補助的素材であり、手法としてはアリストテレスの議論にも当てはまるものである。ただし、以上のホラティウスの用例では、その場で新しく

^{*14} Pl. *Alc. I.* 123a. 第2章参照。

^{*15} Arist. *Rh.* 1393b10-22. 前述の通り、アリストテレスはステーシクロスが語った話とするが、話だけを取り出した場合は、語り手の名前は隠れてしまう。

話を生み出すのではなく、既存の話を活用している点を特徴として挙げるができる。

一方、後のイソップ集との関係では、ホラティウスが『詩論』において示す用例が興味深い（138-139行）。

quid dignum tanto feret hic promissor hiatus?

parturient montes, nascetur ridiculus mus.

大口をたたくこの者が、これほど大袈裟な始まりに見合うどんな作品を生み出すだろうか？
山が出産しようとするが、生まれるのは馬鹿馬鹿しい鼠一匹だろう。

ここで言及されるのは、「大山鳴動して鼠一匹」として知られる話と考えられる。前行の問いに対する答えとして、大口を叩く者が山、生み出される作品が鼠という対応が想定される。つまり、語り始めの構想に見合った作品が生み出されないことを婉曲的に表現するのである。また、疑問文の未来形 *feret* に対応して、未来形 *nascetur* が用いられている点は、文脈に合わせた形といえる。

この「ネズミを産む山」の逸話について、ファエドルスのみが集成に含め、ギリシア語系のイソップ集は含まない^{*16}。ギリシア語の文献としては、プルタルコスやアテナイオスの著作中に用例が見られる^{*17}。プルタルコスとアテナイオスの用例は、イソップと関連して語られるものではなく、いずれもスパルタの王アゲシラオスがエジプトを訪れた際に、彼が小柄であることを揶揄され言われた言葉として記されている。

また、『詩論』139行に関して、3世紀前後のホラティウス注釈では、同様の内容のギリシア語の格言 (*Graecum prouerbium*) が存在することが述べられている^{*18}。そうしてみると、ギリシア語系のイソップ集に「ネズミを産む山」の話が含まれないことは、そもそもそれが「イソップの話」の枠組みの中で認識されていなかったことも考えられる。ファエドルスの時期も同様であったとすれば、むしろファエドルスが格言をもとに話を設えて、自身の集成に含めたということであろう。

ホラティウスの用いる〈話〉は数行程度の短いものがほとんどであるが、『諷刺詩』2.6で語る〈話〉は39行に及ぶものとなっている^{*19}。これは田舎のネズミと都市のネズミが登場する話であり、両者がお互いの家を訪問し合った結果、田舎のネズミが、自分には都市の生活よりも田舎の生活の方が心安らぐものだ、と語るものである。『諷刺詩』2.6において、ホラティウスは自身の経験に基づいて都市の忙しい生活と田舎の平穏な生活を対比し、この話でもって締めくくっている。つまり、田舎の生活と都市の生活を対比する文脈をふまえて、それをまとめる喩え話としてこの「ネズミの話」を用いているのである。

ホラティウスはこの「ネズミの話」を「老婆の話」(*anilis fabellas*)として第三者に語ら

*16 Phaed. 4.24.

*17 Ath. 14.6 (616d); Plu. Ages. 36.5.

*18 Pomponius Porphyrio, *Comment. in Hor. Artem Poet.*

*19 Hor. Sat. 2.6.79-117.

せている。婉曲的な主張をさらに婉曲化する形式ともなるが、話自体は、ある状況に対して語りうる、一種の昔話として提示されるものである。なお、この話はバブリオス集にのみ含まれる*20。

4. 「身体と胃袋の話」

4.1 リウィウス

歴史家リウィウスは、『ローマ建国史』*Ab urbe condita* 2.32.8-12において、次のように記している。

placuit igitur oratorem ad plebem mitti Menenium Agrippam, facundum uirum et quod inde oriundus erat plebi carum. is intromissus in castra prisco illo dicendi et horrido modo nihil aliud quam hoc narrasse fertur: tempore quo in homine non ut nunc omnia in unum consentiant, sed singulis membris suum cuique consilium, suus sermo fuerit, indignatas reliquas partes sua cura, suo labore ac ministerio uentri omnia quaeri, uentrem in medio quietum nihil aliud quam datis uoluptatibus frui; conspirasse inde ne manus ad os cibum ferrent, nec os acciperet datum, nec dentes quae acciperent conficerent. hac ira, dum uentrem fame domare uellent, ipsa una membra totumque corpus ad extremam tabem uenisse. inde apparuisse uentris quoque haud segne ministerium esse, nec magis ali quam alere eum, reddentem in omnes corporis partes hunc quo uiuimus uigemusque, diuisum pariter in uenas maturum confecto cibo sanguinem. comparando hinc quam intestina corporis seditio similis esset irae plebis in patres, flexisse mentes hominum.

そこで元老院は、メネニウス・アグリッパを使節として平民のもとへ派遣することを決定した。彼は能弁な人物であり、その出身のために、平民に親しかったのである。彼は陣営へ通されると、その古風で無骨な語り方でただ次のように語っただけだと言われる。人間の身体において、今のように身体全体がひとつに意見を一致しておらず、身体の各部位がそれぞれ独自の考えを持ち、発言をしていた頃、身体の他の部位が胃に対して憤慨した。自分たちが配慮し、労働し、奉仕して、胃のために全てのものを求めているのに、胃は身体の中でゆっくり休み、与えられた快いものを享受する他に何もしない、と。そこで共謀して、手は口へ食べ物を運ばず、口は与えられたものを受け取らず、歯は受け取ったものを噛まないことにした。こうした怒りによって、飢えによって胃を服従させようとするうちに、四肢ともども身体全体が極度の衰弱に陥った。そこから、胃も奉仕を怠けているわけではなく、養われると同時に養っているのであり、我々が生きて元気でいるためのもの、すなわち等しく血管へ分配される、消化された食べ物によって熟成した血液を、身体の全ての部位へ返してい

*20 Babr. 108.

ることが明らかとなった。このことから、身体内部の仲違いが貴族に対する平民の怒りといかに似ているか比較してみせ、彼は人々の心をなだめた。

メネニウス・アグリッパが平民に向けて語ったという〈話〉である。アグリッパは、過去にあった話として人間の四肢と胃袋の対立とその結果を語ることで、平民と貴族（パトレス）の対立関係を解消するように説得したという。ここでは、対応関係も説明されており、具体的な状況に対する喩え話として機能する話となっている。リウイウスは、アグリッパがこの話を「古風で無骨な語り方」(prisco illo dicendi et horrido modo)で語り、結果として説得が成功したことを伝えるのである。語りの手法を考えると、前述のディオドロスの用例同様のものとなっており、アリストテレスに沿った解釈が可能な用法といえる。リウイウスの記すアグリッパの逸話は前5世紀はじめの出来事であるため、事実かどうか確証はないが、その後の歴史家もこの逸話を取り上げており*21、著名な逸話であったと考えられる。

4.2 ハリカリナッソスのディオニュシオス

ハリカリナッソスのディオニュシオスは、『ローマ古代史』*Antiquitates Romanae* 6.83.2において、メネニウス・アグリッパの語り方について以下のように評している。

ὁ δὲ τὰ τε ἄλλα, ὡς οἷόν τε ἦν, πιθανωτάτοις ἔδοξε χρῆσασθαι λόγοις καὶ τοῦ βουλήματος τῶν ἀκουόντων ἐστοχασμένοις, τελευτῶν δὲ τῆς δημηγορίας λέγεται μῦθόν τινα εἰπεῖν εἰς τὸν Αἰσώπειον τρόπον συμπλάσας πολλὴν ὁμοιότητα πρὸς τὰ πράγματα ἔχοντα, καὶ τούτῳ μάλιστα' αὐτοῦς ἐλεῖν ὅθεν καὶ μνήμης ἀξιοῦται ὁ λόγος καὶ φέρεται ἐν ἀπάσαις ταῖς ἀρχαίαις ἱστορίαις.

(アグリッパは) その弁論の終わりに、イソップの方法に倣って話を語り、直面している状況によく類似した話を作り出して、それによってとりわけ聴衆の心を掴んだと言われる。このことから、彼の弁論は記憶に値するものと考えられて、古代史いずれにおいても言及されるのである。

アグリッパは巧みな弁論の最後に「イソップの方法に倣って話を語る」(μῦθόν τινα εἰπεῖν εἰς τὸν Αἰσώπειον τρόπον) のである。イソップに倣うとは、直面した状況に合わせた喩え話を創り出すことであり、すなわち、ここでのディオニュシオスの説明は、アリストテレスの用法に類似したものといえる。また、アグリッパの弁論は記憶に値するというとおり、ディオニュシオスもその演説を詳細に描写している。ディオニュシオスの著述は、リウイウスが述べる出来事をより詳細に伝えるものであるが、リウイウスと必ずしもアグリッパの人物像が一致しないことに注意が必要である。

*21 Flor. *Epit.* 1.17; Plu. *Cor.* 6.2-5; Dio Cass. 4.14.10-12. いずれの例においても「イソップ」との関連付けは見られないが、語る話は *fabula* / μῦθος と表記される。

ディオニュシオスはアグリッパの語る「身体と胃袋の話」も記すが、そこでは仮定の喩え話として語られる話となっている*22。つまり、それを過去の話としたリウイウスと異なっており、「イソップの話」を「過去の出来事に模した喩え話」とするアリストテレスの議論と一致しない部分である。とはいえ、このことはむしろ、アリストテレスの分析に比して、喩え話としての「イソップの話」の範疇が拡大しているということもできる。また、ディオニュシオスがアグリッパの話を *muthos* として表記する点も、アリストテレスからの変質といえる。

ところで、ディオニュシオスがアグリッパの語り方をイソップと関連付けていることは、彼が「身体と胃袋の話」を喩え話としての「イソップの話」の枠組みで認識していたことを示す。この場合、同様の手法を用いていたディオドロスの用例なども、同じく「イソップの話」の範疇で認識されても不思議ではない。ディオニュシオスが当時著名な修辞学教師であったことをふまえると、むしろ1世紀前後の「イソップの話」に関する認識の在り方として、イソップとの関連が明記されない場合も、ここに示されるような理解が広く行われていたのではないかと考えられる。

4.3 *Augustana* 版

ディオニュシオスの見解との関連は不明であるが、「身体と胃袋の話」は後のイソップ集に含まれている。*Augustana* 集では以下の話として含まれる*23。

ΚΟΙΛΙΑ ΚΑΙ ΠΟΔΕΣ

κοιλία καὶ πόδες περὶ δυνάμεως ἤριζον. παρ' ἕκαστα δὲ τῶν ποδῶν λεγόντων, ὅτι τοσοῦτον προέχουσι τῇ ἰσχύϊ ὡς καὶ αὐτὴν τὴν γαστέρα βαστάζειν, ἐκεῖνη ἀπεκρίνατο· “ἀλλ', ὃ οὗτοι, ἐὰν μὴ ἐγὼ τροφήν προσλάβωμαι, οὐδὲ ὑμεῖς βαστάζειν δυνήσεσθε.” οὕτω καὶ ἐπὶ τῶν στρατευμάτων μηδὲν ἔστι τὸ πολὺ πλῆθος, ἐὰν μὴ οἱ στρατιῶται ἄριστα φρονῶσι.

胃袋と足

胃袋と足が能力について争った。足が何事につけても、自分の方が力が強い、腹も運べるほどだ、と言うので、胃袋が答えて言った。「しかし、お前たち、もし私が栄養を補給しなければ、お前たちは何も運ぶことができないだろう」

このように、軍隊においても、もし兵士たちが最善の考えを持たなければ、大軍勢は何ものでもない。

話の発想はリウイウスが記すアグリッパの逸話と同様であり、それを簡略化して再提示を試みたもののようにも見える。その点では、教訓部で珍しく「軍隊において」と適用対

*22 DH *Ant. Rom.* 6.86. アグリッパの演説中では（当然ながら）イソップの名は登場しない。アグリッパに関するイソップへの言及はあくまでディオニュシオスの見解である。

*23 *Aesopica fab.*130.

象が具体的に限定されることも、典拠の影響があるのかもしれない。とはいえ、話そのものの描写はリウィウス版の方が丁寧であり、内容も分かりやすい。そのためか、近世以降の翻訳イソップ集では、この話に関してはリウィウス版を利用する例が多く見られる。

5. 総括

アリストテレスの『弁論術』における議論において、〈イソップの話〉を含む「イソップの話」が説得のための手段として「過去に模して作られた喩え話」と規定される。既述のとおり、これはあくまで『弁論術』における議論であったが、「イソップの話」について明確な説明が与えられたことは、大きな意味を持ったと考えられる。

アリストテレスの議論においては、用例はいずれも動物の話であるが、話の主体が何であるべきか明記されていない。したがって、アリストテレスの説明に基づけば、何らかの文脈で登場する「過去に模した喩え話」として読みうる話は、人間の話であっても、「イソップの話」の範疇に含みうるのである。これは、アリストテレス以降の各作家の判断に影響を与えたのではないかと推測できる。この点については、デメトリオスによるイソップ集の内容が判明すればおそらく議論は容易となるが、残念ながら散逸している。とはいえ、前1世紀にディオニュシオスが「イソップの方法に倣う」ものとして「身体と胃袋の話」を提示していることから、当時、アリストテレスの議論が適用され、いわゆる人間の〈話〉まで「イソップの話」の枠組みで理解されえたことが分かる。たとえば前章で扱ったヘロドトスの例も、アリストテレスの議論に従えば、「イソップの話」として切り分け可能であろう。

ところで、ここでの「イソップの話」は、ある文脈で一定の機能を果たす話の集合といえる。対象となる話について、新しく生み出すことも可能であり、あるいは既存の話を探索し、適合する話を含めることも可能である。このとき、イソップの名は機能性の表記であって、必ずしも「イソップが語った」ことを意味するわけではない。また、アリストテレスの議論が影響したとすると、イソップの名が表記されなくとも、使用者が「イソップの話」として意識していた可能性もありえる。たとえばディオドロスの用法などは、その形式からみて容易に「イソップの話」と識別されたと推測できるが、前1世紀の状況として、このような機能性に注目した分類が「イソップの話」に含まれる対象を拡大していたとみて不自然ではないだろう。そして、場合によっては、それらの話にイソップの名が附されて語られ、あるいはイソップ集に含まれていくことになる。

また、アリストテレスの議論に従えば、「イソップの話」はあくまでも副次的な手段であり、もともと独立した話として評価される対象ではないことに注意が必要である。しかしその一方で、縁起譚などとして個別に読みうる〈イソップの話〉は、既に存在していた。あるいは、デメトリオスのイソップ集が、個々の話を文脈から切り離して収めるものであったとすると、編纂の意図はどうあれ、それぞれの話が独立した話として提示されたことになる。そしてまた、前1世紀の歴史家たちが示す〈話〉のような、それ自体独立し

た話として読みうる話が「イソップの話」の範疇で理解されていたとすれば、前1世紀頃には、「イソップの話」の拡大と同時に、それら「イソップの話」を個別の独立した話とみる認識が広がりつつあったことを推測できる。

前1世紀の用例では、後のイソップ集に含まれる〈話〉が複数現われる一方で、「イソップ」への言及はほぼ行われていない。そのなかで、ディオニュシオスが語り的手法としてイソップの名に言及した例が（確認できる範囲では）唯一といってよい用例であるが、彼が「イソップの話」を $\mu\acute{\iota}\theta\omicron\varsigma$ として取り上げていることも含め、1世紀以降に受け継がれる「イソップの話」の準備が、この時期に整ってきていたのではないかと考えられる。

第4章

「イソップ寓話」の芽生え——ローマ帝政期

1. はじめに

前1世紀までの状況に比べ、1世紀以降にあっては、「イソップの話」を独立した話として評価し、何らかの一般性を持った意味を読み取ろうとする傾向が生じてくる。本章では、1世紀に登場するテオンの議論をはじめ、2世紀頃までの「イソップの話」の用例を確認し、この時期の「イソップ寓話」の形成とその拡がりを考える。

2. テオン

1世紀の修辞学者テオンは、『修辞学初等教程』*Progymnasmata*において、項目として *μῦθος* を取り上げている。

まず冒頭で、テオンは自身の扱う対象を説明する (72 Spengel)。

Μῦθος ἐστὶ λόγος ψευδῆς εἰκονίζων ἀλήθειαν. Εἰδέναι δὲ χρή, ὅτι μὴ περὶ παντὸς μύθου τὰ νῦν ἢ σκέψις ἐστίν, ἀλλ' οἷς μετὰ τὴν ἔκθεσιν ἐπιλέγομεν τὸν λόγον, ὅτου εἰκὼν ἐστίν· ἔσθ' ὅτε μέντοι τὸν λόγον εἰπόντες ἐπεισφέρομεν τοὺς μύθους.

ミュートスは、真実を映す偽りの話である。知っておくべきこととして、ここで今検討するのは、全てのミュートスに関してではなく、話の提示のあとに説明を語ることができるものであり、その写し絵である。説明を語ったのちに、ミュートスを示す場合もある。

テオンは、「*μῦθος* とは真実を映す偽りの話である (*Μῦθος ἐστὶ λόγος ψευδῆς εἰκονίζων ἀλήθειαν*)」と語り、*μῦθος* を条件付き *λόγος* として説明する。その一方で、テオンが吟味の対象とするのは *μῦθος* の全てではなく、それらの話の後あるいは前に話者による解釈・説明 (*λόγος*) が附されるようなもの、と表明される。また、テオンの序文に従えば、この *μῦθος* に関する説明は、テオンがはじめて明文化したものである*¹。

続いて、*μῦθος* とイソップの関わりが説明される (73 Spengel)。

Καλοῦνται δὲ Αἰσώπειοι καὶ Λιβυστικοὶ ἢ Συβαρτικοὶ τε καὶ Φρύγιοι καὶ Κιλικιοὶ καὶ

*¹ Theon, *Prog.* 59 Spengel.

Καρικοὶ Αἰγύπτιοι καὶ Κύπριοι· τούτων δὲ πάντων μία ἐστὶ πρὸς ἀλλήλους διαφορά, τὸ προσκειμένον αὐτῶ ἐκάστῳ ἴδιον γένος, «οἶον Αἴσωπος εἶπεν», ἢ «Λίβυς ἀνήρ», ἢ «Συβαρίτης», ἢ «Κυπρία γυνή», καὶ τὸν αὐτὸν τρόπον ἐπὶ τῶν ἄλλων· ἐὰν δὲ μηδεμία ὑπάρχη προσθήκη σημαίνουσα τὸ γένος, κοινοτέρως τὸν τοιοῦτον Αἰσώπειον καλοῦμεν.

ミュートスは、「イソップの」「リビュア人の」「シュバリス人の」「ブリュギア人の」「キリア人の」「カリア人の」「エジプト人の」「キュプロス人の」と呼ばれるが、それらにはお互い一つの違いがある。すなわち、それぞれの話の前に、その種類を示す表現が置かれることである。たとえば、「イソップが語った」「リビュアの男が」「シュバリス人が」「キュプロスの女が語った」といったものであり、他の種類についても同様である。もし何も種類を示す表現が附されていない場合、一般に「イソップの話」と呼んでいる。

μῦθος は様々な呼称が附されて導入されるものであるが、そうした呼称がとくに指定されないような場合でも、一般に「イソップの (Αἰσώπειος)」と呼ばれるものであると述べられる。また、テオンによると、μῦθος が一般にイソップのものと呼ばれる所以は、イソップが μῦθος の創始者だからではなく、イソップが最も広く巧みに μῦθος を用いたからだという (73 Spengel)。

Αἰσώπειοι δὲ ὀνομάζονται ὡς ἐπίπαν, οὐχ ὅτι Αἴσωπος πρῶτος εὐρετὴς τῶν μύθων ἐγένετο, (Ὅμηρος γὰρ καὶ Ἡσίοδος καὶ Ἀρχίλοχος καὶ ἄλλοι τινὲς πρεσβύτεροι γεγονότες αὐτοῦ φαίνονται ἐπιστάμενοι, καὶ δὴ καὶ Κόννης ὁ Κίλιξ, καὶ Θουῦρος ὁ Συβαρίτης, καὶ Κυβισσὸς ἐκ Λιβύης, μνημονεύονται ὑπὸ τινῶν ὡς μυθοποιοί) ἀλλ' ὅτι Αἴσωπος αὐτοῖς μᾶλλον κατακόρως καὶ δεξιῶς ἐχρήσατο·

全体として「イソップの話」と名付けられているのは、イソップがミュートスの創始者であるからではなく（というのは、ホメロスやヘシオドス、アルキロコスやその他古い作家たちもミュートスを知っていたように思われるためであり、さらには、キリキアのコンニスやシュバリスのトゥーロス、リビュアのキュビツソスが、ミュートス作家として言及されている）、イソップがそれらの話を数多く巧みに利用したからである。

テオンはさらに、ホメロスやヘシオドス、アルキロコスなどのイソップに先行する者たちも μῦθος を知っていたと述べている。つまり、μῦθος とイソップの関係に関する点の認識は、イソップが μῦθος 使用者たちの中における代表的人物である、というものであった。この一連の説明に従えば、テオンが提示する μῦθος に関して、「イソップの話」と呼んで差し支えないと考えられる。

テオンは、「イソップの話」に用いられる語彙についても言及する (73-74 Spengel)。

Προσαγορεύουσι δὲ αὐτοὺς τῶν μὲν παλαιῶν οἱ ποιηταὶ μᾶλλον αἴνους, οἱ δὲ μύθους· πλεονάζουσι δὲ μάλιστα οἱ καταλογάδην συγγεγραφότες τὸ λόγους ἀλλὰ μὴ μύθους

καλεῖν, ὅθεν λέγουσι καὶ τὸν Αἰσωπὸν λογοποιόν. Πλάτων δὲ ἐν διαλόγῳ τῷ περὶ ψυχῆς πῆ μὲν μῦθον, πῆ δὲ λόγον ὀνομάζει·

昔の詩人たちには、それらの話をアイノスと呼ぶ者たちやミュートスと呼ぶ者たちがいた。一方、とくに散文作家たちでは、ミュートスではなくロゴスと呼ぶ者たちが優勢であり、そのため、イソップをロゴス作家と呼んでいる。また、プラトンは、魂に関する対話の中で、ミュートスと呼んだり、ロゴスと呼んだりしている。

テオンは、それまでも「イソップの話」が αἴνος / λόγος / μῦθος として呼称されてきたという。また、同じ作家（ここではプラトン）でも語彙が異なる例にも触れている*2。テオン自身にも Αἰσώπειοι λόγοι として言及している例もあり*3、語彙の相違はあくまでも呼び方の問題である。テオンにとって、「イソップの話」とは、話そのものが先立つものであり、それが一定の基準を満たしていれば、どのような呼称で呼ばれていたとしても、「イソップの話」の枠組みに組み入れて扱ったということであろう。

この点に関連して、「イソップの話」の内部に何が登場するかということについても、テオンは独自の考えを示している（73 Spengel）。

Οἱ δὲ λέγοντες τοὺς μὲν ἐπὶ τοῖς ἀλόγοις ζώοις συγκεκμημένους τοιούσδε εἶναι, τοὺς δὲ ἐπ' ἀνθρώποις τοιούσδε, τοὺς μὲν ἀδυνάτους τοιούσδε, τοὺς δὲ δυνατῶν ἐχομένους τοιούσδε, εὐήθως μοι ὑπολαμβάνειν δοκοῦσιν· ἐν πᾶσι γὰρ τοῖς προειρημένοις εἰσὶν ἅπασαι αἱ ἰδέαι.

これらミュートスについて、口を利かない動物によって構成されるものであるとか、人間に関わるものであるとか、あるいは、あり得ないものであるとか、あり得ることを含むものであるとか主張する者たちがいるが、私には彼らが単純に理解しているように思われる。というのは、それら全ての型が、既に語られた各話の中に見られるためである。

テオンの観点においては、話の内部に何が登場するか、あるいは何が語られるか、という点も、「イソップの話」を決定付けるものではなかったようである。この場合、動物が登場する話であろうが、人間が登場する話であろうが、同じ枠組みの中で扱われることになる。

テオンの説明は、「イソップの話」に関して一定の基準を示すものであるが、曖昧な部分も残る。「真実を映す」という点である。この点についての判断は、はたして客観的かつ明確に可能といえるのか。この判断は、話の使用者やその受け手側の解釈と関わる問題であるため、各人の主観に影響を受けてしまうのである。そうしてみると、テオンが吟味対象を λόγος が附されたものと限定していることは、ひとつの外形的な判断基準を導入しているようにみえる。とはいえ、この場合でも、話の前後に解釈に類するものが附されて

*2 第2章のプラトンの箇所でも論じている。

*3 Theon, *Prog.* 65 Spengel. 本文では “τῶν Αἰσώπειων λόγων” と記される。

いるという形式的な理由のみで「イソップの話」として判断されるのか、という問題が生じてしまう。

著作の性質上、テオンの「イソップの話」は作文教育における実践を意識したものであり、実際の練習方法が複数提示されている。まず練習の概要が示される (74 Spengel)。

Καὶ πολλαπλοῦν ἔστι καὶ τοῦτο τὸ γύμνασμα· καὶ γὰρ ἀπαγγέλλομεν τὸν μῦθον καὶ κλίνομεν καὶ συμπλέκομεν αὐτὸν διηγήματι, καὶ ἐπεκτείνομεν καὶ συστέλλομεν, ἔστι δὲ καὶ ἐπιλέγειν αὐτῷ τινὰ λόγον, καὶ αὖ λόγου τινὸς προτεθέντος, μῦθον εἰκότα αὐτῷ συμπλάσασθαι· ἔτι δὲ πρὸς τούτοις ἀνασκευάζομεν καὶ κατασκευάζομεν.

練習は以下の通り多様である。ミュートスを語る、ミュートスの語形を変える、ミュートスを逸話の中に編みこむ、ミュートスを拡張する、ミュートスを縮める。また、ミュートスに何か説明を語ることもでき、その一方で、何らかの説明を語ってから、それにふさわしいミュートスを作り出すこともできる。さらに、ミュートスについて、否定的に論じたり、肯定的に論じたりする。

練習の概要では、話そのものを語ること、話の形式の変更といった話本体に関わる練習の他、「真実」を意識した種々の練習も含まれる。概要の後、テオンは複数の具体例を挙げつつ説明を続けている。たとえば、本論第1章でも取り上げたヘシオドスの例を用いて、以下のように論じている (74 Spengel)。

Χρήσιμον δὲ καὶ τὸ ὀλοκλήρου τινὸς εἰρημένου μύθου ἐθισθῆναι τὸν μανθάνοντα χαριέντως ἐκ τῶν μέσων ἄρξασθαι, ὥσπερ Ἡσίοδος·

ἼΩδ' ἴρηξ προσέειπεν ἀηδόνα ποικιλόδειρον·

ἐκ μὲν γὰρ τῶν ἐπενεχθέντων,

ἄφρων δ' ὅς κ' ἐθέλη πρὸς κρείσσονας ἀντιφερίζειν,

δηλοῦται, ὅτι ἄρα ἤριζεν ἀηδῶν πρὸς ἰέρακα· κάπειτα ἀγανακτήσας ὁ ἰέραξ καὶ συναρπάσας αὐτὴν οὕτω τάδε εἶπε.

全体としてミュートスが語られたあと、ヘシオドスのように途中から優雅にミュートスを始めることに学習者が馴染むことも有益である。

鷹が斑な喉嚨をしたナイチンゲールにこう言った。

そして、その後に提示された

自分よりも強い者と張り合おうとする者は愚か者である

という部分から、ナイチンゲールが鷹と言い争い、そして鷹が腹を立ててナイチンゲールを捕えて、このように発言したことが明らかとなる。

テオンは、この箇所の直前でまず先人たちの語った「イソップの話」を覚えるよう勧め

ているが*4、話の構成上の工夫を学ぶことも学習者にとって有益だとする。そして、その優れた例としてヘシオドスの「鷹とナイチンゲール」の話が挙げられるのである。ただし、テオンの説明は、本論で検討したようなヘシオドスの文脈に即した解釈ではなく、テオンの考える「イソップの話」の枠組みに基づき、「鷹とナイチンゲール」の話を持来した話として解釈した場合のものとなっている。つまり、ヘシオドスの意図は考慮されないのである。

テオンの練習例の中でも、「肉を運ぶ犬」の話を持来に挙げて説明する練習方法が興味深い(75 Spengel)。

Ἐπιλέγειν δὲ ἔστιν ὧδε, ὅταν μύθου ῥηθέντος εὐοικότα τινὰ γνωμικὸν αὐτῷ λόγον ἐπιχειρῶμεν κομίζειν, οἷον κύων παρὰ ποταμὸν τινα φέρων κρέας, καὶ κατὰ τοῦ ὕδατος τὴν αὐτοῦ σκιὰν θεασάμενος, οἰηθεὶς ἕτερον εἶναι κύνα μεῖζον κρέας ἔχοντα, ὃ μὲν εἶχεν ἀπέβαλεν, ἀλόμενος δὲ εἰς τὸν ποταμὸν ὡς ἀρπάσων, ὑποβρύχιος ἐγένετο. τὸν λόγον δὲ οὕτως ἐποίησομεν· ὅτι ἄρα πολλάκις οἱ τῶν μειζόνων ὀρεγόμενοι καὶ ἑαυτοὺς πρὸς αὐτοῖς τοῖς ὑπάρχουσιν ἀπολλύουσιν. γένοιτο δ' ἂν καὶ ἐνὸς μύθου πλείονες ἐπίλογοι, ἐξ ἑκάστου τῶν ἐν τῷ μύθῳ πραγμάτων τὰς ἀφορμὰς ἡμῶν λαμβανόντων, καὶ ἀνάπαλιν ἐνὸς ἐπιλόγου πάμπολλοι μῦθοι ἀπεικασμένοι αὐτῷ.

以下のように、説明を後付けすることができる。すなわち、ミュートスが語られたあと、それにふさわしい何か格言的な説明を附そうと試みる。犬が川のそばを歩いて肉を運んでいたとき、水面に映る自分の影を見ると、別の犬が自分のものより大きな肉を持っていると考えた。そこで、自分の持っている肉を投げ捨て、もう一匹のものを奪ってやろうと川へと飛び込んだところ、水底へ沈んでしまった。次のように説明を付してみよう。より大きなものを欲する者は、しばしば、自身が手にしていたものに加えて、自分自身をも滅ぼしてしまう。内容に起点をとれば、ひとつのミュートスに複数の説明が附されうるし、また、その一方で、一つの説明に対して多数のミュートスが示されうる。

「イソップの話」に対して何らかの「説明」を附す練習である。ここでの「説明」は、一種の格言的な、一般化された文言が考えられる。また、「イソップの話」は具体的な文脈に対応する話ではなく、それ自体独立した話として読まれる。たとえば「肉を運ぶ犬」の話については、「より大きなものを望む者たちは、手にしているものばかりか、自分自身をも失うものだ」といった文言の付加が考えられている。つまり、「説明」に望まれるのは、人間にとって一般的な事象である。テオンの「イソップの話」に附される「説明」は、話に対応する「真実」を説明するものとされていたから、この練習を加味して考えると、「真実」とは人間一般に関わる事柄ということになる。このような性質を前提に示されるテオンの「肉を運ぶ犬」の話は、現代的な観点においても、まさに「イソップ寓話」と呼

*4 Theon, *Prog.* 74 Spengel.

びうるものであろう。

テオンはさらに、一つの話に対して複数の「説明」を、あるいは、一つの「説明」に対して複数の「イソップの話」を合わせる練習を挙げる。一つの話に対して複数の「説明」が附されるとするならば、その「イソップの話」に想定される「真実」は絶対的なものではなく、使用者の解釈次第で創り出されるものとなる。また、「説明」に合わせて「イソップの話」を語る練習は、「イソップの話」も固定的なものではないことを示す。テオンの練習においては、「イソップの話」の本体もその「説明」も柔軟に生み出されるものであり、使用者によって動的に構成されるものといえる。そしてまた、テオンは「説明」に合わせて「イソップの話」を構成するための用意として、既存のものであれ自作のものであれ、話の蓄えを持っておくことを勧めている^{*5}。既存の「イソップの話」も、ただそのものとして使用されるだけでなく、新しい「イソップの話」を生み出す素材となり、改変や創作の土台となるのである。

「説明」を附す練習で示されることは、一方で、テオン自身の「イソップの話」の枠組みを曖昧なものとするようになる。テオンは、形式として、「説明」付の $\mu\theta\omicron\varsigma$ を吟味の対象とすると述べているが、その「説明」を後付けで創出可能なものとするならば、そもそも選定されている $\mu\theta\omicron\varsigma$ に関して疑問を生じさせることになるからである。テオンの提示する基準は、「説明」が附されていて満たされるわけであり、「説明」を附すようにと提示される話が「イソップの話」と呼びうるかどうかは、本来はその話に「説明」が附された時点で確定するはずのものである。テオンの練習法では、ある話が「説明」を伴わなくとも「イソップの話」として認められうることを意味する。したがって、テオンの「イソップの話」認定の要件においては、その話に当初から「説明」が附されているかどうかではなく、附すことが可能かどうか、いわば「解釈可能性」が重要ということになる。

形式が整えば「イソップの話」となるかという疑問は先にも触れたが、テオン自身が、形式が整うれば「イソップの話」となる可能性を示しているわけである。そして、形式を調えるための条件が、何らかの「真実」を導出可能かどうかということであり、話の解釈に関わる問題であるため、どのような話であっても「イソップの話」として認められる可能性を帯びることになる。そうしてみると、テオンの考える「イソップの話」の枠組みは、一定の基準を示すものではあるものの、個々の話について、それが「イソップの話」であるかどうかを明確に客観的に判定可能にしてくれるものではないのである。

テオンの姿勢からすると、「イソップの話」において重要なのは、形式ではなく解釈可能性であったと考えられる。まさに「真実」あつての「イソップの話」ということになるが、テオンの説明では、その「真実」が後付けで解釈可能であり、さらにその解釈も絶対的なものではないことが同時に示唆される。したがって、「イソップの話」を判定するにあたって、「真実」の解釈可能性を要件とするならば、その判定への主観の混入は不可避

^{*5} Theon, *Prog.* 76 Spengel.

となってしまう。この点は、テオンの「イソップの話」に関する議論のひとつの限界といえそうである。

テオンが示す「イソップの話」の在り方は、そこに含まれる問題も含め、現在の「イソップ寓話」に通ずるものであることが確認できるが、その一方で、こうした見解の登場がこの時期になってからであったことは、留意すべきであろう。

3. クインティリアヌス

1世紀の修辞学者クインティリアヌスは、『弁論術の教育』*Institutio Oratoria* 1.9.2において、初期の教育の素材として〈イソップの話〉を取り上げている。

Igitur Aesopi fabellas, quae fabulis nutricularum proxime succedunt, narrare sermone puro et nihil se supra modum extollente, deinde eandem gracilitatem stilo exigere condiscant: uersus primo soluere, mox mutatis uerbis interpretari, tum paraphrasi audacius uertere, qua et breuiare quaedam et exornare saluo modo poetae sensu permittitur.

そこで、乳母の話のすぐ次に続くイソップの話も、簡素で節度を守った言葉で語ることを学び、それから書くにあたって同じ簡素さを達成することを彼らが学ぶようにしよう。すなわち、まず詩行を解きほぐし、そして言葉を変えて説明し、詩人の意味が保たれる範囲でどこかを縮めたり装飾したりして、大胆にパラフレーズする。

クインティリアヌスは〈イソップの話〉*Aesopi fabellae*について、「乳母の話」に続く題材として、幾つかの練習方法を挙げている。これらの方法はあくまで本文に関わるものであるが、テオンに類似した練習方法を見出せる。また、〈イソップの話〉を子供向きのものとしている点が特徴的でもある。

クインティリアヌスは、別の箇所でも〈イソップの話〉に関する認識を示している(5.11.19-21)。

Illae quoque fabellae quae, etiam si originem non ab Aesopo acceperunt (nam uidentur earum primus auctor Hesiodus), nomine tamen Aesopi maxime celebrantur, ducere animos solent praecipue rusticorum et imperitorum, qui et simplicius quae ficta sunt audiunt, et capti uoluptate facile iis quibus delectantur consentiunt: si quidem et Mene-nius Agrippa plebem cum patribus in gratiam traditur reduxisse nota illa de membris humanis aduersus ventrem discordantibus fabula, et Horatius ne in poemate quidem humilem generis huius usum putauit in illis versibus: quod dixit vulpes aegroti cauta leoni. Αἴνον Graeci uocant et Αἰσωπείους, ut dixi, λόγους et Λιβυκούς, nostrorum quidam, non sane recepto in usum nomine, apologationem.

Cui confine est παροιμία genus illud quod est uelut fabella breuior et per allegorian

accipitur: ‘non nostrum’ inquit ‘onus: bos clitellas.’

イソップによる起源は認められていないが（というのも、ヘシオドスが最初の作者であると思われるため）、イソップの名でもっとも名高い「イソップの話」についても、それらはとりわけ無教養な田舎者の心を引き付けるものであるが、そのような者たちは、作られた話をあまり考えずに聞き、楽しさにとらわれて、聞いて心地よい話に容易に同意するのである。そして実際、メネニウス・アグリッパは、かの著名な、胃袋と仲違いする人間の四肢についての話によって、平民を貴族との和解に導いたと伝えられる。また、ホラティウスは、詩作においても、この種の話を使うことをさもしいこととは考えず、自身の詩行で、「用心深い狐が病のライオンに語ったことを」と記している。ギリシア人はこれをアイノスと呼んだり、私が言ったように、イソップの話やリビュアの話と呼んでいるが、一方、私たちローマ人のなかには、その名の使用が十分には受け入れられてはいないものの、アポロガーティオーと呼ぶ者たちもいる。

これに近いものが、格言の類であるが、それは縮められた「イソップの話」のようなものであり、含まれる意味の解釈によって理解される。たとえば、「私の荷物ではない。牛が荷かごを、というやつだ」と言う場合である。

〈イソップの話〉とイソップの関わりに関するクインティリアヌスの説明は、テオンの議論とほぼ共通である。ここでヘシオドスの名を挙げる点などをふまえると、クインティリアヌスの示す〈イソップの話〉は、テオン同様に、「イソップの話」と呼ぶべき枠組みに収まるものであると考えられる。一方、μῦθοςには言及せず、“Αἰσωπέιους... λόγους et Λιβυκούς”と述べる点は、むしろアリストテレスを意識しているようにも見える。

「イソップの話」を聞かせて効果を発揮する対象として「無教養な田舎者」に言及している点は、テオンには見られないクインティリアヌス独自の見解といえる。前章でも確認したアグリッパやホラティウスの例を挙げている点もクインティリアヌスならではの点である。また、ラテン語での呼び名として、あまり一般的ではないとしつつも、apologatio を挙げている点も興味深い。ただ、apologatio の現存する用例は、調べた限りではこのクインティリアヌスの言及だけであり、用語としての拡がりを確認できない。

この箇所の最後で、クインティリアヌスは、「イソップの話」に近いものとして「格言・諺の類 (παροιμίας genus)」を挙げ、それが縮められた「イソップの話」のようなものだと述べている。格言との間に類似した性質が認められるというのであれば、クインティリアヌスが「イソップの話」について、それが一般性を持った内容を語るものであると理解していたことを推測できる。ただし、クインティリアヌスは一連の説明の中で、テオンの「説明」にあたる部分には言及していない。したがって、「イソップの話」に関する理解とは別に、クインティリアヌスでは話の「解釈」に関わる練習は提示されないのである。

4. 2世紀頃の用例

4.1 プルタルコス

1～2世紀において、〈イソップの話〉および人物としてのイソップに最も多く言及しているのは、おそらくプルタルコスだろう。ただし、プルタルコスの場合、クインティリアヌス同様に〈イソップの話〉の始祖としてヘシオドスの名を挙げており*6、〈イソップの話〉を内包する「イソップの話」の枠組みが意識される。

プルタルコスは、『いかにして若者は詩人に耳を傾けるべきか』と題する一篇の冒頭で、子供たちは深刻に語られたものにみえない話に耳を傾けるものだとして、哲学的議論においても彼らに向けての話は真面目一辺倒でないことを推奨する*7。その文脈で、「イソップの話」(Αἰσώπεια μυθάρια)が、詩人の語る物語と並んで、もともと子供が喜んで読む題材として挙げられている。クインティリアヌスでも初期の教材であったことを思うと、2世紀頃には「イソップの話」を子供向けの話とみる発想が広がりつつあったことも考えられる。

プルタルコスは、イソップの名を伴う話を幾つも用いているが、イソップが語ったものとして示す他*8、アリストテレスがモーモスの話に言及した際と同様の手法を用いている*9。すなわち、Αἰσώπειος + 動物名、あるいは Αἰσώπου + 動物名による導入である。なかには、“Αἰσώπειος ἀλώπηξ”という同じ出だしで、Augustana集の「狐と豹」にあたる話やアリストテレスが例に挙げた「狐と針鼠」の話に言及する例もあり*10、当時の「イソップの話」の拡がりを見せる。これらの出だしに καθάπερ と附して喩えであることを明示する場合もあり*11、アリストテレスに較べて、より一般化した用法となっている。なお、プルタルコスがこうした手法で言及する話は、単独の話としてではなく、文脈の中で一種の喩え話として利用される。したがって、「イソップの話」はただの子供向けの読み物として扱われるだけでもない。プルタルコスは多くの「イソップの話」を取り上げるが、古代のイソップ集に含まれていない話が複数見られることも特徴的である*12。

ところで、テオンやクインティリアヌスが初期の教材として「イソップの話」を挙げ、あるいはプルタルコスも子供向けの題材として示していることなどからして、この時代には、一定の教育を受ける環境にあった人物であれば、教養として少なからず「イソップの話」に関する知識を身に付けていたことを推測できる。上記のプルタルコスの手法におい

*6 Plu. *Conv. sept. sap.* 158B.

*7 Plu. *Quomodo adul.* 14E.

*8 Plu. *Crass.* 32.5; *Arat.* 30.8; *De Herod. mal.* 871D; *Comm. not.* 1067E.

*9 Plu. *Arat.* 38.9; *Conv. sept. sap.* 157B; *De frat. amor.* 490C; *Anim. an cor.* 500C; *Quaest conv.* 614E; *An seni* 790C; *Prae. ger. reip.* 806E.

*10 Plu. *Anim. an cor.* 500C; *An seni* 790C. 前者が *Aesopica fab.* 12 「狐と豹」、後者がアリストテレスの「狐と針鼠」と対応する。

*11 Plu. *De frat. amor.* 490C; *Prae. ger. reip.* 806E.

*12 Plu. *Arat.* 38.9; *Conv. sept. sap.* 157B; *Quest conv.* 614E; *Prae. ger. reip.* 806E.

でも、必ずしも話全体が提示されるわけではないため、読者の側も、そこで言及される「イソップの話」を想起できないと取り残されてしまうのである。その点で、プルタルコスがしばしば上記の手法を利用していることは、イソップ集の存在も含め、当時それが可能な状況となっていたことを意味しているとも考えられる。

4.2 ディオン・クリュソストモス

プルタルコスと同時代に活躍した弁論家ディオンのクリュソストモスは、イソップが語った話の背景やその意図について説明している。

第12弁論冒頭で、ディオンは聴衆に対して梟について語る^{*13}。梟は知恵も美しさも他の鳥に優ることはなく、声も快いものではないにもかかわらず、他の鳥たちは梟の元に集まる。ディオンは、鳥たちが集まって梟を称賛しているとする一般的見解を紹介し、また、アテネ女神が梟を大切にしていると人々が語り、アテナイでフェイディアスによるアテネ女神と梟の彫像が作られたことにも梟への評価が見られるという。しかし、ディオンは、梟が何か卓越した知恵を持っていたのでなければ、こうした梟の境遇は理解できないという考えを示し、それからイソップに言及する(12.7-8)。

ὄθεν οἶμαι καὶ τὸν μῦθον Αἴσωπος ξυνέστησεν ὅτι σοφὴ οὔσα ξυμβούλευε τοῖς ὀρνέοις τῆς δρυὸς ἐν ἀρχῇ φυομένης μὴ ἐᾶσαι, ἀλλ' ἀνελεῖν πάντα τρόπον· ἔσσεσθαι γὰρ φάρμακον ἀπ' αὐτῆς ἄφυκτον, ὑφ' οὗ ἀλώσονται, τὸν ἰζόν. πάλιν δὲ τὸ λίνον τῶν ἀνθρώπων σπειρόντων, ἐκέλευε καὶ τοῦτο ἐκλέγειν τὸ σπέρμα· μὴ γὰρ ἐπ' ἀγαθῷ φυήσεσθαι. τρίτον δὲ ἰδοῦσα τοξευτὴν τινα ἄνδρα προέλεγεν ὅτι οὗτος ὁ ἀνὴρ φθάσει ὑμᾶς τοῖς ὑμετέροις πτεροῖς, πεζὸς ὢν αὐτὸς πτηνὰ ἐπιπέμπων βέλη. τὰ δὲ ἠπίσται τοῖς λόγοις καὶ ἀνόητον αὐτὴν ἠγοῦντο καὶ μαίνεσθαι ἔφασκον· ὕστερον δὲ πειρώμενα ἐθαύμαζε καὶ τῶ ὄντι σοφωτάτην ἐνόμιζεν. καὶ διὰ τοῦτο, ἐπὶ φανῆ, πρόσσεισιν ὡς πρὸς ἅπαντα ἐπισταμένην· ἢ δὲ συμβουλεύει μὲν αὐτοῖς οὐδὲν ἔτι, ὀδύρεται δὲ μόνον.

私が思うに、ここからイソップは次のような話を作った。すなわち、知恵のある梟が、樾の木が最初に生えて来たときに、それを放っておかず、あらゆる方法で取り除くようにと他の鳥たちに助言した。だれも逃れられない薬、そのせいで鳥たちが捕獲されるだろう鳥もちが、その木から生み出されることになる、というのであった。そして、人間たちが亜麻の種を播いたときに再び、その種も摘まみ出すように命じた。そこから良いものは生み出されないうだろうということであった。三度目は、弓を持った男を目にしたときに、この男自身は地を歩くものだが、羽をつけた矢を放つことで、君たち自身の羽を用いて君たちに追いつくだろう、と予言した。鳥たちは、こうした梟の言葉を信用せず、梟を愚かものとみなして、梟は狂っていると云った。しかしそれから鳥たちは身をもって経験したことで感服し、実際に

^{*13} Dio Chrys. Or. 12.1-6.

梟が非常に賢いものと考えようになった。そして、このために、梟が姿を現わすと、全てについて知っているものとして、鳥たちがその近くにやってくるのである。しかし、梟はもはや鳥たちに助言を与えることはなく、ただ嘆くのみである。

ディオンの考えでは、イソップは「かつて梟に卓越した知恵があった」ことをふまえて、賢い梟が鳥たちに助言を語る逸話（μῦθος）を作ったのである。梟の助言に対して、鳥たちは梟が狂っているとして相手にしなかった。しかし、梟の言う通りの事態が生じるに至り、鳥たちは梟を卓越した知恵の持ち主として認め、称賛するようになった。また、それが梟の周りに鳥たちが集まる理由ともなるが、一方の梟は、もはや鳥たちに助言を与えることはなく、ただ歎くだけである。

ディオンの述べるこの〈イソップの話〉は、梟の過去から現在の状況までを説明する一種の昔話、いわば縁起譚となっている。同時に、「正しく助言を与える者とその助言を軽視して相手にしない過った者たち」が描かれた話ともいえる。そして、ディオンはこの話の構造を聴衆に対して当てはめる*¹⁴。すなわち、聴衆も同様にそうした助言を受けたことがあるはずだ、とディオンは述べるのである。ディオン自身を梟として見立てると、これは「私の話をしっかりと聞くように」というディオンの主張、一種の注意喚起ということになる。これは、眼前の具体的な状況というよりも、これから起こる仮想的状況に適用される話である。具体的な状況に〈イソップの話〉を適用して説明するのではなく、〈イソップの話〉によって来たるべき（そして避けるべき）状況を想定する体裁となっている。この「梟と鳥たち」の話を用いた弁論の導入は、聴衆の関心を弁論本体へと惹きつけるものであったと思われる。

ディオンは、第72弁論においても、イソップに言及している*¹⁵。イソップを七賢人と同様の人物とし、人が聴いて楽しめる話を作る、口が巧みな人物であったと考える者たちをディオンは取り上げる。そして、イソップがそうした方法で人々に忠告を与えてその過ちを示そうとしたという、彼らの見解を紹介する。この場合、イソップの語った話は、楽しめる話であり、（聴いて楽しくない）忠告を含む話という、二重の性格をもった話として理解されたことになる。そして、こうした見解を持つ者たちが、この種の話に期待して、哲学者的風貌をした者たちのもとに集まるとディオンは述べるのである。

ディオンはこの箇所続けて、〈イソップの話〉として「梟と鳥たち」の話を紹介し、弁論の結びへと繋げている*¹⁶。細かい部分の描写には相違が見られるものの、上記の第12弁論で用いたものと同じ筋書きの話である。つまり、助言を与える梟とそれを軽んじる鳥たちが登場し、後に鳥たちが梟の助言の正しさに気づき、梟の知恵を称賛する。そして、何かしらの利益を手にするのではないかと今でも鳥たちが梟の側に群れるという。それに対してディオンは、昔は梟も知恵があり助言を与えられたが、今ではただ外見だけ昔の

*¹⁴ Dio Chrys. Or. 12.9.

*¹⁵ Dio Chrys. Or. 72.13.

*¹⁶ Dio Chrys. Or. 72.14-15.

ままで、知恵は失われてしまったという見解を示す。そして、以上をふまえて、現在自分たちはソクラテスやディオゲネスの身なりをしているが、知恵は彼らに比すべくもない、とディオンは語る。昔の梟はソクラテスたち、今の梟はディオンたち、そしてそこに集まる鳥たちが聴衆だというのである。これは現状を説明するための喩え話となっている。

第12弁論と第72弁論では、同じ話を持ちだしながら、利用法が異なる。話の内容はいずれも今あるものの由来を語る、一種の縁起譚の体裁といえるが、前者では昔の梟、後者では今の梟に自身が投影される。語られる場所に相違はあるが、適用される文脈に合わせて、注目する点を変えて話が解釈され、利用されるのである。ここでの「梟の話」は、ディオンの用例が見られず、ディオンの創作の可能性も考えられるが、その場合、プルタルコス同様に、イソップが語ったという体裁の「イソップの話」の枠組みに含まれる話である。そしてまた、ディオンの示した「梟の話」は、それ自体独立したひとつの逸話として、汎用性の高い使い勝手の良い素材となっている。

また、ディオンは第33弁論においてもイソップが語ったという体裁でひとつの話を語る(33.16)。

ἀλλὰ μὴν τοιοῦτον πεπόνθατε οἶον Αἴσωπος ἔφη τοὺς ὀφθαλμοὺς παθεῖν, ἐπειδὴ ἐαυτοὺς μὲν ἐνόμιζον πλείστου εἶναι ἀξίους, τὸ στόμα δὲ ἐώρων ἀπολαῦν τῶν τε ἄλλων καὶ δὴ τοῦ μέλιτος ἡδίστου ὄντος. οὐκοῦν ἠγανάκτουν τε καὶ ἐμέμφοντο τῷ ἀνθρώπῳ. ἐπεὶ δὲ αὐτοῖς ἐνήκε τοῦ μέλιτος, οἱ δὲ ἐδάκνοντό τε καὶ ἐδάκρουν καὶ δριμύ καὶ ἀηδὲς αὐτὸ ἠγοῦντο. μὴ οὖν καὶ ὑμεῖς ἐπιζητεῖτε γεύσασθαι τῶν ἐκ φιλοσοφίας λόγων, ὥσπερ ὀφθαλμοὶ μέλιτος· ἔπειτα οἶμαι καὶ δακνόμενοι δυσχερανεῖτε καὶ φήσετε ἴσως οὐδαμῶς φιλοσοφίαν εἶναι τὸ τοιοῦτον, ἀλλὰ λοιδορίαν καὶ βλάβην.

実際、イソップが目が起こったと語ったようなことが諸君に起きているのだ。すなわち、目が、自らを最も価値ある器官であると考えていたころ、口が種々のものを享受し、とりわけもっとも甘い蜜を味わっているのを見た。そして、目は腹を立て、持ち主たる人間に非難を向けた。そこで人間が目には蜜を幾らか入れると、目は刺すような痛みを感じて涙を流し、蜜を尖った不快なものだとみなした。したがって、諸君も、目が蜜を味わったようには、哲学による言葉を味わおうとはしないように。私が思うに、諸君は痛みを感じたときに耐えられず、おそらく、こんなものは哲学ではなく、叱責であり傷害である、ということだろう。

ここでは論じる文脈に対応する喩え話として用いられている。イソップが語ったという体裁で語られるが、その後のイソップ集を含め、ディオンのこの箇所を除いて見られない。その点では、「梟の話」同様に「イソップの話」の枠組みで考えられる話である。

ディオンのここで語る話は、目が口に対して反感を持ち、体の持ち主に訴える筋書きであるが、話の基本的な発想はメネニウス・アグリッパの「身体と胃袋の話」に類似している。あくまで推測の域を出ないが、ディオンはその話(あるいは改変版)をもとに自身の弁論用に話を構成したのではないかと考えられる。そして、あるいはそのためか、「梟の

話」と異なり、この話は縁起譚としての性質は持っていない。とはいえ、イソップが語ったという体裁は共通であり、いずれも意図を持って語られる話である。

4.3 ゲッリウス

2世紀後半の著述家ゲッリウスは、『アッティカの夜』*Noctes Atticae* 2.29の「Apologus Aesopi Phrygis memoratu non inutilis」と題する箇所、イソップに言及する(2.29.1)。

Aesopus ille e Phrygia fabulator haut inmerito sapiens existimatus est, cum, quae utilia monitu suasuque erant, non seure neque imperiose praecepit et censuit, ut philosophis mos est, sed festiuos delectabilesque apologos commentus res salubriter ac prospicienter animaduersas in mentes animosque hominum cum audiendi quadam inlecebra induit.

イソップはプリュギア生まれの話の語り手であり、正当に賢人として評価されたが、それは彼が、忠告や助言として有益なことを、哲学者の方法のように、厳格で尊大に忠告し助言するのではなく、気の利いた楽しい話を作り出し、健全に注意深く配慮された内容を、聴くように惹きつけつつ、人々の精神と心へまと寄せた。

イソップは正当に賢人として評価されたと述べるが、その理由は彼の語る話にあった。つまり、イソップが、忠告や助言として有益なことを、それも人々の精神や心に対して有益なことを人々が楽しんで聴くように語り、聴衆の興味を惹く人物であったというのである。哲学者たちのような堅苦しい説教ではなく、いわば「楽しい忠告」を語る存在である。こうしたイソップの語る話の二面性については、プルタルコスやディオンの見解が示されており、2世紀頃には共通の認識として広がっていたといえる。

ゲッリウスは、イソップについて紹介した後、〈イソップの話〉の例として「雲雀と農夫」の話を紹介する^{*17}。この話は、農夫の畑に巣を作っていた雲雀が、いつそこを飛び立つべきかを論じ、農夫が友人や親類に頼まず、自らの手で実りを刈り取ろうという時がその時だと語るものである。この話のあとで、ゲッリウスは以下のように記す(2.19.17)。

Haec quidem est Aesopi fabula de amicorum et propinquorum leui plerumque et inani fiducia.

この話は、友人や親類への信頼がたいてい不確かで空虚なことに關するイソップの話である。

話から導き出される一般的な教訓が、後ろに置かれて説明される。この話に対応する具体的な文脈は存在せず、この〈イソップの話〉自体が、一般的な教訓を語るひとつの具体的な文脈として読まれている。ゲッリウスは、前提となる具体的な状況を必要とせず、〈イソップの話〉そのものを、意図を持った一つの話として提示するのである。こうした読み

^{*17} Gell. *NA* 2.29.2-12. この話はバブリオス集にも含まれる (Babr. 88)。

方や形式はテオンの示した練習にも見出せるものであり、その点では、ゲッリウスの示す〈イソップの話〉は「寓話」と解することのできるものであり、当時の「寓話」としての「イソップの話」の枠内に位置付けられるものといえる。

4.4 テュロスのマクシムス

〈イソップの話〉が何らかの知恵を語るものという認識は、テュロスのマクシムスも示している。2世紀後半のコンモドゥス帝時代に流布していたという彼の講義録では、イソップが動物たちの生活や社会を描いたとされる(32.1a)。

Αἰσώπῳ τῷ Φρυγὶ πεποίηνται διαλόγοι τε θηρίων καὶ ζυνουσίαι, διαλέγεται δὲ αὐτῷ καὶ τὰ δένδρα, καὶ οἱ ἰχθύες, ἄλλο ἄλλῳ καὶ ἀνθρώποις ἀναμίξῃ· καταμέμικται δὲ ἐν τοῖς λόγοις τούτοις νοῦς βραχύς αἰνιττόμενός τι τῶν ἀληθῶν.

ブリュギアのイソップによって、獣たちの対話と社会が描き出された。木々も魚も、お互いに、そして人間たちとも入り混じって言葉を交わす。イソップは、何らかの真実をほのめかすために、これらの話の中に短い知恵を混ぜ込んだ。

マクシムスの説明では、作者イソップに関する具体的なイメージがその背景にあるように考えられるが、そうして語られる〈イソップの話〉は、何らかの事実をほのめかす短い知恵が含まれるとされる。つまり、マクシムスは、〈イソップの話〉について、それ自体として何らかの教えを含む話として理解していたことになる。その点では、マクシムスはゲッリウスとも同様の認識をもっていたといえそうである。

2世紀後半には、個々の〈イソップの話〉に共通の理解を導く「イソップの話」の枠組みが形成されていたのではないかと考えられる。

5. 総括

5.1 ジャンル意識の形成

前1世紀までの状況に較べ、1世紀以降にあっては、「イソップの話」を独立した話として評価し、何らかの一般性を持った意味を読み取ろうとする傾向が生じているが、もうひとつ、当時の認識を考えるにあたって、興味深い事例を見ることができる。

本章で検討したとおり、テオンやクインティリアヌス、プルタルコスらが、「イソップの話」の始祖はイソップではないと表明していることである。テオンはホメロスやヘシオドス、アルキロコスらの名を挙げ、クインティリアヌスやプルタルコスは、ヘシオドスが始祖であるという。こうした見解は、彼らが「イソップの話」をひとつのジャンルとして意識し、その枠内に〈イソップの話〉を位置付けていることを示している。「イソップの話」をひとつのジャンルとして捉える意識は、アリストテレスの議論にその可能性が見られたものの、判断できる範囲では、基本的にこの時代に入ってから鮮明に現われてきたも

のといえる。その一方で、むしろジャンル意識が生じたことで、ヘシオドスの話なども同じ枠組みに含まれる話として見出された可能性も考えられる。そしてこの場合、「イソップの話」を巡って一種の逆転現象が起きているのである。

テオンはその種の話をも *μῦθος* とし、総称して「イソップの話」と呼ばれると述べている。このとき、「イソップの話」はジャンルを構成する一部でありながら、全体を表す枠組みともなる。つまり、「イソップ」の名が概念化してジャンルを表す記号となる一方、「イソップの話」を含めて全体を包括する独自の用語は準備されていないのである^{*18}。部分と全体を切り分け出来ないことで、個々の〈イソップの話〉の集合として「イソップの話」があり、「イソップの話」の枠組みに含まれる個々の話が〈イソップの話〉となる、曖昧な集合として「イソップの話」が立ちあがる。

5.2 「格言」と「イソップの話」

1世紀以降の「イソップの話」認識に一定の傾向が見られることは、既に述べたとおりである。クインティリアヌスは、「イソップの話」が無教養な者たちの心をとくに惹きつけるとも論じるが、そうした認識に当てはまるような対象をアリストテレスが提示している。それは、アリストテレスが『弁論術』1392a19以下で論じている「格言 (*γνώμη*)」である。

アリストテレスは、格言は言明 (*ἀπόφανσις*) であるという^{*19}。それは、個別的な事柄に関して (*περὶ τῶν καθ' ἕνα*) ではなく、一般性を持った事柄 (*καθόλου*)、それもあらゆる事柄というわけではなく、行為の関係する事柄 (*περὶ ὧν αἱ πράξεις*)、つまり行為との関係で、何が選ばれるべきであり、何が避けられるべきであるかを扱うものである^{*20}。アリストテレスによると、格言は、説明のための補足を伴うものか (*μετ' ἐπιλόγου*)、伴わないものか (*ἄνευ ἐπιλόγου*) のいずれかに分けられる^{*21}。容易に受け入れられるものについては、補足は必要ないが、異論の多いことや一般の見解とは異なることについては (*περὶ μὲν γὰρ τῶν ἀμφισβητούμενων ἢ παραδόξων*)、補足が必要である^{*22}。補足の用法は、まず補足説明をして結論として格言を用いる、あるいは、格言を先に置いて補足説明を加えるというものである^{*23}。また、一般の見解とは異ならないが意味がよく分からないことについては (*περὶ δὲ τῶν μὴ παραδόξων ἀδήλων*)、理由を簡潔に示せばよいとする^{*24}。

アリストテレスは、格言は弁論の大きな助けとなるが、それは聴衆の教養の無さのため

^{*18} その点では、たとえばクインティリアヌスが言及した *aplogatio* はひとつの試みであったといえるが、先に述べた通り、それが普及した痕跡はない。

^{*19} Arist. *Rh.* 1394a21.

^{*20} *ibid.* 1394a22-25.

^{*21} *ibid.* 1394b8.

^{*22} *ibid.* 1394b28-29.

^{*23} *ibid.* 1394b29-33.

^{*24} *ibid.* 1394b33-34.

(διὰ τὴν φορτικότητα τῶν ἀκροατῶν) だと述べている*25。誰かが一般的な形で論じ、聴衆がそれぞれ個別に持っている見解がそれとたまたま一致することがあると、彼らは喜びを覚えるものだとアリストテレスは考えていたのである。そしてまた、こうしたことから逆に、どのように格言を用いればよいか明らかとなるという。すなわち、聴衆がどのような考えを抱いているかをあらかじめ推察して、そうしたことに関して一般的な形で語る(περὶ τούτων καθόλου λέγειν) べきだということである*26。つまるところ、格言の効用のひとつは、一般的な形で語られたものについて、聴衆が勝手に自分の経験を当てはめて納得するところに生ずるというわけである。ただ、ここで注意すべきことは、聴衆それぞれが個別に納得したとしても、それは各自の経験に当てはめているだけであり、それだけで語られた話の一般性が信頼に足るものかどうかを判断することは、本来ならばできないはずのものだということである。

このような格言の枠組みで考えると、一般的な内容を語り、しかもそれが大衆に受け入れやすいという「イソップの話」の特徴は、「イソップの話」が格言のごとく一般に認識されていたことを意味しているのではないかと考えられる。実際、クインティリアヌスは「イソップの話」と「παροιμίας genus」の類似を指摘しているが、アリストテレスは「諺内のあるものは格言でもある(εἶναι τῶν παροιμιῶν καὶ γνῶμαί εἰσιν)」と述べており*27、「諺(παροιμία)」についても格言と同様に論じることが可能であることを示している。すなわち、彼らの議論に従えば、「イソップの話」を格言に似たものとして解釈することも、あながち間違いではないといえるのである。

しかし、これは「イソップの話」をどのようなものとして認識し理解するかという問題であり、「イソップの話」の本体が格言と類似しているわけでもない。「イソップの話」において、格言的な言辞が示されるのは、「イソップの話」の前ないし後に附される「説明」によってである。それらの「説明」に関しては、1世紀末までにはテオンの議論が見られ、その後のイソップ集にも見られるものであり、あるいはゲッリウスがそれに類するものを示すなど、その当時には既に一般に広まっていたと推測できる。そうした「説明」と「イソップの話」を包括的に考えると、構造としては、「イソップの話」が格言的言辞を導出するための説明となっているように見える。アリストテレスは、格言について、その前か後ろに補足説明を附す必要がある場合について述べているが、これを「イソップの話」について考えると、構造的には「イソップの話」がその補足説明に当てはまることになる。なお、「イソップの話」の場合、「説明」が附されないこともあるわけであるが、その場合でも、「イソップの話」から一般性を持った見解が導き出されることが前提であるとするならば、想定される格言的言辞に対する補足説明として「イソップの話」を捉えることができる。

*25 *ibid.* 1395b1-2.

*26 *ibid.* 1395b6-11.

*27 *ibid.* 1395a19.

アリストテレスは補足説明を“ἐπίλογος”と呼び、テオンは後付けの「説明」を“ἐπίλογος”と呼んだ。「イソップの話」を格言の枠組みで考える場合、果たしている役割に比して、いわば主客が逆転している。すなわち、形式的には「イソップの話」が格言の位置を、格言的言辞の「説明」が補足説明の位置を得ているということができる。実体からすると、「イソップの話」を格言と呼ぶことは難しいものの、「イソップの話」をどのように読むべきか、という点において、格言と同様の枠組みで考えることが可能となっており、つまり、「イソップの話」に関する認識については、大きな傾向として、それが格言と同化していると指摘することができるのである。

こうした特徴をもつ「イソップの話」の在り方は、現在の「イソップ寓話」に通じるものと考えられる。その点から、「イソップ寓話」の成立と展開については、テオンを中心とした1世紀頃の議論の広まり、2世紀の用例の広がりもふまえて、1～2世紀頃、すなわちペリーが「話」の歴史の第三期とした時期を基点として捉えて問題ないだろう。ただし、本章で確認した議論が、基本的に修辞学の文脈で登場してきたものであることも留意しておきたい。2世紀の用例はその拡がりを窺わせるものではあるものの、後世との関係において、さらに拡張して考えることが可能かどうかは、さらなる検討が必要であろう。

第5章

古代のイソップ集——ファエドルスとバブリオス

1. はじめに

「イソップの話」について、私たちが「寓話」と呼びうるような、それを教訓的なものとして読もうとする意識が明確化してきたのは、1世紀以降であった。この点については、前章までに、個々の作家の用例から、「イソップの話」に関する認識の変質を論じた。しかしながら、その際、やはり1世紀に登場したファエドルス、その後のバブリオスらによる初期のイソップ集については扱わなかった。

ファエドルスやバブリオスは、その集成において「何」を集めようとしたのか。後世においては、両者の集成は同類のもの——いわゆるイソップ（風）寓話集——として扱われているが、そもそもそれらを編纂したときの、両者の認識あるいは意図としてはどうであったのか。2世紀頃までの「イソップの話」に関する作家たちの認識を考慮すると、それらは必ずしも一致するものではないのではないか。

本章では、そうした点に主眼を置いて、両者の残している記述を元に、彼らの「イソップの話」に関する認識を吟味し、その異同を明らかにする。さらにまた、そこで明らかとなる認識とイソップ集の関係について、集成内部から検討を試みる。

1.1 1世紀までのイソップ集

本論では、「イソップの話」を集めたという体裁の集成をイソップ集と呼んでいる。ファエドルスやバブリオスのイソップ集を扱う前に、まず、それまでのイソップ集についても簡単に触れておきたい。

ファエドルス以前においておそらく存在したであろうイソップ集は、ファレロンのデメトリオスが編纂したと考えられる散文イソップ集である。ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』5.80は、ファレロンのデメトリオスが弁論術関連の著作を行う中でイソップ集も編纂したとし、著作リスト(5.81)には「*Δίσωπειών α'*」の名を含めている。つまり、一卷本のイソップ集を編んだというのである。ペリーの推測の正否はともかくも*1、ディオゲネス・ラエルティオスが弁論術関連の著作中にイソップ集を含める点は、

*1 序論参照。

前章でも扱ったアリストテレス『弁論術』の「イソップの話」の存在がその背景にあったとみることができる。

デメトリオス以降、ファエドルスのイソップ集が登場するまでに、デメトリオス以外のイソップ集が存在したかどうかは明らかではない。ただし、「イソップの話」が4篇記されたパピルス断片なども残っており*²、集成と呼ぶほどのものかは別として、デメトリオスの集成以外にも、何かしらの「イソップの話」を集めたものが存在していた可能性はある。また、アドラドスは、ヘレニズム期において、デメトリオスのイソップ集から派生した韻文のイソップ集が存在していたと推測している*³。とはいえ、デメトリオスのものも含め、その時代のイソップ集は現存せず、議論としては推測の域を出るものではない。

デメトリオス以前においては、イソップ集の存在は確認されていない。しかし、たとえばノイガーは、古典期に何かしらのイソップ集が存在したと想定して議論を組み立てている*⁴。第2章でも触れた、アリストファネス『鳥』471行目の“πεπάτηκας”を指で何かをめくる動作として解釈すると、何かしらの「イソップ本」が存在したことになる*⁵。ただ、この時代にそうしたものが存在した痕跡は見られないため、実際にはこの箇所を「イソップ本」への言及と解釈することは困難と思われる。いずれにせよ、デメトリオス以前のイソップ集については、存在を想定することは可能であるが、実在性という観点からすると、現状では根拠が乏しい。

1.2 前辞と後辞

現存するイソップ集に含まれる話には、「前辞」(promythium)と「後辞」(epimythium)が附されていることが多い。ペリーはデメトリオスのイソップ集がある種の資料的利用を企図したものだったと推測したが、その根拠として挙げたのが「前辞」の存在であった。ペリーは、「前辞」が、それぞれの話の前に簡単な説明を付けることで、利用者の目的に適った話の検索を容易にする目的のものだったと考える。一方、「後辞」は、それぞれの話の後ろに附されるもので、その話から導き出される教訓などの寸評を述べるものである。

イソップ集における前辞や後辞についてもペリーの研究に詳しいが*⁶、全体的な傾向からすると、前辞はそれぞれの話で語られる状況に関する簡便な説明を示し、後辞はそれぞれの話から導き出される一般性を持った見解を語る、という色合いが強いようである。また、時代的な流れとしては、前辞がまず登場し、後辞は後の時代に向かうほど一般化した。ファエドルスのイソップ集では、前辞と後辞の使用にばらつきが見られるが、これは歴史

*² Rylands Papyrus 493. ペリーはこの断片がデメトリオスのイソップ集と関わるものとして、重要視していた。

*³ Adrados(1999)は、デメトリオスのイソップ集の後、ヘレニズム時代に韻文によるイソップ集が存在したと推測している。なお、Adrados(2000)巻末に附された別表では、アドラドスが想定するイソップ集の歴史がまとめられている(Synopsis I, II)。

*⁴ Nøjgaard(1964)。

*⁵ 第2章註8参照。

*⁶ Perry(1940)。

的な過渡期だったと考えることができる。なお、既に見た通り、1世紀末にはテオンが前辞や後辞について論じているが、ここでは両者は同等の「説明」として扱われており、前辞も後辞の如く認識されていたことが分かる^{*7}。

さて、前辞の発達は、「イソップの話」使用者の利便性を向上させたであろうが、その一方で、「イソップの話」の内容解釈に対して一定の枠組みを与えることにもなったと考えられる。前辞によって、以下の話はこういう話だ、と示されるとすれば、多くの読者はそれに従った読み方をするようになるだろう。そうすると、その話を使用する／しないに関係なく、前辞によって文脈が与えられ、話の意味が規定されることとなる。それぞれの話が独立して意味を持つものとして吟味の対象となってしまうのである。デメトリオスが、弁論などで二次的に利用するための資料として集成を編んだのであっても、実際に提示されたイソップ集が、デメトリオスの意図したとおりに受容されていたかどうかは不明である。

同様の問題は、ファエドルスやバブリオスのイソップ集においても指摘できる。彼らが「何」を集めようとしたかということと、実際にそれらがどのようなものとして受容され引き継がれていったかということは、必ずしも一致するものではない。形式や体裁の一致は、後世からは同一ジャンルに属する印として扱われうるものであるが、ともすれば、もともとの編者の存在は希薄なものとなってしまうがちである。「イソップ」の名前が前面に出るイソップ集の場合は、なおのことであろう。

1.3 イソップ集の意義

ペリーを中心とした議論では、ファエドルスとバブリオスのイソップ集は、「話」の歴史における第三期の起点となる。それまでの「話」が付随的に用いられる素材や手段であったのに対し、「話」をあえて詩の形にして集成を編んだファエドルスとバブリオスは、「話」をひとつの文学的な対象として選択したのであり、いわば「話」自体をひとつの文学的な題材として独り立ちさせたのだと評価されるのである。しかし、現在に及ぶ「イソップ寓話」の展開を考えると、それが散文であるか韻文であるかという形式的な側面は、さほど重視されていないように見える。ファエドルスとバブリオスのイソップ集が、中世以降に散文化されて流布していたことも、その一例として挙げられる。そうしてみると、ファエドルスやバブリオスが「話」あるいは「イソップの話」を文学的な対象としたかどうかは、彼らのイソップ集のひとつの側面を示すにとどまるものともいえる。

後世との関係を軸にすると、イソップ集はまさにそれが「イソップの話」の集合であるということに大きな意義があったと考えられる。ある話を「イソップの話」と識別する場合、散在する個々の話を個別に判定するのは困難であるが、イソップ集の体裁で話の集合として提示された場合、そこに含まれるものが「イソップの話」であるという判断が自ず

^{*7} Theon, *Prog.* 72 Spengel. 第4章参照。

と可能になるからである。つまり、イソップ集が「イソップの話」を規定する器として機能するのである。とすると、逆に、集成の編者が何を「イソップの話」として集成を編んだのかという点が重要となってくる。読み手は話の集合体を目にするわけであるが、そもそもその集合を構成するのは編者に他ならないからである。

ファエドルスやバブリオスのイソップ集は、現存するイソップ集としては初期のものである。また、それらは形態を変えつつも受け継がれ、後の時代のイソップ集に影響を残している。そうであればこそ、ファエドルスやバブリオスが一体何を集めようと考えていたのか、という点が問題となろう。彼らの意識に相違があれば、それに基づいて構成される集成の実態にも影響するわけであり、ともすれば、「イソップの話」を集めたものという体裁でありながら、両者の示す枠組みが必ずしも一致しないということにもなりうる。結果的には同類のものとして受け継がれるものであるからこそ、当初の編者の認識を吟味し、集成の内容を検討することは、ジャンルとしての「イソップの話」と初期のイソップ集の関係を探るうえでも不可欠であろう。

2. 編者について

2.1 ファエドルス

ファエドルスは5巻からなるラテン語による韻文イソップ集の編者である。その生涯については、有力写本が「アウグストゥスの解放奴隷ファエドルスによるイソップ集」(FEDRI AVGVSTI LIBERTI LIBER FABVLARVM) としている他に有力な客観的手掛かりはない*⁸。同時代の作家たちはファエドルスに関して口を閉ざし、その名が確実に言及されるのは4世紀頃のアウィアヌスによるイソップ集の序文においてである。しかし、ここでは“... Phaedrus etiam partem aliquam quinque in libellos resoluit ...”と述べられるのみで、ファエドルスが5巻からなる集成を残したという情報以上に得られるものはない。

ファエドルスの生涯と時代については、彼自身が集成内部で言及する自伝的記述に頼ることとなる。ファエドルスが自身について最も具体的に言及するのは、第3巻序歌である。ファエドルスの記述からすると、ファエドルスがギリシア北方のマケドニアあるいはトラキアあたりで生まれたことを推測できる*⁹。また、ファエドルスは、自身が詩文にその身を捧げてきたこと、しかし詩人の仲間たちに受け入れられないことを述べている*¹⁰。この点については、同時代のローマの作家たちがファエドルスについて口を閉ざしていることは、そうした境遇と対応するものともいえる。

ファエドルスは、第3巻の結びで、少年時代に読んだというラテン語の警句 (sententia) を挙げており、早い時期からラテン語を学ぶ環境にあったと考えられる*¹¹。また、ファエ

*⁸ Perry(1965), p.lxxiii.

*⁹ Phaed. 3. *Prol.* 52-54; Phaed. 3. *Prol.* 57.

*¹⁰ Phaed. 3. *Prol.* 20-23.

*¹¹ Phaed. 3. *Ep.* 33-35.

ドルス集には、アウグストゥスやティベリウスにまつわる話も収められており*12、経緯は不明ながら、アウグストゥスの奴隷になった後に解放され、はじめはアウグストゥスの下で、後にティベリウスの下で何らかの関わりを持っていたのではないかと推測できる。なお、ペリーは、ファエドルスが前18年前後から後50年前後まで生きた人物であろうと論じている*13。

ファエドルス集の刊行時期については、おそらく、第1巻と第2巻がティベリウスの時代、その後第3巻、少し時期をおいて第4巻、第5巻が刊行されたと考えられる。

ファエドルスは、第3巻序歌において、自身が選んだ題材のためにひどい災難にあったと語っている*14。自身のイソップ集がセイヤヌスの怒りを買って、告発されることになったというのである。セイヤヌスはティベリウスの寵臣であり、近衛長官、エジプト総督などを歴任した人物である。23年のティベリウスの子ドルスの死後勢力を拡大するが、31年には逮捕、処刑された。そうすると、ファエドルス集の第3巻はセイヤヌスの死後に刊行されたということになる。

また、ファエドルスは、第4巻の序歌において、一度筆を置くことを決意したが再び筆をとることにした、と述べている*15。記述の通りであれば、第4巻は第3巻から多少の時間をおいて刊行されたと考えられる。そして、第5巻第10話「老犬と狩人」で、ファエドルスは自身の境遇を題材とする。かつての名犬も寄る年波にかなわないという話を、ファエドルスは自身にかこつけて語るのである。第5巻刊行時には、ファエドルスがかなり高齢であったことを窺える。

2.2 バブリオス

バブリオスは、2巻からなるギリシア語韻文イソップ集の編者である*16。バブリオスについては、ファエドルスと較べても確実に分かっていることは少ない。まず、彼の名前についても、曖昧な点が残る。写本ではバブリオスの名は属格形で記されており、主格ははっきりしない。『スーダ』では、その主格形は Βαβρίας あるいは Βάβριος ではないかと推測されている*17。アウリアヌスはその序文で主格形を Babrius と記すが、ギリシア語での主格形については確認できない。

バブリオスの生存年代についても、現状では、それを判断できるだけの決定的な証拠は見られない。バブリオスは4世紀半ば以降にはしばしば言及されるが*18、それ以前の外的な証拠は、さほど多くはない。ひとつは、偽ドシテウスの『ヘルメネウマタ』*Hermeneumata*

*12 Phaed. 3.10 および 2.5.

*13 Perry(1965), p. lxxx.

*14 Phaed. 3. Prol. 41-44.

*15 Phaed. 4. Prol. 1-9.

*16 バブリオス集は2巻本であったと考えられるが、完全な形で残っているわけでもなく、また、『スーダ』では10巻本と記されていることもあって、巻数についても明確に判明しているとはいえない。

*17 Suda B 7 Adler.

*18 Luzzatto&La Penna(1986), pp. XLI-XLIX. 各資料については次章で扱う。

である。207年に著されたと主張されるその著作において、バブリオス集に含まれる二つの話が写されている*¹⁹。ただし、『ヘルメネウマタ』の年代については疑問が残り、バブリオスの年代について、少なくとも3世紀以前と推測可能にするのみである*²⁰。また、オクシュリェンコス出土のパピルス断片(POxy. 1249)には、バブリオス集の4篇の話から計16行が記されている。ペリーはこのパピルスが記された時期を遅くとも2世紀末と考えるが*²¹、ルツァットは3世紀と推測し*²²、判断が分かれる。ここからも、バブリオス集が少なくとも3世紀には流布していたと推測できるのみである。

バブリオス集の内部にも、バブリオスの生存年代に関する手掛かりは見られる。第2巻序文でバブリオスが行う、「アレクサンドロス王の息子」への呼びかけである*²³。そのアレクサンドロス王について、ペリーは、ウェスパシアヌス帝(在位69-79年)によって任命されたキリキアの小王アレクサンドロスだと推測する立場をとっている*²⁴。これはヨセフスの『ユダヤ古代誌』*Antiquitates Judaicae* 18.140以下の記述に基づくものであるが、ウェスパシアヌス帝によるキリキアの小王任命についてはヨセフスが記すのみであり、また、その記述においても場所に関する詳細が欠落しているため、難点が残る。なお、ラ・ペンナは、この王が2世紀前半の人物である可能性を論じている*²⁵。

バブリオスの生存年代は不明確だが、彼がキリキア周辺、あるいは少なくともギリシア東方に身を置いていたという推測は、バブリオス集に収められた話から確認できる。たとえば、バブリオスは「イソップの話」の起源をオリエントに置くが*²⁶、それはその当時には見られない見解であり、おそらくバブリオス独自の見識に基づくものである。また、ペリーによると、アッシリア起源の賢人物語である「アヒカル物語」と関連する話で、バブリオス集にのみ見られる話があるという*²⁷。こうした事例は、バブリオスが東方と繋がりを持っていたことを示していると考えられる。

ペリーはバブリオスが1世紀後半の人物であったと考えており、彼がその時代に合致する点について幾つか示している。なかでも、ペリーは、クインティリアヌスが『弁論術の教育』で記す「イソップの話」のパラフレーズの推奨を*²⁸、バブリオス集に関する傍証として、バブリオスの年代決定の大きな手掛かりとしている。クインティリアヌスは手本とすべき「イソップの話」の作家名を挙げてはいないが、ペリーは、それがおそらくバブリ

*¹⁹ Perry(1965), pp. xlvii-xlviii. なお、ドシテウスの「イソップの話」は『ヘルメネウマタ』のライデン写本及び一部の断片に残るのみで、稀少なものである。Dickey(2012), p.24-25 参照。

*²⁰ Luzzatto&La Penna(1986), pp. XXXII-XXXIII.

*²¹ Perry(1965), p. xlviii.

*²² Luzzatto&La Penna(1986), p. XXIX.

*²³ Babr. *Prooem.* 2.1.

*²⁴ Perry(1965), pp. xlix-l.

*²⁵ Luzzatto&La Penna(1986), pp. X-XI.

*²⁶ Babr. *Prooem.* 2.1-3.

*²⁷ Perry(1965, p. lx)によると、「アヒカル物語」に由来すると考えられる話がバブリオス集には10篇ほど認められるが、そのうち2篇(Babr. 138と143)は他のギリシア語やラテン語の文献に見られず、バブリオス集にのみ残るものである。

*²⁸ Quint. *Inst.* 1.9.2. 前章クインティリアヌスの項を参照。

オスないしその模倣者だったというのである。

クインティリアヌスはラテン語よりもギリシア語の学習を先に始めるべきとしており^{*29}、「イソップの話」の活用においても、まずギリシア語のものを想定していたと考えられる。一方で、バブリオス本人の記すところでは、バブリオス集がギリシア語韻文による最初のイソップ集であり、さらには模倣者も登場していたようである^{*30}。そして、実際にバブリオス以前においてギリシア語韻文によるイソップ集は現存しないため、ペリーは、クインティリアヌスの記述がバブリオス集ないしその系統のものをふまえたものだったと推測するのである^{*31}。この推測が正しいとすれば、バブリオス集は96年には登場していたということになる。しかし、アドラドスの議論に従えば、バブリオス集以前にギリシア語韻文イソップ集の存在が想定されるため、ペリーの推論は必ずしも成立しない^{*32}。

以上のように、バブリオスの生存年代については判断が難しい。大胆な推論を採用せず、確実に分かっている点をふまえて考慮するならば、バブリオス集は2世紀頃のものとするのが穏当であるように思われる。

2.3 集成相互の関係

さて、バブリオス集の年代については不明な点は残るが、集成が編纂された時期としては、少なくともファエドルス集以降と考えられる。それでは、ファエドルス集とバブリオス集相互の関係はどのようなだろうか。バブリオスがファエドルス集を参照した可能性はあるだろうか。

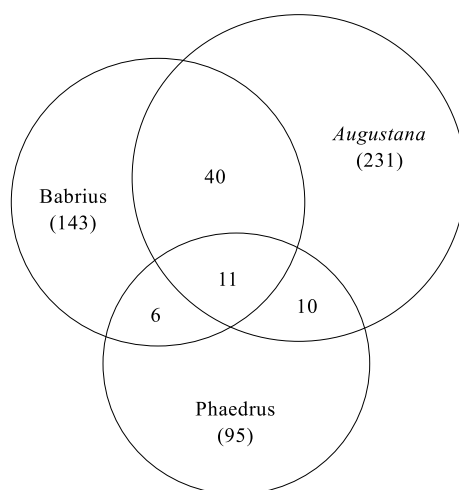


図1 イソップ集相互の関係

実際に確認すると、相互に共通する話の数は図1のように整理できる。括弧内の数字は、その集成に含まれる話の総数である。集成に含まれる話の数は校訂者によって多少の

^{*29} Quint. *Inst.* 1.1.12-13.

^{*30} Babr. *Prooem.* 2.9-12.

^{*31} Perry(1965), pp. 1-li.

^{*32} Adrados(1999); Adrados(2000).

相違があるが、ここではペリーの纏めたものに依拠している*³³。なお、ファエドルス集およびバブリオス集の散文パラフレーズのみに残る話に関しては対象外としている。

ファエドルス集とバブリオス集に共通する話は17話である。そして、ファエドルス集とバブリオス集に共通し、*Augustana* 集に含まれない話はわずか6話のみである。一方、ファエドルス集と *Augustana* 集に共通する話は21話、バブリオス集と *Augustana* 集に共通する話は51話。そのうちファエドルス集を含めて三者で共通している話は11話である。ファエドルス集と *Augustana* 集に共通する話のうち、バブリオス集に含まれないものは10話。バブリオス集と *Augustana* 集で共通し、ファエドルス集に含まれない話は40話ということになる。興味深いことに、ファエドルス集においてバブリオス集と *Augustana* 集に共通する話は、幾つかの例外を除いて、ファエドルス集の第1巻と第4巻に集中している*³⁴。

こうした特徴を鑑みると、バブリオスがファエドルス集を直接参照した可能性は低そうである*³⁵。なお、ファエドルスやバブリオス、さらには *Augustana* 集が、同一とはいえども、デメトリオス集やその系統に属するイソップ集を参照したであろうことは、ペリーやアドラドスらも論じている。実際に含まれる話の関係からすると、三者の共通性はそれらの典拠に由来するものとも推測できる。ファエドルス集第1巻と第4巻に他の集成と共通する話が集中するという特徴は、それらの典拠に関わる問題とも考えられる。

3. 編者の認識

本節では、実際にファエドルスとバブリオスの「イソップの話」に関する認識を検討していく。それぞれの集成に何を集めようとしたのか、彼らが直接表明している「イソップの話」に関する認識を中心に、そうした話の起源やその作者「イソップ」に関する彼らの理解も確認する。

3.1 ファエドルス

3.1.1 「イソップの話」に関する認識

ファエドルスは、自分が扱う対象について、第1巻序歌で明らかとしている。「作者イソップが創出した素材 (*Aesopus auctor quam materiam repperit*)」(1)を用いたと述べており、自身の集成の元が「イソップ」のものであると宣言する。

しかし、その「イソップ」について、ファエドルスは第4巻序歌で自身の話を「私はそれを“イソップの”ではなく“イソップ風の”と呼ぶ (*quae Aesopias, non Aesopi, nomino*)」

*³³ Luzzato&La Penna(1986)は、ペリーより1篇多い144篇とする。ファエドルス集、バブリオス集ともに本来の形がそのまま伝わっているとは考えにくいから、ここでの比較はあくまで現在確認できる「ファエドルス集」「バブリオス集」に基づくものである。

*³⁴ 例外は、Phaed. 2.2; 2.3; 3.7.

*³⁵ Luzzato&La Penna(1986) pp. XII-XIV. ペンナは、バブリオス集がファエドルス集を参照したものではない、と推測している。

(11) と語り、第5巻序歌では「イソップの名前をいずこかに記すとして、私が受けた恩義は既にイソップに返しているわけだから、それは権威づけのためだと考えていただきたい (Aesopi nomen sicubi interposuero, | cui reddidi iam pridem quicquid debui, | auctoritatis esse scito gratia)」(1-3) と述べている。こうしたファエドルスの主張は、彼の集成が「イソップ」を踏襲したものであっても、相当に彼独自の話を含んでいることを示唆するものといえる。

ファエドルスは、このような「イソップの話」の効用について、第1巻序歌で「笑いを生むことと、賢い助言で人生に道を示すこと (... quod risum movet, | et quod prudenti vitam consilio monet)」(3-4) と述べている。つまり、ファエドルスは「イソップの話」に二面的な性質を認めていたことになる。さらに彼は、第2巻序歌において、「イソップの類は範例によって成り立つ。その話によって探求されることは、人々の誤りが正され、儉約、勤勉が強められること以外の何ものでもない (Exemplis continetur Aesopi genus; | nec aliud quicquam per fabellas quaeritur | quam corrigatur error ut mortalium, | acuatque sese diligens industria)」(1-4) と踏み込んで語り、自身の「イソップの話」が教示する道の方向性を明らかにとする。また、第3巻序歌では「個々人について語ろうという意図はなく、人間の生き方そのものや性格を明らかにするつもりである (neque enim notare singulos mens est mihi, | verum ipsam vitam et mores hominum ostendere)」(49-50) と述べており、自身の「イソップの話」が、その一般性に重きを置いたものであるとの認識を示している。

ファエドルスは同様の認識を第4巻第2話でも示す。自身が冗談を語ってふざけているように見えることを自覚しつつ、「けれど、この馬鹿げた話を注意深く吟味しなさい。些細な話のうちに、どれだけ有益な話を見出すことか。目に見えるものは常に見た目通りではない。多くの人は見た目に騙され、注意深く内側に隠されたものを理解する知性は滅多にない (sed diligenter intueri has nenias; | quantam sub pusillis utilitatem reperies! | non semper ea sunt quae videntur; decipit | frons prima multos, rara mens intellegit | quod interior condidit cura angulo)」(3-7) と述べるのである。

話の表層と深層という区分、その深層にこそ重きをおくファエドルスの姿勢からすると、「イソップの話」の二面的な性質のうち、彼が重視していたものは、表層たる「笑いを生む」部分ではなく、深層たる「道を示す助言」であったのだろう。そして、第1巻から第4巻まで同様の認識が示されていることから、ファエドルスの「イソップの話」に関する認識は、年齢を重ねても一定のものであったことが窺える。

また、個々の話について、ファエドルスは第1巻序歌の最後に「獣ばかりでなく、木々も口を利いているとあって、もし非難しようという者がいるならば、私が作り話でもって冗談を言っていることを忘れないでくれ (calumniari si quis autem voluerit, | quod arbores loquantur, non tantum ferae, | fictis iocari nos meminerit fabulis)」(5-7) と述べる。彼は、自分が動物や植物などが主体となる話を語る、と表明しているわけである。同時に、それが作り話であると述べることで、話の内部で動物や植物が口を利くことへの理由付けを

行っているともいえる。こうしてみると、ファエドルスにとっての「イソップの話」とは、一定の機能を持った意図的な作り話として意識されるもの、ということができるだろう。

3.1.2 「イソップの話」の起源

こうしたファエドルスの「イソップの話」に関する認識は、「イソップの話」の起源についての説明にも現われている。彼は、第3巻序歌において、「さて、イソップの話の類が生み出された理由を簡単に示そう。奴隷が、罰を恐れ、言いたいことを思い切って言うことができなかつたため、自分の感情を「話」に託して、冗談話をもって罰を逃れたのである (Nunc fabularum cur sit inventum genus, | brevi docebo. servitus oboxia, | quia quae volebat non audebat dicere, | affectus proprios in fabellas transtulit, | calumniamque fictis elusit iocis)」(33-37)と説明している。真意を冗談の殻で隠す、そのために生み出されたものが「イソップの話」であるとファエドルスは理解していたことになる。これは、ファエドルスの示す「イソップの話」に関する認識と一致するものである。その一方で、こうした「イソップの話」の起源についての説明はあくまでファエドルス独自のものであり、その前後の時期に同様の説明を確認できないことには注意が必要である。

3.1.3 イソップについて

ファエドルスがこの類の「話」の創始者とした奴隷は、おそらくイソップである。第1巻序歌で「作者イソップが創出した素材」を扱うことを宣言したのはファエドルス自身であり、また、第2巻の結びや第3巻第19話で、イソップが奴隷であったことを示している。これらの点をふまえると、第3巻序歌でファエドルスが「話」を生み出したとする奴隷はイソップを指していると考えられるのである。

ファエドルスは、イソップに幾度も言及し、あるいは語り手として「イソップの話」内部に登場させている。ファエドルスの語るイソップは、プリュギア生まれの人物であり、ペイシストラトスの時代のアテナイを活動の場所とした。たとえば、第1巻第2話で、イソップはペイシストラトス治下に嘆くアテナイ人たちに語りかけ、あるいは第4巻第5話では、アテナイを舞台とする話でイソップが登場する。そして、そのように登場するイソップは、民衆の助言者であり、「機転の利く老人 (naris emunctae senex)」(3.3.4)であった。

また、ファエドルスは、第2巻の結びで「アテナイの人々はイソップの才を称えて像を建て、奴隷を永遠の台座に据えたのであり、名誉の道が開かれていること、栄光が生れではなく才覚によって与えられることを皆が知るようになった (Aesopi ingenio statuum posuere Attici, | servumque collocarunt aeterna in basi, | patere honoris scirent ut cuncti viam | nec generi tribui sed virtuti gloriam.)」(1-4)と語っており、イソップをひとりの成功者としても描いている。ファエドルスにとって、この成功者イソップの姿は、かつて奴隷であった自分自身の求める姿でもあったのだろう。さらにまた、第3巻序歌で「私が大

変な仕事に手を出したという人もいるかもしれない。もしプリュギアのイソップが、スキュティアのアナカルシスが、自身の才覚でもって永遠の名声を打ち立てたのなら、私が、彼らより詩文の国ギリシアのそばで生まれた私が、どうして惰眠をむさぼって祖国の名誉を持ち上げずにおこうか (rem me professum dicet fors aliquis gravem. | si Phryx Aesopus potuit, Anacharsis Scythes | aeternam famam condere ingenio suo, | ego litteratae qui sum proprior Graeciae, | cur somno inertī deseram patriae decus)」(51-55) と語り、自らもイソップに倣って名声を打ち立てることを主張するのである。そして実際に、ファエドルスは同時代的な評価を求める姿勢をしばしば見せている^{*36}。

ファエドルスはこうしてイソップに関して幾度と言及するが、その「イソップの話」の起源に関する説明同様に、他の作家たちには見られない、あくまでもファエドルス独自の主張となっている点は留意したい。自身をイソップと比して語るファエドルスの手法もふまえると、ファエドルスの示すイソップの姿は、ファエドルスによって創作された可能性も否定できないのである。

3.2 バブリオス

バブリオスは、ファエドルスと比べて自身の考えを多くは語っていない。バブリオスの「イソップの話」に関する認識を直接窺うことができるのは、第1巻および第2巻の序歌からである。

3.2.1 「イソップの話」に関する認識

バブリオスは、ブランコスという少年への呼びかけの体裁をとる第1巻序歌の冒頭において、黄金の種族と呼ばれる正しい人々の種族が最初に現われ、次いで銀の種族が、三番目に自分たち鉄の種族が現われたと述べた後、次のように語る(5-16行)。

ἐπὶ τῆς δὲ χρυσοῦς καὶ τὰ λοιπὰ τῶν ζώων
 φωνὴν ἔναρθρον εἶχε καὶ λόγους ἦδει
 οἴους περ ἡμεῖς μυθεόμεν πρὸς ἀλλήλους,
 ἀγοραὶ δὲ τούτων ἦσαν ἐν μέσαις ὕλαις.
 ἐλάλει δὲ πεύκη καὶ τὰ φύλλα τῆς δάφνης,
 καὶ πλωτὸς ἰχθὺς συνελάλει φίλῳ ναύτη,
 στρουθοὶ δὲ συνετὰ πρὸς γεωργὸν ὠμίλου.
 ἐφύετ' ἐκ γῆς πάντα μηδὲν αἰτούσης,
 θνητῶν δ' ὑπῆρχε καὶ θεῶν ἐταιρεία.
 ἐκ τοῦ σοφοῦ γέροντος ἦμιν Αἰσώπου

^{*36} Phaed. 2. Ep. 12-19; 3. Prol. 20-23; 4. Prol. 15-20; 5.10.9. ファエドルスが繰り返し同時代的な評価を求める姿勢は、裏返せば、ファエドルスが本人の望みに反して評価されない状況が続いていたということかもしれない。

μύθους φράσαντος τῆς ἐλευθέρης μούσης·

黄金時代には、人間だけでなく他の動物たちも、明瞭な声を持ち、私たちがお互いに語るような言葉を知っていて、森の中では、動物たちの集會が開かれていた。松の木と月桂樹の葉が言葉を交わし、泳ぐ魚が親しい船乗りと会話し、雀たちは農夫へはっきりと語りかけた。何ら求めずとも、大地からはあらゆるものが産み出され、死すべき者たちと神々には親交があった。世界がこのようであったことを、韻律に縛られず話を語った老賢人イソップから、学びなさい。

これは一種の世界観あるいは物語の舞台の提示ともいえるが、バブリオスの示す「イソップの話」は、動物や神々あるいは人間たちが互いに言葉を交わしていた「過去」を賢人イソップが人々に語って聞かせた話ということになる。同時に、このような舞台の提示によって、個々の話において動物が言葉を話す理由が説明されるのである。

このような「イソップの話」に関する認識は、バブリオスに新しいものではない。既に確認したとおり、縁起譚など「過去の話」としての「イソップの話」はバブリオス以前から見られるものであり、バブリオスの認識はそれを踏襲する^{*37}。後で確認するが、バブリオス集では、神話を含め、そうした既存の「過去の話」に由来すると思われる話が複数含まれている。そしてまた、ファエドルスと較べて、バブリオスは前面には出ようとはしていない。バブリオス自身はあくまで「過去の話」の語り手という立場である。

2世紀という時代を考えた場合、前章で見た通り、「イソップの話」に関しては、一種の作り話として、格言的に解釈する傾向を見せるようになってきている。時期的に見てバブリオスがそれを知らなかったとも考えにくいので、ここでバブリオスが示す「イソップの話」に関しては、自身が題材とするものとして、バブリオスが改めて意識的に規定したようにもみえるのである。

3.2.2 「イソップの話」の起源

第2巻序歌で、バブリオスは「イソップの話」の起源に言及している。バブリオスによれば、「イソップの話」とは「かつてニノスやベロスの時代に生きていた古のシリア人が生み出したもの (Μῦθος μὲν, ὃ παῖ βασιλέως Ἀλεξάνδρου, | Σύρων παλαιῶν ἐστὶν εὔρεμ' ἀνθρώπων, | οἱ πρὶν ποτ' ἦσαν ἐπὶ Νίνου τε καὶ Βήλου.)」(1-3)である。ニノスは、ニネヴェ市の創建者とされるアッシリアの王で、東方遠征の際、臣下のオンネスからその妻セミラミスを奪って后としたという。セミラミスはニノスの死後に国を治めた伝説上の女王である。また、ベロスはニノスの父であり、初代のアッシリア王ともされる人物である。これらの人物については、あくまでも伝説である点に注意を要するが、セミラミスとの関

^{*37} さらに、第1巻序歌19行目でバブリオスが「イアンボスの調べを和らげる」と記していることをふまえると、「イソップの話」の例としてアルキロコスやカッリマコスを意識していたのではないかと考えられる。Perry(1965, pp.4-5)の註も参照。バブリオス集第1巻序歌とカッリマコスの関係については、Kerkhecker(1999, p.60. n.68)も指摘している。

連では、時期としては前9世紀頃を想定できる。これは、想定されるイソップの年代よりも古い。

したがって、バブリオスの語る「イソップの話」とは、もともとイソップ以前の東方に起源をおくものといえる。一方、バブリオスの時代にあつて、彼と同様の主張は他に確認できない。前述のとおり、バブリオスと東方世界との関連は他の個所からも推測できるのであり、こうした主張がバブリオス自身の見識に基づいていることは十分に考えられる。

3.2.3 イソップについて

第1巻序歌において、バブリオスはイソップが人々に一種の昔話を聞かせた人物であるとした。また、バブリオスは第2巻序歌で、「イソップの話」そのものは東方起源のものであることを語るが、それに続いて「それをギリシア人の子らにはじめて語ったのは賢者イソップであり、リビュア人に語ったのはキュビッセースだという... (πρῶτος δέ, φασίν, εἶπε παισὶν Ἑλλήνων | Αἴσωπος ὁ σοφός, εἶπε καὶ Λιβυστίνοις | λόγους Κυβίσσης.)」(4-6)とする説を紹介する。キュビッセースについては、テオンが言及するリビュアのキュビッソスと関連する可能性も考えられるが^{*38}、詳細は不明である。ここでは、少なくともバブリオスが認知する「イソップの話」の語り手がイソップだけではなかったことを読み取れる。一方で、ギリシアにおいてはイソップが「イソップの話」をはじめて語ったという点で、イソップはいわばギリシアにおける「イソップの話」の始祖ともいえる立場に置かれていることになる。

バブリオスはこれ以上イソップについて語っていない。すなわち、バブリオスの記述からイソップの具体的な人物像はそれほど浮かんでこないが、それでもイソップを賢者とする認識は、第1巻および第2巻の序歌で共通している。あるいは、第1巻では「老」賢者としたわけであるが、いずれにせよ語り手たるイソップを賢者とするバブリオスからすると、イソップが語る話は賢者の言葉ということになる。また、ファエドルスとは異なり、バブリオスはイソップを賢者とするのみで、奴隷であったとは述べていない点も特徴的である。

イソップが黄金の種族の時代について人々に語って聞かせた人物とするバブリオスの扱いは、おそらくバブリオス集全体を通して一貫している。バブリオス集では、ファエドルス集とは異なり、個々の話の内部にイソップが登場人物として現われることはない。昔話をしているという体裁をとりながら、その話の中に語り手本人が登場するのは問題であろうが、その点において、バブリオスは整合性を保っているといえるのである。

^{*38} Theon, *Prog.* 73 Spengel. 前章参照。

3.3 作品への自負

以上のように、ファエドルスとバブリオスの「イソップの話」に関する認識には、大きな相違があることが確認できる。両者は同じく「イソップ」集成を編纂したとはいえ、その前提となる「イソップの話」についての考え方は共通していない。つまり、ファエドルスとバブリオスは、「イソップの話」についてそれぞれ独自の枠組みを持ち込んで集成に取り組んだということになる。その一方で、自らが生み出すものに関しては、両者とも一定の自負心を示している。

ファエドルスは、第1巻序歌冒頭で「作者イソップが創出した素材を、私がセナリウス調の詩行で磨き上げた (Aesopus auctor quam materiam repperit, | hanc ego polivi versibus senariis.)」(1-2)と述べるが、彼がそうして作り上げた作品に自信を持っており、それに対する評価を求めていることは、既に述べた通りである^{*39}。ファエドルスの場合、「イソップの話」は意図的な作り話であり、話そのものもファエドルスの「作品」とする意識が各所に現われていた。また、そうした自身の作品の要点として、第4巻の結びにおいて「簡潔さ」(brevitas)を挙げている^{*40}。確かに、ファエドルス集では、多くの話が10行前後で語られており、簡潔なものとはなっている。ただし、傾向としてそういえるだけで、中には30行を超える話も存在することは指摘しておきたい^{*41}。

バブリオスもまた、「イソップの話」を韻文化した点について主張している。バブリオスは第2巻序歌で次のように語る(6-12行)。

... ἀλλ' ἐγὼ νέη μούση
 δίδωμι, φαλάρω χρυσέω χαλινώσας
 τὸν μυθίαμβον ὥσπερ ἵππον ὀπλίτην.
 ὑπ' ἐμοῦ δὲ πρώτου τῆς θύρης ἀνοιχθείσης
 εἰσῆλθον ἄλλοι, καὶ σοφωτέρης μούσης
 γρίφοις ὁμοίας ἐκφέρουσι ποιήσεις,
 μαθόντες οὐδὲν πλεῖον ἢ 'μὲ γινώσκειν.

けれど、この私が、黄金の額飾りを軍馬につけるように、新たな調子をイアンボスの話にま
 とわせた。この扉を私が最初に開いたのだが、他の人々が入り込んできて、より洗練された
 調子の、謎かけのような詩を創り出している。しかし、彼らは私を抛り所とするほかない。

「イソップの話」を韻文化する試みそのものは、言語は異なるものの、ファエドルスも同様であり、あるいは当時の作文練習などで既に扱われる手法であって、バブリオスに始まるものではない。さらに遡れば、獄中のソクラテスが「イソップの話」を詩に直す様子

^{*39} 本章 3.1.3。

^{*40} Phaed. 4. Ep. 7-9.

^{*41} Phaed. 1.2; 3.10; 4.5; 4.19; 4.26; 5.5; 5.7.

をプラトンが記してもいた。しかし、バブリオスが模倣者の存在を述べ、自身の優位性を主張する点を鑑みると、バブリオスの試みが同時代的に周囲の作家たちに影響を与えたことを推測できる。

バブリオスは自身の「イソップの話」の語り口についても、第1巻序歌（17-19行）や第2巻序歌（13-15行）で以下のように述べている。

ὦν νῦν ἕκαστον ἀνθίσας ἐμῆ μνήμη
 μελισταγές σοι λωτοκηρίον θήσω,
 πικρῶν ἰάμβων σκληρὰ κῶλα θηλύνας. (Prooem. 1. 17-19.)

私は、それらの話のひとつひとつを、記憶を頼りに彩り、蜜の滴る蜂の巣としてお前に示そう、鋭いイアンボスの硬い調べを和らげてから。

ἐγὼ δὲ λευκῆ μυθιάζομαι ῥήσει,
 καὶ τῶν ἰάμβων τοὺς ὀδόντας οὐ θήγω,
 ἀλλ' εὖ πυρώσας, εὖ δὲ κέντρα πρηύνας, (Prooem. 2. 13-15)

私は、分かりやすい言葉で話を語ろう、イアンボスの鋭い牙を研ぎ澄ますのではなく、よく焼き入れし、尖った切っ先をよく和らげて

バブリオスにとっては、自身の語り口の柔らかさが自負する点であったことを見て取れる。自身の作品だと主張するファエドルスに比べて、いわば既存の話語る趣向のバブリオスの姿勢からすると、その語り方、韻文化の手法そのものが重要だったとも考えられる。そしてまた、その点でバブリオスの理想に適ったものが、2世紀頃まで登場していなかったということでもあろう。

なお、ファエドルスとバブリオスでは、想定される読者にも相違があったように思われる。同時代的評価を求めるファエドルスが、第2巻の結びにおいて自身の作品が「洗練された者たちの耳へ届く (ad aures cultas pervenit)」(12) ことを願ったのは、彼がそうした者たちに向けて作品を発していたということであろう。一方、バブリオスは、第1巻および第2巻序歌の冒頭で、少年への呼びかけを行っている。つまり、自身の作品を、いわば子供に向けて提示しているわけである。これらの相違については、両者の集成編纂時の「イソップの話」のあり方も反映しているように見える。1世紀前半までは、たとえば近い時期のホラティウスの例を見ても、「イソップの話」は必ずしも子供向けに語られる話ではないが、1世紀後半以降は、「イソップの話」を若年者向けの教育の素材とする位置付けが登場しており、子供向けの読み物とされても不自然ではないからである。

4. 編者と集成

ここまで、ファエドルスとバブリオスの「イソップの話」に関する認識の相違を明らかにしてきた。本節では、そうした認識の相違と両者の集成の関連について確認する。

ここでは、両者の集成に含まれる話のなかで、過去の作家にも使用例が見られる話を中心として、編者の認識と集成の関係について検討する。この場合、過去の作家や編者同士の話の共通性は、全く同一であることを意味するのではなく、個々の話の筋書きをもとに判断する。

4.1 過去の作家に使用例が見られる「イソップの話」

Phaed.	Babr.	Aes.	作家の使用例
1.3	72	101	Hor. <i>Epist.</i> 1.3.18–20
1.4	79	133	Theon, <i>Prog.</i> 75 Spengel
1.24	28	376a	Hor. <i>Sat.</i> 2.3.314–319
2.2	22	31	D.S. 33.7.67
1.28	(186)	1	Archil. 172–181 West
4.4	(166)	269	Arist. <i>Rh.</i> 1393b10–22; Hor. <i>Epist.</i> 1.10.34–38
4.24		520	Hor. <i>Ars.</i> 139
	9	11	Hdt. 1.141.1–2
	11	283	Ov. <i>Fast.</i> 4.678ff.
	12	277	Apollod. <i>Bibl.</i> 3.14.8 etc...
	58	312	Hes. <i>Op.</i> 94ff.
	59	59	<u>Arist. <i>Part. an.</i> 663a34–b6</u>
	86	24	Hor. <i>Epist.</i> 1.7.29–33
	98	140	Diod. <i>Sic.</i> 19.25.5–6
	103	142	<u>Pl. <i>Alc.</i> I. 123a</u> ; Hor. <i>Epist.</i> 1.1.73–75
	108	352	Hor. <i>Sat.</i> 2.6.79–117
	128	356	Xen. <i>Mem.</i> 2.7.12–14

表は、ファエドルス・バブリオスのイソップ集の中で、両者以前の作家にも使用例が見られる「イソップの話」の一覧である^{*42}。

ここで示すのは、筆者が確認できた範囲であり、これら以外にも該当する話が存在する可能性はある。表の Aes. は Perry の *Aesopica* で対応する話の番号で、*Aesopica* の 231 番までが、いわゆる *Augustana* 集に含まれるものである。作家の使用例で下線付きのものは、イソップの名が附されて使用されている事例。それ以外の話では、イソップとの関係は明示されていない^{*43}。なお、バブリオス集の (166) および (186) は、散文パラフレーズのみに残る話である。他所にも広く見られる話であることから、実際にバブリオス集に

^{*42} Phaed 1.4 他については、テオンがファエドルス以降の人物である可能性が高く、本来はこの表の対象外であるが、同時代ということで含めている。この話については、第7章で改めて取り上げる。

^{*43} ただし、Archil. 172–181 West については、アリストファネスが『鳥』651–3 行目において、「イソップの話」の中に位置付けている（第2章参照）。したがって、イソップ集ではじめてイソップと関連付けられたわけではない。

も含まれていた可能性は高いが、本章では散文パラフレーズは検討の対象とせず、参考のために記すにとどめる。

4.2 両者に共通する三つの話

それでは、ファエドルスとバブリオスの「イソップの話」に関する認識の相違は、実際にそれぞれの話に反映しているのだろうか。上記の表から、両者で共通する三つの話を取り上げて検討する*44。

4.2.1 驕る黒丸鳥と孔雀 (Phaed. 1.3; Babr. 72)

まず、ファエドルス集に含まれる「驕る黒丸鳥と孔雀」の話を確認する (Phaed. 1.3)。

GRACVLVS SVPERBVS ET PAVO

Ne gloriari libeat alienis bonis,
suoque potius habitu vitam degere,
Aesopus nobis hoc exemplum prodidit.

Tumens inani graculus superbia
pennas pavoni quae deciderant sustulit
seque exornavit. deinde contemnens suos
immiscet se pavonum formoso gregi.
illi impudenti pennas eripiunt avi
fugantque rostris. male mulcatus graculus
redire maerens coepit ad proprium genus,
a quo repulsus tristem sustinuit notam.
tum quidam ex illis quos prius despexerat:
“Contentus nostris si fuisses sedibus
et quod Natura dederat voluisses pati,
nec illam expertus esses contumeliam
nec hanc repulsam tua sentiret calamitas.”

驕る黒丸鳥と孔雀

他者の所有物を使って自慢するのではなく、むしろ自身に具わったもので人生を送るよう、イソップが私たちにこの忠告を示している。

中身のない見栄でふくれた黒丸鳥が、落ちていた孔雀の羽根を拾って、自分の身を飾った。そして自分の仲間たちを馬鹿にしたあと、自分は孔雀たちの美しい群れに混ざった。孔雀たちは恥知らずな黒丸鳥から羽を奪り、嘴で追い払った。ひどい扱いを受けた黒丸鳥は、嘆きつつ自分の種族のもとへ戻り始めたが、そこから追い返されて、悲しむべき汚名を負った。

*44 各話の標題はファエドルス集に拠る。

そのとき、先程黒丸鳥が見下した群れの中から、一羽がこう言った。「もし君が自分の居場所に満足し、自然が授けてくれたものを受け入れる気持ちがあったなら、あんな侮辱を受けることもなかったでしょうし、君の災難がこんな拒絶を感じることもなかったでしょう。」

ファエドルスは、冒頭2行で一種の人生訓ともいえる話の意図を説明し、その意図を持ってイソップが語った話として導入する。話の中では、落ちている孔雀の羽で自身を飾った黒丸鳥が、自分の仲間を馬鹿にし、孔雀の仲間となろうとするが、孔雀に羽を奪られて追い出され、自分の仲間の元にも戻れない。まさにはじめに示される見解通りの話と読める。

一方、バブリオス集では以下の話として収められている (Babr. 72)。

Ἴρίς ποτ' οὐρανοῖο πορφυρῆ κῆρυξ
 πτηνοῖσι κάλλους εἶπεν ἐν θεῶν οἴκοις
 ἀγῶνα κείσθαι· πᾶσι δ' εὐθὺς ἠκούσθη,
 καὶ πάντα θεῶν ἔσχεν ἕμερος δῶρων.
 ἔσταζε πέτρης αἰγὶ δυσβάτου κρήνη,
 θερινόν τί θ' ὕδωρ καὶ διαυγὲς εἰστήκει·
 πάντων τ' ἐπ' αὐτὸ φύλον ἦλθεν ὀρνίθων,
 πρόσωπα δ' αὐτῶν ἐξέλουε καὶ κνήμας,
 ἔσειε ταρσοῦς, ἐκτένιζε τὰς χαίτας.
 ἦλθεν δ' ἐκείνην καὶ κολιοῦς εἰς κρήνην,
 γέρων, κορώνης υἱός, ἄλλο δ' ἐξ ἄλλου
 πτερὸν καθύγρων ἐντὸς ἀρμόσας ὤμων
 μόνος τὰ πάντων ποικίλως ἐκοσμήθη,
 καὶ πρὸς θεοὺς ἦιξεν αἰετοῦ κρείσσων.
 ὁ Ζεὺς δ' ἐθάμβει, καὶ παρεῖχε τὴν νίκην,
 εἰ μὴ χελιδὼν αὐτὸν ὡς Ἀθηναίη
 ἦλεγξεν ἐλκύσασα τὸ πτερὸν πρώτη,
 ὁ δ' εἶπεν αὐτῇ “μὴ με συκοφαντήσης.”
 τὸν δ' ἄρα τρυγῶν ἐσπάραττε καὶ κίχλη
 καὶ κίσσα καὶ κορυδαλλὸς οὖν τάφοις παίζων,
 χῶ νηπίων ἔφεδρος ὀρνέων ἴρηξ,
 τὰ τ' ἄλλ' ὁμοίως, καὶ κολιοῦς ἐγνώσθη.

昔々、薔薇色に輝く天界の使者イリスが、翼あるものたちに、神々の館で美を競う集まりが開かれると布告した。このことは、たちまち皆が耳にするところとなり、神々の褒賞への願望がすべての者をとらえた。山羊も通えない岩場の泉が水を滴らせ、ほんのり温かい澄んだ水をたたえていた。あらゆる鳥の種族がここへやって来て、顔や脚を洗ったり、翼を揺

すったり、羽づくろいをした。その泉へ黒丸鳥もやって来た。鳥の息子で、年老いているが、びっしょり濡れた肩に次々と羽をつけたので、彼だけはあらゆる鳥の羽を色とりどりに身にまどって、神々のもとへ驚より力強く飛んでいった。ゼウスは吃驚して、彼に勝利を与えていたことだろう、もし燕が、アテナイ娘らしく、はじめに羽を筆り取って、黒丸鳥の正体を暴露しなかったならば。黒丸鳥は「責め立てないでくれ」と燕に言った。さらに、キジバトが彼を引き裂こうと攻撃し、ツグミもカケスも墓で戯れるヒバリも、雛鳥の上に座る鷹も、他の鳥たちも同じように攻撃した。こうして黒丸鳥は知られるようになった。

バブリオス集においても、黒丸鳥が他の鳥の羽でその身を飾り、追い出される筋書きは共通である。しかし、話の展開はファエドルス集と大きく異なる。神々の館で鳥たちの美を競う集まりが行われ、そこに拾った種々の鳥の羽でその身を飾り立てた黒丸鳥が登場する。そして、その姿にゼウスも騙されそうになるが、燕に羽を筆られて正体が露呈し、黒丸鳥は他の鳥たちからも攻撃されるのである。ファエドルスと異なり、自分の仲間の元に戻ろうとする展開は含まない。また、この話は黒丸鳥が知られるようになった由来、つまり一種の縁起譚として提示されることも特徴である^{*45}。

なお、鳥が他の鳥の羽で身を飾る話については、ホラティウスが『書簡詩』*Epistulae* 1.3.18-20 で紹介している。

ne, si forte suas repetitum venerit olim,
grex avium plumas, moveat cornicula risum
furtivis nudata coloribus. ...

いつか鳥の群れが自分の羽根を返すように求めてやって来たときに、小さな鳥が、盗んだ色とりどりの羽根を筆られて、笑われることだろう。

ここでの鳥の群れが具体的に何かは不明であるが、小さな鳥が他所から手にした色とりどりの羽を筆られて馬鹿にされる、という筋書きはファエドルスやバブリオスと共通といえる^{*46}。ホラティウスは、他人の作品に触れるのは避け、もっと自分の才覚を求めるように、と語る文脈でこの話に言及している。話の全体を示さない記述の方法からすると、ホラティウスの用法は、鳥に関する逸話が読者に既知であることを前提として、自身の文脈の中に適応したものであろう。したがって、ホラティウスの時点で鳥の話の存在が想定されるのであり、ファエドルスやバブリオスの話も、既存の話を下敷きにしたものと考えられる。

^{*45} なお、A 写本では、この話に “ὦ παῖ, σεαυτὸν κόσμον οἰκεῖον κόσμεν | τοῖσιν ἐτέρων γὰρ ἐμπρέπον στερηθήσῃ.” (少年よ、自分の飾りでその身を装いなさい。他人のものを借りて人目をひくと、身ぐるみはがされることになろうから。) という後辞が残るが、同じくこの話を含む G 写本では、この話に後辞が附されていない。また、校訂者の多くは削除対象として本文には含めない。A 写本と後辞の問題については次章参照。

^{*46} 「小さな鳥」*cornicula* と「黒丸鳥」*graculus* の相違はあるが、黒丸鳥は鳥の仲間では小型種であり、ここでは話の筋書きも同じであるので、共通のものとして扱う。

Augustana 集に含まれる話では、ゼウスが登場し、展開はバブリオス版を簡略化したものとなっている (*Aesopica fab.101*)。

ΚΟΛΟΙΟΣ ΚΑΙ ΟΡΝΕΙΣ

Ζεὺς βουλόμενος βασιλέα ὀρνέων καταστήσαι προθεσμίαν αὐτοῖς ἔταξεν, ἐν ἧ παραγενήσονται. κολοῖος δὲ συνειδὼς ἑαυτῷ δυσμορφίαν περιῶν τὰ ἀποπίπτοντα τῶν ὀρνέων πτερὰ ἀνελάμβανε καὶ ἑαυτῷ περιῆπτεν. ὥς δὲ ἐνέστη ἡ ἡμέρα, ποικίλος γενόμενος ἦκε πρὸς τὸν Δία. μέλλοντος δὲ αὐτοῦ διὰ τὴν εὐπρέπειαν βασιλέα αὐτὸν χειροτονεῖν τὰ ὄρνεα ἀγανακτήσαντα περιέστη καὶ ἕκαστον τὸ ἴδιον πτερόν ἀφείλετο. οὕτω τε συνέβη αὐτῷ ἀπογυμνωθέντι πάλιν κολοῖον γενέσθαι.

οὕτω καὶ τῶν ἀνθρώπων οἱ χρεωφειλέται μέχρι μὲν τὰ ἀλλότρια ἔχουσι χρήματα, δοκοῦσί τινες εἶναι, ἐπειδὴν δὲ αὐτὰ ἀποδώσωσιν, ὅποιοι ἐξ ἀρχῆς ἦσαν εὐρίσκονται.

黒丸鳥と鳥たち

ゼウスは鳥たちの王を立てようと思い、その日に集まるようにと、事前に期日を指定した。黒丸鳥は、自分の醜さを分かっていたので、歩きまわって、落ちている鳥たちの羽根を拾い集め、身体全体にはりつけた。その日になり、色とりどりに身を飾った黒丸鳥はゼウスのもとにやって来た。そして、ゼウスがその見た目の良さゆえに黒丸鳥を王に選ぼうとしたところ、怒った鳥たちが黒丸鳥を取り囲み、それぞれ自分の羽根を奪り取った。こうして、黒丸鳥は裸にされて、再び元の姿に戻ってしまった。

このように、人間の場合も、借金する者たちは、他人の金を手にしている間はそれなりの人物と思われるが、返してしまうと、もともとの姿が晒されるのだ。

もしこの筋書きの話が先行していたとすると、バブリオスは細部に手を加えて独自の話に仕立てていたことになるだろう。一方、こうしてみると、ファエドルス版の筋書きの特異性が顕著である。鳥たちが孔雀とされるだけでなく、他のバージョンを見る限りでは、黒丸鳥が自分の仲間の元へ戻ろうとする展開は含まれないのである。この点については、*Augustana* 集の他の話が手掛かりとなるように思われる (*Aesopica fab.123*)。

ΚΟΛΟΙΟΣ ΚΑΙ ΚΟΡΑΚΕΣ

κολοῖος τῷ μεγέθει τῶν ἄλλων διαφέρων ὑπερφρονήσας τοὺς ὁμοφύλους παρεγένετο πρὸς τοὺς κόρακας καὶ τούτοις ἠξίου συνδιαιτᾶσθαι. οἱ δὲ ἀμφιγνόντες αὐτοῦ τό τε εἶδος καὶ τὴν φωνὴν παίοντες αὐτὸν ἐξέβαλον. καὶ ὃς ἀπελαθεὶς ὑπ' αὐτῶν ἦκε πάλιν εἰς τοὺς κολοιοὺς. οἱ δὲ ἀγανακτοῦντες ἐπὶ τῇ ὕβρει οὐ προσεδέξαντο αὐτόν. οὕτω τε συνέβη αὐτόν τῆς ἐξ ἀμφοτέρων διαίτης στερηθῆναι.

οὕτω καὶ τῶν ἀνθρώπων οἱ τὰς πατρίδας ἀπολιμπάνοντες καὶ τὰς ἀλλοδαπὰς προκρίνοντες οὔτε ἐν ἐκείναις εὐδοκιμοῦσι καὶ ὑπὸ τῶν ἰδίων ἀποστρέφονται.

黒丸鳥と鳥たち

体の大きさが他のものより際立っていた黒丸鳥が、同類たちを馬鹿にして、鳥たちのもとへ向かい、一緒に暮らす仲間に入れてほしいと頼んだ。しかし、鳥たちは、黒丸鳥の姿と声を怪しみ、叩き出して追い払った。鳥に追い出された黒丸鳥は、再び仲間の元へ戻って来た。仲間たちは侮辱に怒り、戻って来た黒丸鳥を受け入れなかった。こうして、この黒丸鳥はどちらと暮らすこともできなくなった。

このように、人間の場合も、祖国を捨てて他国を選ぶ者たちは、他国において評判は悪く自国からは見捨てられるものだ。

この話では、黒丸鳥が他の鳥の羽で自らを飾ることはない。しかし、黒丸鳥が自分の仲間を馬鹿にして鳥の元へ行行った挙句、向かった先でも受け入れられず、元いた場所にも戻れない。こうした筋書きは、ファエドルス版の筋書きと共通である。仮にこの筋書きの話もファエドルス集に先行して存在していたとすると、ファエドルス版は、この話を土台に、羽で身を飾る発想を取り入れて構成したものに見える。あくまで推測の域を出ないが、ファエドルスがもともと二つの話を一つにまとめつつ、黒丸鳥と孔雀の話として独自に生み出したのではないか、と考えられる。

4.2.2 破裂した蛙と牛 (Phaed. 1.24; Babr. 28)

まず、ファエドルス集の「破裂した蛙と牛」の話を確認する (Phaed. 1.24)。

RANA RVPTA ET BOS

Inops potentem dum vult imitari perit.

*In prato quondam rana conspexit bovem,
et tacta invidia tantae magnitudinis
rugosam inflavit pellem; tum natos suos
interrogavit an bove esset latior.
illi negarunt. rursus intendit cutem
maiore nisu, et simili quaesivit modo,
quis maior esse. illi dixerunt bovem.
novissime indignata, dum vult validius
inflare sese, rupto iacuit corpore.*

破裂した蛙と牛

力のない者が力ある者を真似しようとする、身を滅ぼす。

牧草地であるとき蛙が牛を見て、とても大きな体が羨ましくなって、しわしわの皮を膨らませた。そして自分の子供たちに牛よりも大きいかと尋ねた。子供たちは否定した。蛙は再び、もっと頑張るって皮を拡げて、同じように尋ねた、どちらの方が大きいかと。子供たちは牛だと言った。ついには、蛙は腹を立てて、もっと強く自分を膨らまそうとしたところ、身体が破裂して死んでしまった。

この話においても、冒頭で話の意図として一般性を持った見解が示されている。つまり、力のない者が力ある者を真似ようとして身を滅ぼす話である。牛を目にした蛙がその大きさを羨ましく思い、それ以上の大きさになろうと、子蛙たちに確認しつつ身を膨らませた結果、破裂して死んでしまう。小さな存在が大きな存在をまねしようとして、まさに身を滅ぼすのである。

バブリオス集では以下の話である (Babr. 28)。

Γέννημα φρόνου συνεπάτησε βοῦς πίνων.
 ἐλθοῦσα δ' αὐτόν – οὐ παρῆν γάρ – ἡ μήτηρ
 παρὰ τῶν ἀδελφῶν ποῦ ποτ' ἦν ἐπεζήτει.
 “τέθνηκε, μήτηρ· ἄρτι γὰρ πρὸ τῆς ὥρης
 ἦλθεν πάχιστον τετράπουν, ὅφ' οὗ κεῖται
 χηλῆ μαλαχθείς.” ἡ δὲ φρόνος ἠρώτα,
 φουσᾶσ' ἑαυτήν, εἰ τοιοῦτον ἦν ὄγκῳ
 τὸ ζῶον. οἱ δὲ μητρί· “παῦε, μὴ πρήθου.
 θᾶσσον σεαυτήν,” εἶπον, “ἐκ μέσου ῥήξεις
 ἢ τὴν ἐκείνου ποιότητα μιμήση.”

牛が水を飲んでいるときにガマガエルの子を踏みつけた。その子の母親が戻って来ると（というのも、母親はそこにいなかったのだが）、子供たちに「あの子はいったいどこ」と尋ねた。「死んじやったよ、お母さん。たった今、一時間も経たないくらいに、どっしりした四つ足の獣が来て、そいつの蹄の下敷きになって踏みつぶされたんだ。」と子供たちは答えた。母ガマガエルは、自分の体を膨らませながら、「その動物はこれくらい大きさだったかい」と尋ねた。子供たちは母親に答えて言った。「もうやめて、ふくらませないで。あいつと同じくらい大きさになるより先に、お母さんが体の真ん中から裂けちゃうよ」

牛の大きさを目指して蛙（ここではガマガエル）が体を膨らませる点は、ファエドルスと共通といえる。しかし、話の筋書きが大きく異なる。母蛙は、一匹の子蛙を踏み潰した犯人の大きさを確認するために体を膨らませるのであり、そもそも牛の姿は目にしていな。また、残った子蛙たちは母蛙が体を膨らませ続けることを止めており、母蛙が破裂することもない。牛への対抗意識が明示され、その身を滅ぼすファエドルス版とは対照的である。

この話は、ホラティウス『諷刺詩』 *Saturae* 2.3.314-319 にも見られる。

absentis ranae pullis vituli pede pressis
 unus ubi effugit, matri denarrat, ut ingens
 belua cognatos eliserit: illa rogare,
 quantane? num tantum, sufflans se, magna fuisset?

‘maior dimidio.’ ‘num tanto?’ cum magis atque
se magis inflaret, ‘non, si te ruperis,’ inquit,
‘par eris.’ haec a te non multum abludit imago.

母蛙が不在のとき、その子供たちが牛の足で踏みつぶされた。一匹だけ逃げ出して、母蛙に語った。どれだけ大きな獣が兄弟たちを潰してしまったかを。母蛙は尋ねた。「どれくらい？」自分の体を膨らませながら、「これくらいの大きさだったかい?」「もう半分よりもっと大きいよ」と子供が答えた。「これくらい?」自分の体をもっともっと膨らませながら母蛙が尋ねた。すると子供が言った。「母さんの体が破れても、同じ大きさにはならないよ。」この喩えは、君からたいしてはずれていない。

ホラティウスが示す話は、牛に踏みつぶされて生き残る子蛙が一匹だけという点を除けば、バブリオス集と概ね同じ筋書きといえる。また、ホラティウスはこの話を具体的な状況に対する喩え話として利用している。

こうしてみると、バブリオス版は既存の話を活かしたものと見える。しかし、バブリオス集では具体的な文脈の中に置かれず、あるいはバブリオスの見解が示されるわけでもなく、ただ蛙と牛の話として語られるだけである。一方、ファエドルス版はやはり特異である。話の発想からみて、ファエドルスが、ホラティウスの示したような既存の話を元に行っていることは明白であるが、蛙が体を膨らませる経緯、そして破裂して死んでしまう点で大きく筋書きが異なる。ファエドルスは冒頭で話に対する見解を語るが、「イソップの話」に関する彼の認識を考慮すると、まさにその見解を語るために意識的に話を構成し直し、「身を滅ぼす」話へと改変したとみることができる。

なお、この話は *Augustana* 集には含まれていない。

4.2.3 ひとりの男を愛する年増女と娘 (Phaed. 2.2; Babr. 22)

まずはファエドルス版から確認する (Phaed. 2.2)。

ANVS DILIGENS IVVENEM, ITEM PVELLA

A feminis utcumque spoliari viros,
ament, amentur, nempe exemplis discimus.

Aetatis mediae quendam mulier non rudis
tenebat, annos celans elegantia,
animosque eiusdem pulchra iuvenis ceperat.

ambae, videri dum volunt illi pares,
capillos homini legere coepere invicem.

qui se putaret fingi cura mulierum,
calvus repente factus est; nam funditus
canos puella, nigros anus evellerat.

ひとりの男を愛する年増女と娘

男は女を愛するにせよ、愛されるにせよ、とにかく女によって身ぐるみはがされることが、確かにこの話で分かる。

年増の女が、身を取り繕って年齢を隠し、ある中年男を虜にしていたが、その男の心を若く美しい女が捕えた。二人の女は、男と同じ年恰好に見られたいと思い、二人して男から髪を抜き始めた。男が女たちの気遣いで手入れされていると思っていたところ、突然に禿げてしまった。というのも、娘は白髪を、年増女は黒髪を根元から抜いていたからだ。

この話においても、ファエドルスは冒頭で話に対する見解を示している。その是非はともかく、ファエドルスは「男は女に身ぐるみはがされる」ものという男女の関係性を示す。それに続く話は、その見解に沿って解釈される話となる。話の内容は、年齢の異なる二人の愛人に黒髪と白髪を次々抜かれて禿げてしまう男を描くものである。すでに紹介した二つの話とは異なり、動物が登場する話ではなく、冒頭の見解そのままに、男と女の話となっている。髪を抜かれて禿げてしまうことをもって「身ぐるみはがされる」と述べるのは、男の悲哀を語るものとして笑うべきところであろうか。

バブリオス集でも話の展開は同様のものとなっている (Babr. 22)。

Βίου τις ἤδη τὴν μέσην ἔχων ὄρην
 (νέος μὲν οὐκ ἦν, οὐδέπω δὲ πρεσβύτης
 λευκάς μελαίνας μιγάδας ἐκλόνει χαίτας)
 ἔτ' εἰς ἔρωτας ἐσχόλαζε καὶ κώμους.
 ἦρα γυναικῶν δύο, νέης τε καὶ γραίης.
 νέον μὲν αὐτὸν ἢ νεῆνις ἐζήτει
 βλέπειν ἐραστήν, συγγέροντα δ' ἢ γραίην.
 τῶν οὖν τριχῶν ἐκάστοθ' ἢ μὲν ἀκμαίην
 ἔτιλλεν ἄς ἠῦρισκε λευκανθίζούσας,
 ἔτιλλε δ' ἢ γραῦς εἰ μέλαιναν ἠύρηκει,
 ἕως φαλακρὸν ἀντέδωκαν ἀλλήλαις,
 τούτων ἐκάστη τῶν τριχῶν ἀποσπῶσα.

すでに人生の半ばに達したある男が（彼は若くもなく、しかし年寄りでもなく、白髪と黒髪が入り混じっていた）、いまだ色事と酒盛りに励んでいた。彼は二人の女を愛人としており、一人は若く、一人は年増だった。若い娘は男が恋人として若く見えるように望み、年増女は同じ年恰好に見えるように望んだ。そこで、花盛りの娘は男の髪に白くなったものを見つけるとは抜き、年増女は黒いものを見つけると抜き、お互いに禿げた恋人をやり取りするまで、それぞれ髪を引き抜き合った。

ファエドルスと比べると、細部の描写などに違いはあるが、主要な筋書きは基本的に同

じといえる。ただし、ファエドルス版では、男が女性たちの行動に気付きつつも善意に解釈することが記されるが、バブリオス版では、男の側の意識は表現されない*47。

この話は、両者より前に、ディオドロス・シクルスが「世界史」33.7.6で記している。

ἔφη γάρ τινα μέσον ἤδη τὴν ἡλικίαν ὄντα γαμήσαι δύο γυναῖκας, καὶ τὴν μὲν νεωτέραν ἐξομοιοῦν ἑαυτῇ φιλοτιμουμένην τὸν ἄνδρα ἐκ τῆς κεφαλῆς τὰς πολὺς ἐκτίλλειν αὐτοῦ, τὴν δὲ γραιὴν τὰς μελαινας, καὶ πέρας ὑπ' ἀμφοτέρων αὐτὸν ἐκτιλλόμενον ταχὺ γενέσθαι φαλακρόν.

彼はこう語った。ある中年の男が二人の女を娶った。若い方の女は自分に似ていることを望んで男の頭から白髪を引き抜き、年長けた女は黒髪を引き抜いた。男は二人から髪を抜かれた挙句に、すぐに禿げてしまった。

ディオドロスは、ルシタニアの指導者ウィリアトスがローマとルシタニアの間で立場をはっきりさせないトゥッカの人々へ語った話として、この話を登場させる。ディオドロスの記述では、ウィリアトスが、この話に続けて、これと同様のことがトゥッカに暮らす人々に起るだろう、と語る*48。つまり、この話は、トゥッカの人々を中年男とその髪に、ローマとルシタニアを二人の妻に喩えた話であり、具体的な状況に合わせて語られているものである。

ディオドロスの語るウィリアトスは紀元前2世紀半ばに、イベリア半島西側へと侵出するローマに対抗した人物と考えられる。ディオドロスが伝える話では、ウィリアトスは正式な教育を受けておらず実践の中で学んだ人物であって、この手の簡潔な意見表明に長けていたという*49。ディオドロスの示した話は、そのなかの一例である。はたしてウィリアトスが実際にこの話を語ったかどうか確証はないが、少なくとも紀元前1世紀の時点で、こうした来歴を持つ話として語られていたことは確認できる。

ファエドルスやバブリオスは、イソップとは関わりのない由来が示される話を、自身のイソップ集の一部としたわけである*50。そして、もともとの具体的な文脈が失われることで、それ自体独立した話として提示され、読まれることになる。また、この話については、細かい描写の違いはともかくも、ファエドルスも既存の話の筋書きを改変していない。この点は、元の話に対するファエドルスの評価を表すのではないかと考えられる。

*47 バブリオス版について、この話にも写本では後辞が残る。A写本では“φάσκει δ' ὁ μῦθος τοῦτο πᾶσιν ἀνθρώποις | ἔλεινός ὅστις εἰς γυναῖκας ἐπίπτει。”（この話は、次のことを人間たちすべてに語っている。女の虜になる男は哀れだ。）と附され、G写本では“Αἰσωπος οὖν τὸν μῦθον εἶπε δηλώσας | ἔλεινός <ὅς>τις εἰς γυναῖκας ἐπίπτει | ὥσπερ θάλασσα <προ>γελῶσ' ἀποπνίγει。”（イソップは、女の虜になる男は哀れだということを説明するためにこの話を語った。女は海のようなもので、微笑みかけたあと、滅ぼしてしまう。）と附される。共通点はあるが、両者は異なるものである。これはまた、後辞が容易に創作改変されるものであることを示唆している。この後辞についても、校訂者の多くが削除対象とする。

*48 D.S. 33.7.6. 第3章参照。

*49 D.S. 33.7.7.

*50 第3章でも検討したとおり、ディオドロスの話は当時の基準で「イソップの話」として識別されやすい話であり、ファエドルスやバブリオスの時点で「イソップの話」として扱われていた可能性は高い。

なお、*Augustana* 集においては、次のように採録されている (*Aesopica fab.31*)。

ΑΝΗΡ ΜΕΣΑΙΠΟΛΙΟΣ ΚΑΙ ΕΤΑΙΡΑΙ

ἀνὴρ μεσαιπόλιος δύο ἐρωμένας εἶχεν, ὧν ἡ μὲν νέα, ἡ δὲ πρεσβύτις. καὶ ἡ μὲν προβεβηκυῖα αἰδουμένη νεωτέρῳ αὐτῆς πλησιάζειν, διετέλει, εἶποτε πρὸς αὐτὴν παρεγένετο, τὰς μελαινας αὐτοῦ τρίχας περιαιρουμένη. ἡ δὲ νεωτέρα ὑποστελλομένη γέροντα ἐραστὴν ἔχειν τὰς πολιὰς αὐτοῦ ἀπέσπα. οὕτω τε συνέβη ὑπὸ ἀμφοτέρων ἐν μέρει τιλλόμενον φαλακρὸν γενέσθαι.

οὕτω πανταχοῦ τὸ ἀνώμαλον ἐπιβλαβές ἐστίν.

白髪交じりの男と愛人たち

白髪交じりの男が、若い娘と年長けた女の二人の愛人を持っていた。年長けた女は、自分より若い男と語らうのが恥ずかしくて、男が通って来るたびに、男の黒髪を抜き続けた。年若い娘は、年寄りを恋人とすることに気が引けて、男の白髪を引き抜いた。こうして、両方から次々と髪を引き抜かれた男は、剥げてしまった。

このように、何にせよ、不釣り合いは有害である。

やはり、基本的な話の構造は既存のものが保持されている。具体的な文脈から切り離され、ファエドルス同様に、この話そのものから導出される教訓が附される。「不揃い」(ἀνώμαλον) の意味するところが明確ではないが(つまり、髪の問題か、年齢の問題か、そもそも二人の愛人を持つことの問題か、等)、いずれにせよ、男女の関係性を語るファエドルスよりもさらに一般化されたものといえる。また、*Augustana* 集を含め、紀元後のバージョンでは「二人の妻」ではなくなっている点も共通である。

4.3 神話・伝承と関連する話

上記の表で確認できるとおり、バブリオス集は、過去の作家に使用例が見られる話が多く含まれるが、そのなかでも他の集成とは異なる特徴を持つ話が幾つか含まれている。バブリオス集第11話、12話、58話である。

オウィディウスは『祭暦』4.679以下で、燃える松明を背中に括り付けてキツネを放つという、ケレアリア祭で行われる儀式の由来を説明している。かつて、ある少年が悪さを働いていたキツネを捕まえて、草で包んで火をつけたところ、キツネが逃げ出し、実り豊かな畑に火を移して燃やしてしまった。これが人々の記憶に残り、ケレアリア祭にあたって、キツネが実りを台無しにしたのと同じ方法で、すなわちキツネを燃やして罰するようになったのだ、という。バブリオス集の第11話は、ある男が葡萄畑の敵たるキツネを罰しようとして、紐を結んだ尻尾に火をつけてキツネを放したところ、実り豊かな畑に火が燃え移って駄目にしてしまった、という筋書きにおいて、それと類似するものといえる。

バブリオス集の第12話はナイチンゲールとツバメの話であるが、これはプロクネと

フィロメラの神話をふまえたものである。神話において、プロクネはナイチンゲールに、フィロメラはツバメに化身するが、バブリオスが第12話で示すのは、姉妹が鳥に変じた後に両者が再会する場面となっている。そこでは、プロクネの子イテウスがナイチンゲールの子として言及されており、ナイチンゲールはプロクネが、ツバメはフィロメラが変じたものということになる*⁵¹。

ヘシオドスが『仕事と日』94行以下で示すのは、パンドラの逸話である。パンドラが甕の蓋を開けると、その中から様々な厄災が飛び出し、結局希望だけが中に残った、という。バブリオス集の第58話では、甕の中にはゼウスの手であらゆる善なるものが集められ、ひとりの男が蓋を開けることになる。結果として、中の善なるものたちは飛んでいき、希望だけが中に残る。パンドラの名は登場せず、甕の中に詰まっているものも異なるが、話の筋書きから判断すると、バブリオス集の第58話は、パンドラの逸話を背景としたものと考えられる。

以上の話は、いずれも神話や伝承との関連性を指摘できる点が共通する。また、いずれの話も、もともとはイソップとは無縁のものとして語られていた逸話である。そして、ここで挙げた三つの話は *Augustana* 集にも含まれておらず、バブリオス集独自のものといえる。これらの話がバブリオス集のみに含まれていることは、バブリオスの「イソップの話」に関する認識を間接的に示す一例であろうと考えられる。

4.4 総括

過去の作家に使用例が見られる「イソップの話」と共通する例からみると、ファエドルスとバブリオス両者の集成に含まれる「イソップの話」は、実際にそれぞれの編者の認識を反映したものといえる。共通するよう見える話においても、その内実は、編者によって異なるものとなっている。また、バブリオスにおいては、神話・伝承を背景とする話など、ファエドルスとは異なる特徴も見られる。そしてまた、それらの多くの話は、過去においてはイソップとは無縁のものとして語られたものである。

本章における比較は、過去の作家に使用例が見られるものを対象としているが、その範疇を超えたところでも、たとえば同時代的な内容を語るファエドルス集第2巻第5話や第3巻第10話、あるいは東方世界との関係が指摘されるバブリオス集の話など、編者特有の話が散見される。

ファエドルス集とバブリオス集、さらに *Augustana* 集において共通する話の数については既に述べたが、実際のところ、共通する話よりも両者で異なる話の方が多い。そうした異同には、ファエドルスやバブリオスが参照したであろう、デメトリオス集あるいはその系統に属するイソップ集の影響もあると考えられるが、ここで確認したように、ファエド

*⁵¹ Apollod. 3.14.8 にプロクネとフィロメラの逸話が見られる。アポロドーロスにはプロクネがナイチンゲールに、フィロメラがツバメに変じたと記す。なお、Hyg. *fab.* 45 においてもフィロメラの逸話が語られるが、ヒュギーヌスは、プロクネがツバメに、フィロメラがナイチンゲールに変じたと説明している。

ルスとバブリオスの「イソップの話」に関する認識の相違も軽視すべきではないだろう。たとえばファエドルス集第3巻や第5巻がほぼファエドルス独自の話で構成されていることなどは、自ら「イソップの話」を創作しようというファエドルスの意識と無縁ではないと推測できるのである*52。

5. 総括

ファエドルスとバブリオスのイソップ集は、何を対象として集めるかという、編者の「イソップの話」に関する認識の点で、必ずしも一致するものではない。両者とも「イソップの話」を集めるという体裁をとっていても、それぞれがそこに認める枠組みが異なるわけである。

また、両者の集成に相当数独自の話が含まれていること、同一に見える話であっても、それぞれ編者の認識の特徴が見られる点なども、既に述べた通りである。両者の集成の相違は、彼らが典拠とした「イソップ集」との関係もあるだろうが、両者の「イソップの話」に関する認識の相違を考えると、両者の集成の相違を典拠の問題としてのみ扱うことは難しい。

集成を編纂するにあたって、何を集めるのかという前提部分が異なれば、集成されるものに影響が出ることは容易に推測できる。ファエドルスとバブリオスの集成に収められている話に少なからぬ相違が生じていることも、そうしたことを示す一例と考えられる。そして、この場合、ファエドルスとバブリオスは、典拠を参考にただ話を集めてまとめたという存在ではなく、それぞれが独自の枠組みに従って、より主体的に「イソップの話」の集まりを構成した存在ということになる。したがって、典拠の問題もさることながら、編者の問題も重要なのである。

しかしながら、ファエドルス集とバブリオス集は、必ずしも共通とはいえない枠組みに沿って集められた話の集合であっても、外見上は「イソップの話」という点で共通の枠組みに収まっているように見える。これは、「イソップの話」に関する読み方が一定のものとなったとき、大きな意味をもつ。

1世紀以降、「寓話」がジャンルとして整えられていく過程で、「イソップの話」がいわばジャンルの看板となっている。そして、「寓話」についての共通認識が広く成立したとき、「イソップの話」は「寓話」として、共通の理解がなされるのである。そうすると、ファエドルスやバブリオスのイソップ集についても、その内部の個々の話は、「イソップの話」としてそうあるべく読まれることとなる。

中世以降、ファエドルスやバブリオスのイソップ集は、散文化されるなど形態を変えつ

*52 なお、ファエドルス集の各巻の構成については、Henderson(1999, pp.316-317)が詳しくまとめている。また、その独自性と関連して、Shaeffer(1985)の議論はジャンル形成と積極的に関わるものとしてファエドルスを論じるが、ラ・フォンテーヌなどのフランスにおける「イソップの話」の展開が念頭に置かれている。

つ流布している。その際、たとえばファエドルス集の場合、親が子供に語って聞かせる話、あるいは子供が読むべき話として読み替えられており、バブリオス集でも、多くの話に後辞が付加されている。この場合、イソップ集としての体裁が重要であり、ファエドルスやバブリオスという編者の主体性は、さほど必要とされない。つまり、編者の意図については、必ずしも時代を越えて受け継がれていくものではない、ということになる。

その一方で、「イソップの話」の枠組みの下に、話の素材としては、長きにわたって受け継がれているといえる。ファエドルスやバブリオスがそれぞれ準備した「イソップの話」の枠組みであっても、個々の素材という面では、いわばそれらの和集合が、後の「イソップの話」へと受け継がれたことになる。結果として、ファエドルスやバブリオスによって、「イソップの話」が拡張することになっているのである。これは、「イソップ寓話」の形成と展開の関わりで見ると、ファエドルスやバブリオスが、少なくとも素材という面において、そこに大きな影響を持つことになっていたことを意味している。

このように考えると、ファエドルスやバブリオスが現在に至る「イソップ寓話」の歴史において持つ意味は、「イソップの話」を文学的題材として独り立ちさせたということとは別に、それぞれ独自の枠組みをもって「イソップの話」を集め、イソップ集の体裁で残すことにより、後世の「イソップ寓話」に対してひとつの基盤を準備した、ということにも見出せるのである。

第6章

アトス写本とイソップ受容——バブリオス集の受容と変質

1. はじめに

バブリオス集の主要写本は、大英図書館に所蔵されている10世紀頃の写本であり、発見された場所にちなんで、アトス写本と呼ばれる^{*1}。現在バブリオス集として扱われるイソップ集は、基本的に、アトス写本を中心とし、その他幾つかの写本に散在する話をまとめて校訂したものである（以下、アトス写本をA写本と表記する）^{*2}。

もともと、「バブリオスの話」は、「イソップの話」をコリアンボス詩形で語るものであったと考えられる^{*3}。「イソップの話」とは、その名の通りイソップが語ったとされる話であるが、ここまで論じてきたように、古くはアリストファネスやプラトンの作品中に、イソップの名と共に用いられる話の存在を確認できる^{*4}。その一方で、個々の話について、イソップが実際に語ったものであるかどうかを確認することは難しい。本章で扱う「イソップの話」は、ここまでの議論同様に、イソップが語ったという体裁を基準とする。すなわち、イソップの名と共に用いられた話やイソップ集に含まれる話など、作家によって直接的あるいは間接的にイソップとの関係が示される話を「イソップの話」として扱う。この場合、「バブリオスの話」は、バブリオスが「イソップの話」と認めて詩形で示した話ということもできる。

A写本に残るものの他、「バブリオスの話」は二つの写本にそれぞれ30篇程度が認められる（G写本、V写本）^{*5}。G写本は11世紀頃のもので、「バブリオスの話」を31篇含み、そのうち28篇はA写本にも見られる話である。一方、V写本は14世紀頃のもので、29

^{*1} Codex Athous. British Museum Additional 22087. 1842年、マケドニア出身のミノイデス・メナスによって、アトス山のラブラ修道院図書館で発見された。アトス写本については、現在、下記の大英図書館のウェブサイトにて高解像度のデジタル画像を閲覧可能である。本稿は同画像データを利用した。
http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?ref=Add_MS_22087 (2015年3月1日確認)

^{*2} Boissonnade(1844), Lachmann(1845), Lewis(1846), Rutherford(1883), Crusius(1897), Perry(1965), Luzzatto&La Penna(1986)など。

^{*3} 本章では、バブリオスとの関わりが考えられる「イソップの話」について、「バブリオスの話」と表記する。

^{*4} Pl. Alc. I.123A; Ar. Pax. 129など。イソップの名は、ヘロドトスが『歴史』2.134において言及している。詳しくは本論第2章参照。

^{*5} 写本G (Codex 397 Pierpont Morgan Library) および写本V (Codex Vaticanus Graecus 777)。両者に含まれる「バブリオスの話」の数とA写本との対応については、Luzzatto&La Penna(1986, pp.XXV-XXVIII)を参照。

篇を含み、そのうち 17 篇が A 写本にも見られる話となっている。ただし、これらは A 写本とは異なり、「バブリオスの話」のみを纏めたものではなく、イソップ集の一部に「バブリオスの話」が包含される形で残る。したがって、G 写本や V 写本においては、A 写本との対応や韻律が「バブリオスの話」を判断する手掛かりとなっている。

A 写本においては、それぞれの話がアルファベット順に配置されている。ο で始まる話まで現存し、42 葉に 122 話と 123 話の 1 行目までが含まれる。また、冒頭と 107 話目の後ろにそれぞれ第 1 巻と第 2 巻の序歌と目されるものが置かれている。第 2 巻の序歌が中間であるとする、A 写本では、およそ 200 篇の話が含まれていたと推測できる。

1.1 アトス写本における後辞

ところで、「イソップの話」に附される「後辞」については既に紹介したが*6、中世以降のイソップ集では、多くの場合、こうした後辞が各話に附される。

A 写本においても、同様にそうした後辞が附されているが、A 写本では、そこに 2 種類の後辞が認められる。ひとつは、韻律を持つ後辞(=後辞¹)、もうひとつは散文で記された後辞(=後辞²)である*7。A 写本では各話 1 行目が左に一字頭出しされて始まり、その後、原則として各話本文および各後辞の最終行右側に区切り記号が附され、それぞれの部位が区別される。ただし、後辞¹において、本文最終行に区切り記号がなく、左に一字頭出しされて区別されるものもある*8。また、後辞²は字体が変えられており、後辞¹と明確に区別される。

たとえば、図 1 は A 写本の Bab.52 に該当する箇所であるが、本文 6 行に続いて、後辞¹が 2 行、後辞²が 3 行附されている。区切り記号の存在や字体の相違を確認できる。

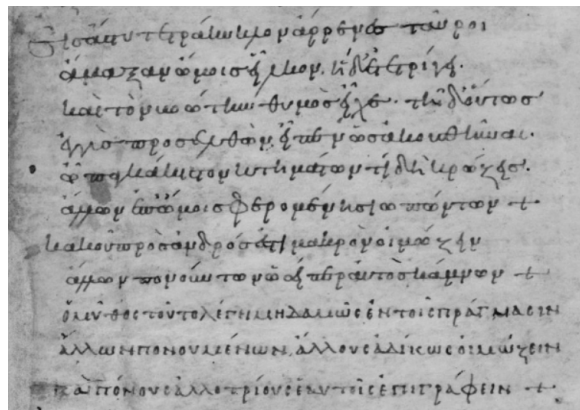


図 1 アトス写本 f.19r より Bab.52 部分

A 写本における後辞の付与パターンは、以下の通りである。

*6 前章参照。

*7 Luzzatto&La Penna(1986)では、epim.¹および epim.²と表記される。

*8 Bab.4; Bab.9; Bab.11; Bab.20; Bab.43.

1. 後辞¹のみ 26篇^{*9}
2. 後辞²のみ 58篇^{*10}
3. 後辞¹と後辞² 20篇^{*11}

また、後辞¹も後辞²も附されていない話が18篇存在する。興味深いのは、それら後辞が附されていない話すべての後ろに、空行が1行または2行置かれている点である^{*12}。それらはルツァットの指摘する通り、おそらく後辞²を挿入するための空行であろう^{*13}。A写本では、(少なくとも現存するものとしては)すべての話に後辞ないし空行が置かれていることになり、つまり、すべての話に後辞を附することが想定されていた、と考えられる。

これら2種類の後辞のうち、後辞¹に関しては、近年の研究者には大きく三つの立場が見られる。すなわち、それら後辞¹について、バブリオス本来のものとして1) 一部を認める、2) 全て認める、3) 全て認めない、というものである。一方、後辞²については、基本的に注記ないし削除の対象である(あるいはそもそも記載されない)^{*14}。

たとえば、ペリーは、あるものは残しあるものは削除の対象とするが^{*15}、アドラドスは、現に附されているものを削除する積極的な理由はないと主張する^{*16}。一方、ラ・ペン

^{*9} Bab.4; Bab.5; Bab.10; Bab.11; Bab.14; Bab.20; Bab.22; Bab.23; Bab.24; Bab.29; Bab.31; Bab.33; Bab.34; Bab.35; Bab.40; Bab.41; Bab.43; Bab.44; Bab.56; Bab.59; Bab.67; Bab.79; Bab.87; Bab.98; Bab.107; Bab.111.

^{*10} Bab.1; Bab.2; Bab.3; Bab.8; Bab.15; Bab.16; Bab.17; Bab.19; Bab.26; Bab.27; Bab.28; Bab.32; Bab.37; Bab.42; Bab.45; Bab.46; Bab.48; Bab.49; Bab.51; Bab.53; Bab.54; Bab.61; Bab.62; Bab.63; Bab.68; Bab.73; Bab.75; Bab.76; Bab.77; Bab.78; Bab.80; Bab.83; Bab.85; Bab.86; Bab.88; Bab.89; Bab.90; Bab.91; Bab.92; Bab.93; Bab.95; Bab.97; Bab.99; Bab.100; Bab.101; Bab.102; Bab.105; Bab.106; Bab.108; Bab.109; Bab.110; Bab.113; Bab.114; Bab.117; Bab.118; Bab.120; Bab.121; Bab.122. ただし、Bab.1 および Bab.83 には後辞²が二つ附されている。校訂本は、Bab.1 については両者を一つの後辞²として、Bab.83 については二つのうち一つを後辞¹として扱う。また、Bab.85 については、A写本は後辞²として字体を変えるが、校訂本は後辞¹として扱っている。

^{*11} Bab.9; Bab.12; Bab.13; Bab.18; Bab.21; Bab.47; Bab.50; Bab.52; Bab.60; Bab.64; Bab.71; Bab.72; Bab.74; Bab.81; Bab.82; Bab.84; Bab.94; Bab.96; Bab.103; Bab.104. なお、Bab.74 と Bab.104 について A写本は後辞¹を区別するが、校訂本は後辞¹を区別しない。後辞の扱いについて、本章は A写本の区別に従う。

^{*12} 空行は、後辞が附されていない話18篇(Bab.6; Bab.7; Bab.25; Bab.30; Bab.36; Bab.38; Bab.39; Bab.55; Bab.57; Bab.58; Bab.65; Bab.66; Bab.69; Bab.70; Bab.112; Bab.115; Bab.116; Bab.119)の後ろ、及び、Bab.23 と Bab.40 の後ろ、の計20篇の後ろに見られる。Bab.23 と Bab.40 には後辞¹が附されており、例外的なパターンといえる。Bab.23 は話の頭文字のアルファベットの変わり目で、Bで始まるものの最後の話。Bab.24 から Gで始まる話となり、Bab.23 の後の空行には「Gの始まり」と記されている。ただし、他のアルファベットの切れ目で同様の措置がなされているわけではないため、空行とアルファベットの関わりははっきりしない。Bab.40 については、Bab.23 のような形式的な切れ目も見出せない。Bab.38, Bab.39 と空行が続いたことが、Bab.40 でも空行が置かれてしまったひとつの原因かもしれないが、詳細は不明である。

^{*13} Luzzatto&La Penna(1986), p.XCVI.

^{*14} 後辞²について、Boissonnade(1844)は本文下に少し間を空けて記載、Lachmann(1845)とLuzzatto&La Penna(1986)は註記、Crusius(1897)は削除対象として掲載し、Lewis(1846), Rutherford(1883), Perry(1965)は掲載しない。対応に相違はあるものの、いずれの研究者も後辞²をバブリオス本来のものとは認めていないように見える。

^{*15} Perry(1965), p.lxiii.

^{*16} Adrados(1999), p.452.

ナは、後辞そのものに懐疑的な姿勢を示してもいる*17。さらに遡ると、ボワソナードは後辞¹を本文内に残して削除対象ともしないが、ラハマンやルイスは後辞¹の一部を削除対象とし、ラザフォードは後辞¹を本文とは区別する形で扱う。また、クルシウスは後辞¹すべてを削除対象とする。こうした扱いの相違は、後辞¹とバブリオスの関係についての各研究者の判断に拠るものである。バブリオス集を復元するという点で、後辞の扱い方は重要な問題ではあるが、残念ながら、いずれの立場も積極的な根拠があるわけではない*18。

また、G写本やV写本においても、後辞の扱いはまちまちである。両者のA写本と共通な話のうち、後辞¹はG写本では4篇に残るが、V写本にはない。一方、後辞²はG写本では見られず、V写本では13篇に附されている。なお、V写本では、A写本と共通しない話でも、10篇に後辞²が附されており、含まれるほとんどの話に後辞²が附される形式となっている。

1.2 後辞と編者

前述の通り、「イソップの話」に附される後辞は、話の解釈から導き出されるものである。そのような読み方を前提とするならば、本来は後辞が存在しない話であっても、後辞の付与は可能であろう。また、後辞付きで話が提示された場合、外形的に話の読み方が明示されているといえる。そうしてみると、後辞の存在は、その話を提示する者の話の読み方、その人物の「イソップの話」に関する認識を可視化するものとも考えられる*19。

A写本で後辞¹と後辞²が混在し、後辞における韻律の有無が、区別はされるものの決定的な要件ではないことにも、留意が必要である。もともと「バブリオスの話」は詩形のものであり、その点を評価するならば、後辞もまた詩形であることが重視されておかしうはない。実際、少なくとも近現代の校訂者たちの姿勢は、そのように見えるものである。それに対して、A写本の姿勢は、A写本における「バブリオスの話」が、必ずしもバブリオス本来の形を意識したものではないことを示している。この場合、A写本の「バブリオスの話」は、あくまで「イソップの話」の枠の内では扱われる、イソップ集編纂のための素材といえるものであり、一種の読み替えが行われている。

さらにまた、A写本に残る後辞が何に由来するものであるか、評価は難しい。バブリオスがもともと後辞を附していたのか、後に附されたものか、あるいはA写本で独自に附されたものなのか。ペリーが指摘する通り、韻律の有無は、その後辞とバブリオスの関係を

*17 Luzzatto&La Penna(1986), p.XCVI. n.1. (ラ・ペンナとルツァットは見解が異なる。)

*18 バブリオスの後辞に関する議論については、Vaio(2001, pp.xlii-xxlvii)も参考になる。

*19 もちろん、後辞が附されていない場合でも、ラ・フォンテーヌなどのように、編者が序文で読み方を説明するなどして、後辞が附されている場合と同様の認識のもとに話は提示されうる。しかし、話だけを取り出した場合、語り手の認識とは別のところで、読み手の側の「イソップの話」に関する認識次第で、話の性質は容易に変化するものでもある。

示すものではない*20。たとえば、A写本で後辞²として残るものであれ、もともとバブリオスが附したものが散文化されている可能性も考えられる。この場合の後辞²は、先にバブリオスの手による後辞¹が存在しており、韻律は失われていても、バブリオスと繋がるものといえる。一方、後辞¹として残るものであっても、後世の創作である可能性も否定できない*21。あるいは、そうした後辞¹がさらに散文化されて後辞²として残った可能性も考えられる。これらの場合、バブリオスとは本来は関わりのない後辞である。

この点で、A写本において、後辞¹と後辞²双方の附された話の存在が、興味深い。仮にバブリオスが後辞を附していたとしても、二つの後辞を附したとは考えにくく、二つのうち少なくとも一つはバブリオス以外の手による創作の可能性が高いからである。また、A写本が形式の異なる後辞を二つ附していることについては、A写本が後辞¹も附す話において、V写本では後辞²しか附されない点、あるいはG写本ではそもそも後辞²が見られない点などからみて、空行と同様に、A写本でとられた選択的な措置と推測できる。こうした後辞の扱い方を鑑みると、A写本では、後辞がバブリオスに由来するものか否かは重視されていないように見える。

以上のような後辞の在り方、「区切り」や空行の存在を考慮すると、A写本における後辞の扱いは意識的と考えられるものであり、また、外形上、そこで扱う素材をすべて「話＋後辞」の形式の内に落とし込もうとする意図を見て取れる。A写本そのものを対象として扱うならば、A写本は、それ自体として、一定の方針に従って「バブリオスの話」という素材を集めようとしたものとも考えられる。このとき、そのような編集を企図した者、一定の方針を持って編集した者（達）の存在が見えてくる。A写本の形式は、バブリオス本来の意図よりも、その編者の「イソップの話」に関する認識と関わるものであり、編者によって意識的に整えられたもの、と考えられるのではないだろうか。

1.3 本章について

A写本は、バブリオスのイソップ集を元に編集されたものであろう。しかし、ここまで述べてきたとおり、そこで示される形式は、おそらくバブリオス本来のものとは異なるものである。そこにはA写本編者の意識が反映されていると推測できるが、ともすれば、それはA写本とバブリオス集の乖離を示すものともなる。

A写本に見られるこうした相違の背景を考える手がかりは、A写本編纂時までのバブリオスの「イソップの話」の受容の在り方も関わるのではないか。A写本の編者がはたしてバブリオスとの相違に自覚的であったかどうかは不明であるが、既に編纂時において、バブリオスの「イソップの話」がそのようなものとして扱われる題材となっていた可能性も否めない。本章では、その点に注目しつつ、後辞の形式を足掛かりに、A写本について改めて検討を試みる。

*20 Perry(1965), p.lxiii. n.2.

*21 第5章註47参照。

2. バブリオスの受容と展開

さて、バブリオスの示した「イソップの話」は、2世紀以降、幾つか使用例が見られる。その中で、「バブリオスの話」はどのようなものとして受容されていたのか。本節ではその点を確認する。

なお、利用例については、バブリオスへの言及がある話のほか、言及のないものも対象に含めている。後者については、それに相当する話がA写本に含まれるものを、「バブリオスの話」として扱う。それらをバブリオスのものとする確証はなく、いわば「その後バブリオスのものとして語られる話」ということになる。

2.1 バブリオスの認識

まずバブリオスがそもそも「イソップの話」をどのようなものとして認識していたか確認しておきたい。この点については既に前章で詳しく論じたので、本節では簡単にまとめるだけとする。

ここまで述べてきたように、形式の問題上、現在残る「バブリオスの話」そのものからバブリオスの認識を窺うことは困難であるが、A写本には個々の話とは別に、バブリオスの序歌が含まれており、そこにバブリオスの認識が見られる。

第1巻序歌において、バブリオスは自らの題材について説明している。つまり、バブリオスの示す「イソップの話」は、動物や神々あるいは人間たちが互いに言葉を交わしていた「過去」をイソップが語った話である。同時に、そのような舞台を提示することで、バブリオスは個々の話で動物が言葉を話す理由を示した。

このような「イソップの話」に関する認識は、バブリオスに新しいものではない。縁起譚など「過去の話」としての「イソップの話」は、バブリオス以前から既にみられたものであり、バブリオスの認識はそれを踏襲するものといえる。前章でも論じた通り、実際にA写本に残る話をみても、神話を含め、そうした既存の「過去の話」に由来すると思われる話が多く含まれている^{*22}。また、こうした認識は、先行するイソップ集の編者であるファエドルスとも異なるものであった。

第2巻序歌では、第1巻序歌と異なり、バブリオスは自己主張を強めている。すなわち、バブリオスの場合、「イソップの話」の韻文化の手法こそ、自負する点であった。「イソップの話」を韻文化する試みそのものは、言語は異なるものの、ファエドルスも同様であり、あるいはプラトンの記したソクラテスの事例など、バブリオスに始まるものではない。しかし、バブリオスが模倣者の存在を述べ、自身の優位性を主張する点を鑑みると、バブリオスの試みが同時代的に周囲の作家たちに影響を与えたことを推測できる^{*23}。ま

^{*22} Bab.9, Bab.11, Bab.12, Bab.22, Bab.28, Bab.58, Bab.59, Bab.72, Bab.86, Bab.98, Bab.103.

^{*23} バブリオスとは韻律の異なる、模倣者たちによる「話」と目されるものについては、Crusius(1897, pp.215-

た、第2巻序歌冒頭において示される「イソップの話」の起源についての理解もバブリオス独自のものであった。

バブリオスが集成を編んだであろう2世紀前後には、既に様々な「イソップの話」が流布していた。ファエドルス集のほか、ギリシア語散文イソップ集なども存在したと考えられる。しかしながら、2世紀頃になると、種々に見られる「イソップの話」は、ファエドルスのものと同様、話の意図を意識したものが多くなる。そのような状況にあって、バブリオスは、第1巻および第2巻序歌において、独自の「イソップの話」に関する認識を示している。つまり、バブリオスは、自身が題材とする「イソップの話」に関して、改めて自身で規定しているのである。

「イソップの話」を自身で規定するという点はファエドルスも同様であったが、両者の規定は異なるものである。そして、バブリオスの場合、「イソップの話」を詩形で語るという表現形式が誇る点でもあった。そうしてみると、バブリオスの狙いは、一般に流布していた「イソップの話」を独自の対象として捉え直し、ひとつの文学作品として昇華することにあつたのではないかと考えられる。このとき、あくまでも印象としてではあるが、話の解釈を示す後辞の存在は、異なる時間軸の混入となり、バブリオスの設定する世界観を阻害するように思われる。

以下、各作家の利用例を確認する。

2.2 アウリアヌス集

アウリアヌス集は、4～5世紀頃に編まれたラテン語韻文によるイソップ集である。42篇からなり、そのうち24篇がバブリオス集に由来するものと考えられる。編者のアウリアヌスは、「イソップの話」について、以下のような見解を示している (*Epistula ad Theodosium*)。

. . . huius ergo materiae ducem nobis Aesopum noveris . . . quas Graecis iambis Babrius repetens in duo volumina coartavit. Phaedrus etiam partem aliquam quinque in libellos resolvit. . . . habes ergo opus, quo animum oblectes, ingenium exerces, sollicitudinem leves totumque vivendi ordinem cautus agnoscas. loqui vero arbores, feras cum hominibus genere, verbis certare volucres, animalia ridere fecimus, ut pro singulorum necessitatibus vel ab ipsis inanimis sententia proferatur.

それゆえ、この素材の第一人者として、イソップをご存じかと思います。．．．それらの話をギリシアのコリアンボスでバブリオスが再び取り上げ、2巻へと縮めました。ファエドルスもまた、その一部を、5巻へと展開しました。．．．したがって、あなたが手にするこの作品は、あなたの心を楽しませ、頭を鍛錬し、不安を解消し、そして、人生全般について注意深

248) がまとめている。しかし、バブリオスが批判の対象とした「同時代の」模倣者たちの「話」がどのようなものであったか、具体的には不明である。

く気付かせるものです。けれど、木々が話し、動物が人々とやりとりし、鳥たちが言葉で議論し、動物たちが笑うように私が設えたのは、個々の必要に応じて、生命のないものによっても見解が述べられるように考えた上のことです。

アウシアヌスの見解において、「イソップの話」を集めた存在として、ファエドルスとバブリオスに区別はない。両者はそれらを巧みに集めた作家の代表である。また、アウシアヌスの「イソップの話」に関する発想は、バブリオスよりもファエドルスに近いものといえる。アウシアヌスが両者を同等に扱うということは、つまり、アウシアヌスが自身の「イソップの話」に関する認識に基づき、バブリオスとファエドルスの「イソップの話」を同一視していることになる。

アウシアヌス集は、バブリオスの名を挙げ、その話を参照しつつも、発想としてはバブリオスとは異なる認識のもとで「バブリオスの話」を扱い、あるいはそれらを再生産しているのである。

2.3 ユリアヌス帝

ユリアヌス帝による362年のニルスへの書簡中に、バブリオスへの言及がみられる (*Ep. 50 Wright*)。

Ἡ τοῦτο νομίζεις ὑπὲρ τῶν παλαιῶν ἀμαρτημάτων ἀπολογεῖσθαι πρὸς ἅπαντας, καὶ τῆς πάλαι ποτὲ μαλακίας παραπέτασμα τὴν νῦν ἀνδρείαν εἶναί σοι; τὸν μῦθον ἀκήκοας τὸν Βαβρίου «γαλῆ ποτ' ἀνδρὸς εὐπρεποῦς ἐρασθεῖσα»· τὰ δὲ ἄλλα ἐκ τοῦ βιβλίου μάθανε.

あるいは、君は、かつての誤りに関して、皆にたいして弁解し、今の君の勇敢さがかつての気弱さを覆い隠すものだと考えているのか？ バブリオスのこの話を聞いたことがある。「あるとき、美男子に恋したイタチが」と。話の残りは本から学びなさい。

ここでユリアヌス帝が挙げる話は、Bab.32「イタチとアフロディテ」と考えられる。

Γαλῆ ποτ' ἀνδρὸς εὐπρεποῦς ἐρασθείση
 δίδωσι σεμνὴ Κύπρις, ἢ πόθων μήτηρ,
 μορφήν ἀμείψαι καὶ λαβεῖν γυναικείην,
 καλῆς γυναικός, ἧς τίς οὐκ ἔχειν ἦρα;

あるとき、美男子に恋したイタチに、欲望の母、尊いキュプリスが、イタチの姿から女性の姿になることを許した。誰もが愛さずにはいられない、美しい女性の姿であった。

ここに引用したのは Bab.32 の冒頭であるが、その後、美しい女性に姿を変えたイタチは、目の前を走りすぎたネズミを追いかけて正体が露呈してしまう。ユリアヌスは話の1行目のみ、与格を主格に変えて提示する。その上で、「本性は変わらない」「取り繕っても

何らかのきっかけで露見する」といった意味を示す。ユリアヌスの用法において、この意味こそ目的であり、話の全体は不要となる。

ユリアヌスにとっては、1行目だけで通じるほどに自明な話であったということであり、それを読む手段が身近にあったということであろう。しかし、1行目のみを挙げ、話から導かれる意味を主目的とする用法は、表現を自負するバブリオスの意図から離れてそれらの「バブリオスの話」が読まれていたことを示唆するものである*24。

2.4 Tabulae Ceratae Assendelftiana

バブリオスの名は言及されないものの、「バブリオスの話」との関連を推測できるものとして、パルミュラ出土の7枚の蠟板がある。発見者に因んでアッセンデルフト蠟板と呼ばれるが、これらには3世紀頃にパルミュラの学童によって記されたと考えられる話が13篇残り、そのうち8篇に、A写本に含まれる「バブリオスの話」との関係を窺える(Bab.43; Bab.78; Bab.91; Bab.97; Bab.103; Bab.117; Bab.121; Bab.123。ただし、Bab.123は、A写本では1行目を残して散逸しているため、実質7篇である)*25。

それらのうち、Bab.43との関連が考えられる話では後辞も記される。A写本では後辞¹が附されており*26、蠟板のものはそれと類似するため、既にこの時期に後辞付きの「バブリオスの話」が存在し、それが後世に引き継がれたと考えられる。なお、蠟板の残り12篇では、A写本とは関連のない1篇に後辞が見られるのみである。

アッセンデルフト蠟板は、「バブリオスの話」が教育の場で用いられていたことを示している。後辞付きの話もあり、後辞を読み取るべき話として「バブリオスの話」を学ぶ環境が、この時期に出来ていたことを示す一つの事例といえる*27。

2.5 P. Oxy. X 1249

3世紀前後のパピルス断片に、A写本と対応する4篇から、16行含まれている(Bab.25; Bab.43; Bab.110; Bab.118)*28。断片では、Bab.43の後辞(19行目)と対応するとみられる部分が1行目にあり、続いてBab.110、Bab.118、Bab.25(1行目)の順に残る。

Bab.43「水辺のシカ」は、脚を疎ましく、角を自慢に思っていたシカが、その角が原因で捕まってしまうもので、シカの思い違いと後悔を語る話である。Bab.110「イヌと飼い主」は、旅に出る男が飼いイヌに準備を促すと、イヌが準備はもう済んでいると答えるも

*24 なお、バブリオスへの言及はないものの、ユリアヌスは *Ep.68 Wright* において「ライオンとネズミ」の話(Bab.107)に触れている。そこでは「力の劣るものが役立つことがある」という意味を前提としており、話の用法は「イタチとアフロディテ」の例と同様である。

*25 Luzzatto&La Penna(1986), p.XXX.

*26 ただし、前述の通り、区切り記号がなく、行頭が一字左に出されて本文と区別される形式である。

*27 教育における「イソップの話」の利用については、Morgan(1998)や Cribiore(2001)なども取り上げている。モーガンが示すのは、バブリオスの使用例を含めて2世紀以降の資料であり、教材として新しい部類のものといえる。

*28 Luzzatto&La Penna(1986), p.XXXI.

の。イヌが飼い主の思い違いを指摘する。Bab.118「ツバメと大蛇」は、安全な場所と考えて巣を作ったツバメが、雛をすべて蛇に食べられてしまう話。親ツバメの思い違いと後悔が示されている。Bab.25「ノウサギとカエル」は、自分たちが最弱であると考えたノウサギが生きるのをやめようと決心するが、さらに弱いカエルたちの姿をみて、それを思いとどまる話。ノウサギたちの思い違いを語るものといえる。

断片に残る話の内容は、それぞれ何かしらの「思い違い」に関わるものと読めるものであり、あるいは、これらがそうした内容に即して抜粋されたものとも推測できる。すなわち「バブリオスの話」が話の意図を前提とする対象として扱われていたことを示唆するものである。

また、それぞれ ε, μ, ξ, γ で始まる話であり、A 写本と異なりアルファベット順の配置となっていない点も、注意が必要である。

2.6 P. Amherst II 26

3～4世紀頃のパピルスに残る話もまた、バブリオスの名は言及されないものの、バブリオスの受容を考える上で興味深い (Bab.11; Bab.16; Bab.17 に相当)^{*29}。パピルスの Bab.11 および Bab.16 に相当する話は、ラテン語とギリシア語双方で記される。A 写本の Bab.11 は後辞¹が附されており、パピルスでは後辞の部分でラテン語でのみ残る。なお、パピルスのその他2篇に後辞はなく、A 写本の対応する話では後辞²が附されている。

χρη̄ πρᾶον εἶναι μηδ' ἄμετρα θυμοῦσθαι.
ἔστι τις ὀργῆς νέμεσις, ἣν φυλαττοίμην,
αὐτοῖς βλάβην φέρουσα τοῖς δυσοργήτοις.
(Bab.11.10-12)

oportet ergo serенаe magis aut inaequa irasci,
est quidam ira ultricis quem custodiamus
ipsismet ipsis nocentiam ferentes animosalibus
(P. Amherst II 26)

これは Bab.11 の後辞¹とそれに対応するラテン語部であるが、ほぼ逐語的な翻訳であることが見受けられる。パピルス上の他の部分に関しても、巧拙は別として、同様の傾向にある^{*30}。「バブリオスの話」とラテン語の繋がりはアウイアヌスでも見られるが、こちらの方がより直接的といえる。こうした翻訳が作られ利用された具体的な状況は、この断片だけでは不明ではあるものの、後辞がラテン語でも残る点は、それを要する読み方がさ

^{*29} Luzzatto&La Penna(1986), p.XXXI.

^{*30} Grenfell&Hunt(1901), p.26.: The Latin version, which in each case precedes the Greek, is extraordinarily bad, giving the impression of having been composed by a person who knew very little Latin, and copied by another who knew less.

れたことを示唆する。

なお、ここに残る3篇がいずれもαで始まる話である点も興味深い。配置順はA写本というBab.17、Bab.16、Bab.11となっており、A写本とは一致しないが、アルファベット順を意識して再配置したのであれば、発想としては、A写本に通ずるものがみえる。

2.7 『スーダ』

10世紀末の『スーダ』のバブリオスの項目は、以下のように記されている(β7 Adler)。

<Βαβρίας ἢ Βάβριος> Μύθους ἤτοι Μυθιάμβους. εἰσὶ γὰρ διὰ χωλιάμβων ἐν βιβλίοις ι'. οὗτος ἐκ τῶν Αἰσωπειῶν μύθων μετέβαλεν ἀπὸ τῆς αὐτῶν λογοποιίας εἰς ἔμμετρα, ἤγουν τοὺς χωλιάμβους.

〈バブリアスあるいはバブリオス〉ミュートスあるいはミュティアンボスを作った。それらはコリアンボスで10巻に残る。彼は、イソップの話に由来する話を、散文から詩形へ、すなわちコリアンボス詩へと転じた。

『スーダ』の説明において、バブリオスは「イソップの話」を詩形に転じた人物である。しかし、この時代にあつては、バブリオスの主張した模倣者たちの話や、後世の創作が流布していたとして、それらと「バブリオスの話」を識別することが可能であったかどうか。むしろ、コリアンボス詩形を持つ「イソップの話」であれば、バブリオスの名のもとに認識されたことも考えられる。なお、ここでコリアンボス詩形の集成が10巻存在したことが語られるが、現状では、バブリオスとの具体的な関係は不明である。

『スーダ』には「バブリオス」の説明だけでなく、その「イソップの話」の痕跡も多数含まれる*31。たとえば、A写本にも残る「バブリオスの話」を元にした以下の項目がある(τ528 Adler)。

<Τὴν χεῖρα προσφέροντα τὸν θεὸν καλεῖν:> βοηλάτης ἐκ κόμης ἄμαξαν ἄγων, καὶ ταύτης ἐμπεσοῦσης εἰς φάραγγα κοιλώδη, δέον βοηθεῖν, ἀργὸς ἴστατο τῷ Ἡρακλεῖ προσευχόμενος· ἐκεῖνον γὰρ ἐκ πάντων τῶν θεῶν ἀσπαζόμενος ἐτίμα. ὁ δὲ θεὸς ἐπιστὰς εἶπε· τῶν τροχῶν ἅπτου καὶ τοὺς βόας νύττε καὶ τότε τὸν θεὸν εὐχου, ὅταν καυτὸς τι ποιῆς· μὴ μέντοι γε μάτην εὐχου. ἐκ τούτου εἰς παροιμίαν εἰσήχθη.

〈手を差し出して神を呼ぶこと〉牛追いが村から荷車を引いて来るとき、荷車が谷間の窪みに落ちてしまった。牛追いは助けるべきであったが、何もせず立ったままヘラクレスに祈っていた。というのは、彼はあらゆる神のうちヘラクレスを信奉していたためである。すると、その神が姿を現わして言った。「車輪を掴み、牛を突きなさい、そして、自ら何かをしてから神に祈りなさい。祈っても無駄にならないように。」この話から諺へと持ち込まれた。

*31 Luzzatto&La Penna(1986), pp.XL-XLI.

ここで示される話は、バブリオスやイソップの名に言及されていないが、Bab.20「ヘラクレスと牛車使い」を散文化したものと考えられる。

Βοηλάτης ἄμαξαν ἤγεν ἐκ κόμης.
 τῆς δ' ἐμπεσοῦσης εἰς φάραγγα κοιλώδη,
 δέον βοηθεῖν, αὐτὸς ἀργὸς εἰστήκει,
 τῷ δ' Ἡρακλεῖ προσήχεθ', ὄν μόνον πάντων
 θεῶν ἀληθῶς προσεκύνει τε κάτιμα.
 ὁ θεὸς δ' ἐπιστὰς εἶπε “τῶν τροχῶν ἅπτου
 καὶ τοὺς βόας κέντριζε. τοῖς θεοῖς δ' εὐχου
 ὅταν τι ποιῆς καὐτός, ἢ μάτην εὐξῆη.”

牛追いが村から荷車を引いて来るところだった。荷車が谷間の窪みへ落ちてしまったとき、牛追いは、助けなければならなかったのに、何もせず立っていた。そして、彼があらゆる神々のうちでただひとり本当に崇め敬っていた神である、ヘラクレスに祈った。すると神が姿を現わして言った。「車輪を掴み、牛を突き棒で突きなさい。自ら何かをしてから神々に祈りなさい、さもないと祈っても無駄だろう。」

語順や語形の相違は見られるが、『スーダ』版の話は Bab.20 とおよそ 70% の語彙が一致するのである。なお、この『スーダ』の項目は、9世紀のフォティオスの辞書にも見られ、字句もフォティオス版の記事とほぼ一致する^{*32}。

この項目で興味深いのは、この話から項目名の「諺・格言」(παροιμία) が導出されたと説明される点である。「イソップの話」と「諺・格言」の親和性については、クインティリアヌスの説明にも現われていたが、まさにそうした枠組みの中で解釈しうる話として、この話が読まれていたことが分かる。つまり、この項目は、9～10世紀頃の散文化された「バブリオスの話」の存在を示すとともに、そこに格言的な解釈を期待する動きがあったことを教えてくれるのである。

ところで、『スーダ』では「イソップの話」を Αἰσώπειοι μῦθοι としている。また、Αἴσωπος の項目では、イソップは “ὁ τῶν μύθων ποιητής” とされ、μῦθος の作り手であることが示されている。そこで、『スーダ』の μῦθος の項目を確認すると (μ 1389 Adler)、

<Μῦθος:> λόγος ψευδῆς, εἰκονίζων τὴν ἀλήθειαν.

<ミュートス> 真実を映した、偽りの話。

と冒頭に記載されている。この文言は『修辞学初等教程』の μῦθος に関する説明を用いたものである。「真実」を含むとする認識は、それを読み解くための解釈を必要とするもの

^{*32} Luzzatto&La Penna(1986, p.XLVII)によると、『スーダ』のこの項目はフォティオスの記事から写したのではなく、他の共通の資料に基づくものと考えられる。

である。こうした認識のもとでは、そこに後辞が附されたとしても不自然なことではないだろう。

2.8 総括

それぞれの用法において、「バブリオスの話」は、同時代的に一定の機能を持った話として使用されている。また、「イソップの話」に関する認識については、バブリオスの示した独自の考えは引き継がれていない。これらの用例をふまえると、「バブリオスの話」は、バブリオスの「作品」として受容されたというよりも、あくまでも詩形の「イソップの話」の一種として認知されていた、と考えられる。詩形であることを別にすれば、バブリオスの名よりも「イソップの話」であることが先立つといえる。一方、既に見た通り、バブリオスの自負は詩形で語ることにあった。その点では、バブリオスの試みの結果が、「イソップの話」の形式として、少なくとも A 写本が編纂される 10 世紀頃まで価値を保っていたということもできる。

こうしてみると、A 写本の形式もまた、バブリオスの「作品」を残すというよりも、このような受容の流れの延長線上に置きうるものである。その中で、『スーダ』に見られる説明は、10 世紀当時の「イソップの話」に関する認識を表すものといえるが、後辞を必須とする A 写本の形式をふまえると、『スーダ』とほぼ同時代の A 写本も、同様の認識のもとに纏められたものではないかと考えられる。

3. 『修辞学初等教程』における μῦθος

ところで、『スーダ』における「イソップの話」(= μῦθος)の説明は、『修辞学初等教程』の文言を受け継ぐものであり、独自の認識を示すものではない。また、後辞に関しても、『修辞学初等教程』において論じられている。後辞の存在と「イソップの話」の読み方は不可分と思われるが、本節では『修辞学初等教程』に着目し、そこにおける μῦθοςに関する議論を確認する。なお、テオンについては本論で既に詳細に論じているため^{*33}、ここではテオン以降の『修辞学初等教程』を扱うこととする。

3.1 アプトニオス

中世以降、いわば標準的な教科書として広く普及した、4 世紀後半のアプトニオス版『修辞学初等教程』では、以下のように μῦθος が説明されている。

Ὁ μῦθος ποιητῶν μὲν προῆλθε, γεγένηται δὲ καὶ ῥητόρων κοινὸς ἐκ παραινέσεως.
Ἔστι δὲ μῦθος λόγος ψευδῆς εἰκονίζων ἀλήθειαν. Καλεῖται δὲ Συβαριτικὸς καὶ Κίλιξ

^{*33} 第4章参照。なお、以下の基本的情報については、Kennedy(1994), Kennedy(2003) や Porter(1997)などを参照した。

καὶ Κύπριος, πρὸς τοὺς εὐρόντας αὐτὸν μεταθεῖς τὰ ὀνόματα· νικᾷ δὲ μᾶλλον Αἰσώ-
πειος λέγεσθαι τῷ τὸν Αἰσώπον ἄριστα πάντων συγγράψαι τοὺς μύθους.

Τοῦ δὲ μύθου τὸ μὲν ἐστὶ λογικόν, τὸ δὲ ἠθικόν, τὸ δὲ μικτόν· καὶ λογικὸν μὲν, ἐν ᾧ
τι ποιῶν ἄνθρωπος πέπλασται, ἠθικὸν δὲ τὸ τῶν ἀλόγων ἦθος ἀπομιμούμενον, μικτὸν
δὲ τὸ ἐξ ἀμφοτέρων, ἀλόγου καὶ λογικοῦ.

Τὴν δὲ παραίνεσιν, δι' ἣν ὁ μῦθος τέτακται, προτάπτων μὲν ὀνομάσεις προμύθιον,
ἐπιμύθιον δὲ τελευταῖον ἐπενεγκών.

ミュートスは、詩人たちから発したものであるが、弁論家たちにも助言のために一般的な
ものとなっている。

ミュートスは、真実を映す偽りの話である。「シュバリス人の」「キリキア人の」「キュプロ
ス人の」など、作り手によってその名を変える。「イソップの話」と言われることがむしろ普
及しているのは、イソップがミュートスをもっとも立派に記したことによる。

ミュートスには発話型、習性型、混合型がある。発話型では何らかの行為を行う人間が作
り出され、習性型では物言わぬ動物たちの習性が模写され、混合型ではその両方、動物と発
話とによる。

ミュートスが意図する助言を、前に附した場合は前辞、後ろに附した場合は後辞と呼ぶこ
とにしよう。

μῦθος を説明するアプトニオスの文言では、テオンの示した説明が受け継がれている。
また、それが一般に「イソップの話」と呼称される点についても、簡潔ながらテオンと
同様の認識を示している。一方、μῦθος の内容に関する分類は、テオンがあまり重視しな
かった部分である。また、μῦθος に附される説明について、テオンは ἐπίλογος として既に
論じていたが、アプトニオスにおいて προμύθιον や ἐπιμύθιον という語彙も規定され、「前
辞」「後辞」が明確化する。そして、そこで示されるのは、παραίνεσις すなわちある種の
助言を意識したものであり、解釈を前提とするものである。

アプトニオスにおいては、μῦθος と「イソップの話」の関係性に変化が見られる。テオ
ンの議論では対象となる μῦθος は条件付きのものであり、つまり一定の基準を満たした
μῦθος が「イソップの話」と呼びうるものであったが、アプトニオスではそうした条件規
定がなくなり、μῦθος = 「イソップの話」という図式が成立する。この場合、どのような話
であっても「イソップの話」として提示されれば、それはアプトニオスの説明する μῦθος
として読むべきものとなり、解釈の対象となる。その一方で、アプトニオスの説明に従っ
て μῦθος として読みうる対象が、「イソップの話」として扱われる可能性も否めない。

ところで、アプトニオスのイソップに関する記述では、イソップが μῦθος を記した
(συγγράψαι) 人物とされている。これまでの議論において、イソップは話の語り手であ
り、書き手として登場することはなかった。アプトニオスの時点でイソップを書き手とす
る根拠がないことを考慮すると、この表記はむしろ、アプトニオスの「イソップの話」に

対する理解を反映したものではないかと推測できる。4世紀後半の「イソップの話」については、種々のイソップ集が既に登場しており、あるいは作文練習の教材としてもテオン以来200年以上の伝統が出来上がっていた。したがって、当時の社会において、「イソップの話」を読み書きすべき素材とする認識が広まっていたとしても不思議ではない。実際、先に見たユリアヌス帝の記述においても、「イソップの話」は「本」で学ぶものであり、読むべき対象となっていた。そうした環境下でアプトニオスが「イソップの話」およびイソップ集に接したことで、イソップはそれらの読むべき対象を書き記した人物として理解されたと考えられるのである。

アプトニオスの議論は、*μῦθος* の概要を、テオンに比べて簡潔に示すものである。その一方で、簡潔であるがゆえに、*μῦθος* を明確に規定する。「イソップの話」は *μῦθος* であり、その学習者に対して、「イソップの話」に関する共通認識を根付かせるものとなる。アプトニオスの『修辞学初等教程』が中世以降の標準的教科書であったことを考慮すると、その議論の中で *μῦθος* が「イソップの話」として説明され、その在り方が規定された意味は大きいと思われる。

3.2 ヘルモゲネス

時代は前後するが、2世紀に活躍したヘルモゲネスの作として伝わる『修辞学初等教程』——実際には3世紀ないし4世紀のものとして推測される——における *μῦθος* 論では、テオンの影響を見せつつも、新しい論点を持ち出されている。

本書では、冒頭で *μῦθος* の教材としての適格性が述べられる (1 Rabe)。

Τὸν μῦθον πρῶτον ἀξιούσι προσάγειν τοῖς νέοις, διότι τὰς ψυχὰς αὐτῶν πρὸς τὸ βέλτιον ρυθμίζειν δύναται· ἔτι οὖν αὐτοὺς ἀπαλοὺς ὄντας ἀξιούσι πλάττειν.

ミュートスは、若者たちにはじめに課すべきものと考えられている。これはミュートスが若者たちの精神をより善きものへと調えうるという理由であるが、それゆえ教師たちは若者たちの精神がまだ柔らかいうちに形作ろうと考えているのである。

μῦθος は、若者たちの精神を善き方向へと導くものであり、そのため最初に与えられる教材としてふさわしい。こうした *μῦθος* に関する価値判断は、テオンの議論には登場しないものであった。本書では、*μῦθος* に関する説明も、同様の評価を背景とするようにみえる (2 Rabe)。

ψευδῆ μὲν αὐτὸν ἀξιούσιν εἶναι, πάντως δὲ χρήσιμον πρὸς τι τῶν ἐν τῷ βίῳ· ἔτι δὲ καὶ πιθανὸν εἶναι βούλονται.

(教師たちは) ミュートスは偽りの話であるが、とりわけ人生における何らかの局面で有益なものだと考える。さらにまた、彼らはミュートスをもっともらしいことを望む。

μῦθος は作り話であり、人生において役立つものという考え方が紹介される。μῦθος を作り話とする視点はテオンと共通であるが、ἀλήθεια に関する言及はなく、むしろそれをふまえた実践的な有益性に注目されている。つまり、この有益性ゆえに、若者向けとして適したものといえるのである。一方、μῦθος がそうした効果をもつためには、それが「もっともらしいもの」(πιθανός) であることが求められる。このもっともらしさは、たとえば美について語るならクジャク、知恵について語るならキツネというように、語る内容に関して適切な動物を割り当てることによって生じるという^{*34}。この点については、テオンが μῦθος を非難する練習において、賢いロバや愚かなキツネなどを論点のひとつに挙げており、発想は類似のものといえる^{*35}。とはいえ、多くの論点のひとつであったテオンに対して、本書ではこの点が μῦθος の要として論じられている。

μῦθος について、本書はヘシオドスやアルキロコスの名を挙げ、イソップが創始者でないことを指摘しつつも、μῦθος が一般に「イソップの話」と呼称されるとしており、テオンと共通の見解を示す^{*36}。しかし、本書では、アプトニオス同様に μῦθος に条件規定はなく、すべての μῦθος = 「イソップの話」ということになる。

また、μῦθος の前後に附されるべき説明についても言及されている (4 Rabe)。

Ὁ δὲ λόγος ὁ τὴν ὠφέλειαν δεικνὺς τὴν ἀπὸ τοῦ μύθου ποτὲ μὲν προταχθήσεται, ποτὲ δὲ ὑποταχθήσεται.

ミュートスの有益性を説明する言葉が、ときには前に置かれ、ときには後に置かれるだろう。

話から導出される内容を ὠφέλεια とする点は本書の考え方に基づくものといえるが、附される説明が λόγος とされるのは、テオンとの共通項である。同時に、この段階では、アプトニオスのように「前辞」「後辞」を区別する用語が生じていなかったことを見て取れる。

以上のように、ヘルモゲネスに帰される本書の μῦθος 論は、概ねテオンの系統に属するものといえるが、同一の議論を行なうものではなく、話の有益性への注目や、それを倫理的観点から若者向けに適したものと述べる点など、独自の論点が示されるのである。本書の μῦθος 論がそのままアプトニオスへと繋がるわけではないが、テオンからアプトニオスの間に行われたであろう種々の議論の一例を示すものである。

ところで、本書と後世の関わりにおいては、これが6世紀初頭のプリスキアヌスによるラテン語版『修辞学初等教程』*Praeexercitamina* の原本となっていることは重要である。中世ヨーロッパにおいて、アプトニオス版がビザンツを中心とするギリシア語圏の標準的教科書となったのに対し、西方のラテン語圏においては、むしろプリスキアヌス版の影響を考える必要があるためである。

プリスキアヌスはビザンツで活躍した人物であるが、その『修辞学初等教程』における

^{*34} Hermog. *Prog.* 2 Rabe.

^{*35} Theon, *Prog.* 77 Spengel.

^{*36} Hermog. *Prog.* 1-2 Rabe.

fabla (= μῦθος) の冒頭は以下の通りである (1)。

fabula est oratio ficta uerisimili dispositione imaginem exhibens ueritatis. ideo autem hanc primam tradere pueris solent oratores, quia animas eorum adhuc molles ad meliores facile uias instituunt uitae.

ファブラは事実に似せた配置によって真実の似姿を表す作り話である。弁論家たちはファブラを若者たちに最初に教える習いであるが、それは若者たちのまだ柔らかい精神を人生のより善い道へと容易に教え導くためである。

冒頭でまず *fabula* について短く定義されるが、この一文はヘルモゲネス版には存在しない。これはテオンやアプトニオスと類似の発想にみえるものであり、プリスキアヌスがヘルモゲネス版以外の文献も参照していたと考えられる。そして、従来の説明にヘルモゲネス版で登場する精神修養の観点が加味されて、μῦθος / *fabula* が青少年向けの最初の題材として提示されることになる。

プリスキアヌスは、たとえばイソップ以外の *fabula* の語り手として、ヘシオドスやアルキロコス他にホラティウスを加えるなどラテン語版としての独自要素も見せるものの^{*37}、大筋の議論はヘルモゲネス版に従うものとなっている。また、*fabula* 全体を一般に「イソップの話」と呼称する点も同様である^{*38}。なお、再び明確にアプトニオスの影響が見受けられるのは末尾の部分である。彼は、*fabula* に附す説明について、次のように記している (4)。

oratio qua utilitas fabulae retegitur, quam epimythion uocant, quod nos affabulationem possumus dicere, a quibusdam prima, sed a plerisque rationabilius postrema ponitur.

ファブラの有用性が明らかにされる説明について、先人は *epimythion* と呼び、私たちは *affabulatio* と呼ぶことができるが、それは、ときには最初に、しかしたいてい場合は、より合理的に最後に置かれる。

プリスキアヌスは、ヘルモゲネス版では用いられない *epimythion* という名称を使用し、さらにそれにラテン語で *affabulatio* という表現を提案するのである。このことは、プリスキアヌスの時代の μῦθος に関する議論で、アプトニオスが示した ἐπιμύθιον の使用が一般化していたことを示唆している。ここにもアプトニオスの議論が μῦθος (*fabula*) に与えた影響を窺うことができる。

^{*37} Prisc. Praeex. 1.

^{*38} *ibid.*

3.3 ニコラオス

5世紀の修辞学者ニコラオスの『修辞学初等教程』における *μῦθος* 論は、テオンやヘルモゲネスに帰される『修辞学初等教程』の議論を受け継ぎつつ、おそらく当時の *μῦθος* に関する議論も反映して、独自の見解を示している。ニコラオスが冒頭で記す *μῦθος* に関する説明は、テオンとヘルモゲネスを合わせたような文言である (6 Felten)。

Mῦθος τοίνυν ἐστὶ λόγος ψευδῆς τῷ πιθανῶς συγκεῖσθαι εἰκονίζων τὴν ἀλήθειαν.

さて、ミュートスとは、もっともらしく構成されることによって真実を映す偽りの話である。

τῷ πιθανῶς συγκεῖσθαι とする発想は、ヘルモゲネスの影響であろう。この「もっともらしさ」の源泉について、ニコラオスは動物の性質と話の内容の関連を重視する、ヘルモゲネス同様の議論を示すのである^{*39}。また、このニコラオスの説明では、*μῦθος* における「真実」*ἀλήθεια* は「もっともらしさ」に由来するものとなる。この点は、前述のプリスキアヌスの *fabula* の説明 (*verisimili dispositione*) と共通するものである。

そして、ニコラオスは *μῦθος* とイソップの関わりについて独自の枠組みを提示する。彼は「イソップの」「シュバリスの」「リュディアの」「プリュギアの」という *μῦθος* の種類に言及するが^{*40}、テオンらの説明とは異なり、それらを分類のための積極的な枠組みとして利用した。すなわち、口を利く動物 (*λογικὸν ζῷον*) と口を利かない動物 (*ἄλογον ζῷον*) を基準として、「シュバリスの話」においては口を利く動物だけ、「イソップの話」では口を利く動物と利かない動物、「リュディア／プリュギアの話」は口を利かない動物だけが登場すると説明する^{*41}。話の内容による分類はアプトニオスにも見られたが、分類と名称を結び付ける考え方は、ニコラオスのみが採用するものである。一方、この分類において、「イソップの話」はすべての種類の *μῦθος* を包括しうると考えられるものの、ニコラオスは *μῦθος* の一般的名称については言及しておらず、この点もテオンらと異なる。

また、ニコラオスは、神々に関する *μῦθος* を「神話的逸話」(*μυθικὰ διηγήματα*) と呼ぶ者たちがいることを紹介している^{*42}。こうした呼称の問題は *μῦθος* の境界線の曖昧さも背景にあると考えられるが、彼は、呼称がどうであれ実際に使用するにあたってそれがもっともらしいものであるかどうか (*πιθανὸν ἢ ἀπίθανον*) に主眼を置く姿勢を示す。つまり、ニコラオスは、*μῦθος* の機能面を重視し、呼称には拘泥しないのである。ニコラオスは *μῦθος* を公衆の面前で語る方法を学ぶ最初の練習とするが^{*43}、ともすれば、その機能を果たす話が *μῦθος* と呼ばれる可能性を帯びる。ただし、ニコラオスの議論においては

^{*39} Nicol. *Prog.* 7-8 Felten.

^{*40} Nicol. *Prog.* 6-7 Felten.

^{*41} Nicol. *Prog.* 7 Felten.

^{*42} Nicol. *Prog.* 7 Felten.

^{*43} Nicol. *Prog.* 6 Felten.

μῦθοςであれば「イソップの話」とはならない点は、前述の通りである。

ニコラオスは、アプトニオス版を直接参照しなかったようである^{*44}。しかし、「前辞」「後辞」を示す語彙において、προμύθιονと ἐπιμύθιον が用いられており、アプトニオスの議論の影響が見られる (9-10 Felten)。

Ἐπιμύθιον δέ ἐστι λόγος ὁ πρὸς τὸν μῦθον ἐκφερόμενος καὶ δηλῶν τὸ ἐν αὐτῷ χρήσιμον. ... τινὲς δὲ καὶ τὸ ἐπιμύθιον τοῦτο προτάπτουσι καὶ ὀνομάζουσιν αὐτὸ προμύθιον.

後辞はミュートスへ附される言葉で、ミュートスに含まれる有用性を明らかにする。・・・この後辞を前に置き、それを前辞と呼ぶ者たちもいる。

後辞 ἐπιμύθιον では、μῦθος に込められた「有用性」(χρήσιμον) が示される。それが前に附される場合もあり、その場合は前辞 προμύθιον と呼ばれる。また、後辞の語り方が三種類挙げられるが、用例を見る限り、期待される「有用性」とは、「すべきこと／すべきでないこと」の提示であり、一種の助言である^{*45}。

後辞に関連して、ニコラオスは必ず後辞を附すべきと主張する議論を紹介している^{*46}。その主張において、そもそも μῦθος は、直截の忠告を嫌がる若者たちが、μῦθος の楽しさ(ἡδονή)によって助言(παραίνεσις)を受け入れるようにすることが目的なのだから、そこに込められた「有用性」(χρήσιμον) を提示しない理由はないとされる。もし若者たちが助言を好意的に受け入れるならば、そもそも μῦθος を利用する必要がないというのである。この場合、μῦθος は後辞あつてのものであり、その意図が重要である。

ニコラオスの示す μῦθος に関する議論は、当時 μῦθος について種々の主張が生じていたことを窺わせる。ニコラオス自身の見解についても、プリスキアヌスの文言や、おそらく9世紀後半のアプトニオスへの注釈本に影響が見られる点など^{*47}、後世においてもその議論が参照されていたことは分かる。とはいえ、たとえば μῦθος の分類や呼称の問題といった、ニコラオス独自の主張については、後世には引き継がれてはいない。この点については、ニコラオス自身も「前辞」「後辞」の語彙を用いているとおり、アプトニオスの μῦθος に関する議論が基本的な枠組みとして存在し、その上でのニコラオスの議論であった、ということであろう。

3.4 総括

『修辞学初等教程』は、教育課程の早期に用いられた教科書であり、そのなかでも「イソップの話」を示す μῦθος は、ほぼ冒頭に置かれる項目であった。そのため、一定の教育

^{*44} Kennedy(2003), p.130.

^{*45} Nicol. Prog. 10 Felten.

^{*46} Nicol. Prog. 10-11 Felten.

^{*47} 9世紀頃のサルデイスのジョン Ioannes Sardinianus に帰されるアプトニオス注釈。Kennedy(2003, pp.177-182)の各所で指摘される。

を受けた人物であれば、教育課程を完遂することがなくとも、少なくとも『修辞学初等教程』における $\mu\theta\omicron\varsigma$ を目にしていたことを推測できる。『修辞学初等教程』における $\mu\theta\omicron\varsigma$ が「寓話」としての「イソップの話」を説明するものであることを考えると、その在り方が人々の「イソップの話」に関する認識の形成に影響した可能性も高い。

現存する文献を見る限り、テオン以降も $\mu\theta\omicron\varsigma$ について種々の議論が行われていたことを確認できるが、その中でもアプトニオスの示した枠組みが影響力を示している。そのアプトニオスの説明に沿えば、「イソップの話」は後辞ないし前辞が附されるものである。そして、もともと後辞が附されていない話であっても、「イソップの話」であれば、附しうるものとして読まれることになる。さらには、そのように読みうる話は、本来別のものであっても、「イソップの話」の枠組みに組み込まれる可能性を帯びるのである。一方、テオンが練習として示した点もふまえると、「イソップの話」は固定的なものではなく、後辞も含めて、動的に改変創作可能な対象でもあった。

こうした『修辞学初等教程』の影響を、具体的に測ることは難しい。しかし、たとえばバブリオスの用例が教育的文脈の中に見られることは、それと関わるものではないかと考えられる。もちろん、『スーダ』における $\mu\theta\omicron\varsigma$ の説明も、『修辞学初等教程』の影響を示す一例といえる。一方、その『スーダ』の説明は、『修辞学初等教程』の $\mu\theta\omicron\varsigma$ に関する認識を、教育的な文脈から切り離して、一般的な説明として提示する。これは、『修辞学初等教程』の説明が、時代を越え、教育の枠組みを越えて、広く「イソップの話」に関わるものとなりえたことを示唆するものである^{*48}。

4. アトス写本後辞と編者

中世までに普及したギリシア語散文イソップ集では、基本的に後辞が附されている^{*49}。そのような「イソップの話」の在り方は、『修辞学初等教程』や『スーダ』に見られる「イソップの話」とも共通のものである。つまり、「イソップの話」に関する発想として、後辞を附すべきもの、あるいはそのように読むべきものとみる認識が前提となる。ここまで確認した用例も考慮に入れると、A 写本編纂の時点において、「バブリオスの話」もまた、後辞を附すべき「イソップの話」の一種として広く受け入れられていた可能性は高い。そうであれば、「バブリオスの話」への後辞の附与は、A 写本における独自の発想というわけではなく、むしろそれまでの「イソップの話」の受容の流れを引き継ぐものといえる。このとき、バブリオスの作品としてよりも「イソップの話」としての評価が先立つとすれば、表現形式より内容解釈が問題となり、それを示す後辞についても韻律の有無は二の次となる。A 写本と同時期の『スーダ』に残る散文化された「バブリオスの話」なども、韻

^{*48} なお、『修辞学初等教程』のヨーロッパ東西における伝承については、堀尾(2006)にまとめられている。中世以降の『修辞学初等教程』の展開を考えると、その冒頭に $\mu\theta\omicron\varsigma$ が置かれた意義は一層大きいように思われる。Wheatley(2000)はその影響が近世に及んでいたことを示す。

^{*49} Hausrath(1957)。中世以降普及したラテン語版のイソップ集(Romulus集)においても、広く前辞や後辞が附される。Österley(1870), Hervieux(1894) 参照。

律の有無が要点とはされない一つの事例といえる。

A 写本の独自性は、すべての話の後辞を想定している点に見ることができる。空行を残していることを考えると、明らかに意図的なものであるが、その後辞の扱いについて、A 写本には考慮すべき点も残る。

4.1 語彙の問題

ひとつは、後辞において用いられる語彙の問題である。バブリオスの序歌において、「イソップの話」を示す語彙には $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ が用いられるが、A 写本の後辞において「イソップの話」を示す語彙を確認すると、後辞¹では $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ が7篇、 $\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$ が2篇で、後辞²では $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ が32篇、 $\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$ が12篇で用いられている。序歌での使用は $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ で統一されるのに対し、A 写本の内部では一貫性が保たれていない。

たとえば、中世まで普及したギリシア語散文イソップ集は、大きく (I) *Augustana*、(II) *Vindobonensis*、(III) *Accursiana* の3種に分けられ、それぞれの祖本は (I) 2世紀頃、(II) 6世紀頃、(III) 9世紀頃のものとして推測される^{*50}。これらの集成に含まれる後辞で使用される語彙を確認すると、(I) では $\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$ 、(II) (III) では $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ が用いられている。あるいはまた、バブリオス系イソップ集を散文化したと考えられる集成も残るが、そこでは $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ が使用される^{*51}。これらの集成ごとの語彙の相違は、それぞれの祖本の成立時期とも関係があるように思われるが、他方、それぞれの集成における使用語彙の一貫性は、集成編纂時に整えられたものと考えられる。

それに対して、A 写本の場合、編者が語彙の統一を図っていないのである。

4.2 区切りの問題

前述のとおり、A 写本の編者は後辞を判別できる形で記した。A 写本では、後辞²は字体が変えられるため明白であるが、後辞¹は本文と同じ字体であるため、区切り記号の有無が、区別を判別する主要な手掛かりとなる。確認してみると、校訂本においては後辞¹として区別されるものの、A 写本では区別されていない話が6篇存在する (Bab.36; Bab.37; Bab.38; Bab.65; Bab.116; Bab.119)^{*52}。

^{*50} Hausrath(1957), pp.VI-XXV.

^{*51} 15世紀頃の写本 (Codex Bodleianus Auct. F. 4.7.) および14世紀前半の写本 (Codex Vaticanus Palatinus Graecus 367) に残る。前者では後辞でなく前辞が用いられている。cf. Luzzatto&La Penna(1986), pp. XXXIII-XXXVIII.; Knoell(1877).

^{*52} Luzzatto&La Penna(1986) はこれらすべてを本文に含め、後辞¹としつつ、いずれも削除対象としない。Perry(1965) は、Bab.37 と Bab.119 の後辞¹を削除対象とし、残り4篇のものは削除しない。Boissonnade(1844) では、全体として後辞¹を区別しないが (ただし、対訳で付されたラテン語では後辞¹は字下げされて区別されている)、これら6篇については、Bab.37の後辞¹を無視して後辞²のみ記載する他は、すべて本文に含まれる。また、Lachmann(1845) は Bab.37の後辞¹を無視して後辞²のみ註記する他は、すべて本文に含めて削除しない。Lewis(1846) は、Bab.37の後辞¹を無視する他、Bab.38の後辞¹を削除対象とし、残りはすべて本文に含めて削除しない。Rutherford(1883) はすべてを後辞¹として本文と区別し註記する。なお、Crusius(1897) はすべての後辞を削除対象とする。校訂者によって対応

それらで示される「後辞」は以下の通りである。

-
36. κάλαμος μὲν οὕτως· ὁ δὲ γε μῦθος ἐμφαίνει
μὴ δεῖν μάχεσθαι τοῖς κρατοῦσιν, ἀλλ' εἴκειν.
37. ἔργοις ἔπαινος· ἀργία δὲ κινδύνοις.
38. ὁ μῦθος δ' ἡμῖν τοῦτο πᾶσι μηνύει,
ὡς οὐδὲν οὕτω δεινὸν ἂν ὑπ' ἀνθρώπων
πάθοις τι τῶν ἔξωθεν ὡς ὑπ' οἰκείων.
65. θαυμαστὸς εἶναι σὺν τρίβωνι βουλοίμην
ἢ ζῆν ἀδόξως πλουσία σὺν ἐσθῆτι.
116. τουτὶ μὲν οὕτως· ἔμφασις δὲ τοῦ μύθου
κακὸν ἐπιχαίρειν ὅτ' ἂν ἔχη τις ἐκτίσαι.
119. καὶ τοὺς θεοὺς Αἴσωπος ἐμπλέκει μύθοις,
βουλόμενος ἡμᾶς νουθετεῖν πρὸς ἀλλήλους.
πλέον οὐδὲν ἔξεις σκαιὸν ἄνδρα τιμήσας,
ἀτιμάσας δ' ἂν αὐτὸν ὠφελῆθεις.
-

また、これらの話では、後辞²が附される Bab.37 を除いて、後ろに空行が置かれている*⁵³。

Bab.65 は、「ツルとクジャク」の話が語られ、豪華な羽を自慢するクジャクと、みすばらしいものの天高く飛べることを誇るツルとの諍いを描いている。豪華な格好でみすばらしく生きるより、みすばらしい恰好でも称賛されることを望むと1人称で語られる「後辞」の内容は、文脈上、ツルの発言と解しても通用するものである。したがって、もともと「後辞」として区別されていなかった可能性も考えられる。なお、この話は散文のものが残っており、そこでは当該部分が“ὅτι κρεῖττον περιβλεπτον εἶναί τινα ἐν πενιχρᾷ ἐσθῆτι ἢ ζῆν ἀδόξως ἐν πλούτῳ γαυρούμενον”と記され、ὅτι で始まる後辞として区別されている*⁵⁴。

Bab.36 と Bab.116 の「後辞」は同様の形式である。“... μὲν οὕτως”として前段を受けて本文に対する区切りが示され、話の解釈へと繋げられる。解釈部分の導入は“μῦθος ἐμφαίνει”“ἔμφασις ... μύθου”と記され、品詞の相違はあるにせよ、同種の表現が用いられている。こうした μῦθος の解釈を直接示そうとする文言からすると、その他の後辞¹と比較してこれらを区別しない理由はない。また、Bab.38 の「後辞」の導入は Bab.96 の後辞¹の導入“ὁ μῦθος ὀρθῶς πᾶσι τοῦτο μηνύει”とほぼ同じ字句である。A 写本が Bab.96 では後辞¹として区別することを考えると、同種の字句で導入される Bab.38 の「後辞」を後辞¹として区別しない理由もとくにない。

は様々だが、基本的にこれらの後辞¹として識別する点は共通である。

*⁵³ Bab.37 の後辞¹については、Boissonnade(1844), Lachmann(1845), Lewis(1846)で、註記もされずに共通して無視されている。Boissonnade(1844)が基本的に後辞¹を削除対象とせず全て記載していることを考えても、Bab.37 の後辞¹に対するこうした扱いは気になる点ではあるが、明確な理由は不明である。

*⁵⁴ Fab.249 Hausrath. なお、Perry(1952)は散文版を含まず Bab.65 を採っている。

Bab.119 では、まずイソップが意図をもって神々を編み込んだ話を語ったことが説明され、その後解釈内容が示される。他に比べても長い「後辞」であり、形式としても本文と繋がるものではない。また、イソップへの言及も、バブリオスの序歌に従えば、話の内部に神々が登場することは織り込み済みであるため、不要な類のものである。つまり、後付けの印象の強い箇所であり、本来は後辞¹として区別しやすい部分と思われる。

これらの事例において、A 写本の編者は、容易に後辞¹として区別可能なものを、区別せずに記したということになる。後辞²の附される Bab.37 を除いて後ろに空行が置かれていることは、編者がこれらに区切りをつけ忘れたということではなく、後辞を必須と意識しつつ、これらを後辞¹として識別していなかったことを示すものである。

4.3 総括

A 写本の参照元がどのようなものであったか、現状では確認することはできない。しかし、語彙の問題や区切りの在り方、後辞¹と後辞²が双方附される話の存在などを考慮すると、A 写本には複数の参照元があったとみて問題はなさそうである。

A 写本が語彙を $\mu\theta\omicron\varsigma$ に統一していない理由は不明であるが、区切りの問題と合わせて考えると、むしろ編者がさほど字句にまで介入せず、参照元をそのまま残しているものと推測できる。また、後辞を必須とする意識を持ちつつ、明らかに「後辞」と区別可能なものを区別せずに残していることなどは、編者が形式を意識しながらも、個々の話に対する独自の判断を避けているようにも考えられる。

また、この点は、A 写本において、参照元の存在しない独自の後辞が創り出されたかどうかという問題にも関わる。既に確認した「イソップの話」に関する議論の中で、後辞は容易に創り出されるものであり、A 写本でもその可能性は否定できない。A 写本が独自に後辞を創り出していたとすれば、参照元を想定したとしても、参照元との関係が不明瞭となってしまうのである。とはいえ、もし A 写本の編者が積極的に後辞を創り出していたとすれば、18 篇も後辞を附さないままに残すことは考えにくい。確実な答えは出ないものの、空行の存在を考えると、少なくとも A 写本は、後辞を積極的に創り出すものではなかったと思われる*55。

A 写本には、バブリオスの序歌が含まれるため、それがバブリオス集を意識したものであることは明らかである。しかし、後辞の扱いに見られる A 写本の姿勢は、バブリオスの序歌に見られる意図から離れたものである。後辞の在り方を鑑みると、A 写本については、バブリオスの作品をただまとめるというよりも、それまでの受容の流れを背景に、参照可能な「バブリオスの話」を、後辞を附すべき「イソップ寓話」として、アルファベット

*55 後辞²については、Luzzatto&La Penna(1986, pp.XCVI-XCVII) が様々な引用元の存在を推測しており、本来はバブリオスとは無縁の場所からも後辞²の選定が行われた可能性が考えられる。ただし、この場合は、A 写本において独自の後辞を創り出したということではなく、個々の話に合わせて独自に後辞を選び出した、ということである。とはいえ、選び出す形であるにしても、後辞を附すべきと考える発想は、当時の「イソップの話」に関する認識を反映したものと考えられる。

順に総合的に纏めようと試みたものと考えられる。A 写本は、「バブリオスの話」を素材としつつ、そこに空行を含めて後辞を附す形式を徹底したため、結果的に、バブリオスの意図とは異なる新たな「イソップ寓話集」を生み出すことになったと評価できるのである。

ペリーは、ギリシア語散文イソップ集が主に一種の手引きとして評価されるなか、それらの編者たちが、独自に体裁を整えることで自身の集成に付加価値を付けようとしていたことに触れている^{*56}。A 写本の場合、「バブリオスの話」という素材が際立ってしまうものの、ここまで見てきた A 写本や「バブリオスの話」の在り方を考えると、A 写本もまた、ペリーが指摘する散文イソップ集と同種の試みを行なうものであったとみることも可能ではないだろうか^{*57}。

5. 総括

本章は、後辞を附すという A 写本の形式をもとに議論を進めたものであり、個々の「バブリオスの話」やそこに含まれる後辞の真偽について明らかにしようとするものではない。むしろ、A 写本以外にまとまった資料のない現状や、「イソップの話」の性質上、真偽の判断は困難であろうと考える。とはいえ、後辞を除外した部分だけを見る場合、A 写本のみに見られる題材も多く、素材としては、バブリオスに由来するものが多数含まれている可能性は高い。その中で、後辞を附す形式は、同じ「バブリオスの話」であっても、それを扱う精神が時代に伴って変質していることを示している。

A 写本が 10 世紀頃までの「バブリオスの話」を吸い上げたものとみると、A 写本は、その当時までのバブリオス受容が結実したものであり、内実の変質した「バブリオスの話」を纏めたものといえる。つまり、それ自体ひとつの独立したイソップ集として評価しうるものと考えられる。その一方で、A 写本は、バブリオス集をいわゆる「イソップ寓話集」へと変質させて後世に残し、19 世紀半ばになって、「バブリオス集」再建の主要な手掛かりとして現われるのである。

^{*56} Perry(1965), p.xi. しかし、そうした集成編者の試みは、素材の性質ゆえか、評価され難いものである。

^{*57} バブリオス集が、文学的題材として「イソップの話」を扱い、その韻文化を誇るものであったとしても、A 写本が必ずしもその精神を引き継いでいるわけではない。A 写本では、教訓を読むべき「イソップの話」としての扱い方が問題であり、後辞が散文か韻文かという点までは、重要な要素となっていない。とはいえ、それまでのバブリオス受容の在り方を鑑みるに、A 写本の編者はそうしたバブリオス集からの乖離に自覚的ではなかったものと推察する。

第7章

「犬とその影」に見るイソップ受容の一端

1. はじめに

肉片を啜えた犬が、水面に映る自分の姿を見て、自分のものとは別の肉片を啜えた他の犬がいると考える。そして、その肉を奪おうとして、自分が持っていた肉を失ってしまう。これは、現在「犬とその影」「肉を運ぶ犬」などの題名で知られる話のおおまかな粗筋である（本章ではそれらをまとめて「犬とその影」と呼ぶ）。

この話は「イソップの話」として知られる話のなかでも定番といえる話であり、古代以来の多数のイソップ集に含まれている。古い例としては、1世紀前半のファエドルス集に含まれており、また、イソップ集ではないが、同じく1世紀のテオンが『修辞学初等教程』の $\mu\acute{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ の項目でこの話を取り上げ、練習方法の一例を示している。それ以降も、バブリオス集やギリシア語散文イソップ集他、時代や言語を問わず、種々のイソップ集にこの話は含まれており、いわば伝統的な「イソップ寓話」と呼びうる話である。

日本における「犬とその影」は、まず『エソポのハブラス』や『伊曾保物語』に確認でき、明治以降は多種多様である。明治以降昭和期までの日本における「犬とその影」について、たとえば話の冒頭に大きな相違が見られ、犬の啜える肉の入手経路に言及される（犬が肉を盗む、貰う）筋書きと、はじめから肉を啜えて登場する筋書きが存在する*1。日本の「犬とその影」において、犬が肉を盗むパターンは一時期に集中して現われており、その初出は1873年（明治6年）刊行の渡部温『通俗伊蘇普物語』（第1巻）である。

第十八 犬と牛肉の話

犬。肉舗より肉一塊盗出し。引くはへたるまゝ溝をわたるとて橋の中ほどに至りたる時。其影の水へ写れるを見て。他の犬己の銜居るより大きな肉を銜居るよと心得。夫をもまた吾ものにせんものをと。水に写れる肉にくらひ付しに。今まで己が銜し肉水底に沈み。前に得しものをさへ。一時に併せ失ひけるとぞ
諺に。影を握むで。実を失ふといふ事あり。凡世の中の人々は。浮雲たる富を慕ひては。固有せる真の宝を失ふ。浅ましき事ならずや

*1 谷出（2010）・（2011）。なお、谷出の調査では、明治30年頃までは前者がよく見られるが、昭和期以降はほぼ後者となり、犬が肉を盗まなくなる。

渡部版の犬は、肉屋から肉片を盗み出し、橋を渡っているときに水面に映る自身の姿を（それと気付かずに）見ることになる。

『通俗伊蘇普物語』は、明治期以降の日本における「イソップ寓話」普及の嚆矢ともなったイソップ集と考えられるが、日本ではじめに普及した「イソップ寓話」はどのようなものであったのだろうか。本章では、渡部版「犬とその影」を題材として、「犬が肉を盗むこと」をはじめ、そこに垣間見えるイソップ受容の在り方を考える。

2. 明治初期の「犬とその影」

渡部温『通俗伊蘇普物語』は、全6巻からなる日本近代最初のイソップ集である。第1巻から第5巻までは、ジェームズ James, T. の英語イソップ集を翻訳した203話を含み、第6巻はタウンゼント Townsend, F. の英語イソップ集および『伊曾保物語』から34話を含む（前者26話、後者8話）^{*2}。全体で237話を含む大規模なイソップ集であり、原書の模写を含む多数の挿絵も含んでいた。また、渡部版は刊行後すぐに小学校教育の国語や修身の教材として採用され、普及の下地が作られた。なお、渡部は、タウンゼント版と『伊曾保物語』の話をさらに加え、挿絵も追加した『改正増補 通俗伊蘇普物語』（全280話）を1888年（明治21年）に刊行している。

本書の訳者である渡部温は1837年（天保8年）に江戸で生まれ、少年期まで長崎・下田・神奈川で過ごした。そして1862年（文久2年）より幕府設置の蕃書調所（翌年開成所となる）で英語教育にあたった。幕府崩壊後、沼津兵学校の英学担当教官として静岡に移ったが、1872年（明治4年）の改組により東京に戻る。その後、1874年（明治7年）に長崎英語学校、翌1875年（明治8年）から東京外国語学校の校長を歴任した。また、1877年（明治10年）に校長を辞職した後は、実業家としても活躍した。

渡部は、沼津兵学校で英語教育に携わった際、英語教材としてジェームズ版の英語イソップ集を採り上げ、沼津で翻刻印刷している。『通俗伊蘇普物語』は、東京に戻った渡部が（ジェームズ版以外も含めて）編集翻訳を行い、1873年（明治6年）に6巻本として刊行したものである^{*3}。

この渡部版「犬とその影」（『犬と牛肉の話』）は、以下のジェームズ版を翻訳したものとされる。

FABLE 24.—THE DOG AND THE SHADOW

A Dog had stolen a piece of meat out of a butcher's shop, and was crossing a river on his way home, when he saw his own shadow reflected in the stream below. Thinking that it was another dog with another piece of meat, he resolved to make himself master of that also; but in snapping at the supposed treasure, he dropped the bit he was

^{*2} 谷川 (2001), pp.282-283.

^{*3} 渡部温については、小堀 (2001, pp.260-261) 及び谷川 (2001, pp.291-293) の解説に拠る。

carrying, and so lost all.

Grasp at the shadow and lose the substance—the common fate of those who hazard a real blessing for some visionary good.

ジェームズ版の犬も肉屋から肉を盗み出す。つまり、渡部版で犬が肉を盗む直接的な要因はジェームズ版にあるといえる。その一方で、両者をさらに比較してみると、渡部版は、大筋ではジェームズ版と同一であるが、「橋の中ほどに至る」「大きな肉」「水底に沈み」など、渡部版独自の記述も見受けられる。また、渡部版では犬が家に戻る途中ともされず、ジェームズ版と状況設定が異なっている。これらの点については、渡部自身が「訳書は原文の面目を改ざるを以て尊しとする事は論を待たず。されど予が此訳述は。意味徹底を旨とすなれば。前後の文気と幹旋轉換の勢とに因て。文を辞に代え辞を文に換え。大小段落を前後にする等の事ありて。原文に離合して書取たり。」「又井と訳すべき字を大溝と訳し。亡牛と訳すべき処を家牛と訳したる類少からず。是等は話頭の都合により。敢て原字に拘泥せず。看官一を執て論ずる事なくして可なり」などと例言で記しており、ある程度の改変は意図的なものでもあったと考えられる。

ジェームズ版イソップ集は1848年刊行の英語によるイソップ集である。全部で203話を含み、そのうち98話にはテニエル Tenniel, J. による挿絵が付されている。また、“A New Version, Chiefly from original sources” という副題が付されており、ギリシア語やラテン語の「イソップの話」まで参照した上で、ジェームズが英語で再構成したものである。ただし、できるだけ古い原典を参照するとしつつも、それを厳密に翻訳するものではないこと、あるいは新旧の話を組み合わせたりすることを、ジェームズは序文で述べている^{*4}。1848年の刊行後、ジェームズ本は版を重ねており、筆者が確認できた範囲では、1850年代のものは初版と変わらず、1866年に刊行されたもの以降は一部挿絵の入れ替えが見られ、1872年以降に刊行されたものでは、テニエルに加えてウォルフ Wolf, J. の名が挿絵画家として記載されている。



図1 ジェームズ版挿絵, 1848.



図2 ジェームズ版挿絵, 1866.

^{*4} James(1848), pp. xvii-xviii.

上記のジェームズ版「犬とその影」は挿絵付きの話である。1860年代に挿絵の差し替えが行われているものの、本文に変更はない。また、渡部版ではもともと挿絵は付されていなかったが、『改正増補』版で追加された。

1848年版では水面に波紋が広がり、犬が肉片を水の中に落とした後の姿が描かれている(図1)。心なしか、犬が哀しそうである。一方の1866年版では、水面に犬の啜えた肉片が映っており、犬はこれから肉片を失うことになる(図2)。いずれにも共通するのは、犬が板の上を渡っていることであるが、この点は渡部版では記述されるものの、ジェームズ版の本文では明記されない要素である。(ただ、in the stream below という表現で犬が流れの上にいることは示されており、何らかの方法で川の上にいることは分かる。)

『改正増補』版「犬とその影」の挿絵を見ると、差し替え後のジェームズ版の挿絵を模倣したものであることが明白である(図3)。渡部が参照したジェームズ本は1863年刊行のものであったとされるが^{*5}、ここからも改訂後のものであったことを確認できる。また、1863年にはジェームズ版の挿絵の差し替えが行われていたということでもあろう。

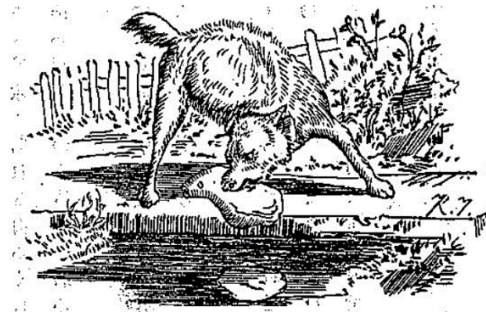


図3 『改訂増補』版挿絵, 1888.

なお、渡部版と同時代の日本に、犬が橋を渡ると明記されているバージョンが存在しないわけではない。渡部版と同年(明治6年)に刊行された福沢英之助『^{くもんうはなしぐさ}訓蒙話草』に含まれる「慾張タル犬ノ話」である。

一匹ノ犬一切レノ肉ヲ啣ヘテ小川ノ橋ヲ通りタルニ巳ノ影ノ水中ニ映ルヲ見テ他ノ犬ガ巳ノ肉ヨリ大ナル肉ヲ啣ヘタルト思ヒコレヲ得ント巳ノ肉ヲバ打棄テ其影ヲ追ヒ行キケレバ恰ムベシ此犬ハ其目指セシ肉ヲ取り能ハザルノミナラズ巳ノ肉モ水ニ流サレテ終ニコレヲ失ヒタリ

慾ヲスレバ實ガナイト云フ諺ノ如ク此犬ハ餘リ慾張シユヘ終ニ巳ノ物ヲモ失ヒタリ人々貪リテ飽クヲ知ラズ他人ノ物ヲノミ羨ミ思フ時ハ必ズ此犬ノ如ク終ニハ巳ノ物ヲモ失フニ至ラン慎マズンバアルベカラズ

渡部版との相違は、犬がはじめから肉片を啜えて登場している点、肉が水底に沈むのではなく流されていく点である。また、話の後ろに付される説明も、渡部版と福沢版では異なる。

『訓蒙話草』は、1867年刊行のタウンゼント版イソップ集を翻訳したものである^{*6}。タ

^{*5} 谷川(2001, pp.179-180)。なお、小堀(2001, p.263)では異版の存在が推測されるのみである。小堀は改訂前のジェームズ本を参照し、改訂後の挿絵の差し替えを把握していなかったと思われる。

^{*6} 福沢は英国留学時に原書を得たと序文に記すが、標題を含めてイソップとの関連は示されていない。また、原書に関する情報も記されない。本書の読者は、本書に含まれる話が西洋由来の話であることを把握できても、「イソップの話」であると認識したかどうかは不明である。なお、『訓蒙話草』はタウンゼント

ウンゼント本は313話を含み、そのうち105話にウィアー Weir, H. による挿絵が付されている。また、タウンゼント本は、“literally translated from the Greek”と副題が付けられており、主にギリシア語版イソップ集に基づきその意味を忠実に翻訳することを目指したものである^{*7}。訳者のタウンゼント自身が、前書きでその点をジェームズ版との違いとして述べている。ただし、タウンゼントが挙げる原典にはラテン語のファエドルス集も含まれており、ギリシア語の話だけを参照したというわけでもなさそうである。

タウンゼント版の「犬とその影」は次の通りである。

THE DOG AND THE SHADOW.

A Dog, crossing a bridge over a stream with a piece of flesh in his mouth, saw his own shadow in the water, and took it for that of another Dog, with a piece of meat double his own in size. He therefore let go his own, and fiercely attacked the other Dog, to get his larger piece from him. He thus lost both: that which he grasped at in the water, because it was a shadow; and his own, because the stream swept it away.

福沢版「犬とその影」は、タウンゼント版をそのまま翻訳しているのではない。とはいえ、渡部版の「橋」のような新規の要素が話に加えられるわけではなく、「二倍の大きさの肉」を「大ナル肉」とするなど、簡略化や要素の書き換えが主であり、基本的にはタウンゼント版に沿った翻訳である。題名が「慾張タル犬ノ話」とされ、話の解説が後ろに加えられている点などを考えると、福沢版では話の意図に比重が置かれているようにも見える。

また、両者の話にはいずれも挿絵が付けられている（図4・図5）。

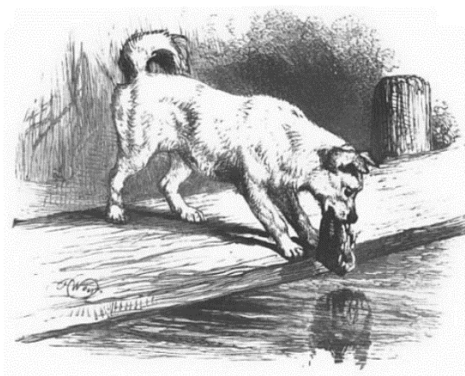


図4 タウンゼント版挿絵, 1867.

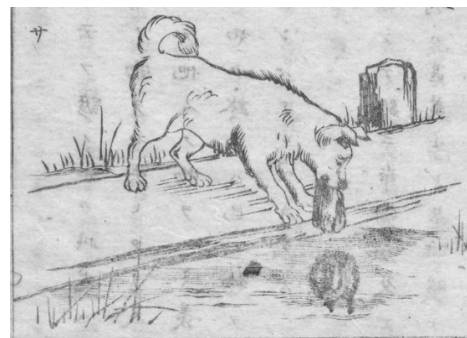


図5 福沢版挿絵, 1873.

挿絵に描かれているのは、木の橋の上で犬が水面に映る影に気付く場面である。ジェームズ版の差し替え後の挿絵も同じ場面を描くものであった。また、渡部版でも同様であるが、福沢版も原書の挿絵をほぼ模写したものとなっている。タウンゼント版では、本文の記述通り、水面に映る肉が犬の咥えているものより大きく描かれているように見える。

本全体を翻訳するものではない。

^{*7} Townsend(1867), pp. xx-xxiii.

『通俗伊蘇普物語』第6巻でタウンゼント版イソップ集が用いられていることからみて、訳者の渡部温はタウンゼント版も知っていたと推測できる。そうしてみると、肉を盗む表記はジェームズ版に基づくものであるが、橋を渡る表記は、挿絵の存在やタウンゼント版が影響した可能性も考えられる。一方、やはり第6巻で参照される『伊曾保物語』の「犬とその影」においては、肉を盗む表記も橋を渡る表記もない。ただし、肉の大きさについては、『伊曾保物語』でも水面に映る肉の影が大きく見えたことが記されており、タウンゼント版と共通する。

第1巻掲載の渡部版「犬とその影」にタウンゼント版が影響していたかどうかは判然とはしないものの、たとえば渡部版において犬が「肉を盗み」「橋を渡る」要素については、近代の英語イソップ集にその直接的な要因を求めることができそうである。他方、渡部版の原書編者であるジェームズやタウンゼントは、ギリシア語・ラテン語による古代の「犬とその影」を参照したと考えられるが、はたしてその実態はどうであったのか。次節では古代の各バージョンを確認する。

3. 古代の「犬とその影」

古代に見られる「犬とその影」において、現存するものでは、ファエドルス集に収められたものが最も古い。

(1) ファエドルス版 (Phaed. 1.4)

*Amittit merito proprium qui alienum adpetit.
Canis per flumen carnem cum ferret, natans
lympharum in speculo vidit simulacrum suum,
aliamque praedam ab alio cane ferri putans
eripere voluit; verum decepta aviditas
et quem tenebat ore dimisit cibum,
nec quem petebat potuit adeo tangere.*

1世紀前半に編纂されたファエドルス集において、「犬とその影」の話は、「他者のものを望むと自身のものも失う」ことを示す話として語られる。犬ははじめから肉を持った状態で登場し、肉の出所は不明である。犬は肉を啜って川を渡っているが、橋の上ではない。また、水面に映る肉の大きさは言及されない。自分の肉を大きなものに交換しようとするよりも、水面に映る肉も手に入れようとして、結果として自分のものを失う展開と読める。

犬が「泳いでいる」かどうかは、2行目 *natans* の解釈次第である。ペリーは該当箇所を“caught sight of his own image floating in the mirror of the water”（下線筆者）と翻訳して

おり、3行目 *simulacrum* にかかる現在分詞の中性対格形として解釈する*8。たしかに「肉を啜えて川を泳ぎながら水面に映る自分の影を見る」という行為は困難を伴うことが予想されるが、4行目 *putans* の例も含めて考えると、*natans* を主格として「犬が泳ぎながら」と取らず、あえて複雑な解釈をする必要性には疑問が残る。岩谷訳では「イヌは泳ぎながら」と翻訳されている*9。なお、ペリーのように解釈する場合、犬がどのように川を渡っているか不明である。

(2) テオン版 (Theon, *Prog.* 75 Spengel.)

οἶον κύων παρὰ ποταμόν τινα φέρων κρέας, καὶ κατὰ τοῦ ὕδατος τὴν αὐτοῦ σκιὰν θεασάμενος, οἰηθεὶς ἕτερον εἶναι κύνα μείζον κρέας ἔχοντα, ὃ μὲν εἶχεν ἀπέβαλεν, ἀλόμενος δὲ εἰς τὸν ποταμόν ὡς ἀρπάσων, ὑποβρύχιος ἐγένετο. τὸν λόγον δὲ οὕτως ἐποίησεν· ὅτι ἄρα πολλάκις οἱ τῶν μειζόνων ὀρεγόμενοι καὶ ἑαυτοὺς πρὸς αὐτοῖς τοῖς ὑπάρχουσιν ἀπολλύουσιν.

1世紀後半のテオンが、『修辞学初等教程』の中で、*μῦθος* 練習法の具体例の一つとして「犬とその影」の話を持ち上げる*10。テオンの用例では、ファエドルス集同様に犬がはじめから肉を持って登場する。しかし、犬は川の中を通るのではなく、川辺を通る。そして、水面に映る肉片は自分のものより大きく見える。テオン版で特徴的なのは、話の結末である。テオンの犬はもう一匹の啜えた肉を奪ってやろうと、自分の肉を捨てて川へ飛び込み、犬自身が水底へと沈んでしまう。「より大きなものを欲する者は、自身が手にしていたものに加えて、自分自身をも滅ぼす」とする、テオンが例として示す教訓もそれに対応したものとなっている。なお、テオンの提示する「犬とその影」の結末は、その他のバリエーションの中でも特異なものである。

(3) バブリオス版 (Babr. 79.)

Κρέας κύων ἐκλεψεν ἐκ μαγειρείου,
καὶ δὴ παρήει ποταμόν· ἐν δὲ τῷ ρείθρῳ
πολὺ τοῦ κρέως ἰδοῦσα τὴν σκιὴν μείζω,
τὸ κρέας ἀφῆκε, τῇ σκιῇ δ' ἐφορμήθη.
ἀλλ' οὐτ' ἐκείνην εὗρεν οὐθ' ὁ βεβλήκει,
πεινώσα δ' ὀπίσω τὸν πόρον διεξήει.
[Βίος ἀβέβαιος παντὸς ἀνδρὸς ἀπλήστου
ἐλπίσι ματαίαις πραγμάτων ἀναλοῦται.]

*8 Perry(1965), p.197.

*9 岩谷・西村(1998), p.17.

*10 なお、テオン版については、本論第2章で紹介している。

2世紀頃に編纂されたバブリオス集に含まれる「犬とその影」の話では、犬は肉屋から肉を盗み出す。犬は川沿いを通っており、水面に自分のものよりも大きな肉片の影を認めて、自分のものを捨てて影にとびかかる。バブリオス版の中核部分の展開はテオンのものと同様である。しかし、テオン版とは異なり、犬は水底には沈まず、肉をなくしてもとの道を引き返す。A写本ではこの話の後ろに教訓が付されているが、「人生は滅ぼされる」とする文言は、犬が引き返すバブリオス版の内容にはそぐわず、むしろテオン版の結末に対応するようにも見える。この2行は、校訂本の多くで削除の対象である*¹¹。

ジェームズ版で犬が肉屋から肉を盗む展開は、バブリオス版との関連が考えられる。

(4) *Augustana* 版 (Aes.136 (I) Hausrath.; *Aesopica* fab.133; Halm 233)

κύων κρέας φέρουσα

κύων κρέας ἔχουσα ποταμὸν διέβαινε· θεασαμένη δὲ τὴν ἑαυτῆς σκιὰν κατὰ τοῦ ὕδατος ὑπέλαβεν ἑτέραν κύνα εἶναι μείζον κρέας ἔχουσαν. διόπερ ἀφείσα τὸ ἴδιον ὄρμησεν ὡς τὸ ἐκείνης ἀφαιρησομένη. συνέβη δὲ αὐτῇ ἀμφοτέρων στερηθῆναι, τοῦ μὲν μὴ ἐφικομένη, διότι μηδὲν ἦν, τοῦ δέ, διότι ὑπὸ τοῦ ποταμοῦ παρεσύρη.

πρὸς ἄνδρα πλεονέκτην ὁ λόγος εὐκαιρος.

ギリシア語散文イソップ集 (*Augustana* 集) に収められる話である。犬は肉を既に持った状態で登場し、川を渡っている。水面に映る肉片は自分のものよりも大きなものに見える。そして、その肉を奪ってやろうと、自分の肉片を捨てて跳びかかる。「川を渡っていた」とする点は (2) (3) と異なり、(1) と共通である。ただし、どのように渡っていたのかは明らかではない。一方で、水面に映った肉片の方が大きく見え、それを手に入れるために自身の持つ肉片を捨てて奪いにいく筋書きは、(2) (3) と共通する。

タウンゼントは、原典にハルム版ギリシア語散文イソップ集を含めている*¹²。ここで引用したテキストはハウストラト版であるが、字句上の違いは、3行目 δὲ αὐτῇ および4行目 μηδὲν ἦν, τοῦ δέ がハルム版ではそれぞれ δ' αὐτῇ および μηδὲ ἦν, τοῦ δ' となるのみで、解釈上の相違はない。タウンゼント版と比較してみると、タウンゼント版は、幾つかの点を除き、ほぼこのギリシア語原文を翻訳したものといえる。原文と大きく異なるのは、犬が「橋の上を渡る」点、水面に映る肉が自分の啜えた肉の「二倍の大きさ」に見えた点である。

(5) アプトニオス版 (Fab. Aphth. 35.)

ΜΥΘΟΣ Ο ΤΟΥ ΚΥΝΟΣ ΠΑΡΑΙΝΩΝ ΑΠΛΗΣΤΙΑΝ ΦΕΥΓΕΙΝ

κρέας ἀρπάσας τις κύων παρ' αὐτὴν διήει τὴν ὄχθην τινὸς ποταμοῦ. καὶ θεωρῶν τὴν

*¹¹ Luzzatto&La Penna(1986), p.78. ただしルツァットは本文に残している。

*¹² Townsend(1867), p.xxiii.

σκιάν διπλασίαν τοῖς νόμασιν, ὃ μὲν εἶχεν ἀφῆκε· πειρώμενος δὲ λαβεῖν τὸ μείζον
συνδιαμαρτάνει μετὰ τοῦ μετρίου τοῦ πλείονος.

[τὸ ἐν χερσὶ μικρὸν τοῦ ἐλπίζομένου μείζονος κρεῖσσον.]

4世紀後半に『修辞学初等教程』を著したアプトニオスであるが、彼の名のもとに伝わるイソップ集にも「犬とその影」が含まれている。アプトニオスの犬は、どこからか肉を奪ってきて、川の土手を進む。水面には「二倍の大きさ」の影が見える。そして、自分の肉を捨て、大きな肉を手に入れようとする。肉屋とは書かれないが、犬が肉をどこからか奪ってきて（ただし盗みにあたるかどうかは不明）、川のそばを通っている点、自分の肉を捨てて大きく見える肉を奪おうとする点は（3）と共通する。肉を奪う点を除けば、（2）とも共通である。教訓部分は、内容的には問題なさそうであるが、一部の写本に残るのみである*13。

タウンゼント版における「二倍の大きさ」に見える肉という表現には、このアプトニオス版との関係を窺える。というのは、タウンゼントが原典に挙げる1610年刊行のネヴェレ版イソップ集や1810年刊行のフリヤ版イソップ集にはアプトニオス集が収録されており、タウンゼントはアプトニオス版を参照可能だったからである*14。そうしてみると、タウンゼント版「犬とその影」は、（4）のギリシア語散文版に上記アプトニオス版の発想を加味して翻訳したもの、ということができる。

総括

古代における「犬とその影」の話は、中心部分の展開によって（1）と（2）（3）（4）（5）に分けられる。すなわち、前者は（A）水面に映る肉片の影を見て、その肉も手に入れようとした結果自分のものまで失くしてしまうという、犬が両方の肉を手に入れようとして失敗する展開、後者は（B）水面に映る肉片の影が自分のものよりも大きなものに見えたため、犬が自分の持つ肉を捨て、代わりに大きく見える方を手に入れようとして失敗する展開である。それぞれ（A）ラテン語系筋書き、（B）ギリシア語系筋書きということもできよう。

タウンゼント版は（4）を基軸としているため、（B）の展開に沿ったものとなっている。一方、ジェームズ版の中心部分の展開は（A）に従い、（1）を基軸としたものと読める。しかし、それだけではなく、ジェームズ版では、（3）のみに見られる「犬が肉屋から肉を盗む」表現が冒頭に加えられている。（3）をそのまま用いているわけでもないが、ジェームズ版の話の展開は、ファエドルス集とバプリオス集という、初期のイソップ集に残る話を組み合わせたものであり、古典的要素を混成したものとなる。

ところで、ジェームズは前書きで“The recent happy discovery of the long-lost Fables of

*13 Hausrath(1965), p.149 参照。

*14 アプトニオス版「犬とその影」の教訓部分について、ネヴェレ版やフリヤ版では記載されていない。

Babrius”と記している。ジェームズ本が刊行された1840年代は、バブリオス集が“発見”されて間もない時期であった。

1840年にフランス公教育省から稀覯本収集の依頼を受けたマケドニア人メナス Menas, M. が、1842年にアトス山のラブラ修道院図書館でバブリオスの写本を発見した^{*15}。しかし、写本そのものは購入できず、その代わりに、彼は自らの手で写本を筆写して持ち帰った。1844年、それをもとにボワソナード Boissonade, J.F. が最初の印刷本をパリで刊行した。さらに、翌年の1845年にはラハマン Lachmann, C. 版他数種、1846年にはルイス Lewis, G.C. 版など、バブリオス集の刊行本が相次いで世の中に出た^{*16}。

状況を鑑みるに、バブリオス集のアトス写本発見は当時一寸した事件であったといえる^{*17}。ジェームズは英国で刊行されたルイス本に言及しており^{*18}、自身のイソップ集を編集する上で、バブリオス集も参照していたことが分かる。ルイス本の刊行が1846年、ジェームズ本の刊行が1848年であるから、ジェームズは当時最新の古典研究の成果を取り入れていたといっても差し支えはない。また、バブリオス集そのものの英訳は、ルイス本を元にしたものが1860年に出版されているが^{*19}、それと比べても、ジェームズ本は一足早くバブリオス集を英語に取り込んだものといえる。

タウンゼントもまた、前書きでバブリオス集について言及している。しかも、ジェームズよりもページを割いて詳細に説明しており、参照元リストにはルイス版バブリオス集も挙げている^{*20}。しかし、タウンゼントは「犬とその影」の話でバブリオス版を利用しなかった。あるいは、ギリシア語版原典として散文版イソップ集の方を正統として扱った可能性もある。ともかくも、ジェームズが(1)に依拠しつつ(3)の一部を用いたのに対し、タウンゼントが(4)に依拠しつつ(5)の一部を用いたことで、結果として古典を参照した(A)(B)二通りの「犬とその影」の話が、19世紀半ば以降に英語で読まれることになったと考えられる。

次節で確認するとおり、ジェームズ版以前にも「犬が肉屋から肉を盗む」パターンは登場するが、古典を重視するジェームズの方針やファエドルスとの組み合わせからすると、ジェームズ版の「犬が肉屋から肉を盗む」点はバブリオス集の“発見”を反映したものと考えられる。そしてこの場合、渡部版もその延長線上に存在するのである。また、渡部版の「大きな肉」は、(B)に属する要素の混入である。(B)の筋書きでは、犬が自分の肉を捨てて大きな肉に交換しようとするのが期待されるが、渡部版では自分のものはその

*15 前章で扱ったアトス写本である。

*16 Rutherford(1883), p.lxviii. n.1. なお、写本そのものについては、その後メナスが入手に成功したものの、パリ王立図書館に購入を断られ、1857年に大英博物館に収められることになる。バブリオス集発見前後の状況に関しては、Irigoin(2003)がまとめている。

*17 Reynolds&Wilson (2013, p.200) では、“From the history of Greek scholarship in nineteenth century it is worth mentioning the discovery of the verse fables by Babrius”と述べられており、アトス写本発見が古典研究史上でも有意義なものであったことが窺える。

*18 James(1848), p.xvii.

*19 Davies(1860).

*20 Townsend(1867), pp.xvi-xx.

ままに大きな方も手に入れようとする (A) の筋書きとなるため、渡部版の犬は、ともすればジェームズ版よりも貪欲な犬ということになる。

他方、「犬が橋を渡る」点については、タウンゼント版でも犬は橋を渡っているものの、確認したとおり、古代の犬は橋を渡っていない。古代の犬は、川岸を歩くか、泳ぐか、あるいは曖昧な渡り方である。つまり、「橋を渡る」犬は、古典に由来するものではないといえる。その点は、挿絵はともかくも、ジェームズ本文は古典に従うものであり、一方、渡部版もタウンゼント版も、本来ならば渡らないはずの橋を、犬が渡るのである。

4. ジェームズとタウンゼントの参照元

中近世ヨーロッパにおける「犬とその影」の変容において、「犬が橋を渡る」話は、古くは12世紀末のマリー Marie de France 版で現れ、その後は15世紀末のイタリア語韻文によるズッコ Zucco 版 (1479年)、シュタインヘーヴェル Steinhöwel 集から派生した仏語のマショー Macho 版 (1483年) およびその英語訳のカクストン Caxton 版 (1484年) で現れるという^{*21}。したがって、「橋」の要素は中世以降の新しい要素であることは明らかであり、タウンゼント版の例は、その新しい要素が19世紀半ばにも残っていたことを示す。すべてを網羅的に扱うことは困難であるので、本節では、ジェームズが前書きで言及し、あるいはタウンゼントが自身のイソップ集の原典として挙げているイソップ集を取り上げて、彼らが何を元に話を構成したのか確認する。

両者がファエドルス・バブリオス以外に言及するイソップ集は次の通りである。ジェームズは、レストランジ・クロックソール・ドズリーの名に言及している。それぞれ、レストランジ L'Estrange 版イソップ集 (1692年)、クロックソール Croxall, S. 版イソップ集 (1722年)、ドズリー Dodsly, R. 版イソップ集 (1761年) を指す^{*22}。また、タウンゼントはネヴェレ Nevelet, I. N. (1610年)、フリア Furia, F. de (1810年)、ハルム Halm, C. (1851年) によるイソップ集を原典として挙げている。その一方で、クロックソール本やジェームズ本は批判の対象である^{*23}。

^{*21} 村上 (1996)・(1997)。中世フランスで生み出されたイソップ集は「イゾベ」と呼ばれる。マリー版イソップ集は『マリーのイゾベ』ともいわれ、マリーの記述から、その原本は同時代の英訳イソップ集が想定される。古代から中世フランスへの展開については月村 (1989) の議論が興味深い。シュタインヘーヴェル集は、シュタインヘーヴェル Steinhöwel, H. によって編纂され、1476年頃にウルムで刊行されたイソップ集。シュタインヘーヴェル集の構成については、小堀 (2001, pp.149-159) に詳しい。また、伊藤 (2009, p.3) が簡潔にまとめている。シュタインヘーヴェル集は幾度も再刊されており、派生版も多い。マショー本やカクストン本に関する伊藤 (2009, p. 3-4) の調査では、これらの刊本も1500年までに複数回版を重ねており、広く流布したことが分かる。

^{*22} ただし、いずれのイソップ集もしばしば再刊されており、ジェームズがどの版を参照したかは定かではない。

^{*23} Townsend(1867), pp. xx-xxi.

(6) ネヴェレ版

Κύων κρέας φερουσα.

ΚΥων κρέας ἔχουσα ποταμὸν διέβαινε. θεασαμένη δὲ τὴν σκιὰν ὑπέλαβε μείζονα κρέας ἔχουσαν. διόπερ ἀφεῖσα τὸ ἴδιον, ὥρμησεν ὡς τὰ ἐκείνης ἀφαιρησομένη. συνέβη δὲ αὐτὴν ἀμφοτέρων στειρηθῆναι, τοῦ μὲν μὴ ἐφικομένην, διὸ μηδὲν ἦν, τοῦ δὲ ὅτι ὑπὸ τοῦ ποταμοῦ παρεσύρει.

Επιμύθιον.

Ο λόγος πρὸς ἄνδρα πλεονέκτην εὐκαιρος.

Canicula carnem ferens.

Canicula carnem habens fluuium transnatabat, cuius vmbram conspicata canem maiorem arbitrata est carnem habere. omisso igitur proprio aggreditur tanquam illud illius raptura. Ambobus vero priuari Caniculam contigit, hoc quidem non nactam quoniam nihil erat. Illo vero, quoniam a fluuio ablatum est.

ADFABVLATIO.

Oratio in Auarum accomoda est.

1610年に刊行された本書は、スイスの学者ネヴェレ Nevelet, I.N. によって編纂されたイソップ集である。ネヴェレ本については、タウンゼントがこの時代最大のイソップ集として前書きで詳しく紹介しており、そのイソップ集の参照元としても挙げている*24。

本書にはギリシア語およびラテン語の話が含まれ、ギリシア語の話にはラテン語訳も附される。古代から16世紀頃までの既存のイソップ集を再編したものであり、のべ782篇の話が含まれる*25。また、はじめにプリスキアヌスとアプトニオスによる *Fabula / Μῦθος* の説明やフィロストラトスによる *Μῦθος* の説明が載せられており、巻末にはネヴェレによる注釈 *Notae* が附される。ネヴェレ本は17世紀を通じて幾度か再刊されており、当時広く読まれていたものと考えられる。

はじめの *Aesopi Fabulae* には297篇の話が含まれるが、前半はプラステス系イソッ

*24 Townsend(1867), pp.xiv-xvi.

*25 掲載順に、Aesopus (297話)、Aphthonius (40話)、Gabria (43話)、Babria (11話)、Phaedrus (90話)、Avianus (42話)、Anonymous (60話)、Abstemius (199話) による話である。Gabriaは、9世紀のイグナティウス Ignatius Diaconus による *Tetrasticha iambica* が、その名で伝わったものである。印刷本としては、アルドゥス版イソップ集 (1505年刊行) ではじめて採録される。Crusius(1897), pp.257-258 参照。Babriaについては、ネヴェレが韻律をもとに散在する話から抽出したもので、何らかのバブリオス集が発見されたわけではない。また、ここでの Anonymous はロムルス系ラテン語韻文イソップ集からの採録。「ロムルス集」は、ファエドルス集に由来するラテン語イソップ集であり、中世を通じてヨーロッパに広がり、散文・韻文ともに様々なバージョンが残る。ロムルス集他、中世ラテン語版各種テキストはエルビュー Hervieux, L. の *Les Fabulistes Latins* シリーズに収められている。また、Abstemiusは15世紀末に刊行されたイソップ集である。

プ集*²⁶、後半の 150 話から 297 話までは、*SEQVNTVR FABVLAE NVNQVAM Hactenus Editae.* と題される部分で、ネヴェレが写本から採録した、初出のギリシア語散文（およびラテン語訳）のイソップ集が示される。「犬とその影」の話は第 213 話として、この後半部分に含まれる。ネヴェレ版は、アプトニオス版を除けば、古代由来のギリシア語散文版「犬とその影」が提示される最初の事例でもある。

ネヴェレの採録したギリシア語散文版「犬とその影」は、「水の中」(κατὰ τοῦ ὕδατος) および「他の犬」(ἐτέραν κύνα) への言及がない他は、(4) のギリシア語散文版と概ね同じといえる。すなわち、肉を啜えた犬が川を渡っているとき、水面に映る肉の影に気付く。影の方が自分のものより大きく見えた犬は、自分の啜えた肉を自ら捨てて、影に襲いかかる。しかし、影を手に入れることはできず、もともと啜えていた肉も流されて失ってしまう。当然ながら、話で展開する筋書きはギリシア語系 (B) である。

なお、μείζονα κρέας ἔχουσιν は、現代の校訂版 (4) では μείζον κρέας ἔχουσιν と表記される部分である。ネヴェレ自身は、巻末の Notae において*²⁷、μείζονα κρέας ἔχουσιν) Deesse videtur vox κύνα. qua interserta legendum erit θεασαμένη δὲ τὴν σκιάν, κύνα ὑπέλαβε μείζον κρέας ἔχουσιν. と述べており、ラテン語訳 (canem maiorem arbitrata est carnem habere) はこの読みに対応したものとなっている。また、ネヴェレによる注記はないが、本文最後の παρεσύρει は、(4) では παρεσύρη であり、ネヴェレのラテン語訳を見ると彼も受け身で解釈しているようである。

このギリシア語版に附されるラテン語訳は、ほぼ素直に原文のギリシア語をラテン語に置き換えたものと読める。上記の修正と transnabat が川の渡り方に関する解釈を含む点を除けば、とくに訳者による話の改変はない。つまり、ラテン語によってギリシア語系の筋書きの話がそのまま示されるのである。

ネヴェレ本では、「犬とその影」の話はギリシア語散文版以外にも複数含まれている。以下、タイトルのみ挙げておく。

(p.349: Aphth.)

Μύθος τοῦ κυνός, παραινῶν ἀπληστίαν φεύγειν.

Fabula Canis, ad auaritiam fugiendam exhortans.

(p.373: Gabria)

Περὶ Κυνός καὶ εἰδώλου αὐτοῦ ἐν τῷ ὕδατι.

De Cane & imagine ipsius in aqua.

*²⁶ マクシムス・プラスデスによる 14 世紀半ばのギリシア語散文イソップ集をもとにしたイソップ集。1480 年にアックルシウス Accrusius, B. によって印刷本が刊行されている。この時期までの散文ギリシア語イソップ集は基本的にプラスデス系のものである。なお、プラスデス系集成には「犬とその影」の話は含まれない。

*²⁷ Nevelet(1610), pp.627-628.

(p.392: Phaedrus)

Canis per fluium carnem ferens.

(p.489: Anonymous)

De Cane & Carne.

Gabria 版と Anonymous 版「犬とその影」は、ラテン語系の筋書きを示す話である。Gabria 版「犬とその影」は 1505 年刊行のアルドゥス版イソップ集に含まれ、話のタイトルも同じである。筆者が確認できた範囲では、アルドゥス版のタイトルは「犬とその影」と題して印刷される最初の事例である。

(7) レストランジ版

A DOG AND A SHADOW

As a *Dog* was crossing a River with a Morsel of good Flesh in his Mouth, he saw (as he thought) Another Dog under the Water, upon the very same Adventure. He never consider'd that the One was only the *Image* of the Other; but out of a Greediness to get Both, he Chops at the *Shadow*, and Loses the *Substance*.

THE MORAL. All Covet, All Lose; which may serve for a *Reproof* to Those that Govern their Lives by *Fancy* and *Appetite*, without Consulting the *Honour*, and *Justice* of the *Case*.

レストランジ版イソップ集は、1692 年に刊行された。500 話を含み、英語イソップ集としては、当時最大のものであった。19 世紀後半のジェームズもレストランジ本を参照したことを前書きに記しているが^{*28}、簡単に調べただけでも、刊行後から 20 世紀に至るまで幾度も再刊されていることを確認できる^{*29}。編者のレストランジ L'Estrange, R. は、17 世紀後半に英国の検閲官を務めた人物であり、当時著名な出版人でもあった。

レストランジの前書きによると、もともと教育的意図がイソップ集編纂の背景に含まれる。はじめ彼の手元にあったのは学校教育用ラテン語イソップ集 *Aesopi Phrygis Fabulae* だけであり、当初の考えは、その教材の英語訳を作ろうというものであったらしい。しかし、実際に作業を進めるなかで、レストランジは教材版だけでは不十分と考えるようになった。そこで、それぞれの話について、複数のイソップ集を参照しながら、レストランジが良いと考える話を構成する手法を選択したのだという。彼が挙げるイソップ集は、ラテン語・フランス語のものを中心に、17 世紀後半までに登場した主要なイソップ集が含

^{*28} James(1848), p.xviii.

^{*29} Cottegnies(2008, p.132)によると、レストランジ本はクロックソール本の登場まで英語イソップ集の標準となっていたようである。

まれており、レストランジが古代から近世にかけての種々のバージョンを参照していたことを窺える^{*30}。それらをふまえた上でのレストランジのイソップ集は、ただの翻訳本ではなく、本文まで含めて、編者であるレストランジの意識を色濃く反映したものである。なお、レストランジ本では、201話までが *Aesop's Fables* と題される。それ以降は、作家毎に話が纏められ、全体で500話となる。

さて、レストランジ版「犬とその影」の話を確認すると、ラテン語系(A)の筋書きを、自身の言葉で簡潔にまとめたものである。また、*Shadow* と *Substance* の対比は、既存のイソップ集をふまえたものであった^{*31}。また、「すべてを望み、すべてを失う」とする教訓部は話の筋書きに適うものであり^{*32}、教訓部後半はレストランジ自身の見解であろう。なお、レストランジ版イソップ集では、「犬とその影」を含め、全ての話について、本文と教訓部に加えて、レストランジによる省察 reflections が記される。レストランジ本では、この省察部分が特徴的である。

(8) クロックソール版

The Dog and the Shadow.

A DOG, crossing a little Rivulet with a Piece of Flesh in his Mouth, saw his own Shadow represented in the clear Mirrour of the limpid Stream; and believing it to be another Dog, who was carrying another Piece of Flesh, he could not forbear catching at it; but was so far from getting any Thing by his greedy Design, that he dropt the Piece he had in his Mouth, which immediately sunk to the Bottom, and was irrecoverably lost.

クロックソール Croxall, S. のイソップ集は、1722年に刊行された。タウンゼントが、当時普及している主要な英語イソップ集としてジェームズ本とともにその名を挙げる本で

^{*30} レストランジが挙げる参照元は、“Phaedrus, Camerarius, Avienus, Neveletus, Aphthonius, Gabrias, or Babrias, Baudoin, La Fontaine, Aesope en Belle Humeur, Audin, etc.”である。Gabrias, Babrias としてギリシア語版も含まれるが、ネヴェレ本等でラテン語訳も参照可能であった。Camerarius は16世紀半ばに刊行されたラテン語イソップ集、Baudoin 以下は17世紀に刊行されたフランス語イソップ集である。Cottegnies(2008, p.134)は、レストランジがとくにフランス語イソップ集を参照していた可能性を指摘している。

^{*31} この対比は17世紀半ばのオギルビー Ogilby, J. およびバルロー Barlow, F. による英語版「犬とその影」で登場している。オギルビー本は1651年、バルロー本は1666年にそれぞれ初版が刊行された。バルロー本は、各話について英語・フランス語・ラテン語の三言語版が並置される体裁である。バルロー本は1687年に改訂版が刊行されるが、その際に各話の英語版・フランス語版は差し替えられている。また、オギルビー本・バルロー本ともに秀麗な挿絵が附されたイソップ集である。ただし、両者についてレストランジは前書きで言及していない。

^{*32} 「すべてを望み、すべてを失う」と似た教訓は、1690年刊行の Bruslé 版 (*Aesope en Belle Humeur* とレストランジは表記する) で登場している。Bruslé 版では“Qui veut tout avoir, n’a bien souvent rien.”。すべてを失うというよりは、何も手にできない、という意味であり、レストランジと同一ではないが、全てを手に入れようとする発想は共通する。筆者が確認した範囲では、この発想自体、Bruslé 版ではじめて登場する。

ある*33。18世紀から19世紀にかけて、ほぼ数年に一度再刊されており、タウンゼントが指摘するとおり、その普及の有様を窺える。

前書きを見ると、クロックソールはレストランジ本を非常に意識していたようである。レストランジは各話に *reflection* を附したが、クロックソールは *application* を附している。他方、クロックソールは、レストランジほど見解を書かないことを方針とした*34。

クロックソール版「犬とその影」の話は、ラテン語系(A)の展開を示す。また、*Mirror of the limpid Stream* などの表現からみても、(1)のファエドルス版との関係を窺える本文である。ただし、犬は川を泳いで渡るのではなく、小さな橋を渡る。さらに、肉片は水底に沈んでしまい、橋上の犬はそれを取ることができない。したがって、内容的には、古典版への回帰が行われているようにも読めるが、一方で「橋」などの新しい要素も盛り込まれており、クロックソールの独自版となる。なお、クロックソール版には挿絵が附されている(図6)。話のとおり、肉を啜えて橋を渡る犬が描かれる。



図6 クロックソール版挿絵, 1722.

クロックソール本は度々再刊されたが、19世紀のものには、クロックソールの本文に新しい挿絵を附したイソップ集も見られる*35。また、タウンゼントがクロックソールの *application* を書き直し、さらに挿絵が差し替えられたものが1866年(タウンゼント本刊行の前年)に刊行されており、19世紀後半でも多様な形態でクロックソールの本文が読まれた状況を確認できる。

(9) ドズリー版

The Dog and the Shadow.

AN hungry Spaniel, having stolen a piece of flesh from a butchers's shop was carrying it across a river. The water being clear, and the sun shining brightly, he saw his own Image in the stream, and fancied it to be another dog, with a more delicious morsel: upon which, *unjustly* and *greedily* opening his jaws to snatch at the *shadow*, he lost the *substance*.

(An over-greedy disposition often subjects us to lose what we already possess.)

1761年に刊行された、英国の出版業者ドズリー Dodsley, R. によるイソップ集である。

*33 Townsend(1867), p.xx.

*34 Croxall(1722), *Preface*.

*35 Bewick(1818).

全3巻からなり、第1巻は *from the Ancients* (54話)、第2巻は *from the Moderns* (53話)、第3巻は *Newly invented* (52話) と題され、第3巻では彼独自の話がまとめられている。また、ジェームズはドズリー本を参照して、自身のイソップ集に *Modern Fables* を数話採用している^{*36}。ドズリー本もまた、初刊以降19世紀にかけて幾度も再刊されており、レストランジ本やクロックソール本同様に、当時広く普及したイソップ集のひとつであったと考えられる。

ドズリー版「犬とその影」の話は第1巻に含まれるが、本文には様々なバージョンから種々の要素が盛り込まれ、さらに彼独自の要素が加えられる。まず冒頭で飢えた犬 *Spaniel* が肉屋から肉を盗む。これは17世紀半ばに刊行されたイソップ集にも現われる要素である^{*37}。犬がどのように川を渡っているかは明記されない。澄んだ水はクロックソール版にも見られる要素である。一方で、輝く太陽に言及されるが、これは16世紀のイソップ集で登場した要素である^{*38}。水面に映る犬を別の犬と勘違いする点は全てに共通するが、自身の啜った肉との比較はギリシア系筋書き (B) といえる。ただし、ギリシア系筋書きでは大きさが問題となるが、ドズリー版は「美味しさ」が問題とされる。これはドズリー版独自の発想といえる。続く *unjustly and greedily opening* という表記も、見た限りではドズリー独自のものであるが、最後の *shadow* と *substance* の対比は、レストランジ版あるいはそれ以前に登場した表現をふまえたものである。最終的には、ドズリー版はラテン語系 (A) の筋書きに沿ったものとなっている。

「肉屋から肉を盗む」点について、17世紀半ばのバルロー版で登場した要素であるものの、それがどこに由来するか不明である^{*39}。ただ、アプトニオス版では肉はどこからか奪ったものであるから、犬が肉を手に入れた場所を説明する場合に、「肉屋から盗む」とするのは奇抜な発想でもない。ギリシア語散文イソップ集には「犬と肉屋」と題される話が含まれており、犬が肉屋から心臓 (肉) を盗んで逃げる^{*40}。つまり、犬と肉屋の組み合わせも、バブリオス版「犬とその影」に限定されないのである。バブリオス版の影響がな

^{*36} James(1848), p.xviii.

^{*37} *Spaniel* はオギルビー版に登場。肉屋から肉を盗む犬はバルロー本初版のフランス語版で登場する。そこでは “Vn Chien passant vn jour deuant vne boucherie et estant pressé de faim; il derobait vne piece de chair, et comme le boucher le poursuiuoit à grand’ force; il se jetta dans vn fleuve prochain; Et comme il le passoit a nage ...” である。また、バルロー本初版の英語版では “An Hungry Dog” であるから、ドズリーの犬が *hungry* である点もバルロー本初版を踏まえたものように見える。バルロー本改訂版ではこれらの要素は失われる。

^{*38} 1515年刊行のドルピウス版イソップ集で登場する。ドルピウス版「犬とその影」は “De Cane & Vmbra. Canis tranans fluuium, rictu uehebat carnem. Splendente sole, ita ut fit, umbra carnis lucebat in aquis ...” と始まる。輝く太陽のために水面に影が映るのである。ドルピウス集は16世紀中に幾度も版を重ねており、当時広く読まれたものと考えられる。前註のバルロー版「犬とその影」のラテン語部分はドルピウス版を元にしたものであり、また、フランス語部分でも太陽への言及がある。また、レストランジが参照したという教科書はドルピウス集を利用したものであり、17世紀末の時点でもドルピウス版が読まれる環境にあった。

^{*39} 上記註37参照。バルロー版での独自の翻案の可能性もあるが詳細は不明。バブリオス集“発見”前であるため、バブリオス版に基づくものではないと考えられる。

^{*40} *Aesopica fab.254*. “ΚΥΩΝ ΚΑΙ ΜΑΓΕΙΡΟΣ: κύων εἰς τι μαγειρεῖον εἰσελθοῦσα τοῦ μαγειροῦ ἀσχολουμένου καρδίαν ἀρπάσασα ἔφυγεν. ...” (ハウスラト版では134番。)

くとも、話の変容の過程でバブリオスとは別系統の「肉屋から肉を盗む犬」が生み出される可能性は十分に考えられる。もちろん、ドズリー本人による発案であることも否定しがたいが、ドズリー版に含まれる他の既存要素の関連を考えると、この点はバルロー版を参照したものと推定する。

ドズリー版「犬とその影」は、Ancient Fable として括られる話であるものの、確認すると、当時参照可能であったと思しき 18 世紀頃までの各種「犬とその影」をふまえたうえで、さらにドズリー独自の要素を加えて構成された、まさにドズリー版といえるものに仕上がっているのである。しかしながら、一般的な読者は、提示される古代という括りのために、この新しいドズリー版を古典的話として読んでいたのではないかと考えられる。

また、ドズリー版には小さな図案が附されている(図7)^{*41}。図の形式はクロックソール版に倣ったものに見える。犬は肉を啜えて橋を渡っている。つまり、本文の across a river について、「橋を渡って」であることが暗に示され、図案が読者の本文解釈を助けることになる。



図7 ドズリー版図案, 1761.

(10) フリア版等

Fab. CCXIX. Κύων και εἶδωλον αὐτοῦ.

本文はアプトニオス版(5)

Fab. CCXXXIX. Κύων και βρώμα. (シュンティパス版)

κύων ἀρπάσας βρώμα ἐκ μακελλίου ὄχετο φυγὰς ἐκεῖθεν καὶ ἔφθασεν ἐπὶ τινα ποταμόν. περαιούμενος δὲ αὐτὸν ὄρα ἐν τοῖς ὕδασι τὴν τοῦ βρώματος σκιὰν πολλῶ οὖσαν, οὗ ἔφερον, εὐμεγεθεστέραν. καὶ τοῦ στόματος ἀπορρίψας τὸ βρώμα ἐπὶ τὴν ὄραθεισαν αὐτοῦ σκιὰν κατηπείγεται. τῆς δὲ ἀφανοῦς γενομένης στραφεὶς ὁ κύων τὸ ἀπορριφέν ἄραι οὐδὲν ἐφεῦρε τὸ σύνολον. καὶ γὰρ ἐκεῖνο παρά τινος καταπτάντος κόρακος εὐθὺς ἠρπάγη καὶ κατεβρώθη. εἶτα ὁ κύων ἑαυτὸν ἐταλάνιζε· “τί ἄρα πέπονθα” λέγων, “ὅτι, ὃ εἶχον, ἀφρόνως καταλιπὼν ἐφ’ ἕτερον ἀφανὲς ἠπειγόμενῃ κάκεινου ἀποτυχὼν καὶ τοῦ προτέρου ἐξέπεσον.”

ὁ μῦθος ἐλέγχει τοὺς ἀκορέστως ἔχοντας καὶ τῶν περιττῶν ὀρεγομένους.

イタリアの文献学者フリヤ Furia, F. del によるギリシア語イソップ集で、タウンゼントが参照したイソップ集として挙げていたものの一つである。タウンゼントは 1810 年にライプチヒで刊行されたものを挙げてている^{*42}。フリヤ本は、フィレンツェの修道院が所蔵していた写本を中心に、プラヌデスの時代までのギリシア語による複数のイソップ集を纏

^{*41} ドズリー本では各話に挿絵が附されるのではなく、12 話毎にこのような図案がまとめられて掲載される。

^{*42} 調べてみると、その前年 1809 年にまず二巻本としてフィレンツェで刊行されたものが見つかる。1810 年版がギリシア語のみであるのに対して、1809 年版はラテン語対訳本となっている。

めたものである。さらに古典作品中に登場する話も採録し、全部で423話を含む。

フリア本には、アプトニオス版とシュンティパス版の二つの「犬とその影」の話が含まれる。フリアが扱った写本には「犬とその影」は含まれなかったようである。また、フリア本はネヴェレ本の抄録を含むが、なぜか特色あるネヴェレ版「犬とその影」の話は採録されていない^{*43}。

「シュンティパス集」は、11世紀頃にビザンツでシリア語からギリシア語へと翻訳されたものと考えられる。もともと「賢者シュンティパスの物語」という、インドの賢人による説話を起源とする物語が東方から伝わっており、中世には種々の言語に翻訳されて広まっていた。「シュンティパス集」はその人物の名に帰されたイソップ集である。「シュンティパス集」については、「イソップの話」が東方に伝わった後に、再度ギリシアに戻ったとも言えるが、当時の認識として、「イソップの話」が賢人に帰される素材であったことも示唆する。

シュンティパス版「犬とその影」前半部分の展開は、バブリオス版の影響が見られる。まず、お店から肉を奪った犬が、逃げて川の側までやって来る。川を渡っているときに、水に自分のものよりも大きな肉片の影を目にする。そして、自身のものを放して、影を手に入れようと襲いかかって失敗する。しかし、後半部分はシュンティパス版特有のものである。犬が手放した肉片を、近くにいた鳥がすばやく掠め取って食べてしまい、それを見た犬が自分の愚行に気付いて嘆くことになる。後半部分については、仏教經典の説話（ジャータカ）に以下の筋書きの話が存在するようである^{*44}。ジャッカルが肉を啜えて川を渡っていた。川を泳ぐ魚を捕まえようとして口を開けたところ、鷺が肉を奪ってしまい、ジャッカルは何も手に入れられなかった。ここまでのギリシア語版およびラテン語版においては、水面に影が映り、犬は啜えた肉を失うだけで他の動物は登場しない。シュンティパス版は、何らかの経緯で東方に伝わったバブリオスの話に、インド由来の話が加味されて翻案されたものと考えられる。

ただ、シュンティパス版「犬とその影」の話は非常に特徴的な話であるものの、その他の「犬とその影」の話にその影響が見られない点も注意が必要である。アプトニオス集は既にネヴェレ本にも含まれていたが、シュンティパス集は1781年にライプチヒで刊行されたマッタイ Matthäi, C. F. von による校訂本が最初の印刷本である。したがって、フリア本に採録されたものは、当時としてはまだ新しいものでもあった。

また、フリア本の翌年（あるいはライプチヒ版フリア本と同年）、1810年に刊行されたギリシア人文献学者コライス Korais, A. によるイソップ集もシュンティパス集を含むものであった^{*45}。コライス本の「犬とその影」を見ると、各種ギリシア語版「犬とその影」の話が採録されている。順に、ネヴェレ本にも見られたギリシア語散文版、ギリシア語散文

^{*43} ネヴェレ版「犬とその影」は213話。前後の209、210、211、212、214、215、216、217話は続けて含まれるので、213話だけ外されているようにも見える。

^{*44} ただし、この粗筋は Jacobs(1889, pp.58-60) を参照した。

^{*45} 現在のハウストラ本に含まれるシュンティパス集の各話には、コライス本の該当箇所が提示されている。

の別バージョン、テオン版、*Tetrasticha iambica* 版、シュンティパス版、アプトニオス版である。シュンティパス版以外は出典が明記されていない点は注意が必要である。ほぼギリシア語系「犬とその影」を網羅しているが、1810年はまだバブリオス集の“発見”前であり、バブリオス版は含まれていない。なお、コライス本の形式は、各話のタイトルのもとに各種バージョンが集められる形（散文版に続けて ΑΑΛΩΣ として別バージョンを示す）となっており、各バージョンの一覧性が向上している。この形式自体は18世紀に登場したものである。

タウンゼントがネヴェレ本、フリア本とともに挙げるギリシア語散文系イソップ集の原典が、1852年に刊行されたハルム版イソップ集である^{*46}。ハルム本は426話を含み、多数の写本を系統立てて分析したシャンブリー本の登場まで、古代ギリシア語による網羅的イソップ集として広く用いられた^{*47}。ハルム本は、フリア本およびコライス本をふまえたもので、話の掲載順はタイトルのアルファベット順とされ、別バージョンの示し方はコライス本の方式を踏襲した。とはいえ、ハルム本の「犬とその影」をみると、掲載されるのはギリシア語散文版(4)のみであり、別バージョンはひとつも採用されていない。ハルム本のみ参照した場合、「犬とその影」の話は、ギリシア語散文版のひとつに集約することになる。

総括

ジェームズとタウンゼントは17世紀以降のイソップ集を挙げるが、両者は性質が異なるイソップ集を利用したことが分かる。すなわち、既存の話を集めた体裁のものと、既存の話を利用して編者が新たに独自のイソップ集として作り出したもの、である。本章で確認した範囲では、前者を原典系イソップ集、後者を翻訳系イソップ集と呼ぶこともできる。そして、両者に共通するのは、いずれも教訓を意識した「寓話集」として編まれている点である。

タウンゼントが当時最大のイソップ集として評価するネヴェレ本は、古代から15世紀末頃までのイソップ集を纏めた、ひとつの集大成であった。とくに *FABVLAE NVNQVAM Hactenus Editae* と題する箇所は、ネヴェレ自身の写本研究に基づくものであり、一種の研究成果であったといえる。ネヴェレ本は各種イソップ集を含むが、写本に残るギリシア語散文イソップ集は *Aesopi Fabulae* として纏められている。ネヴェレ本を原典系イソップ集と考えると、ネヴェレ本以降の原典系イソップ集は、基本的にギリシア語版のみを扱うものとなる。ネヴェレ本の場合は、ギリシア語・ラテン語さらには15世紀末に刊行されたラテン語イソップ集まで含むため、多少色合いが異なるが、既存の話に視線を向ける姿勢は共通である。

ネヴェレ本で興味深いのは、はじめにプリスキアヌスとアプトニオスによる *fabula* /

^{*46} タウンゼントは1851年と記しているが、おそらく1852年の誤り。

^{*47} Chambry(1925-6). 1927年には、二巻本を一冊にまとめた改訂普及版が登場する。

μῦθοςの説明やフィロストラトスによる μῦθοςの説明が載せられている点である*48。プリスキアヌスやアプトニオスの議論については前章で検討したが、フィロストラトスの説明は『絵画論』*Imagines*に含まれるものである*49。『絵画論』は、種々の絵画の解説を子供向けに語る体裁をとる著作であるが、ここではイソップを中心に動物たちが囲む絵の説明が与えられ、それに付随してイソップが語る μῦθοςについても説明される。フィロストラトスの説明では、「イソップの話」は人間に関わるあらゆる事柄が語られるものであり、それによって子供たちが人生の諸事を学ぶものである。ホメロスやヘシオドス、アルキロコスの名前に言及する点など、フィロストラトスの説明には『修辞学初等教程』との共通項が見られるものの、説明自体は「イソップの話」の倫理的側面を強調するものである。

ネヴェレ本の *Aesopi Fabulae* では、教訓部分を提示するにあたって、ギリシア語部分では Επιμύθιον、ラテン語部分では AFFABVLATIO または ADFABVLATIO と表記される*50。これらは『修辞学初等教程』によって説明が与えられる語彙であり、その形式がネヴェレ本でも用いられたことになる。古代の『修辞学初等教程』における議論が、17世紀初頭においても「イソップの話」を理解する枠組みとして利用され、同時に、それらの議論を適用する形で「イソップの話」が提示されるのである。また、タウンゼントが参照した19世紀の校訂本は、『修辞学初等教程』の議論を提示して「イソップの話」の意味づけを行うことはしないものの、基本的に本文+後辞の形式を持ち、ギリシア語系イソップ集に関するネヴェレ以降の研究成果を反映したものとなっている。

一方、ジェームズが言及するレストランジ本は、多数のイソップ集を元にした翻訳系イソップ集である。とりわけ *Aesop's Fables* と題される部分は、作家名付きで提示される部分に比べ、本文まで自由に構成されているように見える。これは、本節で取り上げた3つの翻訳系イソップ集すべてに共通する特徴でもある。また、*Aesop's Fables* に関しては、いずれの翻訳本においても、イソップが作った話の集合としてではなく、種々の話がイソップの名のもとに積み重ねられた集合として理解される。翻訳系イソップ集の個々の話に見られる自由さは、こうした古来のイソップ集に対する認識と関わるものでもあろう。

レストランジはネヴェレ本を含め複数の参照元を挙げており、当時参照可能であった主要なイソップ集に目を通していたことが分かる。クロックソールもドズリーも、「犬とその影」の構成を考えると、やはり複数の参照元を持っていたと推測できる。ここで重要なのは、彼らがある話を提示するにあたって、何か一つのイソップ集をもとに敷衍・翻案して自身の話を作り出しているのではなく、その時点で参照可能な既存の話を十分に意識して、その要素を取り込みつつ独自版として再生産していることである。この点では、ドズ

*48 なお、これら3点は、1505年刊行のアルドゥス本ではじめて掲載された。その形式をネヴェレが引き継いだものである。

*49 Philostr. *Im.* 1.3.

*50 ADFABVLATIO は *Aesopi Fabulae* 後半のネヴェレが独自に編纂した部分で用いられている。前半部分は AFFABVLATIO であるが、これはアルドゥス版を踏襲する。その他の箇所に関しては、それぞれの編者の形式に拠るものとなる。

リー版「犬とその影」はそうした手法のひとつの到達点ともいえる構成となっている。

しかしこの場合、「イソップの話」という枠組みにおいて、既存の話が編者・時代・言語・形式などを超えて、素材として同列化することになる。そして、各イソップ集編集時に取捨選択が行われ、それぞれの編者の手で個々の話に纏められるのである。ドズリーは *Ancient Fable* として「古代」を前面に出すが、これは古代のイソップ集にも含まれる話という程度の意味合いであり、実際に提示されるのは、既存の話をふまえて、その時点で創出可能な新しい話である。英語という点も含め、これらは同時代の読者に向けて提示された話といえるが、それと同時に、そこで生み出された話は既存の話となり、次の話を生み出す素材ともなる。

ジェームズやタウンゼントが参照元として選択したイソップ集は以上のものであったが、両者がともに「原典」からの翻訳を意識している点で、それ以前の翻訳系イソップ集と差別化が図られていた。これは、当時のアトス写本発見などを含めた、古典研究の一環としてのイソップ研究の進展も背景にあったのではないかと考えられる。19世紀半ばの状況として、従来の翻訳系イソップ集に加え、ギリシア語原典系イソップ集も充実しつつあり、ジェームズやタウンゼントのイソップ集が生み出される環境が整ってきていたのである*⁵¹。

5. 再読：明治初期の「犬とその影」

ここまでをふまえて、改めてジェームズ版とタウンゼント版を見直し、最後に渡部版を読み直して、渡部版の在り方を検討する。(短い話なので、再度引用する)

(11) ジェームズ版

FABLE 24.—THE DOG AND THE SHADOW

A Dog had stolen a piece of meat out of a butcher's shop, and was crossing a river on his way home, when he saw his own shadow reflected in the stream below. Thinking that it was another dog with another piece of meat, he resolved to make himself master of that also; but in snapping at the supposed treasure, he dropped the bit he was carrying, and so lost all.

Grasp at the shadow and lose the substance—the common fate of those who hazard a real blessing for some visionary good.

ジェームズ版の筋書きは、冒頭がバブリオス版、後半はファエドルス版を参照したもの

*⁵¹ なお、17～19世紀の英語イソップ集については、Lewis(1996), Loveridge(1998), Dölvers(1997)などが論じている。この時期、本節で扱ったものを含め、多くのイソップ集が生み出されており、「イソップの話」が作家たちの関心を得ていた様子を窺える。ジェームズやタウンゼントはそれらのイソップ集の中から自身の参照元を選別したことになるが、その基準が古代の「イソップの話」に目を向けるものであったといえる。

であろう。話の展開は古典に由来する話の混成版となっている。しかし、本文はファエドルス・バブリオスの完全な翻訳というわけではない。犬が川を渡る点はバブリオスと異なり、ギリシア語散文版、あるいはジェームズが言及する17世紀以降のイソップ集でも共通の特徴である。また、肉屋から肉を盗む点はドズリー版で示されていたが、バブリオス集“発見”までは「新しい」要素であり、バブリオス版による裏付けがなければ、“Chiefly from original sources”を謳うジェームズは採用しなかったのではないかと考えられる。一方、教訓部の shadow と substance の対比は、17世紀半ばに登場し、レストランジ版やドズリー版にも見られる表現である。ジェームズ版もそれを踏襲したものといえる。

したがって、ジェームズの示す「犬とその影」の話は、古代のみならず、近世以降の「犬とその影」も息づいた、ジェームズの独自版として提示されるのである。

(12) タウンゼント版

THE DOG AND THE SHADOW.

A Dog, crossing a bridge over a stream with a piece of flesh in his mouth, saw his own shadow in the water, and took it for that of another Dog, with a piece of meat double his own in size. He therefore let go his own, and fiercely attacked the other Dog, to get his larger piece from him. He thus lost both: that which he grasped at in the water, because it was a shadow; and his own, because the stream swept it away.

ジェームズ版に対して、タウンゼント版はギリシア語散文版とアプトニオス版を利用したものとなっている。タウンゼントはフリヤ本を参考文献に挙げており、さらには、近い時期にハルム本も刊行されているため、ギリシア語散文版を参照しやすい状況にあった。ジェームズの場合はバブリオス集が注目すべき対象であり、タウンゼントはギリシア語原典として散文版を重視したということでもあろう。英語本文に関しては、基本的にギリシア語散文版とアプトニオス版を合わせた翻訳と評価できるものであり、ジェームズ版のような自由さはない。したがって、タウンゼント版はジェームズ版よりも原典に従うものといえるが、二つの話を組み合わせる発想は、当時の翻訳系イソップ集にも通じるものである。

そしてまた、「橋を渡る」犬は古代の「犬とその影」の話には登場しない要素である。タウンゼントの方針は、可能な限り原典からの翻訳を目指したものであったが、それに関わらず、タウンゼントが橋が登場させたことは、いわば原典主義的なタウンゼントが犬に橋を渡らせてしまうほど、19世紀半ばには「橋を渡る犬」が一般化していたことを示唆しているのではないか。このことは、本文に橋が登場しないジェームズ版において、挿絵では橋が描かれる点にも現われている^{*52}。その点では、タウンゼントも、同時代の「犬とそ

^{*52} 筆者が確認できた範囲では、17世紀後半以降の「犬とその影」の挿絵は、本文とは無関係に、多くが橋を渡る図案となっている。

の影」の在り方と無関係ではいられなかったということであろう。

以上のジェームズ版やタウンゼント版を土台としつつ、渡部温が独自の要素を追加して構成したものが渡部版「犬とその影」である。既に指摘したとおり、バブリオス集およびファエドルス集のみならず、ジェームズ版には登場しないギリシア語系イソップ集の要素まで含まれる。

(13) 渡部版

第十八 犬と牛肉の話

犬。肉舗より肉一塊盗出し。引くはへたるまゝ溝をわたるとて橋の中ほどに至りたる時。其影の水へ写れるを見て。他の犬己の銜居るより大きな肉を銜居るよと心得。夫をもまた吾ものにせんものをと。水に写れる肉にくらひ付しに。今まで己が銜し肉水底に沈み。前に得しものをさへ。一時に併せ失ひけるとぞ
 諺に。影を握むで。実を失ふといふ事あり。凡世の中の人々は。浮雲たる富を慕ひては。固有せる真の宝を失ふ 浅ましき事ならずや

さて、改めて渡部版をジェームズ版と比較してみると、(イ)「引くはへたるまゝ」(ロ)「橋の中ほどに至りたる時」(ハ)「大きな肉」(ニ)「水底に沈み」(ホ)「浅ましき事ならずや」が渡部版で追加された主な要素といえる。(イ)について、ジェームズ版では、犬は肉を盗むが、(手段は限られるとはいえ)その肉の運び方は記されていない。たとえばタウンゼント版では *in his mouth* と書かれ、口に咥えていることが示される。その点で、(イ)はジェームズ版の曖昧な箇所を渡部が説明を加えたものといえる。(ロ)は、挿絵も含めると、18世紀以降の英語版「犬とその影」に共通する要素である。渡部が「橋」を渡る英語版を参照できたことに疑いはないが、「中ほどに至り」という表現は挿絵の影響も窺わせる。(ハ)は、ラテン語系筋書き(A)に対するギリシア系筋書き(B)の要素の混入である。いずれも古典的要素であるが、両者が組み合わせられることで、新しい展開が創出されるのである。この発想自体はドズリー版にも見られたが、同一のものではない。(ニ)は、クロックソール版においても登場する表現である。クロックソール本は19世紀半ばになっても入手可能な状況であり、さらに同時期にはタウンゼントが関わるクロックソール本も存在するため、言及はされていないものの、渡部が参照できた可能性も皆無ではない。あくまで推測の域を出ないが、「橋の上」で落した肉が「水底に沈む」展開がクロックソールならではあることをふまえると、(ロ)についても、クロックソール版の影響を考えられるのではないか。この点は、明治初期の日本でどのイソップ集が参照可能であったか、すなわち西洋から何が持ち込まれていたか、という問題と関わるものである。(ホ)は、渡部の寸評ともいえるべき追記であろう。

これらの要素の組み合わせにより、渡部版「犬とその影」は、ジェームズ版を越えて、

渡部による新規の「犬とその影」として提示されるのである*53。

6. 総括

渡部温は翻訳者である。『通俗伊蘇普物語』の翻訳方針は、本章第2節においても触れたとおり、例言で示されていた。

○ 譯書は原文の面目を改めざるを以て尊とする事は論を俟ず。されど予が此譯述は意味徹底を旨と爲なれば。前後の文氣と斡旋轉換の勢とにより。文を辞に代え辞を文に換え。大小段落を前後にする等の事ありて。原文に離合して書取りたり。看るもの請ふ疑ふ事なかれ。

○ 又井と譯すべき字を大溝と譯し。亡牛と譯すべき處を家牛と譯したる類少なからず。是等は話頭の都合により。敢て原字に拘泥せず。看官一を執て論ずる事なくして可なり。

渡部は当初から原文をそのまま翻訳するものではないことを断っている。しかし、「犬とその影」で確認したように、実際には、彼の示す翻訳方針では説明できない話が語られる。このことは、渡部が原文を自由に翻案したことではなく、彼が複数の参照元を持っていたことに由来すると考えられる。その点では、渡部はただの翻訳者ではない。

渡部の手法は、彼が参照したジェームズ本やタウンゼント本を含め、翻訳版イソップ集の手法を踏襲するものであり、本章で確認した17世紀以降のとくに英語イソップ集に見られるイソップ集編集の精神を受け継ぐものであった。また、渡部の場合、直接ラテン語やギリシア語の原典を扱ったわけではないが、ジェームズやタウンゼントを参照できたことにより、間接的に当時最新の古代のイソップ集を反映することも可能となっていた。そうした点では、『通俗伊蘇普物語』は、近代までのイソップ受容を背景として、明治初期の日本の読者を企図した日本版イソップ集として、日本人の手で新たに生み出されたものであった。

本章では古代から近代まで、渡部版に至る各種「犬とその影」を取り上げてきた。網羅的に全てのバージョンを扱ったわけではないが、古代から共通するのは、それぞれ既存の話をふまえつつ、各自の「犬とその影」が語られる点である。さらに、過去に生み出され

*53 また、『通俗伊蘇普物語』に含まれる各話の標題とジェームズ版の英文タイトルを比較すると、渡部は重複するものを除き、基本的に英文タイトルに準拠した日本語標題をつけている。一方、この話の原本英文タイトルは THE DOG AND THE SHADOW であり、重複も見られないため、渡部が附した「犬と牛肉の話」という標題は、例外的に原題を外れたものといえる。ただし、『エソポのハプラス』では「Inuganicuuo fucunda coto」、『伊曾保物語』では「犬、肉の事」であって、渡部の標題はむしろこれらに類似する。渡部は『伊曾保物語』も参照していたため、「犬と牛肉の話」はその影響の現われと見ることもできる。また、肉の種類を「牛肉」（読みは「にく」）としたのは渡部の工夫である。本文でも「肉舗」と記して「うしや」と読ませており、渡部版の犬は「牛肉」を手に入れることが想定される。この点については、食用として牛肉の普及が図られた明治初期の時代背景からみて、「牛肉」は同時代的に話題の素材でもあったのではないかと推測する。

たものが価値を失うわけではなく、結果として、幾つものバージョンが併存しながら古代から近代へと展開していくのである。語りの意図が重要な「イソップ寓話」としては、編者の認識に沿って意識的に話の再生産が行われることも、古代以来の伝統的な在り方だったと考えられる。そうしてみると、日本で「イソップ寓話」普及に大きく貢献した『通俗伊蘇普物語』は、西洋の古典作品として「イソップの話」を紹介したものとはいえないものの、西洋における「寓話」としての「イソップの話」の在り方を、巧みに日本に持ち込んだものだったといえるのではないだろうか。

ところで、渡部温は例言で次のように記している。

みるひと 看官たゞ其説話の有益なると。意味の深優なるとに注意ありて。尙又一層の分解を加へ。童蒙へ説諭せらるゝ事あらば。予が本懐是に過ぎ。

小学校の教科書としても読まれる『通俗伊蘇普物語』の展開は、例言で記す渡部の本懐に適うものであったと思われる。渡部本以降は本章の対象とはしないが、明治・大正期にかけて、初等教育に関する議論で「寓話」が現われており、その後の日本における「イソップ寓話」の普及を考える上で重要な手がかりとなりそうである。

なお、日本におけるイソップ集としては、16世紀末から17世紀はじめに『エソポのハブラス』や『伊曾保物語』が登場していたが、それらの本格的な研究は、渡部本以降、日本に（まだ寓話とは呼ばれない）「イソップ寓話」が広まった後に始まっている。両者に含まれる「犬とその影」は以下のものである。

『エソポのハブラス』

Inuga nicuuo fucunda coto.

Aru inu xiximurauo fucunde cauauo vataruni, sono cauano mannacade fucunda xiximurano caguega mizzuno soconi vtçuttauo mireba, vonorega fucunda yorimo, ychibai vòqinareba, caguetoua xiraide, fucundauo sutete mizzuno socoye caxirauo irete mireba, fontaiga naini yotte, sunauachi qiyevxete dochiuomo torifazzuite xittçuiuo xita.

Xitagocoro.

Tonyocuni ficare, fugiõna cotoni tanomiuo cagete vaga teni motta monouo torifazzusunatoyũ coto gia.

『万治絵入本 伊曾保物語』

(中・第13) 犬、肉ししむらの事

ある犬、肉くわを啜へて川を渡る。真中にて、その影、水に映りて大きに見えけれ

ば、「我が啗ゆる所の肉より大きなる」と心得て、これを捨てて、かれを取らんとす。^{かるがゆえ}故に、二つながら、これを失ふ。

その如く、重欲心の輩は、他の宝を羨み、事にふれて貪るほどに、忽ち天罰を蒙る。我が持つ所の宝をも、失ふ事あり。

『エソポのハブラス』と『伊曾保物語』の構成は、15世紀末に刊行されたシュタインヘーヴェル集の枠組みを利用したものであった。しかし、シュタインヘーヴェル集の「犬とその影」がラテン語系筋書きの話であるのに対して、『エソポのハブラス』と『伊曾保物語』ではギリシア語系筋書きの話が示される。16世紀頃のイソップ受容の観点から、当時の日本において何が参照可能であったか興味の尽きないところであるが、これについては改めて別の議論が必要であろう。

結論

本論は、日本における「イソップ寓話」の存在が関心の原点である。本論では、「寓話」が「イソップの話」の教訓話としての性質を表すものと捉え、「イソップ寓話」は「寓話」としての「イソップの話」を示すものとした。一般に「イソップの話」は *Aesop's fable* として、古代ギリシア以来のより大きな「話」 *fable* の枠組みが考えられるが、本論はそうした「話」を論じることを目的とせず、あくまでも「イソップの話」という、古代ギリシア・ローマに現われ、後に「イソップ寓話」として日本にまで至る話の集合にこだわり、考察を試みるものであった。その点で、本論の扱う対象は限定的なものといえるが、「寓話」に注目する本論の関心においては、むしろ限定することが肝要であったと思われる。さいごに、日本における「寓話」という語彙の問題を取り上げつつ、本論全体を概観して、改めて「イソップ寓話」の成立と展開について考える。

1. 「寓話」という語彙について

本論は「寓話」の辞書的な語義から議論を始めたが、そもそも「寓話」という語彙はいつ頃から日本で広く用いられるようになったのだろうか。論を結ぶに先立ち、語彙普及の観点から、日本における「寓話」という語彙について検討しておく。

16世紀末に日本で刊行された天草本『エソポのハブラス』*ESOPO NO FABVLAS* は、まとまった形で日本に「イソップの話」が紹介された最初の事例といえる。これは15世紀末から16世紀中にヨーロッパで刊行されたイソップ集が原本と考えられる翻訳本だが、今でいう「寓話」に該当する部分に関しては「*FABVLAS*」がそのまま使用されており、日本語に翻訳されていない。この点については、17世紀前半に刊行された『伊曾保物語』においても同様である。『伊曾保物語』も西洋のイソップ集を底本とする翻訳本であったと考えられるが、やはり「寓話」に当たる語彙は使用されておらず、「伊曾保物のたとへ」といった表現が見られる程度である。

日本に再び「イソップの話」が紹介されるのは、1873年（明治6年）に刊行された、渡部温による『通俗伊蘇普物語』による。第7章で見た通り、本書は主に同時代のトマス・ジェームズ *James, T.* による英文イソップ集 *AESOP'S FABLES* を元としたものであった。当時、小学校の読本として採用されるなど広く読まれ、明治期以降のイソップ普及に大きく貢献した。しかし、渡部は自身の翻訳した対象について、「予が譯述せし此伊蘇普氏の
ぐうげん ひ ゆ をんなわらべ ときしめ ちかみち そんどうやふ わけあひ
寓言譬喩は、徳教を婦 幼に説示す捷徑にて、如何なる村童野婦といへども其條理を解し

易き」ものと述べており*1、教訓話としつつも「寓話」を用いていない。この点は、1910年（明治43年）の上田敏『伊曾保物語考』や、あるいは1911年（明治44年）の新村出『文禄旧訳伊曾保物語』なども同様であり、「寓話」を使用せず、「寓言」「喩言」「動物譬話」といった複数の語彙を用いている。

「イソップの話」を表す語彙に関する意識的な記述としては、たとえば、1907年（明治40年）刊行の『新訳伊蘇普物語』の前書きで、編者の上田萬年が、日本語に適当な語彙がないため「今は暫く物語の概括的言語を以て譯出し置き」と記している*2。また、新村出が「當代の日本で最も完備したイソップ本」とも評した*3、1916年（大正5年）刊行の楠山正雄譯『イソップ物語』において、訳者の楠山は「寓話」なども意識しつつ、結局「物語」を訳語として選択した。

「寓話」について筆者が確認できた古い例は、1902年（明治35年）刊行の村田宇一郎『小學實際的教授法』における用例である。児童向け教材について、「學齡前の兒童が、童話寓話に對して強盛なる嗜好を有せることは、世人の等しく承認せる所なり。而して此嗜好は慥か尋常初學年まで繼續せり」と説明される*4。また、同年刊行のやはり村田による『單級修身教授の實際』では、「予輩は、多年予輩の接せる兒童に徴して、尋常一學年にては桃太郎花咲爺の如き童話と、兎と亀、狐と鶴の如き寓話が歡迎せられ」と述べられる*5。「兎と亀」「狐と鶴」が例に挙げられる点で、村田はイソップの名に言及しないものの、ここでの「寓話」は主に「イソップの話」が想定される。また、それら「寓話」については、「固と或る徳目につき、訓戒せんと企圖せられたるものなる」と説明されており*6、意図的な教訓話として教育的価値が認められるのである*7。

実際に「寓話」という語彙が一般に定着した時期を考えるにあたっては、この時代の各種辞書がひとつの手掛かりとなりそうである。明治から昭和初期にかけて多種の国語辞典や外国語辞典が編纂されたが、これらの辞書を調べてみると、「寓話」の掲載開始時期に一定の傾向が見られる。

辞書において「寓話」が登場する例は、早いもので1902年（明治35）に三省堂書店から刊行された神田乃武等編『新譯英和辞典』である。「Fable」（名詞）の語義のひとつとして、「教訓的寓話〔動物又非情物ヲ人ニ擬シテ教訓的ニ仕組ミタル小話〕、寓意物語、寓言」と説明する。ここでは教訓的寓話の説明まで併記されるが、これはつまり、「寓話」が説明を要する語彙であったということであろう。『新譯英和辞典』は、「寓話」が含まれる辞

*1 渡部温 (1873) 例言.

*2 上田 (1907), 例言 pp.1-2.

*3 新村 (1934), p.5.

*4 村田 (1902a), p.58.

*5 村田 (1902b), p.6.

*6 村田 (1902b), pp.100-101.

*7 上田萬年や楠山正雄の例からも窺えるように、この時期の「寓話」は決して一般的なものではないが、学校教育関係者の間では、教材としての「イソップの話」の展開とともに「寓話」の利用が広まっていた可能性も考えられる。実際、書名や目次などから判断すると、1910年代には教育関係の文献に「寓話」の使用が増えている様子を窺える。とはいえ、これは一般への普及を意味するものではない。

書として早期のものではあるが、上記村田の例と併せて稀少な事例でもあり、実際に各種辞書中に「寓話」が広く見られるようになるのは、1920年代に入ってからである。

たとえば、1922年（大正11年）に刊行された落合直文編『言泉：日本大辞典』において、「寓話」が見られる。そこでは「ぐう-わ 寓話【名】ぐうげん（寓言）に同じ。」と記され、「寓言」の同義語としての扱いである。一方、「寓言」については、「ぐう-げん 寓言【名】寓意のある話。たとへばなし。つくりごと。寓話。」と記される。他方、1935年（昭和10年）に刊行された平凡社編『大辞典』（第8巻）では、「グーゲン 寓言 かりに事を設け、暗に事実をほのめかしたる話。寓意の説。」「グーワ 寓話 教訓・諷刺の意を含み、イソップ・舌切雀・かちかち山などの如く、多く擬人法が施されてある話。」とされ、「寓話」は「寓言」から切り離されることになる。

各種辞書の用例を見る限り、「寓話」は1920年代以降に一般的になる語彙であるように推測できるが、1925年（大正14年）にはまさに「イソップ寓話集」が刊行される。世界童話大系刊行會刊行の『世界童話大系』第1巻「希臘・羅馬・伊太利篇」が、「伊蘇普寓話集」「フェードルス寓話集」を含むのである。『世界童話大系』は1924年（大正13年）から28年（昭和3年）にかけて刊行された全23巻からなる全集で、1924年刊行の第6巻「露西亜篇2」では「クルイロフ寓話集」が、1926年刊行の第9巻「佛蘭西・和蘭篇」では「ラ・フォンテーヌ寓話集」が収録された。これらはいずれも「イソップの話」と関連する作品集であるが、『世界童話大系』では他の作品集は「童話集」と表記されることから、いわば「イソップの話」のまとまりが「寓話集」として明らかに区別されている*8。

そして、1933年（昭和8年）には、金田鬼一が『寓話文學』を著しており、その冒頭で「日本で「寓話」という譯語を得たのはいつの頃だか知らないが」と述べつつ、論考では「寓話」を用いている。また、1934年（昭和9年）には新村出が『イソップ』を著すが、そのなかで新村は「寓話」も使用しており、過去の彼の論述からの変化が見られるのである。したがって、辞書の用例なども含め、昭和初期には「寓話」が相当に一般的なものとなっていたことを推測できる。

以上の状況を鑑みて、日本語の語彙としての「寓話」は、元来日本語に当てはまる語彙のない対象を表現しようとする中で生み出され、次第に利用されるようになったものと考えられる。そして、その主たる対象は、渡部温『通俗伊蘇普物語』に代表されるような、明治初期に日本に再び紹介され、急速に普及した「イソップの話」であった。その点で、日本における「寓話」は、明治期に伝わった既成の集合としての「イソップの話」に基づくものであり、それら「イソップの話」の持つ性質が「寓話」として概念化されたわけである。その一方で、「イソップの話」から「寓話」が抽出され、逆に、「寓話」が「イソップの話」を内包する一種のジャンルとして認識される。すなわち、テオンの $\mu\ddot{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ と同様の構造がここに見られるが、 $\mu\ddot{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ が一般的語彙であるために「イソップ」の名を必要とし

*8 小田(2004)によると『世界童話大系』は当時「かなり普及」したようである。とすれば、この全集も一般への「寓話」普及の一助となった可能性も考えられる。

たのと対照的に、日本においては、独自の語彙が用意されたことで、「寓話」という、「イソップ」から独立した普遍的な対象として認められることになるのである。

他方、「寓話」以前の「イソップの話」に関して、それらを包括的に扱う表現は見出せない。従来はそれらも含めて「イソップの話」全体が「寓話」とされるが、そうした扱い方の問題は本論から明らかであろう。語彙の面から捉え直すと、本論は、後に日本で「寓話」として表現されるようになる、古代以来の「イソップの話」の在り方について問うものであったということもできる。

2. 「イソップ寓話」の成立

さて、古代以来の「イソップの話」を扱う場合、現存する資料としては、イソップの名への言及が前5世紀から現われるものである点は注意を要する。ヘロドトスの記述から想定されるイソップの年代は前600年前後であるが、その名の著名度に比して、伝わる情報が乏しいのである。また、ヘシオドスやアルキロコスなどが示すイソップ以前の話が、古代から「イソップの話」として扱われ、さらに時代を経て「イソップ寓話」として認識されている。両者の話は、動物が登場する短い話という特徴から「イソップの話」として扱われやすい題材ではあったが、もともと「イソップの話」でも「寓話」でもなく、それらの属性は後で認められるのである。この場合、何を「イソップの話」とするかという認識が問題となる。

前400年前後における用例は、アリストファネスとプラトンに集中している。両者が示す「イソップの話」は、一種の昔話である。動物や昆虫が主体となる話、あるいは、事物の由来を語る縁起譚とする認識も見られる。彼らの記述から、前400年頃には複数の「イソップの話」が流布していた状況を窺えるが、具体的に内容が伝わる話は僅かである。さらには、アリストファネスやプラトンが用いる「イソップの話」は、彼らの文脈に即した独特なものであり、同じ作家においても作品によって性質が異なるものとして示される。そのため、現存する資料ではこの時代の「イソップの話」の実態は明らかではない。ローマ時代の作家による言及も、現存する資料以上の情報を与えてくれるものではなく、彼らが持つ古典期の「イソップの話」に関する情報量がどの程度のものであったか判然としない。とはいえ、後代の人々からすると、古典期に両者がイソップに言及したこと自体が、「イソップの話」を評価する上で有意義なものであったと考えられる。

また、アリストファネスは元来イソップとは無縁な話を「イソップの話」として示し、あるいはプラトンの描くソクラテスも、イソップならば、という前提で逸話を創作した。ここには「イソップの話」を類型化する意識が見られ、両者の例では「動物の話」「縁起譚」という点がイソップと結びつけるための条件であったと推測できる。しかし、これらの条件では、後のイソップ集に含まれるヘロドトスの用例は、必ずしも「イソップの話」の枠組みに含まれない。

「イソップの話」の枠組みを拡大する議論としては、アリストテレスの『弁論術』の存

在が大きい。説得のための「過去に模した喩え話」として「イソップの話」の機能が説明されたことにより、既存の話や新規の話を含め、「イソップの話」の範疇で理解される話が増大するのである。ペリーが重視するデメトリオス集も、アリストテレスの議論を背景にしたものであったと考えられる。アリストテレスの問題は、自身の論じる「喩え話」を *λόγος* としたことで、説得の手段としての「喩え話」を明示するために、「イソップの」などと付記する必要があることである。この場合、イソップとの関連性ではなく、文脈における機能性が個々の話の評価の基準となり、それに該当する話が「イソップの話」として分類されることになる。

また、アリストテレスの議論に従えば、「イソップの話」はあくまでも副次的な手段であり、具体的な状況に対応する話であって、独立した話として評価される対象ではない。とはいえ、たとえばデメトリオス集が個々の話を文脈から切り離して収めるものであったならば、意図はどうか、個々の話が独立した話として提示されるのである。残念ながらデメトリオス集は散逸しており、その具体的な影響を確認することは難しいが、前1世紀に見られる用例にはアリストテレスの議論との関連が見受けられ、なかでも「身体と胃袋の話」は、アリストテレス以降の「イソップの話」の拡大を示す特徴的な事例と考えられる。

アリストテレスの説明は、「イソップの話」の集合を形成する上で一つの契機となったと思われるが、「イソップ寓話」という観点からすると、アリストテレスが示す「喩え話」としての「イソップの話」は、まだ「寓話」の域には達していない。その点で、「イソップ寓話」に通じる意識が登場するのは、紀元後1世紀に入ってからである。

1世紀後半以降、「イソップの話」をより大きな「話」の枠組みに位置付けるジャンル意識が見られるようになる。テオンの『修辞学初等教程』における *μῦθος* 論は、このような「話」を説明するものであった。テオンは *μῦθος* を「真実を映す偽りの話」(*λόγος ψευδῆς εἰκονίζων ἀλήθειαν*) として規定したが、彼が示す *μῦθος* は、独立的に解釈され、そこから一般性を持った見解の導出が期待される話であり、さらにその見解を説明する文言が話の前後に附される形式を持つ。また、テオンの議論は作文教育の文脈で語られるものであり、*μῦθος* は初期に与えられる練習課題のひとつである。彼は *μῦθος* に関する種々の練習方法を挙げるが、既存の話の改変や新規の話の創作、あるいは話に附す見解を作るなど、*μῦθος* は動的に構成される対象であった。一方で、既存の話もまた、*μῦθος* を構成するための素材として学習の対象となった。

テオンは *μῦθος* が総称して「イソップの話」と呼ばれるものと述べる。独自の用語は用意されず、「イソップの話」は *μῦθος* を構成する一部でありながら、*μῦθος* 全体を表す枠組みともなる。同根の問題は既にアリストテレスの「喩え話」に現われていたが、この点はテオンにおいても変わらない。むしろテオンの場合、話の解釈可能性が要件となるため、アリストテレスの議論では対象とならない話も対象に含みえた。たとえば、アリストテレス以前から存在する昔話としての「イソップの話」も、アリストテレスの議論によって拡大した「イソップの話」も、いずれも *μῦθος* として読み直しが可能となり、それまで混在

していた多様な「イソップの話」が、共通の「イソップの話」の枠組みで理解されるのである。

テオンの説明する $\mu\theta\theta\omicron\varsigma$ は、彼が例に挙げる「肉を運ぶ犬」(＝「犬とその影」)の話など、率直にみて「寓話」としての性質を備えた話である。テオンは $\mu\theta\theta\omicron\varsigma$ が「イソップの話」と総称されるとしたが、この場合、「イソップの話」は「寓話」であり「イソップ寓話」ということになる。そしてまた、ヘシオドスなど古の詩人が語った話も「寓話」として読み直され、あるいは「イソップ寓話」に組み込まれるのである。テオンはイソップが「寓話」の創始者ではないとする一種のジャンル意識が示すが、この場合、遡及的に「寓話」に適合する話が見出され、古から続く「寓話」の伝統が意識されることになった可能性も考えられる。ここにおいて、一種の逆転現象が起きていることに注意が必要である。

テオンの他には、クインティリアヌスが「イソップの話」と「諺」の類似性を述べており、「寓話」的理解が示される。クインティリアヌスの見解は、アリストテレスの影響も見られる発想であり、テオンと必ずしも同一のものではないが、「イソップの話」に関するジャンル意識はテオンと共通である。また、テオンやクインティリアヌスの議論は修辞学教育の文脈で語られるものであったが、プルタルコスがやはり同様のジャンル意識を見せ、2世紀の用例に「寓話」としての「イソップの話」が現われるなど、その拡がりを確認できる。

以上をふまえて、「イソップの話」を寓話概念形成という観点から捉えなおした場合、1～2世紀頃が「イソップ寓話」成立の基点となる時期であったといえる。ただし、この時期に急に登場したものというよりも、古典期以降の在り方、アリストテレスの議論による拡大などを経て、蓄積されてきた「イソップの話」が、総合的に「寓話」として再認識されることで、「イソップ寓話」成立に至ったと考えるべきであろう。

3. 「イソップ寓話」の展開

一方、後世に「イソップの話」を残した媒体としては、イソップ集の存在が重要である。現存する初期のイソップ集であるファエドルス集とバブリオス集は、1～2世紀頃のものであり、後世においていずれも「イソップ寓話集」として扱われるものの、両者が示す「イソップの話」に関する認識はそれぞれ独自のものである。ファエドルスは知恵を含む作り話として「イソップの話」を提示し、バブリオスは一種の昔話としての「イソップの話」を物語る。ファエドルスはテオンに先行して「イソップ寓話」に含まれる話を示すが、テオンとは異なる認識に基づくものであった。そのため、ファエドルス集に含まれる話は、同時代を題材とした話も含め、ファエドルスの独自性が強く現われている。一方、バブリオスの時期には既に「寓話」としての「イソップの話」が拡大していたと考えられるが、バブリオスの示す認識はむしろそれ以前の「イソップの話」の在り方を意識したものであった。そして、バブリオス集もまた、彼独自の話を多く含むものであり、その認識を反映したものであった。

ファエドルス集とバブリオス集は、共通とはいえない枠組みに沿って集められた話の集合であるが、外見上は「イソップの話」という共通の枠組みに納まっているように見える。そのため、「イソップの話」が「寓話」として理解されるとき、ファエドルス集もバブリオス集も共通の理解がなされることになる。この場合、ファエドルスとバブリオスの意図はイソップの名の下に消えてしまうが、その一方で、話そのものは「イソップ寓話」として残るのである。両者が多くの異なる話を自身の集成に含めたことを考慮すると、「イソップ寓話」の展開という点では、両者の素材によって後世に伝わる「イソップ寓話」が拡張されることになったのである。

この点については、バブリオス集の受容の在り方が特徴的である。3世紀以降、バブリオス集は教育用途や格言的用法など、それぞれ一定の機能をもつ話として利用されている。アウリアヌスはバブリオス集とファエドルス集を同種のイソップ集として扱い、あるいは『スーダ』には散文化されたバブリオス由来の話が含まれる。こうした事例は、バブリオス集がバブリオスの意図とは関係なく受容されたことを示唆している。また、現在のバブリオス集の主要写本である10世紀頃のアトス写本には、徹底して話の形式を整えようとする意識が見られるが、これはバブリオス集を「イソップ寓話集」として纏めようとしたものと考えられる。

「イソップ寓話」については、テオンの『修辞学初等教程』以降、アプトニオスによって教訓的文言を示す「後辞」「前辞」などまで規定され、「イソップの話」の「寓話」としての意味や形式が簡潔に説明されている。『スーダ』は $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ について『修辞学初等教程』の説明を用いており、アトス写本と同時代において『修辞学初等教程』の議論が影響を持っていたことを窺える。テオンより後の『修辞学初等教程』において、 $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ は冒頭の教材となっており、一定の教育を受けた人物であれば必ず目にしていたと推測できる。テオン以後の『修辞学初等教程』に見られる $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ には、アプトニオスの議論の影響が大きい。アプトニオスが示す「イソップ寓話」としての $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ の意味と形式は、中世のイソップ集に共通してみられる特徴でもあった。両者の直接的関係は不明ながらも、イソップ集における教訓的文言を示す後辞・前辞の附与は、「イソップの話」に関する編者の認識を示すものであり、そこに含まれる話を「寓話」として読ませる形式でもある。そしてまた、読者にとっては、この形式は「イソップの話」に関する「寓話」としての理解を促すものでもあったと思われる。

アトス写本の形式は、バブリオスの「イソップの話」を「イソップ寓話」とする編者の認識を明確に示すものであったと理解できる。そうした姿勢を示すアトス写本は、3世紀以降のバブリオス集受容の延長線上にあり、バブリオス集本来の意図とは離れたものであったといえる。19世紀半ば、アトス写本によってバブリオス集が“発見”された際には、バブリオス集は「イソップ寓話集」として認識されるイソップ集となっていたのである。

さて、西洋古代に生じた「イソップ寓話」は、近世および近代の日本に持ち込まれた。本論では、日本における「イソップ寓話」の普及という観点から、とくに明治初期に刊行

された渡部温『通俗伊蘇普物語』に注目した。古代との関わりについては、渡部版イソップ集が英語イソップ集を原本としたものであり、ラテン語・ギリシア語のイソップ集を直接持ち込んだものではない。とはいえ、渡部が主な原本とした英語イソップ集、すなわちジェームズおよびタウンゼントによるイソップ集は、アトス写本の発見など、19世紀半ばまでの古典研究の成果を反映し、当時参照可能となっていたギリシア語・ラテン語による古代のイソップ集を意識したものであった。

ジェームズやタウンゼントが挙げる参照元は、おもに17世紀以降のイソップ集であるが、それらは原典系イソップ集と翻訳系イソップ集に大きく分類できる。原典系イソップ集としては、1610年刊行のネヴェレ本は、ギリシア語・ラテン語による各種イソップ集を含む集大成であった。ネヴェレ本で興味深い特徴は、冒頭でアプトニオスおよびプリスキアヌスの『修辞学初等教程』による「イソップ寓話」の説明が掲載され、集成に含まれる話の意味付けがなされている点である。これは、17世紀初頭に、「イソップの話」の理解の枠組みとして古代の『修辞学初等教程』の議論が利用されたことを意味する。また、19世紀以降の原典系イソップ集では、写本研究に基づくギリシア語散文イソップ集が増えるが、これらは主に、各話に「後辞」の附される形式の「イソップ寓話集」であった。

一方、本論では「犬とその影」をもとに古代からの話の変容を確認したが、そこに見られた翻訳系イソップ集の特徴は、既存の話素材として独自の話が構成されることにあった。すなわち、ある一つの集成の一つの話をもそのまま訳出するのではなく、その時点で参照可能な複数の話をふまえて、同時代の読者に向けて編者が再構成した話が提示されるのである。(ただし、これは主にイソップの名のもとに集められるイソップ集についてであり、ファエドルスなどの作家名付きイソップ集の翻訳はその限りではない。)

ジェームズやタウンゼントの時期には、原典系イソップ集が充実しつつあり、バブリオス集のアトス写本の発見もあって、古代のイソップ集に対する関心が高まっていたと考えられる。古代を重視する彼らの編集方針も、そうした関心と無縁ではなかったはずである。ギリシア語・ラテン語による古代のイソップ集への注目が可能となり、彼らはファエドルス集やバブリオス集なども参照したが、他方、彼らのイソップ集はそれまで同様の翻訳系イソップ集としての特徴も残し、古代のイソップ集は、その他のイソップ集と同等の素材として活用されるのである。そして、渡部温『通俗伊蘇普物語』もまた、ジェームズやタウンゼントと同じく、翻訳系イソップ集と評価できるものであった。渡部の方針は、原本をそのまま翻訳するのではなく、それらを参照した上で、明治初期の日本の読者に向けた話を提示することにあつたのである。

これら翻訳系イソップ集の在り方について改めて考えてみると、既存の話素材を尊重しつつ独自の話を語ろうとする姿勢は、テオン以来の『修辞学初等教程』の議論によって示された「イソップ寓話」の在り方と共通である。『修辞学初等教程』において、「イソップ寓話」は語り手の意図によって動的に再構成される対象であった。そして解釈も含めて固定的なものではなく、言語や形式を問うものでもない。本論で扱った近代までのイソップ集の在

り方は、原典系も翻訳系もその精神が受け継がれていると見做せるものであり、この点は『通俗伊蘇普物語』も同様といえる。ペリーは古代の「話」を説明するものとしてテオンの定義を取り上げたが、後世へと展開する「イソップ寓話」の観点では、むしろテオンに始まる『修辞学初等教程』の議論の存在が、「イソップの話」の「寓話」としての展開を方向付けるものとして、重要な役割を担ったのではないかと考えられる。

明治から昭和初期にかけて、日本では多種多様なイソップ集が生み出されたが、その点では、「イソップ寓話」の在り方を具体的に表すものとして、はじめに『通俗伊蘇普物語』が普及した意義は大きいように思われる。翻って、現代に目を向けると、現在日本で容易に入手可能なイソップ集は、おそらく岩波文庫版『イソップ寓話集』（中務哲郎訳）であろう。これはペリーの *Aesopica* のギリシア語部分を直接日本語へ翻訳したものである。主に古代に由来する話が日本語で参照可能になったことは有意義であるが、その一方で、一般に読まれる「イソップ寓話」が過去のものとして固定化されることになる。本論で扱った「犬とその影」の話为例にとれば、岩波文庫版では *Augustana* 版のみ含まれるため、犬が肉を盗むこともなければ、川を泳ぐことも、橋を渡ることもないのである。

急速に進む文献電子化の恩恵もあり、参照可能なイソップ集が増えている現状を思えば、それらの存在もふまえて、過去に固定化するのではない、新しい「イソップ寓話集」の創出を改めて模索することも、古代以来の「イソップ寓話」の在り方に適ったものといえるのではないだろうか。

4. おわりに

「イソップ寓話」は、古代から現代に至るまで、常に読まれ続けた題材であり、古典語のみならず各国語への展開も著しい。したがって、本論で扱い得た範囲は、その中でもほんの一部に過ぎないことは留意したい。本論が「一考察」と題する所以である。

本論冒頭で引用した「うさぎとかめ」は、明治期の日本における「イソップ寓話」展開の一例である。これは「幼年唱歌」であり、教育的意図が込められたものであった。また、『通俗伊蘇普物語』は小学校の教科書として用いられ、あるいは「寓話」という語彙自体、早期に小学校教育の議論の中で登場した。「寓話」と教育の関わりが、近代日本における「イソップ寓話」展開に関与しているように見えるが、両者の関係は、日本に限らず、西洋でも古代以来共通して現われるものである。もともと「イソップ寓話」の端緒ともいえる『修辞学初等教程』の議論自体が、教育に関わるものであった。

本論は、「イソップの話」から「イソップ寓話」への変質に注目し、その枠組みや在り方を分析して考察を行ったものである。一方、議論の中で、「イソップ寓話」展開の背景として、各時代の教育との関わりがひとつの軸として現われてくるものの、本論では扱いきれていない。その点も含め、「イソップ寓話」の展開に関する課題は多数残るが、その検討は別の機会のこととし、本論はひとまずここで結びとする。

略号について

古典作家名・作品名等の略号は *LSJ*・*OLD* および *OCD* の記法に従う。

引用原典出典

本論で引用したテキストの出典を示す。

- Aesopica* Hausrath, A., *Corpus fabularum Aesopicarum vol. I fasc. I-2*, Lipzig, 1957-1959. (cf. Perry, B.E., *Aesopica*, Urbana, 1952.)
- Aphth. Rabe, H., *Aphthonii progymnasmata*, Leipzig, 1926.
- Ar. Wilson, N. G., *Aristophanis Fabulae*, I-II, Oxford, 2007.
- Archil. West, M. L., *Iambi et Elegi Graeci*, I, Oxford, 1989. (2nd ed.)
- Arist. *Rh.* Ross, W. D., *Aristotelis ars rhetorica*, Oxford, 1959. (repr. 1964)
- Mete.* Fobes, F. H., *Aristotelis meteorologicorum libri quattuor*, I-II, Oxford, 1924. (repr 1970)
- PA.* Louis, P., *Aristote. Les parties des animaux*, Paris, 1956.
- Avian. Gaide, F., *Avianus. Fables*, Paris, 1980.
- Babr./Bab. Perry, B. E., *Babrius and Phaedrus*, Cambridge, 1965. (cf. Luzzatto, M. J.,-La Penna, A., *Babrii mythiambi Aesopei*, Leipzig, 1986.)
- Call. Pfeiffer, R., *Callimachus*, I, Oxford, 1949. (repr. 1965)
- DH Usener, H.-Radermacher, L., *Dionysii Halicarnasei quae exstant*, V-VI, Leipzig, 1899-1929. (repr. 1965)
- D.S. Vogel., F., Fischer, K. T., *Diodori bibliotheca historica*, Leipzig, 1888-1906. (repr. 1966)
- Dio von Arnim, J., *Dionis Prusaensis quem vocant Chrysostomum quae exstant omnia*, I-II, Berlin, 1893-1896. (repr. 1962)
- Chrys.
- Gell. Marshall, P. K., *A. Gelli Noctes Atticae*, I-II, Oxford, 1968. (repr. 1990)
- Hdt. Hude, C., *Herodoti Historiae*, I, Oxford, 1927. (3rd ed.; repr. 1967)
- Hermog. Rabe, H., *Hermogenis opera*, Leipzig, 1913. (repr. 1969)
- Hes. West, M. L., *Hesiod: Works & days*, Oxford, 1978.
- Hor. Shackleton Bailey, D. R., *Horatius Opera*, Leipzig, 2001.
- Iul. Wright, W. C., *The Works of the Emperor Julian*, III, London, 1923.
- Liv. Conway, R. S.,-Walters, C. F., *Titi Livi ab urbe condita*, I, Oxford, 1914. (repr. 1969)
- Max.Tyr. Trapp, M. B., *Maximus Tyrius Dissertationes*, Leipzig, 1994.
- Nicol. Felten, J., *Nicolai progymnasmata*, Leipzig, 1913.

- Phaed. Perry, B. E., *Babrius and Phaedrus*, Cambridge, 1965.
- Pl. *Phd.* Duke, E. A., [et. al.], *Platonis Opera*, I, Oxford, 1995.
Alc.I Burnet, J., *Platonis Opera*, II, Oxford, 1901. (repr. 1967)
- Prisc. Keil, H. *Grammatici Latini*, III, Leipzig, 1859.
- Quint. Winterbottom, M., *M. Fabi Quintiliani Institutionis Oratoriae libri duodecim*, I-II, Oxford, 1970.
- Suda* Adler A., *Suidae lexicon*, I-IV, Leipzig, 1928-1935. (repr. 1967-1971)
- Theon Patillon, M., Bolognesi, G., *Aelius Théon: Progymnasmata*, Paris, 1997.
- X. Marchant, E. C., *Xenophontis opera omnia*, II, Oxford, 1921. (2nd ed.; repr. 1967)

イソップ集出典

本論第7章で参照・引用した主なイソップ集を示す。

- Aldus, M., *Vita & Fabellae Aesopi cum interpretatione latina*, Venice, 1505.
- Dorpius, M., *Fabularvm Qvae hoc libro continentur, interpretes atque authores...*, Straßburg, 1515.
- Camerarius, J., *Fabellae Aesopicae*, Tübingen, 1538.
- Nevelet, I. N., *Mythologia Aesopica*, Frankfurt, 1610.
- Ogilby, J., *The fables of Aesop paraphras'd in verse, and adorn'd with sculpture*, London, 1651.
- Barlow, F., *Aesop's fables, with his life: in English, French, and Latin*, London, 1666.
- Bruslé, J. C., *Esope en belle humeur*, Amsterdam, 1690.
- L'Estrange, R., *Fables of Aesop and other eminent mythologists*, London, 1692.
- Croxall, S., *Fables of Aesop and others*, London, 1722.
- Dodsley, R., *Select Fables of Esop and other fabulists. In three books*, Birmingham, 1761.
- Matthäi, C. F., *Syntipae philosophi Persae Fabvlae LXII*, Leipzig, 1781.
- Furia, F. del., *Fabulae Aesopicae quales ante Planudem ferebantur*, Leipzig, 1810.
- Korais, A., *Μύθων Αἰσωπειῶν συναγωγή*, Paris, 1810.
- James, T., *Aesop's fables: a new version chiefly from original sources*, London, 1848.
- Halm, C., *Fabulae Aesopicae Collectae*, Leipzig, 1852.
- Townsend, G. F., *Three hundred Aesop's fables: literally translated from the Greek*, London, 1866.
- 渡部温, 『通俗伊蘇普物語』, 東京, 1873.
- 福沢英之介, 『訓蒙話草』, 東京, 1873.

参考文献

- Adrados, F. R. ed. (1984) *La fable*, Entretiens sur L'Antiquité Classique 30, Genève.
- Adrados, F. R., (1999) *History of the Graeco-Latin fable I: Introduction and from the origins to the Hellenistic age*, Leiden. (trans. by Leslie A. Ray).
- (2000) *History of the Graeco-Latin fable II: The fable during the Roman Empire and in the Middle Ages*, Leiden. (trans. by Leslie A. Ray).
- Bewick, T. (1818) *The Fables of Æsop, and others*, Newcastle.
- Boissonnade, J. F. (1844) *BABPIΘY MYΘIAMBOI*, Paris.
- Chambry É. (1925-6) *Aesopi fabulae*, Paris.
- Cottegnies, L. (2008) “‘The Art of Schooling Mankind’ The Uses of the Fable in Roger L’Estrange’s Aesop’s Fables (1692)” in Dunan-Page & Lynch ed (2008) *Roger L’Estrange and the making of Restoration culture*, 131-148.
- Criore, R. (2001) *Gymnastics of the Mind: Greek education in Hellenistic and Roman Egypt*, Princeton.
- Croxall, S. (1722) *Fables of AEsop and others*, London.
- Crusius, O. (1897) *Babrii fabulae Aesopeae*, Leipzig.
- Davies, J. (1860) *The fables of Babrius : in two parts*, London.
- Dijk, G.-J. van (1993) “Theory and Terminology of the Greek Fable”, *Reinardus*, 6, 171-183.
- (1997) *Ἄϊβοι, Λόγοι, Μῦθοι: Fables in Archaic, Classical, and Hellenistic Greek Literature. With a Study of the Theory and Terminology of the Genre.*, Leiden.
- Dickey, E. (2012) *The colloquia of the Hermeneumata Pseudodositheana: Colloquia Monacensia-Einsidlensia, Leidense-Stephani, and Stephani from the Hermeneumata Pseudodositheana*, New York.
- Dölvers, H. (1997) *Fables Less and Less Fabulous: English fables and parables of the nineteenth century and their illustrations*, London.
- Dunan-Page, A. & Lynch, B. ed. (2008) *Roger L’Estrange and the making of Restoration culture*, Aldershot.
- Dunbar, N. (1995) *Aristophanes: Birds*, Oxford.
- Gibbs, L. (2002), *Aesop’s Fables*, Oxford.
- Grenfell, B. P. & Hunt, A. S. (1901) *The Amherst Papyri*, II, London.
- Henderson, J. (1987) *Aristophanes’ Lysistrata*, Oxford.
- Henderson, J. (1999) “Phaedrus’s Fables: The Original Corpus”, *Mnemosyne*, 52(3), 308-329.
- Hervieux, L. (1894) *Les Fabulistes Latins: depuis le siècle d’Auguste jusqu’a la fin du moyen*

- âge, II, Paris.
- Holzberg, N. (2002) *The Ancient Fable: An Introduction*, Bloomington. (trans. by Christine Jackson-Holzberg).
- Hunter, R. & Russell, D. (2011) *Plutarch: How to study poetry*, Cambridge.
- Irigoin, J. (2003) “Recherche et histoire des textes grecs au XIXe siècle : autour des Fables de Babrios”, in Irigoin, J. (2003) *La Tradition des textes Grecs*, Paris, 363-372.
- Irwin, E. (1998) “Biography, fiction, and the Archilochean ainos”, *Journal of Hellenic Studies*, 118, 177-183.
- Jacobs, J. (1889) *The fables of Aesop / 1, History of the Aesopic fable*, London.
- James, T. (1848) *Aesop's fables; a new version chiefly from original sources*, London.
- Kennedy, G. A. (1994) *A new history of classical rhetoric*, Princeton.
- (2003) *Progymnasmata: Greek Textbooks of Prose Composition and Rhetoric*, Atlanta.
- Kerkhecker, A. (1999) *Callimachus' Book of Iambi*, Oxford.
- Knoell, P. (1877) *Fabularum Babrianarum paraphrasis Bodleiana*, Vienna.
- Kurke, L. (2011) *Aesopic conversations: popular tradition, cultural dialogue, and the invention of Greek prose*, Princeton.
- Lachmann, C. (1845) *Babrii Fabulae Aesopeae*, Berlin.
- Lewis, J. E. (1996) *The English fable: Aesop and literary culture, 1651-1740*, Cambridge.
- Lewis, G. C. (1846) *Babrii Fabulae Aesopeae*, London.
- Loveridge, M. (1998) *A history of Augustan fable*, Cambridge.
- Luzzatto, M. J. and La Penna, A. (1986) *Babrii Mythiambi Aesopei*, Leipzig.
- MacDowell, D. M. (1971) *Aristophanes: Wasps*, Oxford.
- Morgan, T. (1998) *Literate education in the Hellenistic and Roman worlds*, Cambridge.
- Nelson, S. (1997) “The Justice of Zeus in Hesiod's Fable of The Hawk and The Nightingale”, *The Classical Journal*, 92(3), 235-247.
- Nisetich, F. (2001) *The Poems of Callimachus*, New York.
- Nøjgaard, M. (1964) *La fable grecque avant Phedre (La fable antique, tom. 1)*, København.
- (1984) “La moralization de la fable: d'Ésope à Romulus”, in F. R. Adrados ed. (1984) *La Fable*, 225-251.
- Öesterley, H. (1870) *Romulus: die Paphrasen des Phaedrus und die Aesopische Fable im Mittelalter*, Berlin.
- (1873) *Steinhöwels Äsop*, Stuttgart.
- Olson, S. D. (1998) *Aristophanes: Peace*, Oxford.
- Perry, B. E. (1940) “The Origin of the Epimythium”, *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, 71, 391-419.

- (1952) *Aesopica: A series of texts relating to Aesop or ascribed to him or closely connected with literary tradition that bears his name: collected and critically edited, in part translated from oriental languages, with a commentary and historical essay: vol.1 Greek and Latin Texts*, Urbana.
- (1959) “Fable”, *Studium Generale*, 12, 17-37.
- (1962) “Demetrius of Phalerum and Aesopic Fables”, *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, 93, 287-346.
- (1965) *Babrius and Phaedrus*, LCL 436, Cambridge.
- Pfeiffer (1965) *Callimachus*, I, Oxford.
- Porter, S. E. ed. (1997) *Handbook of classical rhetoric in the Hellenistic Period (330 B.C.-A.D. 400)*, Leiden. Reynolds, L. D. & Wilson, N. G. (2013) *Scribes and Scholars: A Guide to the Transmission of Greek and Latin Literature*, Oxford. (4th ed.)
- Rutherford, W. G. (1883) *Babrius*, London.
- Schaeffer, J.-M. (1985) “Aesopus auctor inventus: Naissance d’un genre: la fable ésopique”, *Poétique*, 63, 345-364.
- Steiner, D. (2010) “Framing the fox: Callimachus’ second Iamb and its predecessors”, *Journal of Hellenic Studies*, 130, 97-107.
- Townsend, G. F. (1867) *Three hundred Aesop’s fables*, London.
- Vaio, J. (2001) *The Mythiambi of Babrius: Notes on the Constitution of the Text*, Spudasmata 83, Hildesheim.
- Verdenius, W. J. (1985) *A Commentary on Hesiod Works and Days*, vv. 1-382, Leiden.
- West, M. L. (1978) *Hesiod: Works & days*, Oxford.
- (1984) “The Ascription of Fables to Aesop in Archaic and Classical Greece”, in F. R. Adrados ed. (1984) *La fable*, 105-136.
- (1989) *Iambi et Elegi Graeci ante Alexandrum Cantati*, 1, Oxford. (2nd ed.)
- (1993) *Greek Lyric Poetry*, Oxford.
- Wheatley, E. (2000) *Mastering Aesop: medieval education, Chaucer, and his followers*, Gainesville.
- Zafiroopoulos, C. A. (2001) *Ethics in Aesop’s Fables: The Augustana Collection*, Leiden.
- 岩谷智・西村賀子 (1998) 『イソップ風寓話集 / パエドルス, バブリオス』, 叢書アレクサンドリア図書館第 10 巻, 国文社.
- 上田萬年 (1907) 『新譯伊蘇普物語』, 鐘美堂.
- 上田敏 (1910) 「伊曾保物語考」.
- 大塚光信 (2001) 「『エソポのハブラス』小考」, 『國語國文』, 70(3), 1-25.
- 小田光雄 (2004) 「近代社と『世界童話大系』」, 『白水社の本棚』, No. 118.
- 金田鬼一 (1933) 『寓話文學』, 岩波講座世界文学, 岩波書店.

- 楠山正雄訳 (1916) 『イソップ物語』, 富山房.
- 小堀桂一郎 (1978a) 「『伊曾保物語』原本考 (上) ——シュタインヘーヴェル本『イソップ集』に就て——」, 『文学』, 46(10), 136-148.
- (1978b) 「『伊曾保物語』原本考 (下) ——シュタインヘーヴェル本『イソップ集』に就て——」, 『文学』, 46(12), 91-112.
- (2001) 『イソップ寓話 その伝承と変容』, 講談社学術文庫 1495, 講談社.
- 新村出 (1911) 『文禄旧訳伊曾保物語』, 開成館.
- 新村出 (1934) 『イソップ』, 岩波講座世界文学, 岩波書店.
- 谷川恵一 (解説) (2001) 『通俗伊曾保物語』, 東洋文庫 693, 平凡社.
- 谷出千代子 (2010) 「イソップ寓話の変容と寓意性—明治・大正期出版「犬とその影」をめぐる—」, 『仁愛大学研究紀要 (人間生活学部)』, 第2号, 109-120頁.
- (2011) 「昭和期にみるイソップ寓話「犬とその影」の変容」, 『仁愛大学研究紀要 (人間生活学部)』, 3, 63-75.
- 月村辰雄 (1989) 「古代寓話と中世寓話——マリー・ド・フランスの『イゾペ』の意味——」, 『文学』, 57, 21-43.
- 中川芳雄 (解説) (1994) 『古活字本伊曾保物語: 国立国会図書館所蔵本影印』, 勉誠社.
- 中務哲郎 (1996) 『イソップ寓話の世界』, ちくま新書 063, 筑摩書房.
- (1999) 『イソップ寓話集』, 岩波文庫 赤 103-1, 岩波書店.
- 福島邦道 (解説) (1976) 『天草版イソポ物語: 大英図書館本影印』, 勉誠出版.
- 堀尾耕一 (2006) 「プロギュムナスマタ文献の伝承について」, 『フィロロギカ——古典文献学のために』 I, 1-18.
- 武藤禎夫 (校注) (1976) 『万治絵入本伊曾保物語』, 岩波文庫 黄 276-1, 岩波書店.
- 村上勝也 (1996) 「『イソップ寓話』変容考——「犬が肉を含んだ事」について (1)」, 『広島文教女子大学紀要』, 31, 31-47.
- (1997) 「『イソップ寓話』変容考——「犬が肉を含んだ事」について (2)」, 『広島文教女子大学紀要』, 32, 47-73.
- 村田宇一郎 (1902a) 『小學實際的教授法』, 東洋社.
- (1902b) 『單級修身教授の實際』, 金港堂.
- 吉川斉 (2008) 「『寓話』成立に関する一考察——“イソップ寓話”認識の成立——」, 『東京大学西洋古典学研究室紀要』 IV, 19-50.
- (2010) 「初期イソップ集成編者と「寓話」——ファエドルスおよびバブリオスの“イソップ寓話”認識——」, 『東京大学西洋古典学研究室紀要』 VI, 35-67.
- (2013) 「バブリオス集の受容と変質に関する一考察——アトス写本の後辞が示すもの——」, 『東京大学西洋古典学研究室紀要』 8, 29-63.
- 渡部温 (1873) 『通俗伊蘇普物語』, 東京.